原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第26集

原の辻遺跡

はる　つじ

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2003

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所報告書第２６集　正誤表

ページ	行	誤	正
7	4	（第4図）	（第3図）
18	11	退部	体部
25	12	弥生時代後期後葉	弥生時代後期後葉～終末
28	1	弥生時代後期後葉	弥生時代後期後葉～終末
58	2	土壙	土坑
58	7	土壙	土坑
58	8	土壙	土坑
82	19	（遺構名）中期包含層	（遺構名）ＳＢ５覆土
90	上の図面	ＳＫ５	ＳＫ６
90	上の図面	ＳＫ６	ＳＫ５
91	3	不定型	不定形
91	5	ＳＤ１	ＳＢ１
91	6	（ＳＫ５）	（ＳＫ６）
115	20	逆台形形	逆台形
152	7	はった	はつった
153	7	丘陵北東部	台地北東低地部
156	5	,,	,
156	14～15	弥生時代中期	弥生時代後期
194	1	春の辻遺跡	原の辻遺跡

原の辻 全景（西から）

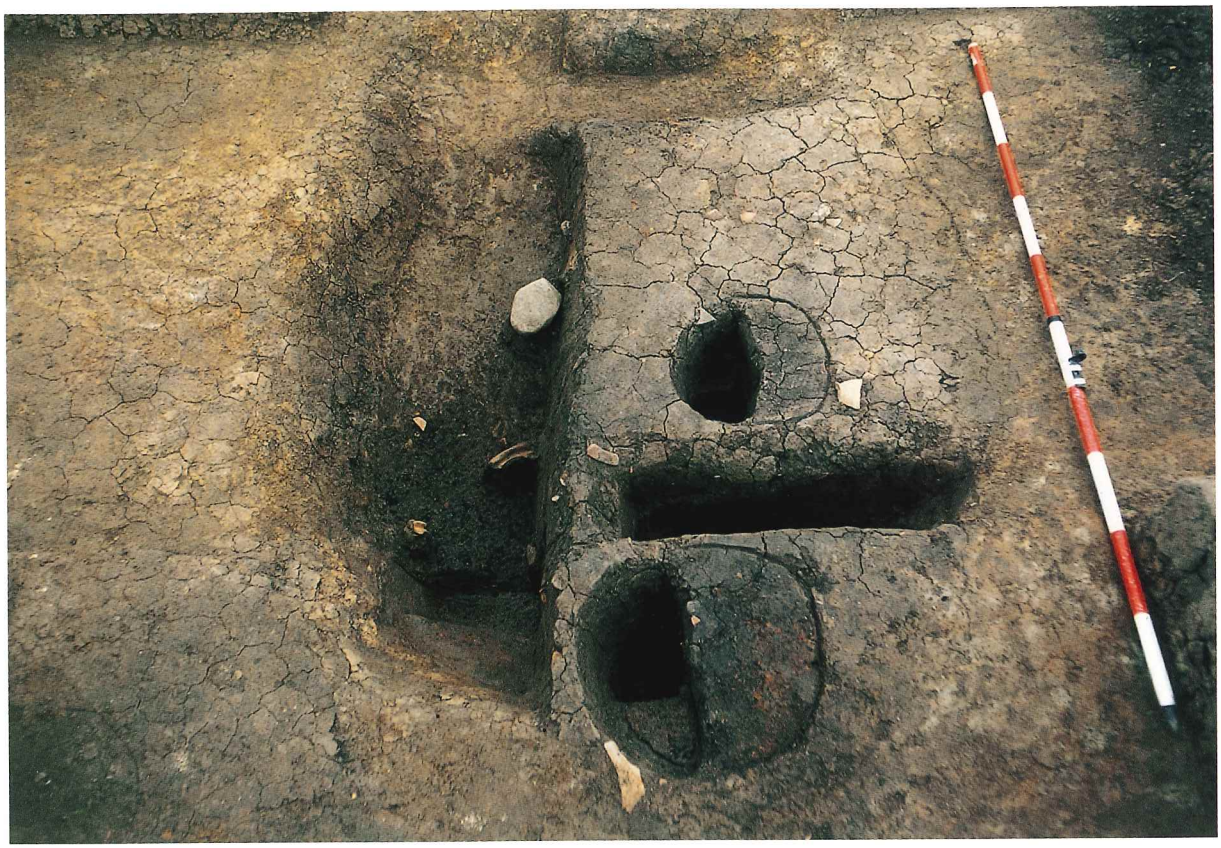
石田高原地区　全景

石田高原地区 Ⅲ・Ⅳ区 全景

ココヤシ製笛

銅鏃　出土状況

絵画土器



高元Ⅰ区 SK２　検出状況

高元Ⅰ区 SK２　断面土層

高元Ⅰ区　SK３　検出状況

高元Ⅰ区　SK２　床面検出状況

高元Ⅰ・Ⅱ区 全景

発刊にあたって

本書は国庫補助を受けて実施した，平成14年度の原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は，弥生時代を代表する大規模環濠集落で，日本最古の船着き場も確認され，大陸や朝鮮半島との交流を物語る数多くの遺物が出土しています。このことから『魏志倭人伝』に記された「一支国」の「王都」と特定され，平成９年９月に国史跡，平成12年11月に国特別史跡の指定を受けました。

今年度の調査は，台地西側の芦辺町八反地区と台地先端部の芦辺高元地区，そして台地北東側の石田町高原地区で実施しました。八反地区では，環濠の一部が確認され，台地西側の環濠の状況がより詳しく明らかになりました。高元地区では，弥生時代後期から古墳時代前期の住居址，弥生時代中期の焼土坑が確認されました。また石田町高原地区では，複雑に掘られた環濠や，道路状遺構の延長が確認されました。

このように，継続した調査によって当時の状況が少しずつ明らかになってきました。これからも調査は続けられますが，「南北市羅」し，国際的な感覚を身につけていた一支国人と同じように，広い視野に立って調査研究を行っていきたいと考えています。

原の辻遺跡の調査成果が，学術資料として活用され，文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成15年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した，平成14年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡の調査地区は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字八反・字高元，石田町石田西触字石田高原に所在する。

3．調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会　委員長　西谷　正（九州大学名誉教授）

委員　工楽善通（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修事業部長）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授）

日野尚志（佐賀大学名誉教授）

沢田正昭（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）

松井　章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官）

原の辻遺跡調査事務所　所長　高野晋司

課長（兼）野中滋生（壱岐教育事務所）

係長（兼）長岡正記（壱岐教育事務所）

係長　町田利幸

主任文化財保護主事　福田一志

文化財保護主事　藤村　誠（現場担当）

文化財保護主事　小玉友裕

文化財保護主事　中尾篤志（現場担当）

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会・長岡　信治（長崎大学教育学部）

松井　和幸（北九州市立自然史歴史博物館）・村上　恭通（愛媛大学法文学部）

4．本書で使用した遺物と遺構の実測および製図は，原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．本書に収録した遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所に保管している。

6．本書の遺構写真は現場担当者が，遺物写真は町田利幸が撮影した。

7．本書の執筆担当者は本文目次に（　）で示した。

8．本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではＭＮの略字を使用した。

9．本書では溝状遺構にＳＤ，土坑にＳＫ，住居址にＳＢの略字を使用した。

10．本書の総編集は，中尾篤志が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境……1（藤村）

2．歴史的環境……2（藤村）

Ⅱ　調査にいたる経緯……5（中尾）

Ⅲ　調査

1．八反地区の調査

(1)　調査概要……7（藤村）

(2)　基本土層……7（藤村）

(3)　遺　構……13（藤村）

(4)　出土遺物……18（中尾）

(5)　小　結……42（中尾）

2．高元地区の調査

(1)　調査概要……51（中尾）

(2)　土　層……51（中尾）

(3)　遺　構……51（中尾）

(4)　遺　物……65（中尾）

(5)　小　結……85（中尾）

3．石田高原地区の調査

(1)　調査概要……101（藤村）

(2)　土　層……101（藤村）

(3)　遺　構……115（藤村）

(4)　遺　物……124（中尾）

(5)　小　結……153（中尾）

挿図目次

第１図　壱岐・対馬比較図……1
第２図　壱岐島位置図及び主要遺跡図……3
第３図　平成14年度調査研究事業調査区位置図……6
第４図　八反地区調査区位置図……8
第５図　八反地区遺構配置図……9～10
第６図　Ａ北壁・Ｂ北壁・Ｃ北壁・南壁土層図……11
第７図　Ｃ西壁・Ｄ西壁・北壁土層図……12
第８図　ＳＤ２遺物出土状況及び土層図……15～16
第９図　１号・２号建物検出状況……17
第10図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(1)……19
第11図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(2)……20
第12図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(3)……21
第13図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(4)……22
第14図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(5)……23
第15図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(6)……24
第16図　ＳＤ２Ⅱ層出土土器(1)……26
第17図　ＳＤ２Ⅱ層出土土器(2)……27
第18図　ＳＤ３出土土器……28
第19図　Ｄ区落ち込み出土土器(1)……29
第20図　Ｄ区落ち込み出土土器(2)……30
第21図　包含層出土遺物……31
第22図　八反地区出土石器(1)……34
第23図　八反地区出土石器(2)……35
第24図　八反地区出土石器(3)……36
第25図　八反地区出土石器(4)……37
第26図　八反地区出土石器(5)……38
第27図　八反地区出土石器(6)……39
第28図　その他の出土遺物……41
第29図　台地西側低地部の主要遺構図……43
第30図　高元地区調査区位置図……52
第31図　高元Ⅰ区Ａ・Ｂ東西トレンチ遺構配置図及び土層図……53
第32図　高元Ⅰ区Ｃ・Ｄ東西トレンチ遺構配置図及び土層図……54
第33図　高元Ⅰ区南北トレンチ遺構配置図及び土層図……55
第34図　高元Ⅱ区遺構配置図及び土層図……56
第35図　高元Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図及び土層図……57
第36図　ＳＢ１検出状況……59
第37図　ＳＢ２・ＳＢ３検出状況……60
第38図　ＳＫ１・ＳＫ４遺物出土状況及び土層図……63
第39図　ＳＫ２・ＳＫ３遺構検出状況及び土層図……64
第40図　ＳＢ１出土土器……68
第41図　ＳＢ２出土土器(1)……69
第42図　ＳＢ２出土土器(2)・ＳＢ３出土土器……70
第43図　ＳＢ５覆土中出土土器……71
第44図　ＳＫ１出土土器(1)……72
第45図　ＳＫ１出土土器(2)・ＳＫ２・ＳＫ３出土土器……73

第46図　ＳＫ４出土土器……74
第47図　高元Ⅱ区中期包含層出土土器(1)……75
第48図　高元Ⅱ区中期包含層出土土器(2)及び半島系土器……76
第49図　高元地区出土石器(1)……79
第50図　高元地区出土石器(2)……80
第51図　高元地区出土石器(3)……81
第52図　その他の出土遺物（土製品・金属製品・ガラス製品・骨角製品）……84
第53図　ＳＫ２・ＳＫ３構造推定図……86
第54図　住居址の変遷……87
第55図　竪穴住居址時期別分布図……89
第56図　高元地区時期別遺構配置図……90
第57図　石田高原地区調査区位置図……102
第58図　石田高原中央区遺構配置図……103～104
第59図　石田高原中央区主要遺構配置図……105
第60図　石田高原南区遺構配置図……106
第61図　石田高原北区遺構配置図……107～108
第62図　Ⅰ・Ⅱ区南壁・西壁土層図……109
第63図　Ⅲ・Ⅳ区南壁・西壁土層図……110
第64図　Ⅴ・Ⅵ区土層図及びＳＤ14土層図……111～112
第65図　Ⅶ・Ⅷ区北壁・西壁土層図……113
第66図　Ⅱ区東西トレンチ土層図及びＳＤ土層図……114
第67図　ＳＤ１・２遺物出土状況及び土層図……117
第68図　ＳＤ３遺物出土状況及び土層図……118
第69図　ＳＤ９・７・11遺物出土状況及び土層図……119
第70図　道路状遺構検出状況……121～122
第71図　石敷き遺構検出状況……123
第72図　ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３出土土器(1)……126
第73図　ＳＤ３出土土器(2)……127
第74図　ＳＤ５・ＳＤ７・ＳＤ８・ＳＤ９出土土器……128
第75図　ＳＤ11出土土器……129
第76図　ＳＤ12・ＳＤ13・Ⅰ～Ⅳ区中期包含層・大溝関連出土土器……131
第77図　Ⅷ区落ち込み出土土器……132
第78図　Ⅴ区溝状落ち込み出土土器……133
第79図　Ⅵ区古墳時代前期落ち込み出土土器……134
第80図　その他の出土土器及び半島系土器(1)……135
第81図　半島系土器(2)……136
第82図　石田高原地区出土石器(1)……140
第83図　石田高原地区出土石器(2)……141
第84図　石田高原地区出土石器(3)……142
第85図　石田高原地区出土石器(4)……143
第86図　石田高原地区出土石器(5)……144
第87図　石田高原地区出土石器(6)……145
第88図　金属製品・石製品・ガラス製品・骨角製品……148
第89図　木製品……149～150
第90図　土製品……151
第91図　石田高原地区遺構変遷図（平成５年度調査分と合成）……155

図版目次

図版１　調査区全景（北から），ＳＤ２・ＳＤ３検出状況，ＳＤ２遺物出土状況
図版２　ＳＤ２遺物出土状況・ＳＤ２断面土層・ＳＤ３遺物出土状況
図版３　ＳＤ３遺物出土状況及び１号建物跡柱穴検出状況，１号・２号建物跡柱穴検出状況（北から），１号建物跡柱穴検出状況（東から）
図版４　ＳＤ２調査風景，砥石出土状況，ウマの歯出土状況
図版５　八反地区出土土器
図版６　八反地区出土土器・石器
図版７　Ⅰ区住居址群半掘状況（東から）・Ⅱ区全景（北から）・Ⅱ区ＳＢ５・６・７検出状況
図版８　Ⅰ区ＳＢ１検出状況・Ⅰ区ＳＢ２検出状況・Ⅰ区ＳＢ３検出状況
図版９　ＳＫ１検出状況・ＳＫ１遺物出土状況・高元Ⅳ区ＳＫ４遺物出土状況
図版10　Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況・Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況・Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況
図版11　Ⅱ区棒状銅製品出土状況・ＳＢ１鉄鏃出土状況・ＳＢ１鉄鏃出土状況
図版12　高元地区出土遺物
図版13　高元地区出土遺物
図版14　Ⅰ区遺構検出状況(西から)・Ⅰ区遺構検出状況(北から)・Ⅱ区遺構検出状況(北から)
図版15　Ⅳ区遺構検出状況(西から)・Ⅳ区遺構検出状況(西から)・Ⅴ区遺構検出状況(北から)
図版16　Ⅵ区全景（北から）・Ⅶ・Ⅷ区全景（南から）・Ⅷ区遺構検出状況（西から）
図版17　Ⅱ区ＳＤ７遺物出土状況・Ⅱ区ＳＤ９遺物出土状況・Ⅳ区ＳＤ10遺物出土状況
図版18　Ⅵ区石敷き遺構検出状況・ＳＤ１断面土層・ＳＤ２断面土層
図版19　ＳＤ７断面土層・ＳＤ８断面土層・ＳＤ８断面土層
図版20　ＳＤ７・ＳＤ８断面土層・ＳＤ10断面土層・Ⅲ区南壁サブトレンチ土層
図版21　ＳＤ９断面土層・Ⅳ区南壁サブトレンチ土層・ＳＤ５断面土層
図版22　建築部材出土状況（全景）・建築部材出土状況（先端部）・建築部材出土状況（末端部）
図版23　組み合せ式案脚部出土状況（遠景）・組み合せ式案脚部出土状況（近景）・木製品出土状況
図版24　ＳＤ３獣骨出土状況・刻骨出土状況・ココヤシ製笛出土状況
図版25　木製品（槽）出土状況・木製品（梯子）出土状況・銅鏃出土状況
図版26　石田高原地区出土遺物
図版27　石田高原地区出土遺物
図版28　石田高原地区出土遺物

表目次

表１　八反地区出土土器観察表……32
表２　八反地区遺構別石器組成表……33
表３　八反地区出土石器その他観察表……40
表４　高元地区出土土器観察表……77
表５　高元地区遺構別石器組成表……78
表６　高元地区出土石器その他観察表……82
表７　石田高原地区出土土器観察表……137～138
表８　石田高原地区遺構別石器組成表……139
表９　石田高原地区出土石器観察表……146
表10　石田高原地区出土その他観察表……153

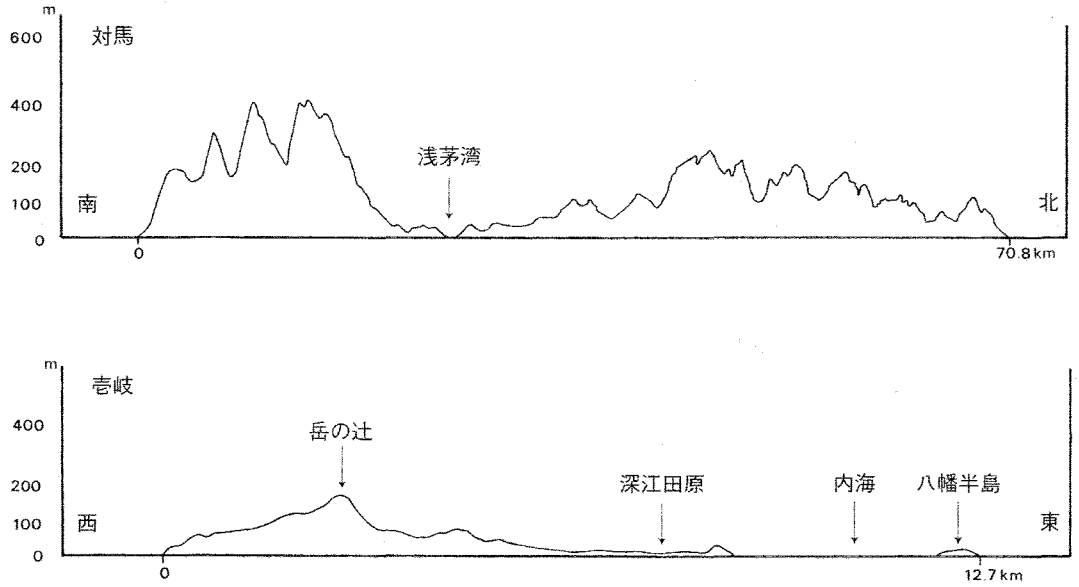
Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

玄界灘に飛び石のように浮かぶ壱岐島は東西約15km，南北約17km，面積約138km²（対馬の５分の１），対馬とともに長崎県に属し，人口は約３万５千人である。朝鮮半島の釜山から対馬までは約52km，対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多までは約67km，壱岐から佐賀県呼子までは約26kmの距離に位置する。福岡県博多港とはフェリー・ジェットフォイルで，佐賀県呼子港とはフェリーで結ばれている。長崎県への交通アクセスは航空機のみで，行政的には長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県との繋がり深い。

島は全体が平坦な溶岩台地で，起伏は少なく最も高い岳の辻でも標高は213mにすぎない。岳の辻に上ると，原の辻遺跡を見渡すことができるし，晴れた日には対馬の島影を見ることもできる。現在島の面積の30％が耕地で森林は39％である。険しい山々からなり森林が島全体の90％を占める対馬とは好対照をなしている。島の基盤は古第三期層で，玄武岩がその表面を覆い，弥生時代以降の箱式石棺や古墳石室の石材として利用されている。気候は対馬暖流の影響を受け，全国的に見るとおおむね温暖な海洋性気候である。年間降水量は本土部と比べると多いほうである。離島であるがゆえ自然環境の破壊は都市部ほど進んでおらず，歴史・文化の研究フィールドとしてはとても有効な場所である。

中国の歴史書『魏志』倭人伝は３世紀頃の壱岐の様子を「・・・耕田猶不足食・・・」と記しているが，島南東部の「深江田原」は県内第１の沖積平野で，有数の穀倉地帯である。原の辻遺跡はこの平野の中にあり，南北方向に舌状に突き出した台地（標高８～18m）と現在の水田面（標高５～７m）からなる。遺跡の範囲は約100haである。環濠はその台地を取り巻くように巡り，環濠内の面積は約24haである。遺跡北側には島内最大の幡鉾川（全長約９km）が流れ，東へ約1.5km進むと内海（うちめ）に注ぎ，西は郷ノ浦方面まで続いている。この川が弥生時代以降，島内の重要な交通ルートであったことは間違いない。遺跡周辺は小高い山々で囲まれ，海から約１kmしか離れていないにもかかわらず海からはその場所を確認できない。



第１図　壱岐・対馬比較図

2．歴史的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は古くから対馬とともに大陸や朝鮮半島との交流拠点として，また防衛上の要衝として，その時々の国際情勢の中で様々な役割を演じてきた。

旧石器時代の遺物は，原の辻遺跡・名切遺跡など確認されているがごくわずかである。

縄文時代の遺跡も実際に確認されているものは鎌崎海岸遺跡・名切遺跡・松崎遺跡など7遺跡程度で，その大半が干潮になって遺跡が現れる潮間帯遺跡である。

それに対して，弥生時代の遺跡は島内で66カ所確認されている。弥生遺跡分布の特徴として，縄文遺跡が壱岐島西側の海岸部に集中しているのに比べ，弥生遺跡は壱岐島全体に広がっている。これは漁労・採集社会から農耕社会への変化に対応したものと考えられる。また，河川の流域に多く位置するのも特徴の一つであろう。ただし，島の北東部を流れる谷江川流域には遺跡が立地していない。これは島の北東部は発達した海蝕崖で湾入が少ないことや，表面を玄武岩で覆われた低平な溶岩台地であるなどの地形的な条件から集落が形成されにくかったためと考えられる。

壱岐が初めて文献に登場するのは，日本の弥生時代，中国の歴史書『魏志』倭人伝に「一支国」として紹介されたことに始まる。「(対馬国から）南に瀚海という海を渡り，千余里行くと，一大国（一支国）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹木・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが3世紀前半頃の壱岐を知る貴重な記述である。

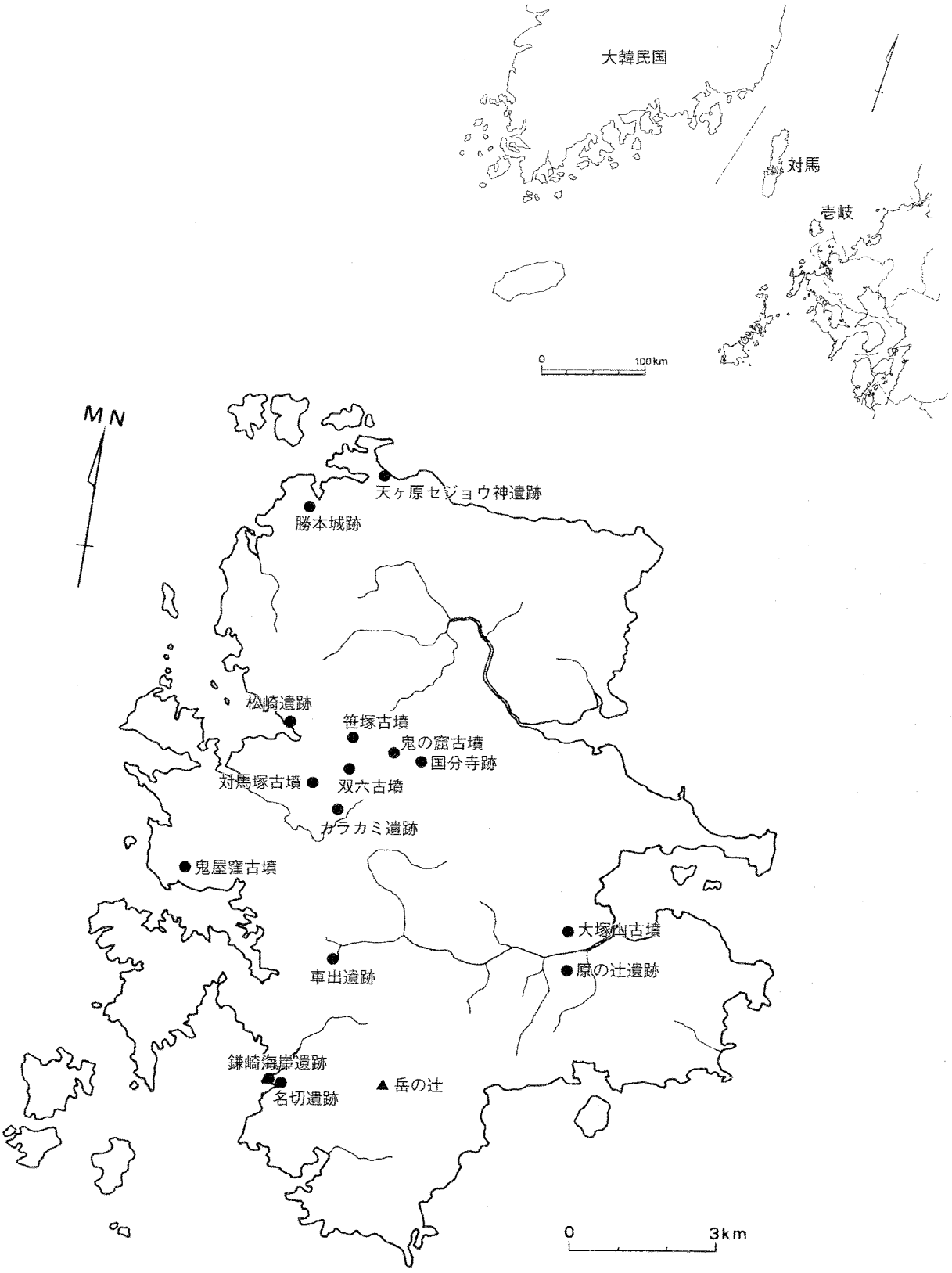
現在壱岐島内で「一支国」の拠点集落と考えられる遺跡は，原の辻遺跡・カラカミ遺跡・車出遺跡である。

原の辻遺跡は遺跡の範囲，出土遺構・遺物の質・量ともに他を圧倒している。集落の形成は弥生時代前期末に始まり，弥生時代中期前半には多重の環濠を掘削して大集落として整備されていく。その後弥生時代後期に環濠の再整備を経て，古墳時代前期に環濠は埋まり集落は解体していった。

台地頂上部では，集落の中枢部分とみられる高床式建物群が，その周辺では住居址が確認されている。また台地西側低地では東アジアで最古の船着き場跡や水田畦畔遺構も確認されている。そして遺跡の南部を中心に，それぞれの時期ごとに墓域が形成されている。特に石田大原地区の墓域からは，多鈕細文鏡と細形銅剣が出土し，この地区が原の辻遺跡の初期王墓であることがわかった。こういった調査の結果から原の辻遺跡は，倭人伝に記載された国の中で唯一，一支国の王都として特定された。

原の辻遺跡で特に注目されるのは大陸・朝鮮半島系の遺物の豊富さである。貨泉・五銖銭・大泉五十などの中国の貨幣や朝鮮半島系無文土器・楽浪系土器・三韓系瓦質土器・陶質土器，内行花文鏡や戦国式銅剣など数え上げればきりがない。「南北市糴」の言葉どおり，海を渡りこの地を訪れた人々との活発な交流を物語る。また，「人面石」と呼ばれる岩偶は祭祀に用いられたと考えられ，全国でも例のない貴重な遺物である。

カラカミ遺跡は，刈田院川の中流右岸に点在する遺跡群の中心で，原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から集落の形成が始まっている。高地に位置するものの環濠が巡り，朝鮮半島系の瓦質土器や楽浪系滑石混入土器の出土は，大陸との頻繁な交流を伺わせる。獣骨製の銛・ヤス・アワビおこしなどの漁労関係の遺物が多く，漁労や交易に従事した集団の基地的な集落であった可能性が強い。また方



第２図　壱岐島位置図及び主要遺跡図

格規矩鏡や銅鏃，卜骨も出土するなど原の辻遺跡との類似性は大きいが，集落の規模が小さく，遺跡群の中心集落ではあるものの原の辻遺跡の集団よりも階層的に下位にあったと考えられる。

幡鉾川上流の遺跡群の中心が車出遺跡である。車出遺跡の位置する柳田地区は壱岐西部で比較的まとまりのある平野部が形成され，その中心にあたる鉢形山には旧式内社で壱岐一の宮と称される天手長男神社が位置する。方格規矩鏡・貨泉が出土し，祭祀的な性格を持つと思われる土器溜や卜骨も確認されている。最近の調査結果から隣接する田ノ上遺跡や戸田遺跡なども車出遺跡の範疇としてとらえられ，当時の一支国内の有力な集団がここにも存在したとも考えられる。しかし原の辻遺跡と同じ水系で直線で約５km程上流であること，集落の形成時期が弥生中期であることから，何らかの理由で原の辻遺跡から派生した集団によって集落が営まれた可能性が強いと考えられる。一支国を形成する集落の一つとして，ここにも有力者層が存在し，北から南に深く湾入した半城湾を意識し，島の西側をかためるための役割を果たしていた可能性もある。

この他，対馬を臨む島の北端部にも多くの弥生遺跡が点在する。中でも天ケ原セジョウ神遺跡は，護岸工事中に海岸の石祠の下から三本の中広形銅矛が出土した。壱岐での銅矛の出土はここだけであり，この場所で航海の安全を守るための祭祀が行われていた可能性がある。壱岐は対馬に次ぐ国境の島としての外敵の侵入を防ぐとともに大陸への航海の安全を守る役割を果たしたのであろう。

古墳時代になると，壱岐には多くの古墳が築造された。現在でも県内の半数以上の264基もの古墳が確認されており，最も早いのが５世紀後半に築造されたとみられる大塚山古墳で，原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれ，この地を生活の基盤とした豪族の墳墓と考えられる。しかし，その後約１世紀近くの空白を経て，巨石墳が島の中央部に多く見られるようになる。壱岐島の穀倉地帯を捨てて，何故この地に移ってきたのか詳細はわからない。全長89.5m，県内最大の前方後円墳で，二彩や新羅土器が出土した双六古墳や，金銅製の飾り金具をつけた馬具が出土した笹塚古墳の他，対馬塚古墳・鬼の窟古墳もこの一帯に造られた。出土遺物からも，これらの古墳を築いた人物が，中央政権との関わりの深さとともに大陸との繋がりをも持っていたことが伺える。律令制下，壱岐・対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱いを受けた。また聖武天皇の発願による国分寺が置かれたのもこの地域であった。壱岐嶋分寺は，当時の壱岐直の氏寺を嶋分寺に転用した。発掘調査の結果，ここから出土した瓦が平城京の瓦と同笵であることが確認された。こうした事実からこの時代の壱岐がいかに重要視されていたかが推測される。

壱岐島は国境に近いため人的・物的交流の最前線であるのは当然のことながら，いったん対外的な緊張関係が高まると状況は一変する。1019年，女真族刀伊が50隻の船で押し寄せ，国司藤原理忠らはことごとく殺害され，壱岐の島は甚大な被害を被った。また，鎌倉時代の元軍の襲来に際して，守護代平景隆や少弐資時がこれを迎え撃ったが，元軍の圧倒的な兵力の前に全滅し，多くの壱岐島民が虐殺された。このように国際関係の緊張が国防の最前線である壱岐に悲劇をもたらすこともあった。

また，それとは逆に日本の朝鮮半島進出の兵糧・兵站基地としての役割を果たしたこともある。文禄・慶長の役（壬申・丁酉の倭乱）に際して，秀吉は肥前名護屋城を本拠地とした。それに続く壱岐の地に，松浦鎮信に命じて勝本城を築かせた。このように古代以来，玄界灘に浮かぶ壱岐の島は国境の島であるが故の宿命を背負ってきたのである。

Ⅱ．調査にいたる経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川改修工事や耕地整理の際に，大量の土器や中国製鏡などが発見され，遺跡の重要性が認識されるようになると，昭和26年～昭和36年には，京都大学や九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行われた。初めての本格的な発掘が行われたこの調査では，大量の弥生土器とともに各種鉄製品や中国製の貨泉，あるいは朝鮮半島系や楽浪系土器などが出土し，大陸との関連性が強い遺跡として，学会で注目を集めた。一方で，地元に対しての理解は浸透しておらず，高度成長期を迎えると，遺跡の位置する丘陵周辺も畑地から水田への転換が押し進められ，それに伴って，遺跡自体かなりの損壊をうけた。

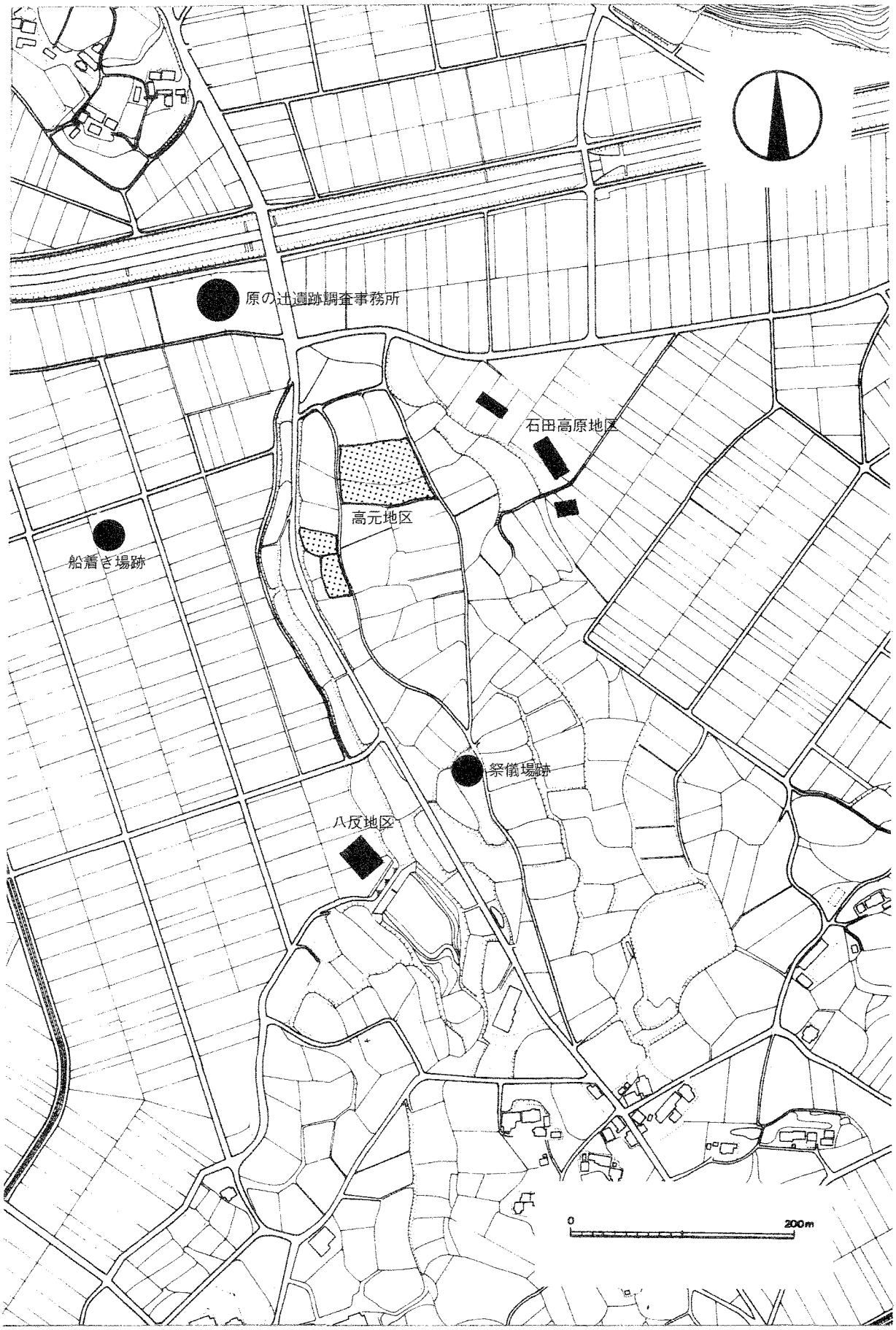
昭和49年には，石田大原地区において水田化改良工事が計画され，これに先立つ発掘調査で墓域が検出された。この墓域は，弥生時代前期末～中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝なども伴う本格的な墓域として注目された。この調査をうけて，新たな保護対策として昭和50年～52年度にかけて範囲確認調査を実施し，遺跡の広がりが南北に延びる舌上台地だけでなく，より南側まで広がることが確実となった。

平成にはいって幡鉾川流域総合整備事業が計画されると，舌状台地周辺の低地部を中心に広大な面積の発掘調査が行われることとなった。これによって，遺跡の範囲が約100haに及ぶとともに，台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす巨大環濠集落であることが判明した。

平成７年以降は，集落構造の把握を目的として，改めて範囲確認調査を実施している。これまでの調査により，環濠の外側に小児甕棺墓や成人用の箱式石棺などを主体とする墓域が検出され，集落の形成から解体まで，地点を変えつつ連綿と墓域が形成されていた様相が明らかになりつつある。丘陵上の調査においては，多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘建柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また，低地部の調査も継続して行われており，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で検出された環濠同士のつながりについても検討できる状況になりつつある。

本年度の調査は，丘陵を挟んだ東西の低地部と，丘陵上の先端部付近の３カ所，合計2,500㎡を対象に調査を行った（第３図）。調査区名は，字名を用いてそれぞれ八反地区，高元地区，石田高原地区と呼称する。八反地区では，前年度に集中して調査が行われた丘陵南西低地部の調査成果に基づいて，さらに南側への環濠の展開を探るとともに，平成７年度の調査で検出された丘陵を東西に横切る２条の環濠と，低地部の環濠との関連性について確認することを目的として調査を行った。また，高元地区は，これまで調査が手薄であった丘陵先端部付近のトレンチ調査を行い，弥生時代における遺構群の展開を探ることを目的とした。石田高原地区は，平成５年度に行われた丘陵東側低地部の調査において確認した環濠および道路状遺構のつながりを確認することを目的として調査区を設定した。

調査は，平成14年５月７日～平成15年２月14日まで行った。



第３図　平成14年度調査研究事業調査区位置図（１/5000）

Ⅲ．調　　査

1．八反地区の調査

(1) 調査概要（第３図，第４図）

平成13年度の特定調査に引き続き，今年度は深江池に近い八反地区南端部（第４図）の調査を実施した。昨年度の調査で確認された複数の環濠がどのように伸びていくのか，また平成12年度の農道調査で確認された水田跡，畦畔跡がどのように広がりをみせるのかを確認することを目的とした。今年度の調査は昨年度の特定調査の調査区南側に南北35m，東西25mの調査区を設定し，910m²にわたって発掘調査を実施した。その際，県道移設に伴って緊急発掘調査が実施される予定地と重複しないようにした。調査方法は調査区北側から18m地点と東西13m地点に土層観察用のベルトを十文字に残し，調査区北東側から時計回りにＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区とした。調査区全体を面的に掘り下げるとともに，調査区全体に５m四方の小グリッドを設定して遺物の取り上げを行った。（第４図）Ｃ区については，調査区の南北西壁際に１mのサブトレンチを設定し，地山まで掘り下げを行い土層を観察したが，遺構を確認できなかったので，全体的な掘り下げは行わなかった。

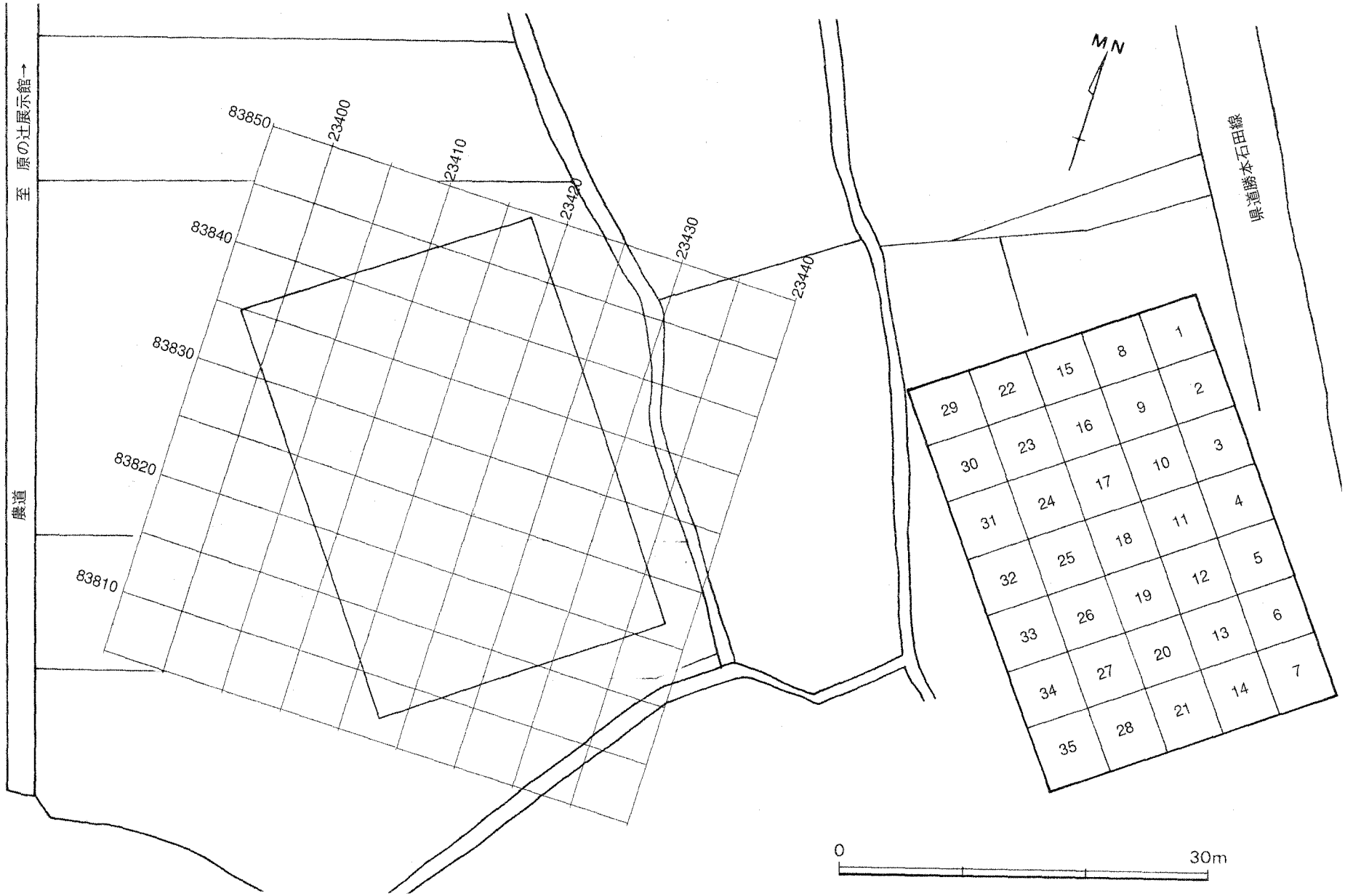
調査区は東側台地の裾から，西側に向かって緩やかに傾斜しており，低くなった西側では，底の方に小礫や砂・腐植が堆積していた。またこの付近は湧水が多い場所であり，Ｃ・Ｄ区は恒常的に水が溜まる低湿地であったと推測できる。

調査の結果，弥生時代後期から古墳時代初頭の溝２条と，弥生時代中期の溝１条，弥生時代中期以前の建物跡２棟を確認した。また，古墳時代初頭以降の落ち込みや，環濠が埋没したあとの土地の造成に伴うものと見られる杭列なども確認した。この杭列は，昨年の特定調査・国庫補助調査区でも確認されており，近世頃にこの台地西側の低地部で，大規模な土地の造成が行われたことを示している。この杭を境にして地山が西側に急激に落ち込んで，Ａ区とＤ区では地山の検出面の標高に約50cmの差があった。

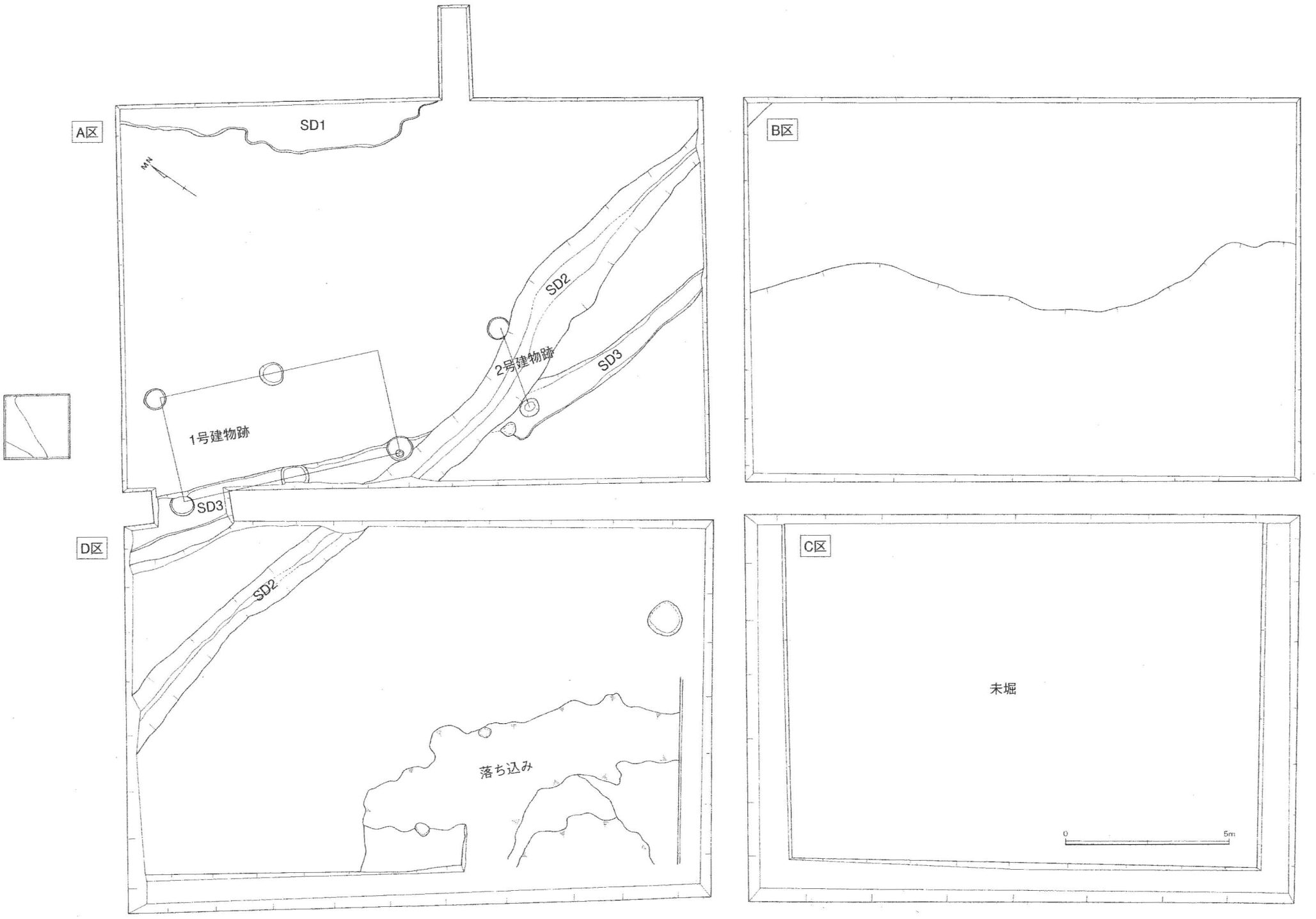
(2) 基本土層（第６図～第８図）

基本層序は，次の１～４層である。１層は灰黄褐色系で現耕作土である。２層は暗褐色土で旧耕作土であろう。Ａ・Ｂ・Ｄ区を面的に下げるとこの層の上面で，列状に打ち込まれた杭列を確認した。おそらく近世頃の土地の造成による水田化の過程で打ち込まれたものであろう。またＣ区北壁土層で，畔の跡も確認している。３層は黒褐色土で須恵器が出土した。足で踏み込まれたような土の混ざり合いが確認されているので，古代以降の水田であった可能性が高い。Ａ区は２層まで，Ｂ区では３層までを確認した。４層は黒褐色の粘土・腐植土・小礫混じりの砂層からなる。中でもＤ区西壁の４ａ～４ｅ層は古墳時代初頭以降の落ち込みに関連する土層である。特に４ａ層は黒色の砂質土が厚く堆積した状況で大量の土器片が出土した。

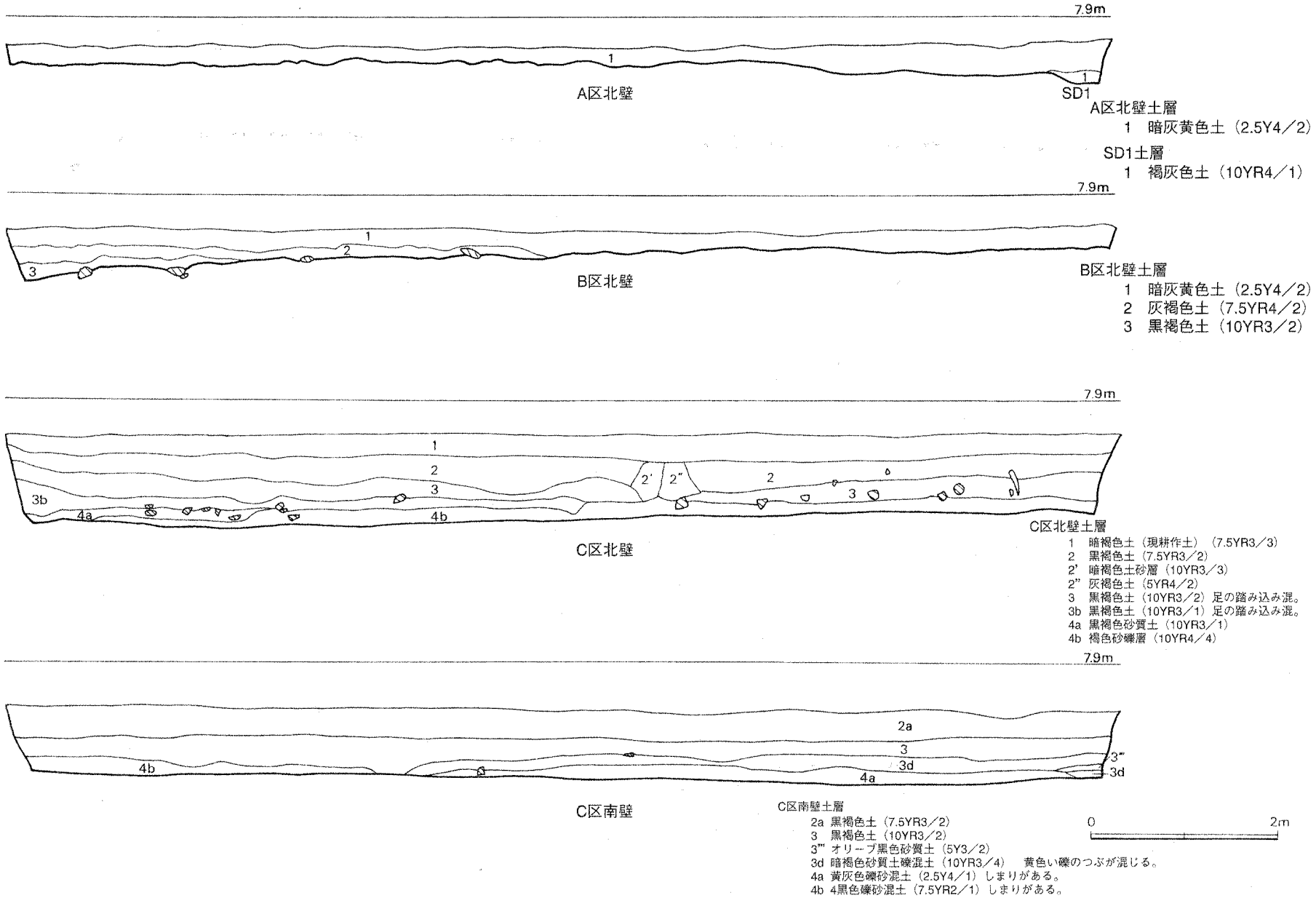
環濠内の土層を見ると，地山の土が丘陵側から崩れ込んだような形で混入していた。土器の取り上げに関して，この層より上をⅠ層，下をⅡ層とした。



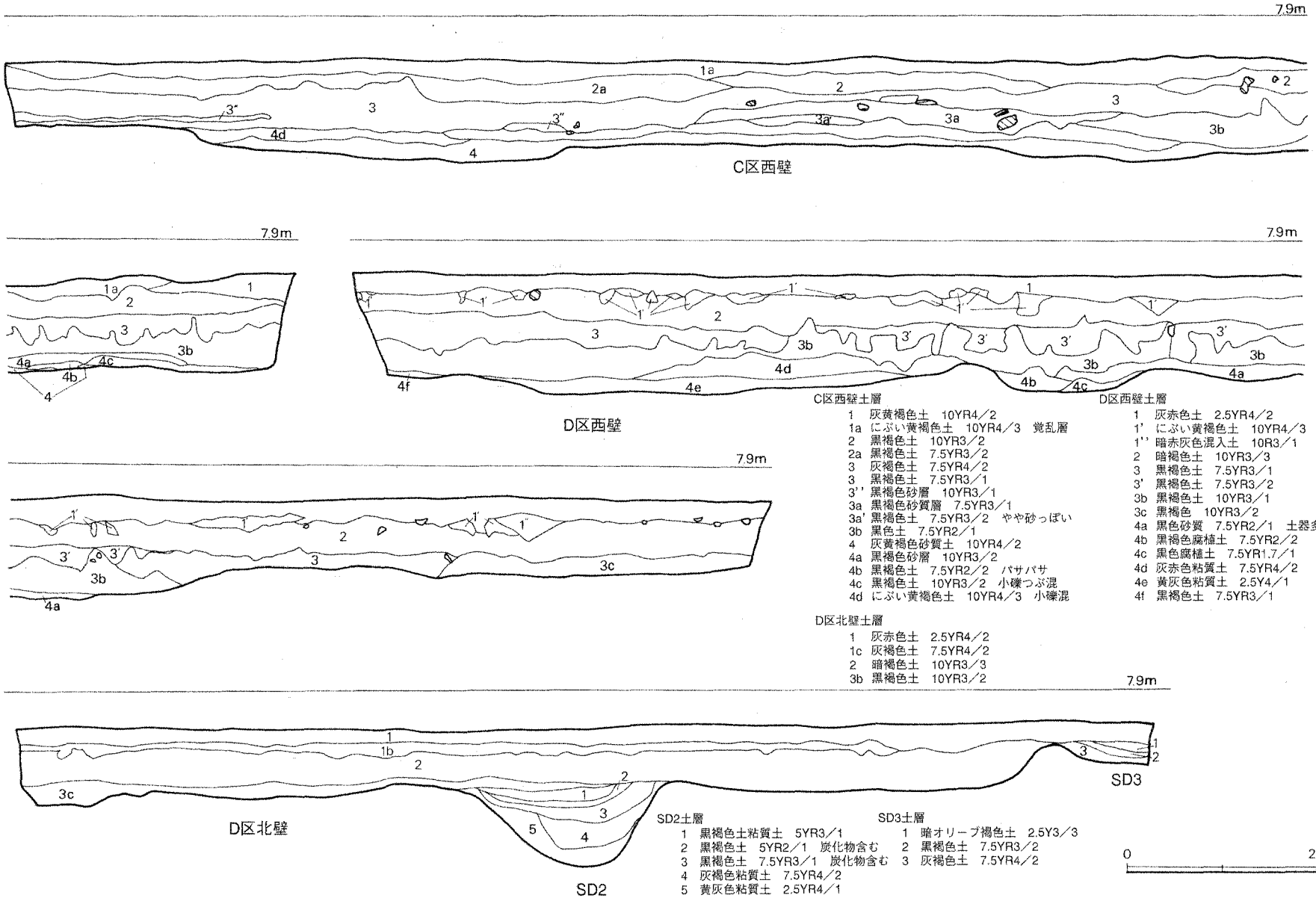
第４図　八反地区調査区位置図（１/450）



第５図　八反地区遺構配置図（1/150）



第６図　Ａ北壁・Ｂ北壁・Ｃ北壁・南壁土層図（１/60）



C区西壁土層
1　灰黄褐色土　10YR4／2
1a　にぶい黄褐色土　10YR4／3　覚乱層
2　黒褐色土　10YR3／2
2a　黒褐色土　7.5YR3／2
3　灰褐色土　7.5YR4／2
3　黒褐色土　7.5YR3／1
3''　黒褐色砂層　10YR3／1
3a　黒褐色砂質層　7.5YR3／1
3a'　黒褐色土　7.5YR3／2　やや砂っぽい
3b　黒色土　7.5YR2／1
4　灰黄褐色砂質土　10YR4／2
4a　黒褐色砂層　10YR3／2
4b　黒褐色土　7.5YR2／2　パサパサ
4c　黒褐色土　10YR3／2　小礫つぶ混
4d　にぶい黄褐色土　10YR4／3　小礫混

D区西壁土層
1　灰赤色土　2.5YR4／2
1'　にぶい黄褐色土　10YR4／3
1''　暗赤灰色混入土　10R3／1
2　暗褐色土　10YR3／3
3　黒褐色土　7.5YR3／1
3'　黒褐色土　7.5YR3／2
3b　黒褐色土　10YR3／1
3c　黒褐色　10YR3／2
4a　黒色砂質　7.5YR2／1　土器多量に混じる
4b　黒褐色腐植土　7.5YR2／2
4c　黒色腐植土　7.5YR1.7／1
4d　灰赤色粘質土　7.5YR4／2
4e　黄灰色粘質土　2.5Y4／1
4f　黒褐色土　7.5YR3／1

D区北壁土層
1　灰赤色土　2.5YR4／2
1c　灰褐色土　7.5YR4／2
2　暗褐色土　10YR3／3
3b　黒褐色土　10YR3／2

SD2土層
1　黒褐色土粘質土　5YR3／1
2　黒褐色土　5YR2／1　炭化物含む
3　黒褐色土　7.5YR3／1　炭化物含む
4　灰褐色粘質土　7.5YR4／2
5　黄灰色粘質土　2.5YR4／1

SD3土層
1　暗オリーブ褐色土　2.5Y3／3
2　黒褐色土　7.5YR3／2
3　灰褐色土　7.5YR4／2

第７図　Ｃ西壁・Ｄ西壁・北壁土層図（１/60）

(3) 遺　構

ＳＤ１（第５図）

Ａ区北東隅にＳＤ１を検出した。遺構上面を検出した段階で，昨年の特定調査で確認されたＳＤ１につながるものと考え掘り下げたが，深さは約20cmで，昨年度のＳＤ１と比べると非常に浅かった。遺物が多量に破棄されていた昨年のＳＤ１に比べると，遺物も少量でほとんどが小型の土器片であった。また南への伸びを確認するためＡ区東壁中央に１ｍ×２ｍの東西トレンチを設定して掘り下げたが，溝の続きを確認できなかった。これらのことから，ここから南は溝が完全に削平され消えてしまったか，または溝がここで止まってしまったものと思われる。出土土器から，弥生時代中期のものである。

ＳＤ２（第５図，第８図）

Ｂ区北東隅からＡ区を斜めに横切り，Ｄ区北西部に向かってＳＤ２を検出した。現耕作面から約30cm程度掘り下げたところで検出され，確認した溝の長さは21.5m，最大幅約1.2mを測る。Ａ区での深さは最大約60cm，Ｄ区では深さ約55cmをはかる。Ａ区で検出された溝の深さは，台地に近づくに従って浅くなっていったため，台地裾部分は，かなり地山が削平されていることが想像される。出土遺物は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が中心であった。土層の断面を観察してみると，ベルトを残した３カ所で溝の覆土に地山の土が混入している。例えば第８図のＡ区ＳＤ２断面土層の３・４（にぶい黄褐色土）がそれである。この土は台地側から崩れ込むようなかたちで堆積していることから，溝を掘った土で作った土塁が崩れて堆積したものではないかと考える。同じ状況は昨年の特定調査ＳＤ３でも確認されており，今回の状況と考え合わせて，原の辻遺跡の環濠に作られた土塁は台地側に作られていた可能性が高いことが明らかになった。溝の中に破棄された土器等も大部分はこの層より上に堆積しており，環濠が役割を終え埋没していく過程で不要になった土器などが破棄された状況が伺える。

ＳＤ３（第５図）

Ａ区南端から，南北ベルト北端に向かって長さ約19mを確認した。中央部分でＳＤ２に切られていた。溝の深さは最も深いところでも約40cmで非常に浅かった。特に溝の南端は浅く深さ約10cm程度であり，Ｂ区でこの溝が確認されていないのは，地山の削平により，溝そのものが削平されたためと考えられる。全体的に出土遺物の量は少ないものの，溝の底の部分からは弥生時代中期の土器が出土している。またこのＳＤ３を面的に掘り下げて床面を検出した段階で，掘建柱建物の柱穴を４カ所確認した。

１号建物跡（第９図）

Ａ区北西隅で確認した。当初は東側の柱穴３カ所を列状に検出したが，ＳＤ３を面的に掘り下げて

いくうちに，西側に３カ所の柱穴を確認した。そこで調査区北側に２×２ｍのトレンチと南北ベルト上２カ所を掘り下げてみた結果，新たなに柱穴を１カ所確認することができた。

調査の現場では南側の２カ所の柱穴も含めて，１×３間の建物跡を想定したが，その後，調査指導委員の宮本長二郎氏の指摘により，南側２カ所の柱穴は別の建物址の柱穴と考えられ，１号・２号建物跡とした。１号建物跡は１×２間の掘建柱建物で，桁行3.2m，梁行3.3m～3.6mを計る。柱穴は径約70cm～80cmを計る。主軸方位はN46°Wで，ＳＤ３の走る方向とほぼ平行である。柱穴深さは最も深いもので約26cm，浅いものは約８cmである。ここは台地の裾部にあたり，弥生時代以降の土地の造成に伴って柱穴も上面が削平されたものと考えられる。南東隅の柱穴は恐らく削平され失われたのだろう。

柱穴から遺物は出土していないが，ＳＤ３を掘り下げるまで柱穴を全く確認できなかったため，建物跡の時期はＳＤ３掘削以前ということになる。ＳＤ３からは弥生時代中期後葉の遺物が出土していることから，この建物跡の時期は弥生時代中期中葉以前ということになる。

平成12年度の農道調査で，この地点から西南西へ約50mのところで，弥生時代の水田畦畔や水田跡が確認されていることから，この建物は倉庫の可能性がある。倉庫は遺跡西側に広がった水田地帯で生産された米の一時収納のための倉庫として利用された可能性もあると指摘を受けた。また平成11年度の農道調査では，ここから北西へ約400m離れた場所でも，水田跡や掘建柱建物跡が確認されている。

２号建物跡（第９図）

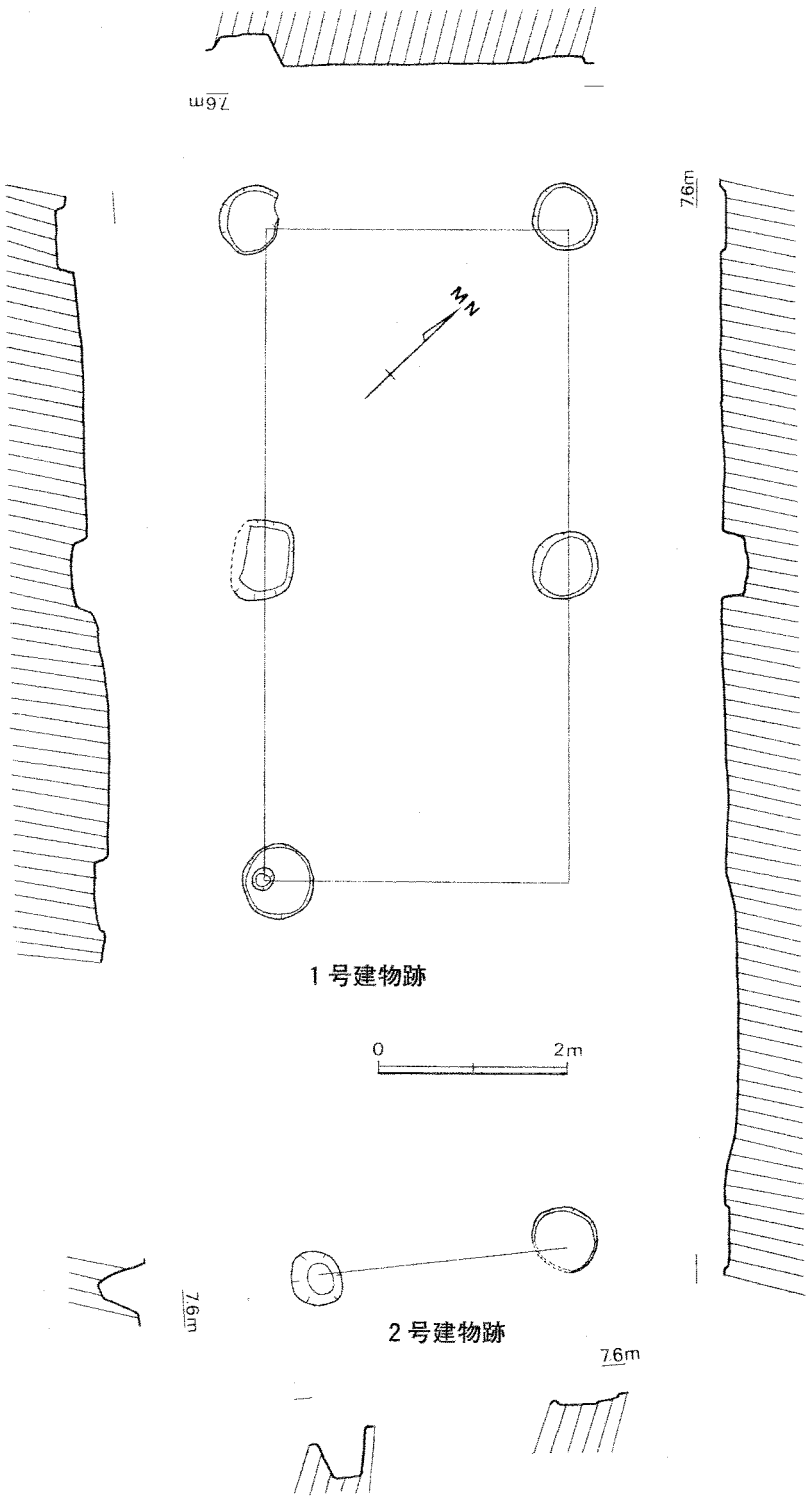
１号建物跡の南側で検出した。桁行約2.8mで１号建物跡のものより若干短い。深さは西側が約50cm，東側が約８cmで，西側の穴の底には石が置かれていた。この柱穴の南側では地山が削平されていたため柱穴を検出することができなかった。

落ち込み（第５図）

Ｄ区南西側で確認した。調査区は全体的に東側から西側に向かって緩やかに傾斜しているが，この部分だけ，その傾斜がさらに急になっていた。黒褐色の砂が厚く堆積し，その層から大型のものも含めて大量の土器片・石製品が出土した。出土した土器の時期は古墳時代初頭のものが中心であった。砂層の下には木質の残りの良い腐植土が，そしてその下には腐植が少し混じった灰色の粘土層が堆積し，遺物はほとんど出土しなかった。この場所では多くの湧水点を確認しており，時間がたてばすぐに水が溜まってしまう状況で，調査も難航した。

当時この場所は湧水によって常に水が溜まる低湿地のような状況で，ここから幡鉾川にむかって伸びていく旧河道に水が供給されていた可能性もある。今後の県道移設のための緊急発掘調査で，この調査区の西側を面的に調査する予定であるので，水田との関連も含めて明らかにされる部分も多いであろう。

第８図　ＳＤ２遺物出土状況（1/40）及び土層図（1/20）



第9図　1号・2号建物検出状況（1/80）

(4) 出土遺物

平成14年度の調査で出土した遺物はコンテナ74箱分である。これらのうち，圧倒的に土器が多く，続いて石器・土製品・金属製品となる。金属製品は量的に非常に少なかった。

ここでは遺構出土遺物を中心に説明を加える。なお，報告書掲載分については，それぞれ観察表を掲載している。併せて参照していただきたい。

①土器

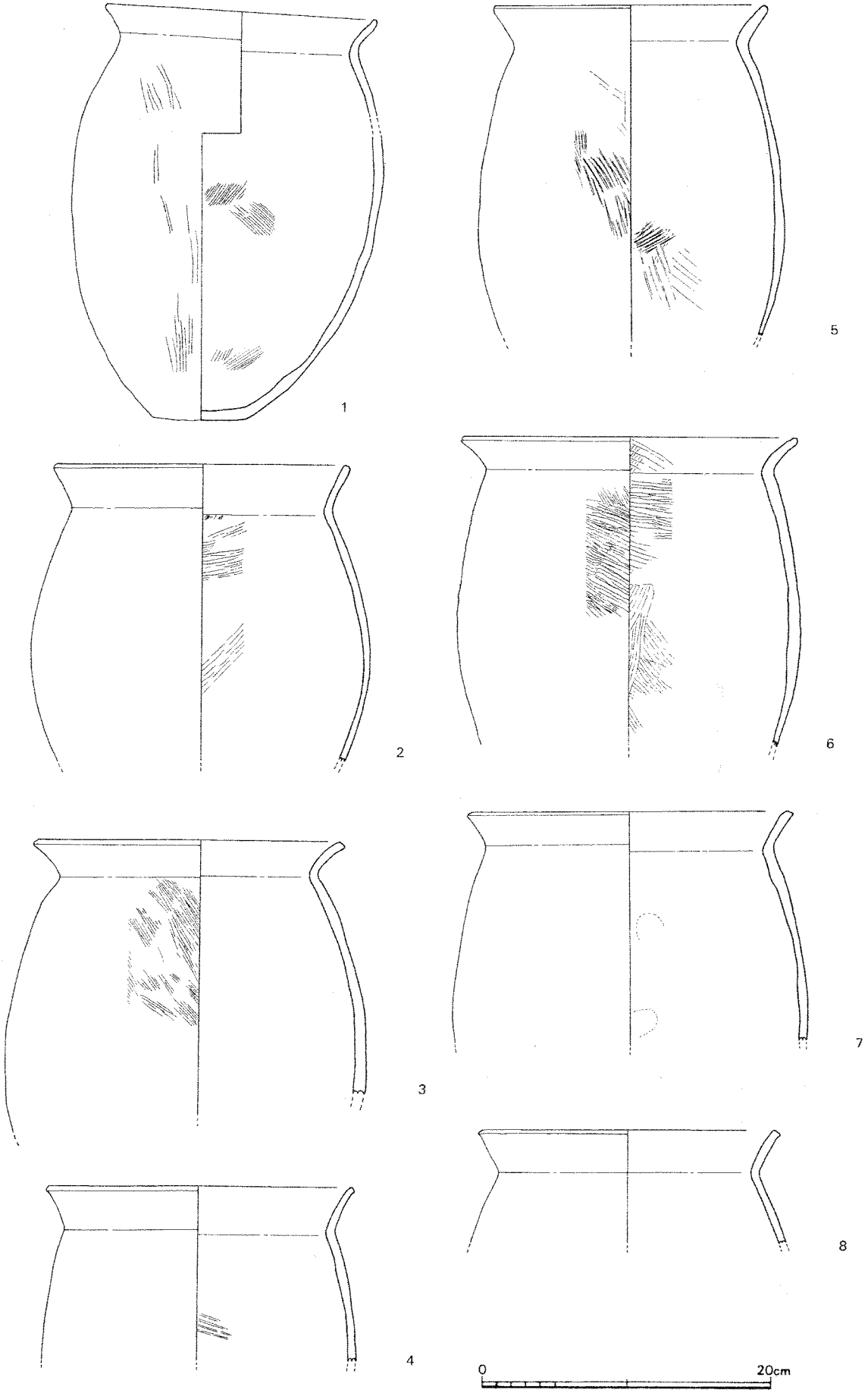
ＳＤ２Ｉ層出土土器（第10図～第15図）

１～16は甕である。いずれも胴部があまり張らず，長胴となる。口縁部は，１・３・６・15・16は外傾し，２・４・５・７～14は直線的に立ち上がる。特に２・４・10・14は立ち上がり部分の長さが長く，立ち上がりの角度も鈍角で，より直口に近い形態となる。調整はいずれも内外面で刷毛目による調整の痕跡が認められ，ほとんどの個体でそれをなで消している。なお，11は退部に穿孔が施されている。焼成後の穿孔で，外側から内側に向けて施されたものである。17は脚部を欠損するものの，台付きの鉢になると考えられる。胴部から口縁にかけてやや内側にすぼまり，端部を丸く収める。調整は内外面ともになで調整である。

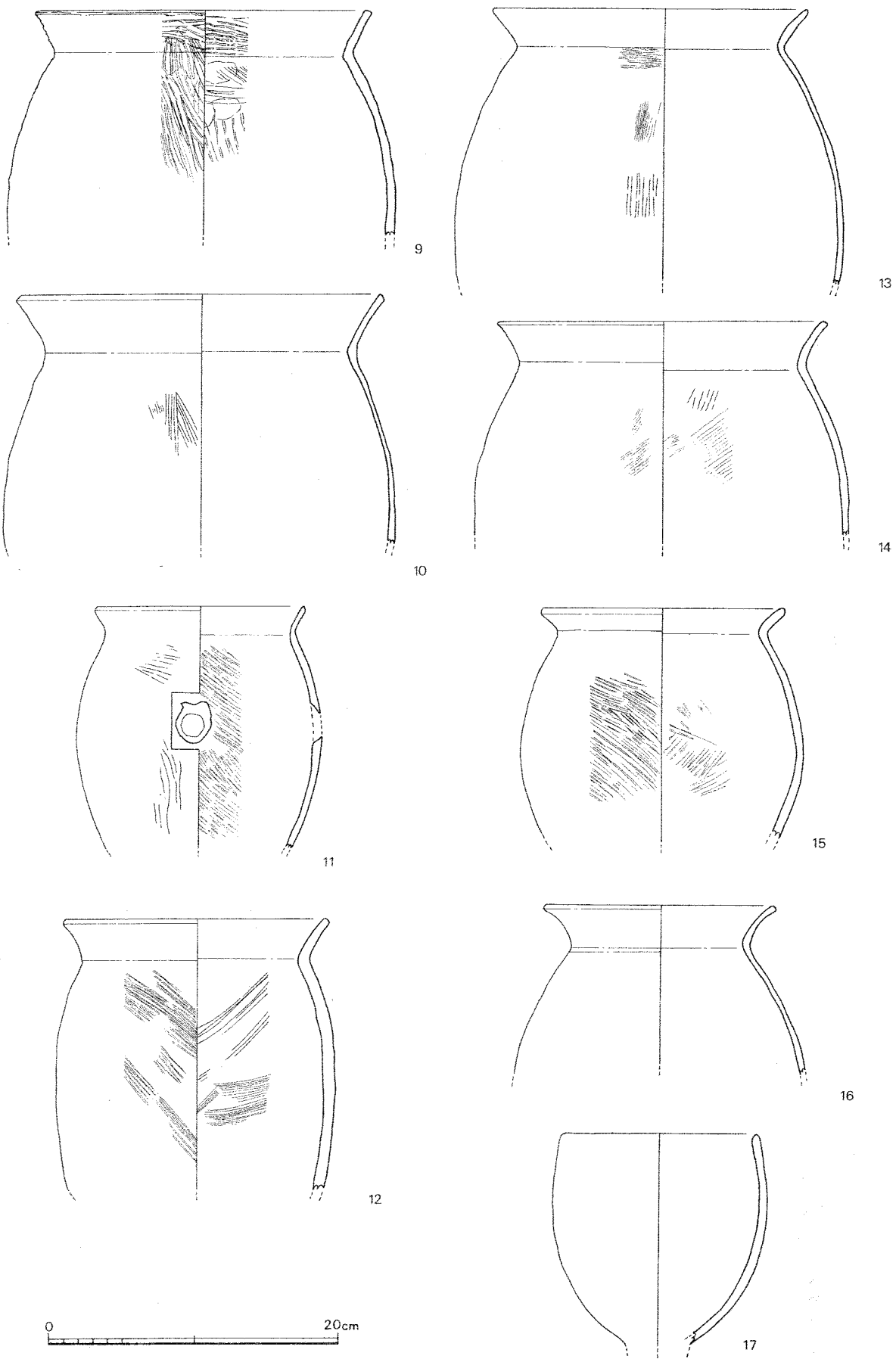
18・19は短頸の壺である。18は胴部中位に最大径をもち，頸部でいったんくびれて外傾しながら口縁が立ち上がる。19は18に比べて胴部最大径がやや上位になり，口縁の立ち上がりもより直線的となっている。底部は，18がやや欠損するものの，丸底に近い平底となる。20は台付きの甕である。やや胴が張って口縁部が緩やかに外湾する甕に，低く小さい脚部がつく。肥後系の土器であろう。21・22は鉢である。いずれも浅めの胴部に外湾しながら立ち上がる口縁部がつく。23～26は複合口縁の壺である。いずれも口縁部はやや内傾しながら立ち上がるものの，23・25は頸部との角度が鋭角になるのに対して，24・26は頸部との角度が鈍角となり，より直口に近い形態となる。頸部の立ち上がりは直立に近いものが多く，頸部付け根のしまりも悪い。25には頸部の付け根に低い三角突帯が１条つく。

27～33は，単口縁の壺である。胴部最大径は，いずれの個体も中位もしくはやや上位となる。口縁部は，27・28・30・31は外湾しながら立ち上がるのに対し，32・33は直線的に立ち上がっている。なお，29は口縁部以上を欠損するが，頸部付け根の立ち上がりから，直口壺になる可能性もある。27の底部は据わりが悪く，凸レンズ状の平底である。31の頸部付け根には，浅い三角突帯が一条つく。

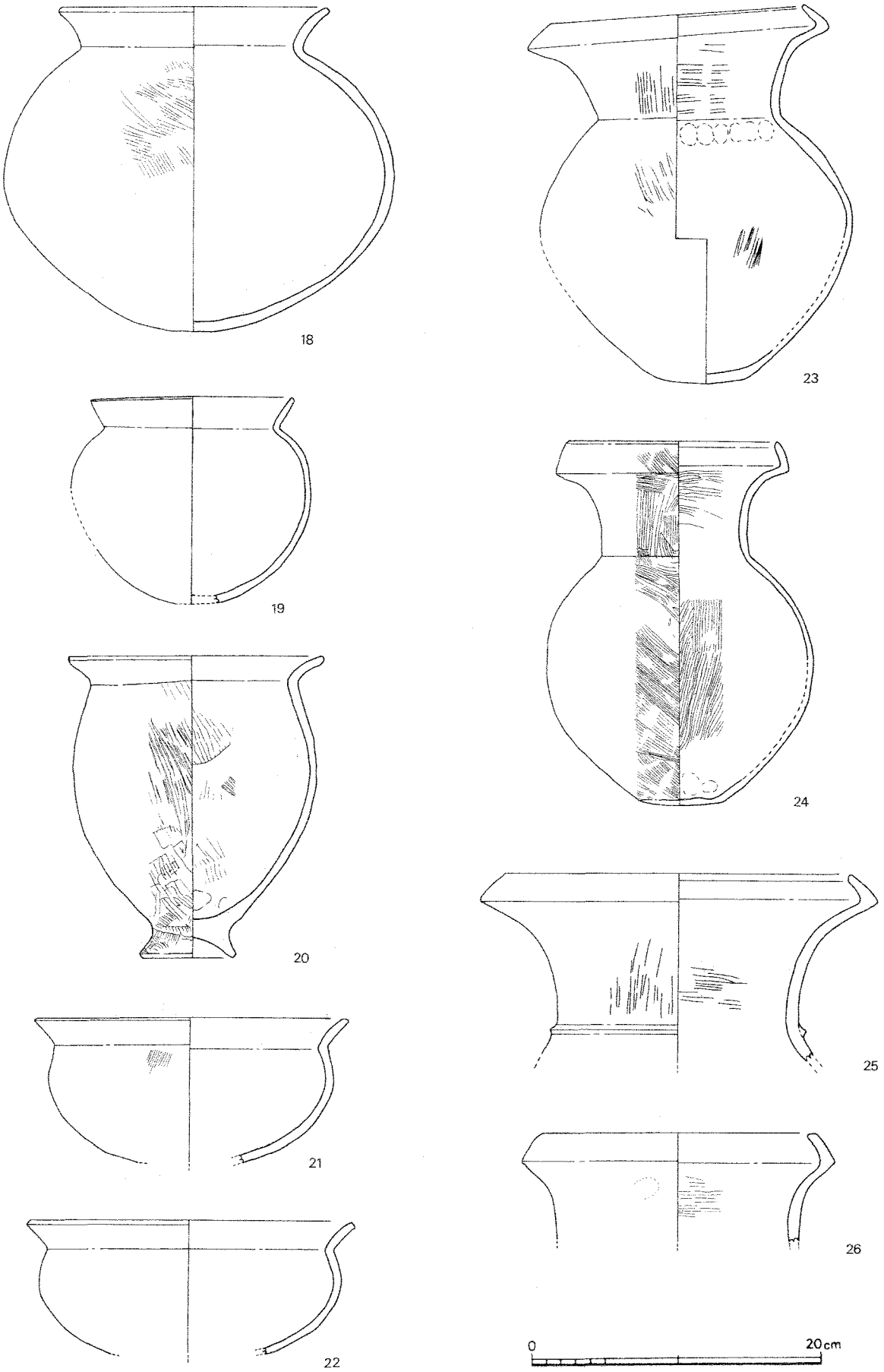
34～42は，甕もしくは壺の底部である。37・42をのぞいてすべて平底となるものの，据わりが悪く，凸レンズ状の平底に分類される。37は大型の壺の底部と考えられ，尖り気味の丸底となる。底部外面はヘラケズリによる調整痕が明瞭に残る。42は甕の底部と考えられる。丸底で胴部との境にしっかりとした稜線が入る。43・44は高坏の脚部と考えられる。いずれも低脚で，特に44は円形の透かしが３つあり，この透かし部分から裾部が屈曲して平坦に近くなっている。43は側面がやや内湾しながら立ち上がるが，台付きの甕もしくは鉢の脚部となる可能性もある。



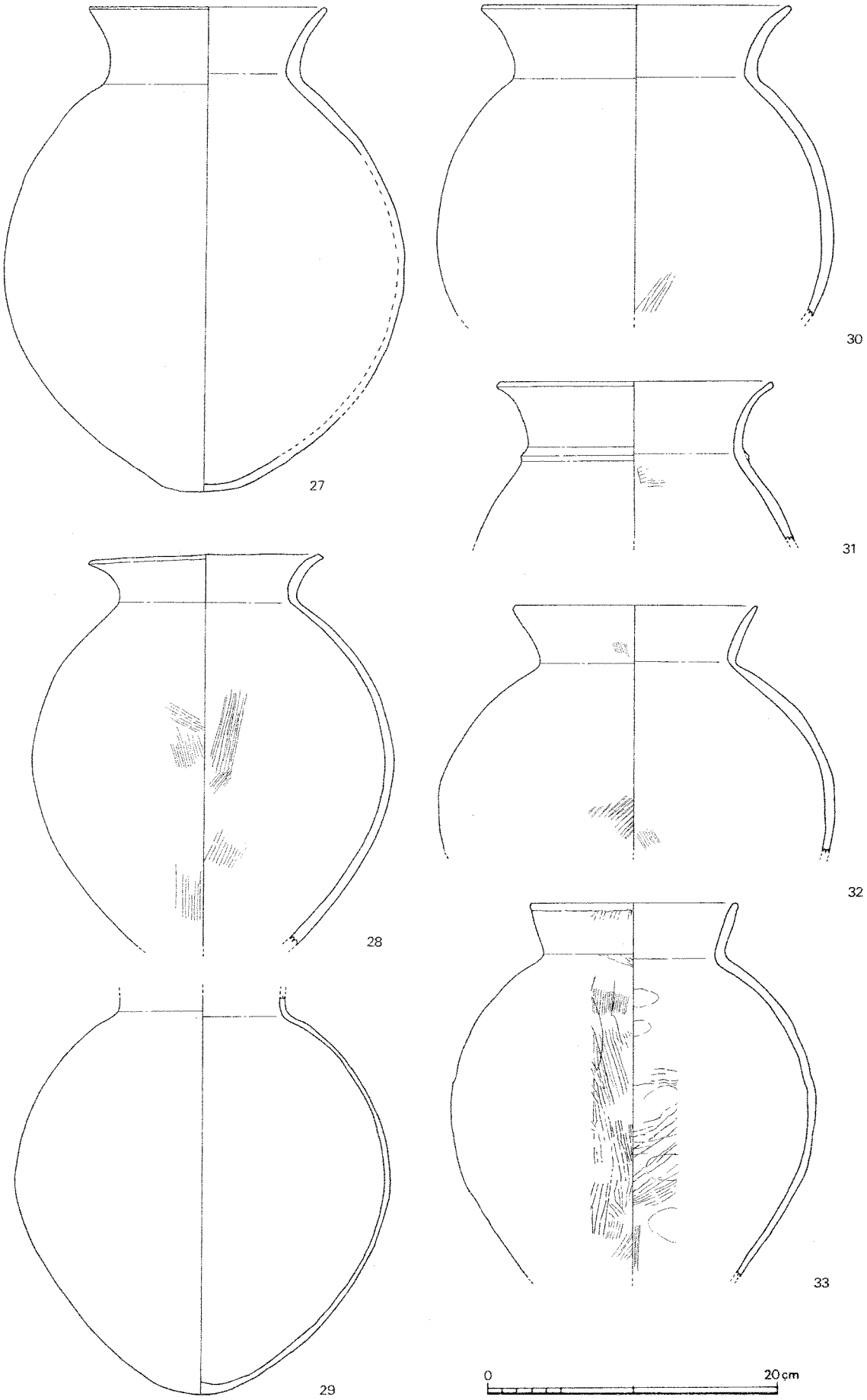
第10図　ＳＤ２Ⅰ層出土土器(1)（1／4）



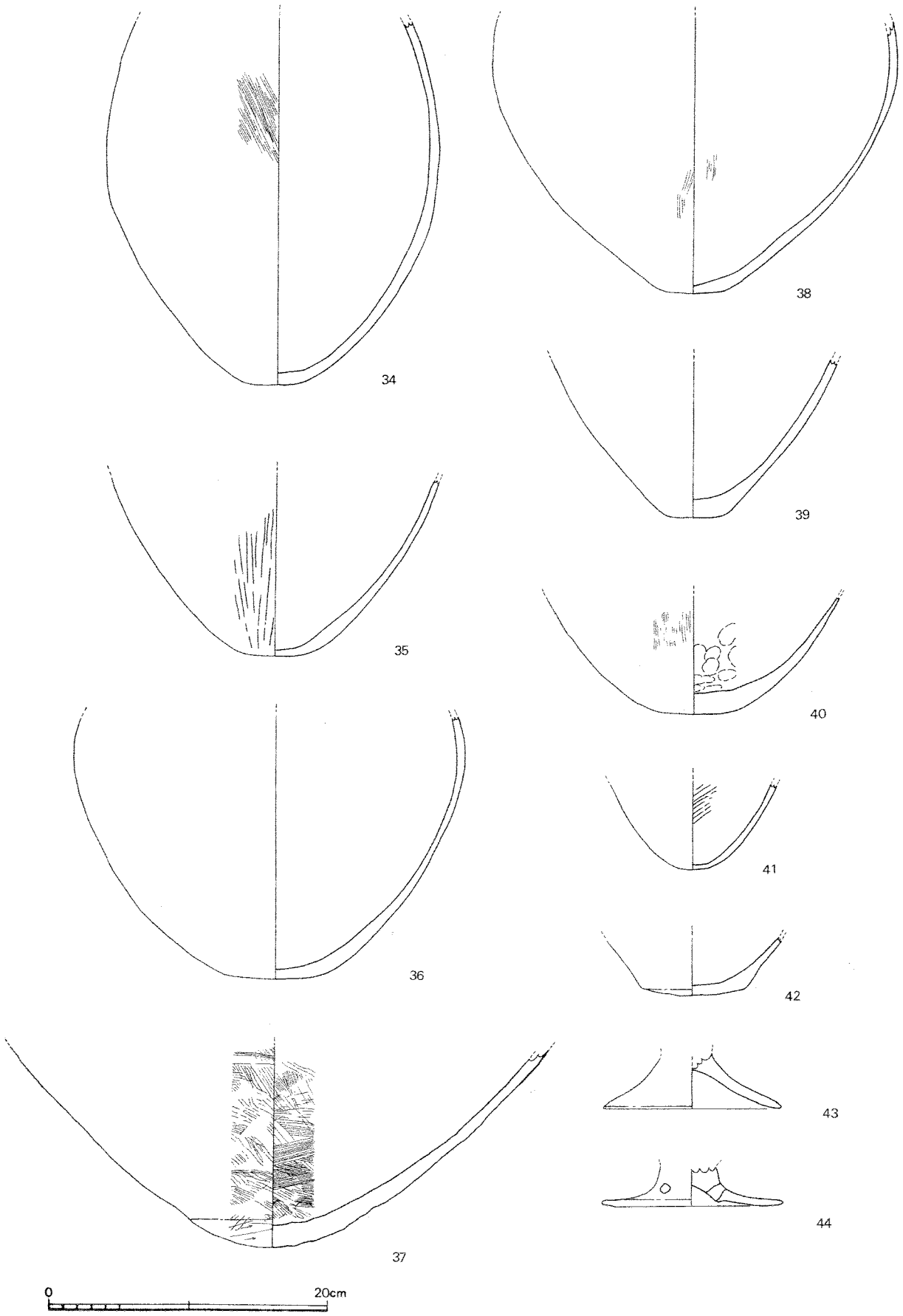
第11図　ＳＤ２Ｉ層出土土器(2)（１/４）



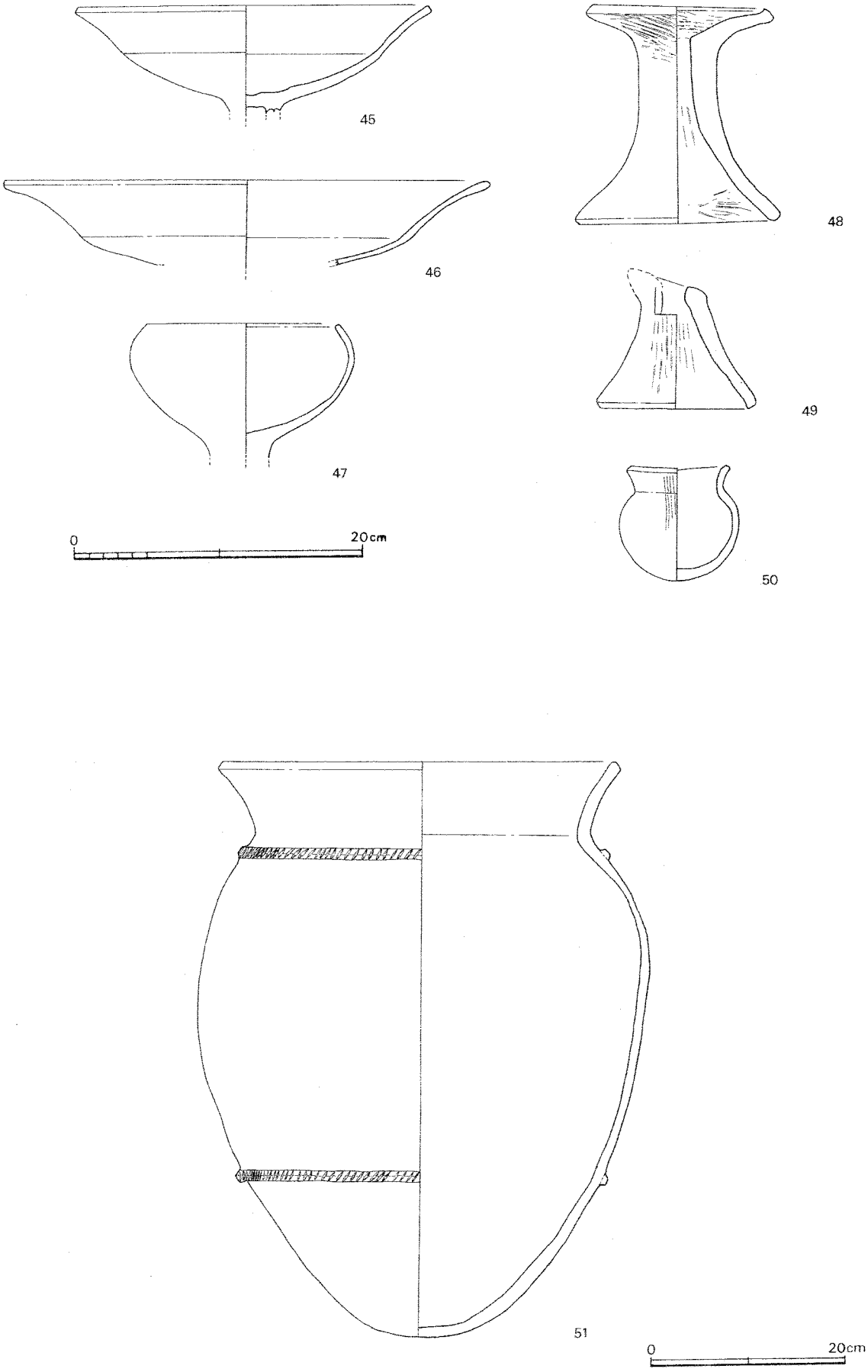
第12図　ＳＤ２Ｉ層出土土器(3)（１／４）



第13図　ＳＤ２Ｉ層出土土器(4)（１／４）



第14図　ＳＤ２Ｉ層出土土器(5)（１／４）



第15図　ＳＤ２Ｉ層出土土器(6)（１/４，51は１/６）

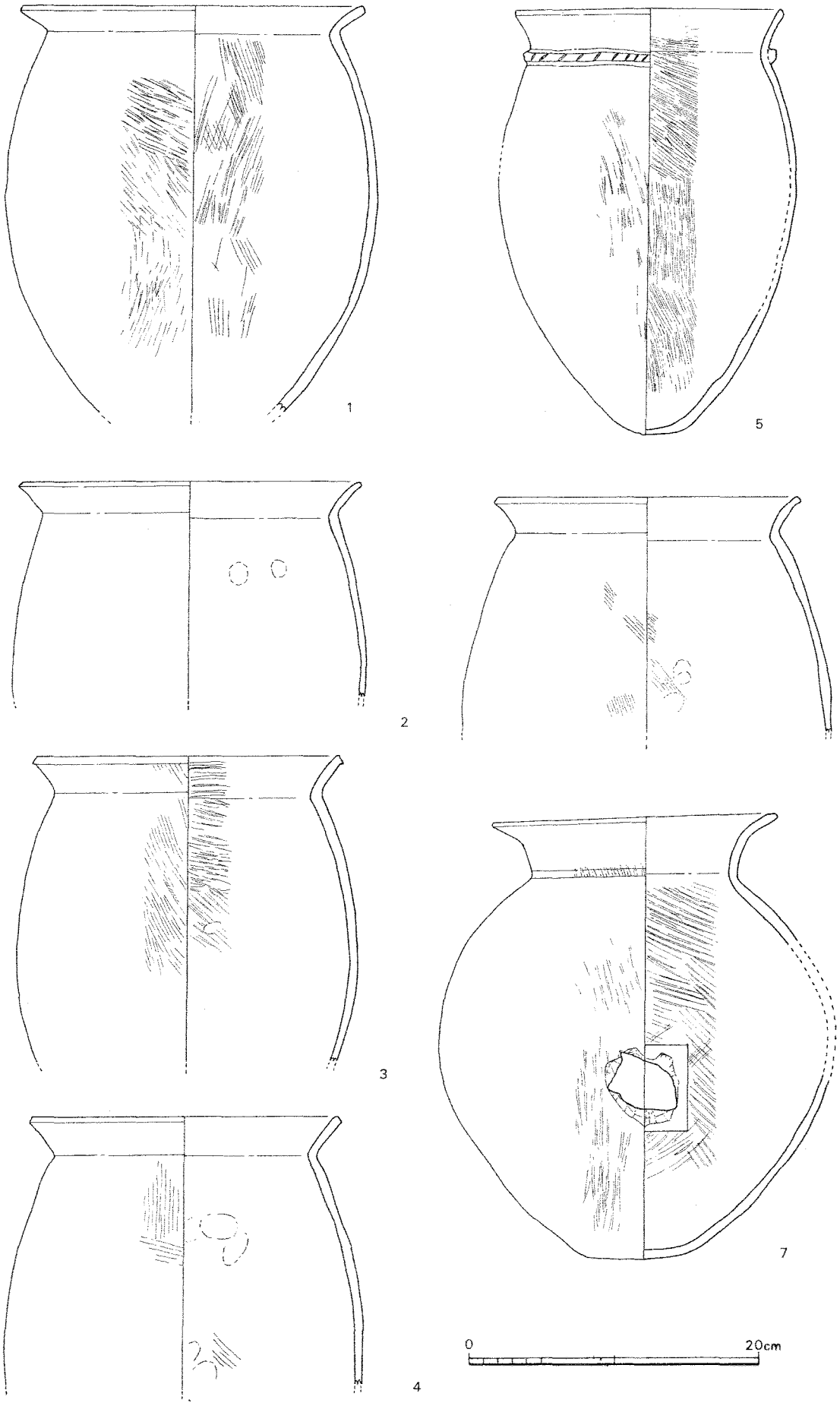
45～47は高坏である。いずれも坏部のみであるが，45・46は坏部が浅く坏部上半が屈曲して外湾しながら立ち上がるのに対して，47は坏部が深く内湾しながら立ち上がる単口縁となる。45・46は，坏部上半の立ち上がりが長くなり，坏部下半とほぼ同じ長さとなる。47については豊前地域の系統を引くものであろうか。48は器台である。体部上半で屈曲して，平坦な受け部を形成している。受け部の端部はややつまみ上げており，上面にはタタキの痕跡が残る。脚部内面にはシボリ痕残す。49は支脚である。上端をやや欠損するものの，受け部の端部はやや突出していたものと考えられる。受け部はやや斜行しており，平坦面中央から脚部にかけて穿孔が施される。脚部内面にはシボリ痕残る。50は小型の壺である。底部は丸底で，頸部から口縁にかけてややいびつな作りとなる。内外面ともに黒塗りの痕跡が認められる。51は大型の壺である。口縁を含めてほぼ完形に復元できる資料である。胴部最大径はやや上位にあり，やや外反しながら口縁が立ち上がる。頸部の付け根付近および胴部下半にそれぞれ１条の台形突帯がつき，斜行する刻みが施される。底部は凸レンズ状の平底である。

以上，ＳＤ２上層出土土器は，弥生時代後期後葉を主体としており，井上編年の後期後葉１式～後期後葉３式に相当する。

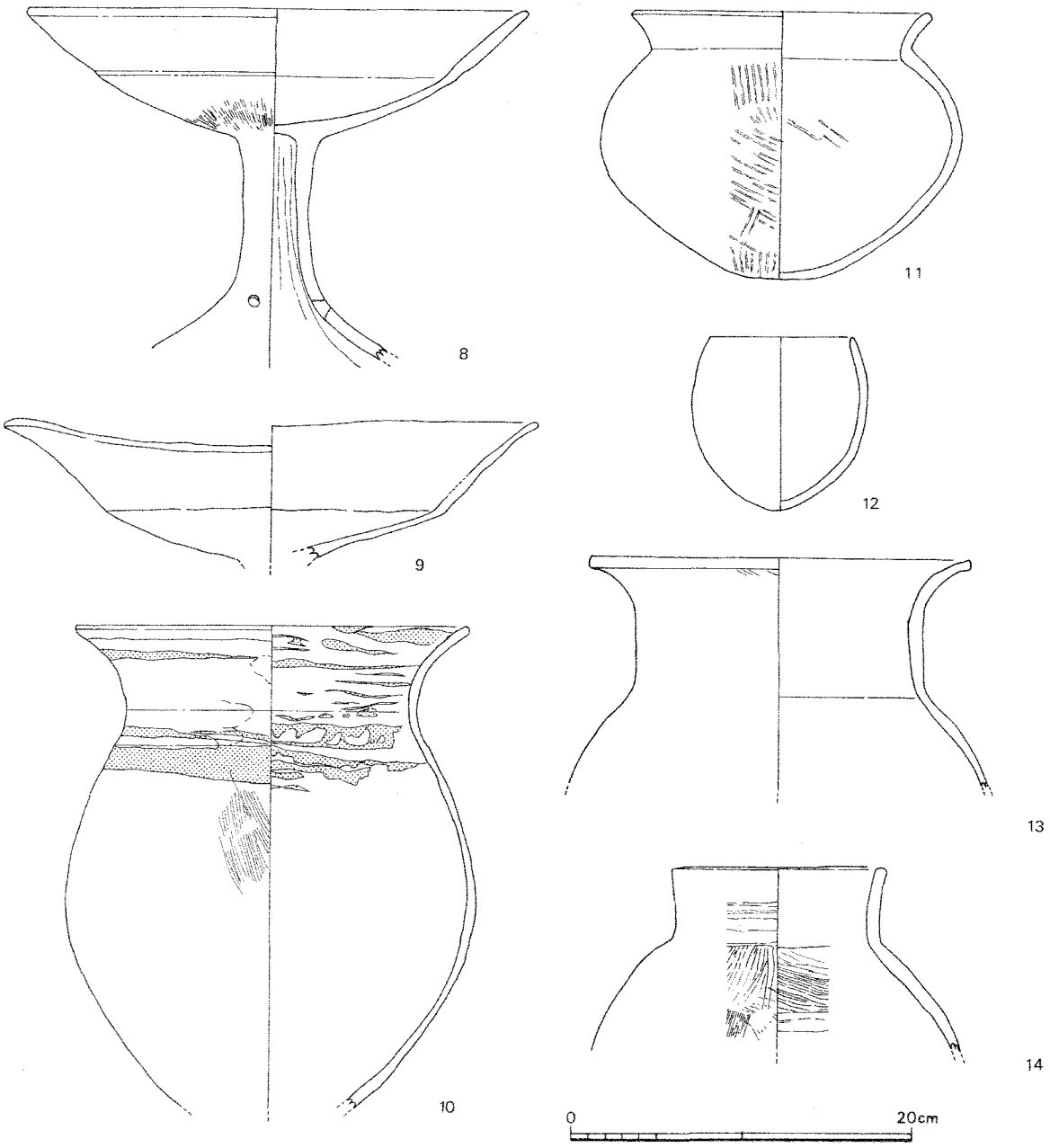
ＳＤ２Ⅱ層出土土器（第16図，第17図）

１～６は甕である。１は胴部がやや張っており，最大径は中位にある。口縁はくの字に立ち上がるものの，２～６に比べて立ち上がりは弱い。２～６は口縁が外反しながら立ち上がり，より直立に近い資料である。いずれも胴部があまり張らず長胴となる。調整は，表面が風化している２をのぞくと，いずれも刷毛目をなで消した痕跡が認められる。５の底部は凸レンズ状の平底となる。７は単口縁の壺である。胴部は球胴状で中位に最大径を持つ。口縁は外反しながら立ち上がり，端部付近でさらに外反している。底部は凸レンズ状の平底で，胴部には内面からの穿孔が認められる。内面には刷毛目を残す。

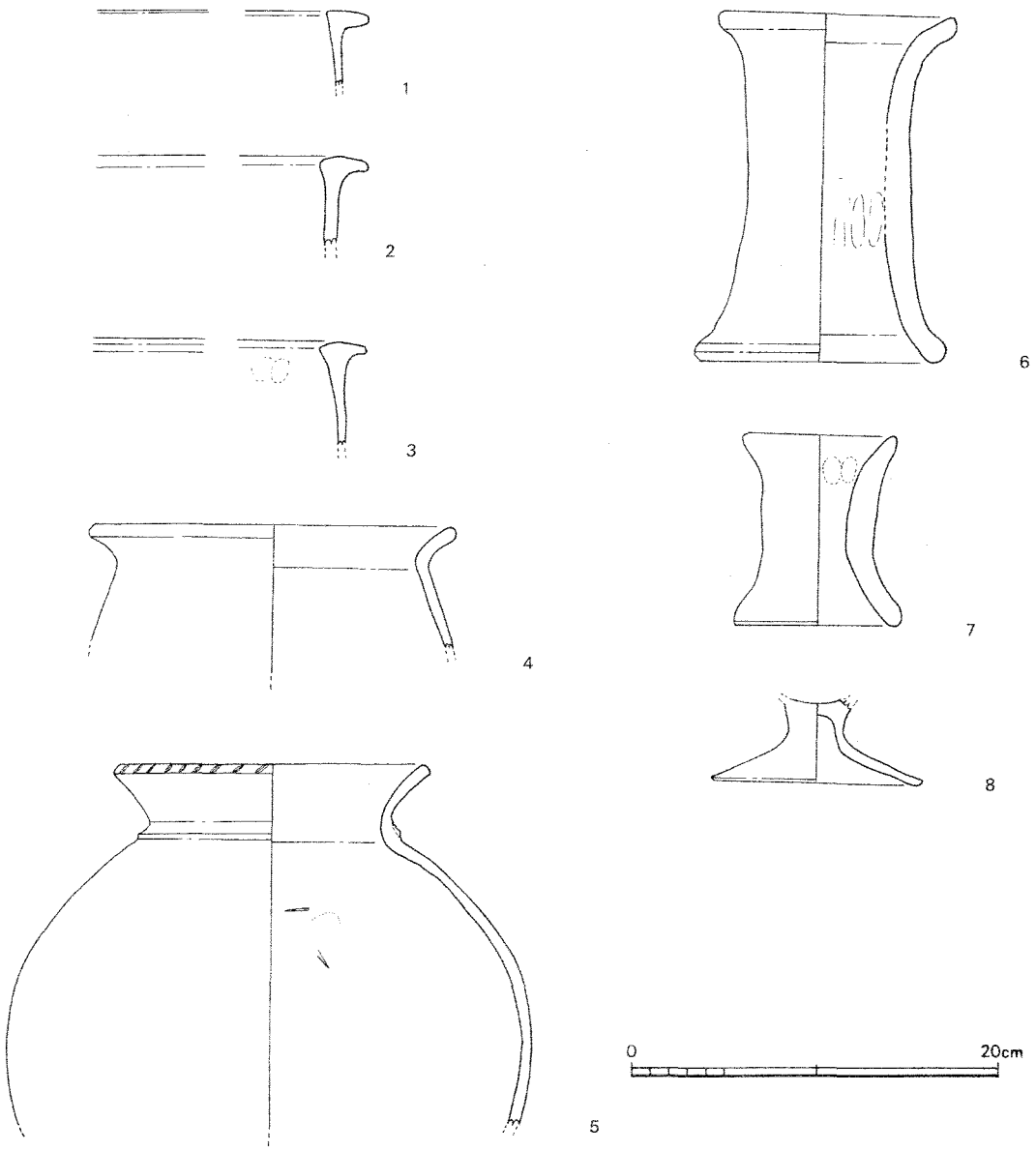
８・９は高坏である。いずれも坏部が浅く体部中央に稜線を持つが，８は体部下半から角度を変えずに緩やかに立ち上がるのに対して，９は体部下半と角度を変えて外湾しながら立ち上がる点が異なる。８の脚部は細く，裾にかけてラッパ状に広がる。脚部には円形の透かしが３個はいる。８・９ともに胎土が非常に精良で非常にきめが細かい粘土を用いている。11は広口の壺である。胴部中位に最大径を持ち，いったんくびれて外湾しながら口縁が立ち上がる。内面にはヘラナデの痕跡が残る。底部は凸レンズ状の平底となる。12は小型の鉢で，尖り気味の底部からやや内湾しながら口縁まで立ち上がる。10・13・14は壺である。10・13は口縁が外反するタイプで，14は直口壺となる。10の胴部は表面浅黄橙色であるが，頸部から口縁部にかけて赤橙色の粘土がマーブル状に混じっている。断面でも同様の色の粘土が観察されることから，おそらく色の異なる粘土を交互に積み上げて，意図的に文様としての効果をねらったものと考えられる。14の胎土は，石英・長石を含むものの，粒の細かい精良な粘土を用いている。調整は，内外面ともに刷毛目・ナデであるが，内面の胴部下半には横方向にケズリの痕跡が残る。



第16図　ＳＤ２Ⅱ層出土土器(1)（１/４）



第17図　ＳＤ２Ⅱ層出土土器(2)（１／４）



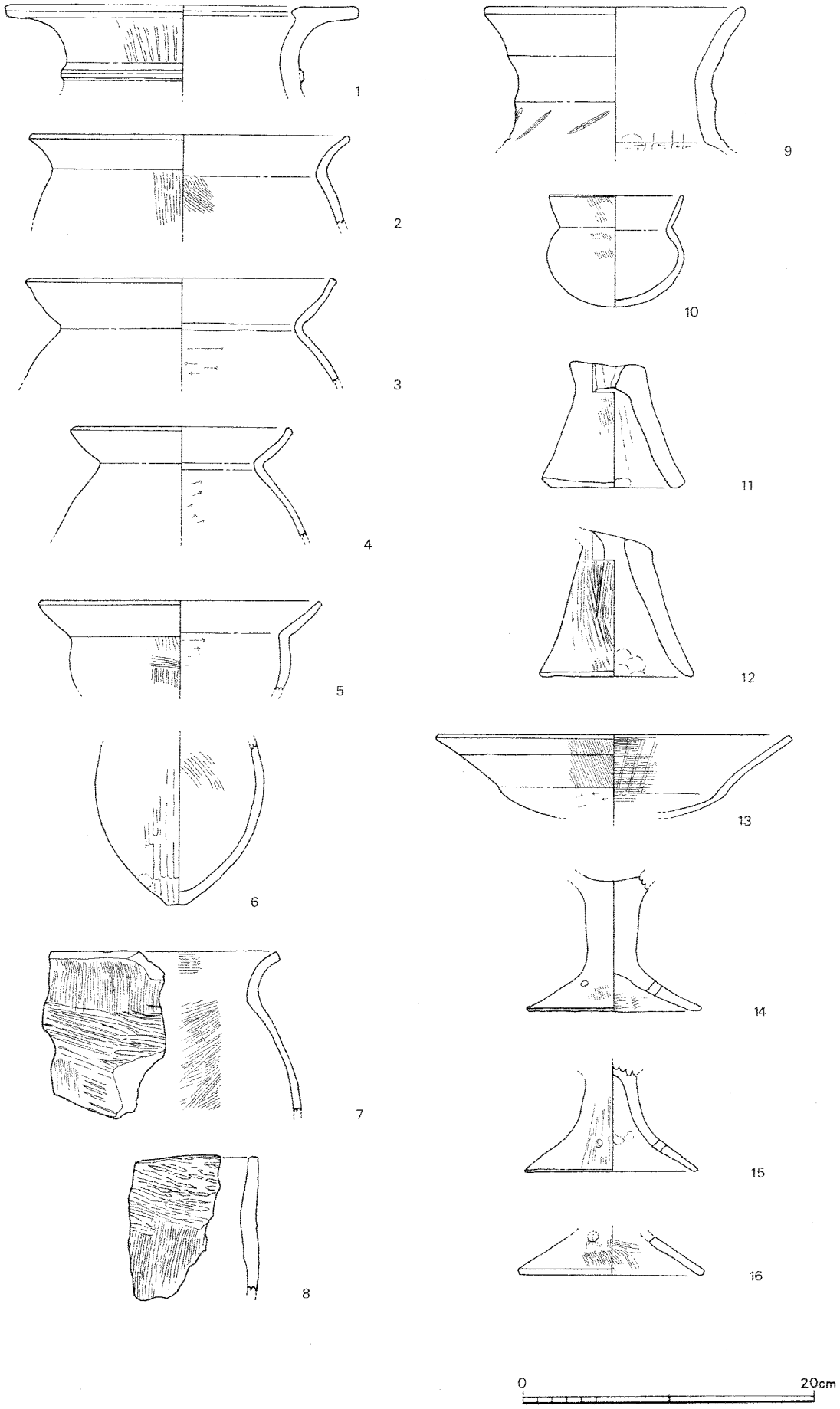
第18図　ＳＤ３出土土器（1/4）

これらの土器は，弥生時代後期後葉に位置づけられ，上層の土器群と時期差はほとんど認められない。

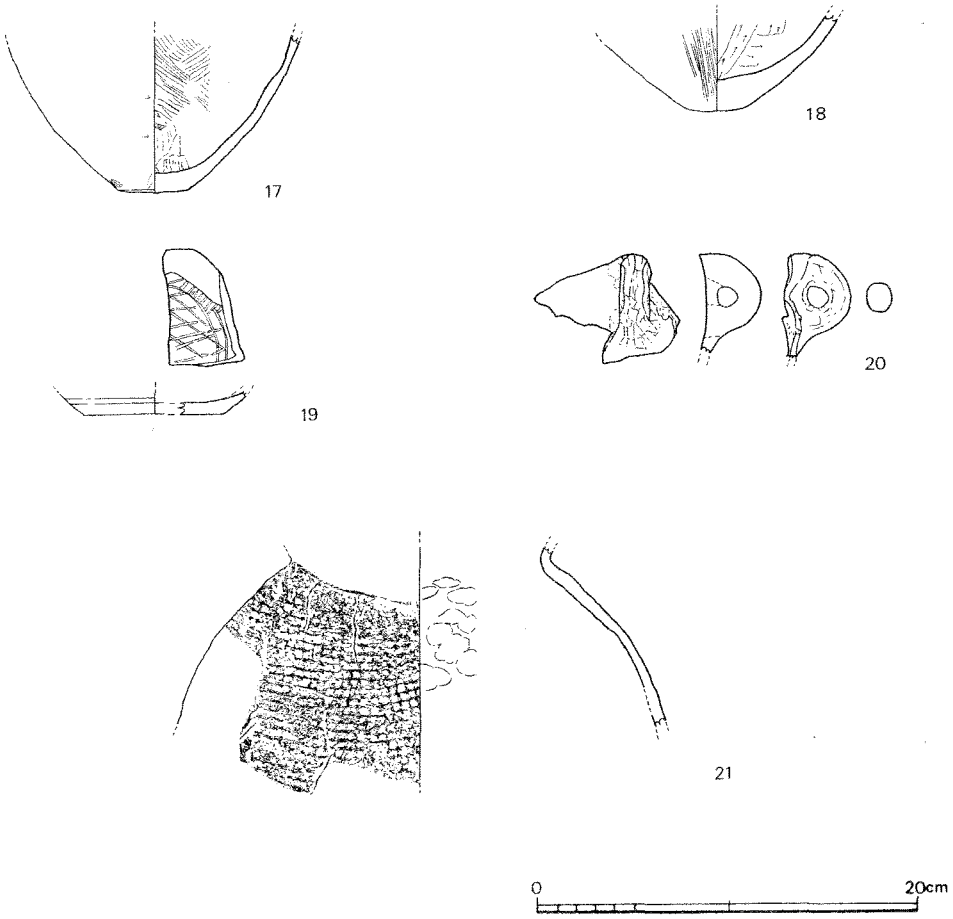
ＳＤ３出土土器（第18図）

１～３は鋤先状口縁を持つ甕である。いずれも口縁端部がやや垂れ下がるものの，１は端部まで厚みを有し，内面への突出もわずかである。４はくの字に屈曲する口縁持つ甕である。５は球胴状の胴部を持つ壺で，頸部の付け根には低い三角突帯を有し，口縁端部には斜行する刻みが施される。６・７は器台である。いずれもほぼ上下対象で，内面には指おさえによる調整の痕跡が残る。８は高坏の脚部である。低脚で円筒形の細い脚部が裾に向かって急激に広がる。

ＳＤ３は時期的には弥生時代中期後葉と後期後葉の土器が認められる。後期後葉の土器については，ＳＤ３を切るＳＤ２から混入している可能性が高く，ＳＤ３が実際に掘削された時期は，弥生時代中期後葉であった可能性が高い。



第19図　D区落ち込み出土土器(1)（1/4）



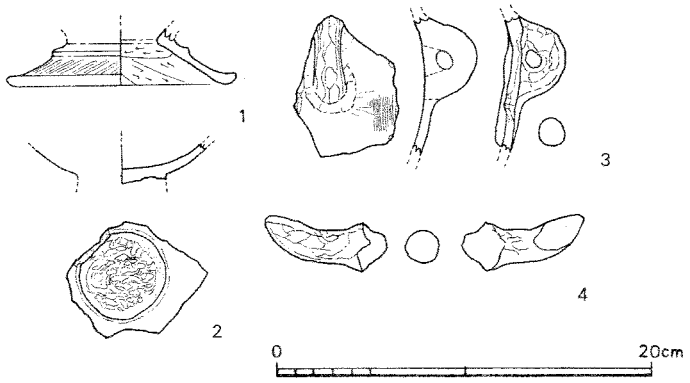
第20図　D区落ち込み出土土器(2)（1/4）

落ち込み出土土器（第19図，第20図）

1は，鋤先状口縁の広口壺である。頸部には台形突帯が一条つけられ，内外面ともに丹塗りの痕跡が残るとともに，頸部外面には暗文も施されている。2～4は甕である。2は口縁部が外反するもので，胴部の内外面は刷毛目による調整痕が残る。3・4は口縁が内湾するもので，4の口縁端部は内側にややつまみ上げられている。いずれも胴部内面は横方向のケズリ痕が顕著である。5・6は鉢である。5は口縁がやや内湾気味に立ち上がり，胴部内面はケズリ痕を残す。6は小型の鉢で，小さめの底部から内湾気味に立ち上がり，口縁を欠くものの，そのまま端部を丸くおさめる口縁になるものと考えられる。外面には底部付近を中心に縦方向のヘラミガキ様の調整が認められる。7・8はいずれも甕の破片で，7は胴部に，8は口縁部にそれぞれ斜め方向のタタキ痕が残る。9は山陰系土器の系譜を引くと考えられるもので，二重口縁のくびれが弱くなって内面には稜線が残っていない。頸部には斜め方向の短沈線が施される。10は小型の壺である。底部は丸底で口縁はやや内湾しながら立ち上がる。胴部外面には刷毛目・ナデ調整で，内面はヘラナデの痕跡が残る。11・12は支脚である。11は受け部の上面は平坦に近く，上面端部の張り出しも少ないのに対し，12は上面が斜めに傾き，端部は欠損しているものの，やや張り出していた痕跡が残る。外面はともに刷毛目が残り，内面はナデ・

指おさえの痕跡が顕著である。11には内面にシボリ痕も残る。13～16は高坏である。13は坏部で，体部上半がやや外湾しながら長くのびる。外面には丹塗りの痕跡が残り，内面は横方向の丁寧な刷毛目ののち，細かいヘラミガキが施される。胎土には石英・長石をほとんど含まず，均質で精緻な粘土を用いている。14～16は高坏の脚部である。14は３つの円形透かしを持ち，脚部はややすぼまりながら下方にのびた後，透かし付近で急激に外に広がり裾にいたる。透かしより上の部分は中実となっており，重量感がある。15も３つの円形透かしを持ち，裾にかけてラッパ状に広がる。16は裾付近のみ残存し，３つの円形透かしの痕跡がわずかに残っている。

17・18は，甕の底部である。17は凸レンズ状の平底，18は尖り気味の丸底となる。18の内面にはヘラナデ痕が残る。19～21には，朝鮮半島系・中国系の土器をまとめた。19は楽浪系土器で鉢の底部と考えられる。平底で轆轤による回転ナデ調整の痕跡を残す。底部外面にはカキメ様の痕跡が残り，内面にはヘラ描きの浅い沈線が格子状に描かれている。20は円形のつまみで，朝鮮半島系か。つまみは指おさえによって整形し丁寧にナデ消している。胴部とつまみは，胴部に２つの穴をあけ，半円形に曲げた粘土ひもを挿入して接合している。内面の接合部分には縦方向のケズリ痕が顕著である。21は三韓系瓦質土器の壺と考えられ，胴部のみ残存する。外面は浅黄橙色で，頸部からやや空間をあけて格子目のタタキが残る。内面には指おさえの痕跡が明瞭である。



第21図　包含層出土遺物（1/4）

以上，落ち込み出土土器は，１をのぞいて古墳時代前期を主体としている。特に布留系の甕が多く出土しており，井上編年の古墳時代２式～３式を主体とするものと考えている。

その他の土器（第21図）

包含層から出土したもので，特に重要な土器をまとめた。１は山陰系の鼓形器台である。脚部のみ残存しており，内面には横方向のケズリ痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色で山陰系土器本来の色調とは異なっている。２は高坏の坏部底面付近と考えられる。底部外面にヘラおさえによる凹凸がある。凹凸の周囲に円筒状の粘土を接合した痕跡があることから，この凹凸は擬口縁と考えられる。３は円形のつまみで，第20図20と同じく，胴部に２孔あけ半円形の粘土ひもを挿入して接合している。４は牛角取手である。指ナデによりやや細身の断面円形に整えている。３・４は朝鮮半島系の土器であろう。

表1　八反地区出土土器観察表

遺物番号	遺構名	種　類	色　調(表)	色　調(裏)	胎　土	残存状況	調　整　手　法	備　考
1	SD2 II	甕	にぶい橙 7.5YR 6/4	明褐灰 7.5YR 7/2	長石・石英・金雲母・黒雲母	ほぼ完形	外：ハケメ・なで，内：ハケメ・なで	
2	SD2 II	甕	にぶい橙 7.5YR 7/4	橙 5YR 6/6	長石・石英	口縁～胴部片	外：ナデ，内：ハケメ・ナデ	
3	SD2 II	甕	橙 10YR 7/6	橙 10YR 6/6	長石・金雲母・黒雲母	口縁～胴部	外：ナデ，内：ナデ	
4	SD2 II	甕	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	長石・石英・砂粒	口縁～胴部片	外：ハケメ・なで，内：ハケメ・なで	
5	SD2 II	甕	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 5YR 6/3	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	内外面とも剥落著しい	
6	SD2 II	甕	灰褐 10YR 5/1	灰黄 2.5YR 7/2	石英・長石	口縁～胴部片	内外面ともハケメ	
7	SD2 II	甕	灰黄褐 10YR 4/2	黒褐 10YR 3/1	長石・石英・砂粒	口縁～胴部片	外：ナデ，内：指おさえ・ナデ	
8	SD2 II	甕	明赤褐 5YR 5/6	赤褐 5YR 4/8	長石・石英・砂粒	口縁部片	内外面とも剥落著しい	
9	SD2 II	甕	灰黄 2.5YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 6/3	長石・石英・砂粒	口縁～胴部片	外：ハケメ，内：ハケメ・なで	
10	SD2 II	甕	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄 7.5YR5/3	長石・石英	口縁～胴部片	外：ハケメ，内：ナデ	
11	SD2 II	甕	にぶい褐 7.5YR 5/3	灰褐 7.5YR 4/2	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	外：ケズリ・なで，内：ハケメ	胴部に穿孔有り
12	SD2 II	甕	灰褐 7.5YR 4/2	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	内外面ともハケメなで消し	外側に煤付着
13	SD2 II	甕	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐灰 7.5YR 5/1	長石・石英	口縁～胴部片	内外面ともナデ	
14	SD2 II	甕	灰黄褐 10YR 6/2	灰黄褐 10YR 5/2	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	内外面ともハケメ・ナデ	
15	SD2 II	甕	灰褐 7.5YR 6/2	灰褐 5YR 5/2	長石・石英	口縁～胴部片	内外面ともハケメ・ナデ	
16	SD2 II	甕	にぶい褐 7.5YR 6/3	明褐灰 7.5YR 7/2	長石・石英	口縁～胴部片	内外面ともナデ	
17	SD2 II	甕	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	内外面ともナデ	台付の可能性有り
18	SD2 II	短頸壺	灰黄 2.5Y7/2	灰白 10YR7/1	長石・石英	口縁～底部	外：ハケメ・なで，内：ナデ	
19	SD2 II	短頸壺	にぶい橙 7.5YR 6/4	黒褐 7.5YR 3/1	長石・石英・金雲母	口縁～底部	内外面ともナデ	
20	SD2 II	台付甕	浅黄橙 10YR 8/3	灰白 10YR 8/2	石英・長石	底部付近欠損	外：ハケメ・なで，内：ナデ	
21	SD2 II	鉢	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 7/2	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	外：ハケメ・なで，内：ナデ	
22	SD2 II	鉢	にぶい黄橙 10YR 7/2	橙 5YR 6/6	長石・石英	口縁～胴部片	内外面ともナデ	
23	SD2 II	袋状口縁壺	にぶい黄橙 10YR 7/2	灰白 10YR8/2	長石・石英	ほぼ完形	外：ナデ，内：ハケメ・なで	
24	SD2 II	袋状口縁壺	浅黄 2.5Y 7/3		石英・長石	ほぼ完形	内外面ともハケメ・なで	
25	SD2 II	袋状口縁壺	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐灰 10YR 6/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	内外面ともナデ	
26	SD2 II	袋状口縁壺	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	内外面ともハケメなで消し	
27	SD2 II	壺	明褐灰 7.5YR 7/1	灰白 10YR 7/1	長石・石英	ほぼ完形	内外面ともナデ	
28	SD2 II	壺	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・石英	口縁～胴部	外：ナデ，内：ハケメ・なで	
29	SD2 II	壺	にぶい橙 7.5YR 6/4		長石・石英・砂粒	胴部～底部	内外面ともナデ	
30	SD2 II	壺	にぶい橙 7.5YR 7/3	橙 5YR 6/6	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	内外面ともナデ	
31	SD2 II	壺	明褐 7.5YR 5/6	明褐 7.5YR 5/6	長石・石英	口縁部片	内外面ともナデ	
32	SD2 II	壺	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	長石・石英・砂粒	口縁～胴部	外：ハケメ・なで，内：ナデ	
33	SD2 II	甕	黄灰 2.5Y 4/1	灰黄褐 10YR 6/2	長石・石英・砂粒	口縁～胴部片	内外面ともハケメ・なで	
34	SD2 II	甕	赤褐 5YR4/6	明赤褐 5YR5/6	長石・石英・砂粒	底部～胴部	外：ケズリ・なで，内：ナデ	
35	SD2 II	甕	にぶい橙 7.5YR 6/3	灰黄褐 10YR4/2	長石・石英	底部～胴部	外：ハケメ・なで，内：ナデ	
36	SD2 II	壺	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	長石・石英	底部～胴部	内外面ともナデ	
37	SD2 II	壺	明赤褐 5YR 5/6	にぶい黄橙 10YR 7/3	長石・石英・砂粒	底部付近	外：ケズリ，内ハケメ・なで	大型壺
38	SD2 II	甕	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	長石・石英・砂粒	底部～胴部	内外面ともナデ	
39	SD2 II	甕	赤褐 2.5Y 4/6	暗赤褐 2.5YR 3/1	長石・石英	底部～胴部	内外面ともナデ	
40	SD2 II	壺	にぶい黄橙 10YR 7/4	浅黄橙 10YR 8/3	石英・長石・雲母	底部付近	内外面ともナデ	
41	SD2 II	壺	暗赤褐 5YR 3/2	黒褐 5YR 2/1	長石・石英	底部付近	内外面ともナデ	
42	SD2 II	甕	浅黄 2.5Y 7/3	淡黄 2.5Y 8/3	石英・長石	底部	内外面ともナデ	
43	SD2 II	台付鉢？	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR 7/2	長石・石英・金雲母	脚部	内外面ともナデ	
44	SD2 II	台付鉢？	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 7/1	長石・石英・金雲母	脚部	内外面ともナデ	
45	SD2 II	高坏	明褐灰 7.5YR 7/2	にぶい橙 7.5YR 7/3	長石・石英	坏部	内外面ともナデ	
46	SD2 II	高坏	にぶい橙 7.5YR 7/4	灰白 2.5Y 7/1	石英・金雲母	坏部	内外面ともナデ	
47	SD2 II	高坏	にぶい橙 5YR 6/4	橙 5YR 6/6	長石・石英・金雲母	坏部	内外面とも風化により調整未確認	
48	SD2 II	器台	にぶい橙 5YR 6/4	橙 5YR 6/6	長石・石英・金雲母	口縁・裾部欠損	外：ナデ，内：ハケメ・なで	
49	SD2 II	支脚	灰黄褐 10YR 5/2	灰黄褐 10YR5/2	長石・石英・黒雲母	受部・裾部欠損	外：ケズリ・なで，内：ナデ	
50	SD2 II	小　壺	灰黄褐 10YR5/2	灰褐 10YR 5/1	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	外：ハケメ・なで，内：ナデ	内外面とも黒塗り
51	SD2 II	壺	灰白 5YR 8/1	灰白 2.5Y 8/2	長石・石英	口縁～底部	内外面ともナデ	大型壺
1	SD2 II	壺	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	外：ハケメ・ナデ・ケズリ，内：ハケメ・なで	
2	SD2 II	〃	にぶい橙 7.5YR 7/3	明褐灰 7.5YR 7/2	石英・長石・金雲母	口縁～胴部片	内外面ともナデ	
3	SD2 II	甕	褐灰 10YR 4/1	にぶい褐 7.5YR 5/4	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	外：ハケメ・ナデ，内：ハケメ，指おさえ	
4	SD2 II	〃	黒褐 7.5YR 3/1	灰黄褐 10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	外：ハケメ・なで，内：ナデ・指おさえ	
5	SD2 II	〃	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/3	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	内外面ともハケメ・ナデ	
6	SD2 II	甕	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄 2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	口縁～胴部片	外：ハケメ・ナデ，内：ハケメ・ナデ・指おさえ	
7	SD2 II	壺	灰白 10YR 8/1	にぶい黄橙 10YR 7/3	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：ケズリ・ナデ，内：ハケメ・ナデ	胴部に穿孔有り
8	SD2 II	高坏	にぶい橙 7.5YR 7/5	にぶい橙 7.5YR 7/5	金雲母	脚部欠損	内外面ともナデ	胎土精良
9	SD2 II	高坏	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰白 2.5Y7/1	長石・石英・金雲母	坏部	内外面ともナデ	胎土精良
10	SD2 II	壺	浅黄橙 7.5YR 8/4	にぶい黄橙 10YR 7/2	長石・石英・砂粒	口縁～胴部	外：ハケメ・ナデ・指おさえ，内：ナデ	口縁部に色粘土使用
11	SD2 II	鉢	にぶい黄橙 10YR6/3	橙 5YR6/6	長石・石英・金雲母	完形	外：ハケメ・ナデ，内：ナデ・指おさえ	煤付着
12	SD2 II	鉢	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR 7/3	長石・石英・金雲母	完形	外：風化のため未確認，内：ナデ	小型
13	SD2 II	壺	橙 5YR 6/6	にぶい褐 7.5YR 6/3	長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁～頸部片	内外面ともナデ	
14	SD2 II	直口壺	灰黄 2.5Y 6/2		長石・石英・金雲母	口縁～胴部	外：ハケメ・ナデ，内：ハケメ・ナデ・ナデ・ケズリ	胎土精良
1	SD3	甕	にぶい橙 7.5YR 6/4	褐灰 7.5YR 5/1	石英・長石・雲母	口縁部	内外面ともナデ	
2	SD3	甕	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 7/2	長石・石英	口縁部	内外面とも風化により調整未確認	
3	SD3	〃	明褐灰 7.5YR 7/2	にぶい赤褐 7.5YR 6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	内外面とも風化により調整未確認	
4	SD3	〃	灰褐 5YR 4/2	にぶい赤褐 5YR 5/4	長石・石英	口縁部	外面：ナデ，内面：指おさえ・ナデ	
5	SD3	壺	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	外面：ナデ，内面：指おさえ・ナデ	
6	SD3	器台	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英	ほぼ完形	内外面ともナデ	
7	SD3	器台	にぶい橙 5YR 7/4	にぶい橙 5YR 7/3	長石・石英・金雲母	完形	内外面ともナデ	
8	SD3	台付鉢？	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石・石英	脚部	内外面ともナデ	
1	落ち込み	壺	明赤褐 2.5YR 5/8	橙 7.5YR 7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	外：ナデ・暗文，内：ナデ	内外面とも丹塗り
2	落ち込み	甕	にぶい黄褐 10YR 5/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	内外面ともハケメ・ナデ	
3	落ち込み	甕	橙 5YR 7/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	外：ナデ，内：ナデ・ケズリ	
4	落ち込み	甕	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 7/1	長石・石英	口縁部片	外：ナデ，内：ナデ，ケズリ	
5	落ち込み	甕	橙 5YR 6/6	にぶい黄橙 10YR 7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	外：ハケメ・ナデ，内：ナデ・ケズリ	
6	落ち込み	鉢	灰白 5Y 7/2	灰オリーブ 5Y 6/2	石英・長石・金雲母	口縁部欠損	外：ナデ，内：ハケメ・ナデ	
7	落ち込み	甕	橙 7.5YR 6/6	赤褐 5YR 4/6	石英・長石・金雲母	口縁～胴部片	外：タタキ・ハケメ，内：ハケメ・ナデ	
8	落ち込み	甕	にぶい黄 2.5Y 6/3	灰黄 2.5Y 6/2	石英・長石・黒雲母	口縁～胴部	外：タタキ・ハケメ，内：ナデ・指おさえ	
9	落ち込み	壺	浅黄橙 10YR 8/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ナデ，内：ナデ・ケズリ	頸部に斜行沈線あり
10	落ち込み	小型丸底壺	橙 7.5YR 7/6	灰褐 7.5YR 6/2	金雲母	口縁の一部欠損	外：ハケメ・ヨコナデ，内：ヘラナデ・ヨコナデ	胎土精良
11	落ち込み	支脚	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 5YR 5/6	長石・石英・金雲母	完形	外：ハケメ・ナデ，内：指おさえ・ナデ	
12	落ち込み	〃	暗灰黄 2.5Y 5/2	灰黄 2.5Y 6/2	長石・石英・金雲母	脚部欠損	外：ハケメ，内：指おさえ	
13	落ち込み	高坏	橙 5YR 6/6	明赤褐 5YR 5/6	金雲母	坏部	外：ハケメ・ナデ・暗文，内：ハケメ・ナデ・暗文	胎土精良・外面丹塗り
14	落ち込み	高坏	灰黄 2.5Y 6/2	暗灰黄 2.5Y 6/2	長石・石英・金雲母	脚部	外：ハケメ・ナデ・指おさえ，内：ハケメ・ナデ・ヘラナデ	
15	落ち込み	高坏	橙 7.5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6	金雲母	脚部	外：ナデ・暗文，内：ナデ・指おさえ	胎土精良
16	落ち込み	高坏	明赤褐 5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	金雲母	脚部	外：ハケメ・ヘラミガキ，内：ハケメ・ナデ	胎土精良
17	落ち込み	甕	にぶい黄褐 10YR 5/3	褐灰 10YR 4/1	石英・長石	底部	外：ナデ，内：ケズリ・ハケメ・ナデ・指おさえ	
18	落ち込み	甕	暗灰黄 2.5Y 5/2	灰黄 2.5Y 6/2	長石・石英・金雲母	底部	外：ハケメ・ナデ，内：ヘラケズリ・ナデ	
19	落ち込み	鉢（楽浪）	黄灰 2.5Y 5/1	黄灰 2.5Y 5/1	雲母	底部	外：回転ナデ・カキメ，内：回転ナデ・ヘラ描き	胎土精良・やや軟質
20	落ち込み	取手	灰白 5Y 7/2	黄灰 2.5Y 6/1	石英・雲母	取手	外：ナデ，内：ケズリ・ナデ	胎土精良
21	落ち込み	三韓系瓦質土器	浅黄橙 10YR 8/3	灰黄 2.5Y 7/2	石英	頸部～胴部	外：格子目タタキ・ナデ，内：指おさえ・ナデ	
1	包含層	彩形器台	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英	底部片	外：ナデ・暗文，内：ケズリ・ナデ	山陰系
2	包含層	高坏？	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	石英・金雲母	坏の底部	外：回転ナデ，内：ナデ	底面にヘラおさえ
3	包含層	取手	灰白 2.5Y 8/2	黄灰 2.5Y 6/1	石英・長石	取手	外：ナデ，内：ヘラケズリ・ナデ	
4	包含層	牛角取手	灰黄 2.5Y 6/2		石英・小豆色鉱物	取手	外：ナデ・指おさえ	

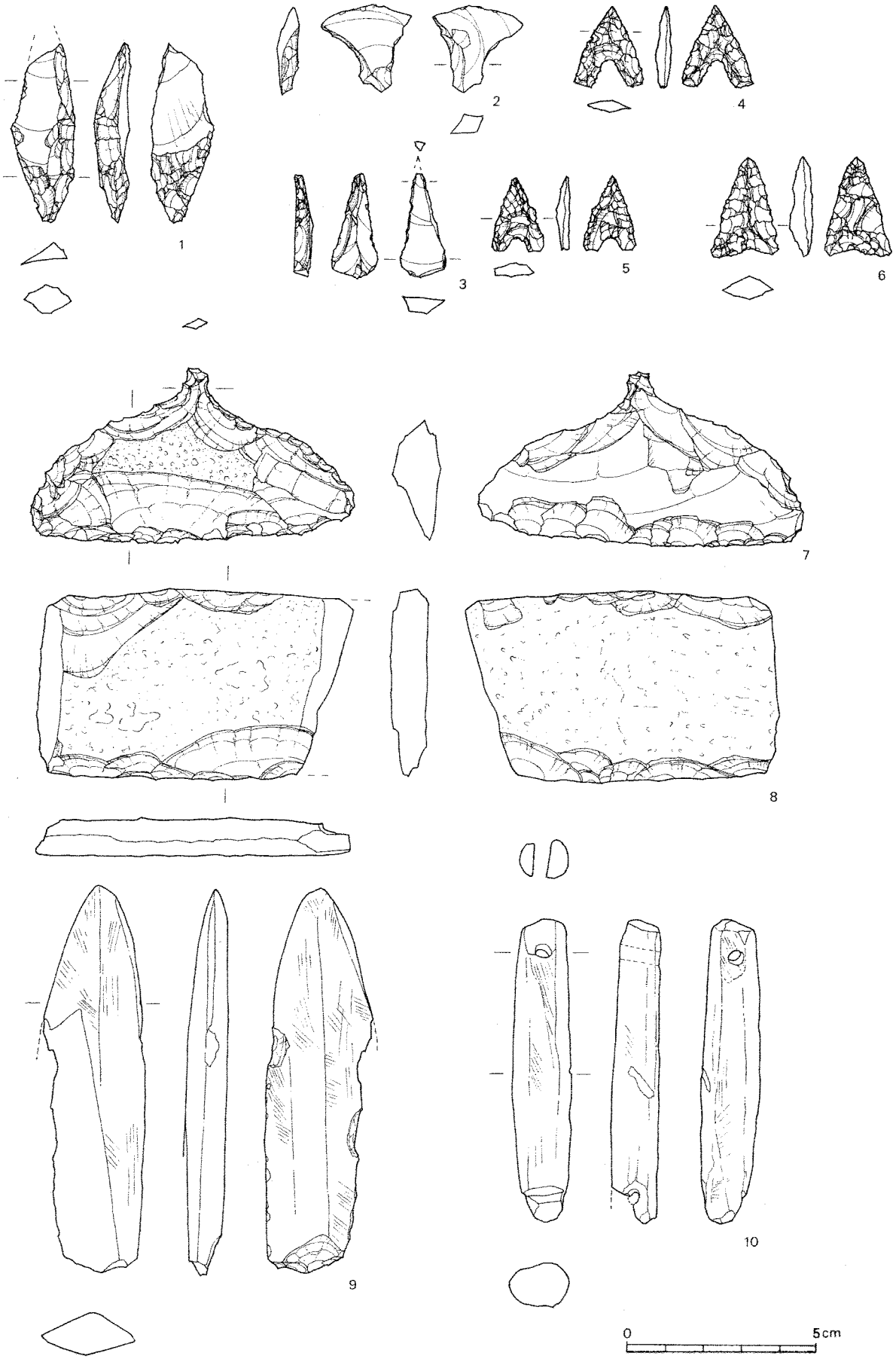
②**石器**（第22図～第27図）

1・3はナイフ形石器である。1は先端部を欠損するものの縦長剥片の二側縁に調整剥離を施すとともに，基部にも主要剥離面側に平坦剥離が認められる。3は先端部と考えられ，左側縁先端部を中心に二次加工が施される。2は台形石器である。縦長剥片の打点近くを素材としており，打面を除去するように左側縁の調整を行っている。左側縁は作業面側から，右側縁は主要剥離面側からの調整剥離で，左右で調整剥離を施す面が異なっており，原の辻型台形石器の特徴を有する。4～6は石鏃である。いずれも基部が大きく抉れた凹基式石鏃で，体部全面に精緻な調整が施される。7は安山岩製の石匙である。厚手の横長剥片を素材とし，横長の刃部および細いつまみがつく。8は石鎌で，板状の頁岩の両側縁に荒い調整を施している。未製品の可能性もある。9は磨製石剣である。体部中央に長軸に沿って鎬が認められる。10～12は石錘である。10は両端に穿孔があるが，穿孔の方向が上下で90°異なっている。11は礫石錘で，縄かけ部の位置は長軸両端である。12は円柱状に整えた石材の短軸中央に溝を一周させた有溝石錘である。上端をやや欠損する。13～16は石斧である。16は基部をやや欠損するもののほぼ完形である。刃部は両刃だが，刃部の線状痕が表面のみ確認できることから，手斧として利用されたと考えられる。13・14はいずれも基部・刃部ともに欠損しているが，特に14は刃部再生を意図するとみられる調整剥離が認められる。15は小型の扁平片刃石斧である。風化が著しいものの，刃部の片刃を意識した刃部の研磨面は比較的明瞭に観察できる。17～21は砥石である。17～19・22は小型品で，17～19は特にきめが細かい石材を利用している。20・21は大型品である。20は鉄アレイ状を呈しているが，元々は角柱状素材の四面を研ぎ面に用いていたものと推測される。やや粗めの砂岩製。21は表裏面および右側縁を研ぎ面として利用している。裏面には溝状の研磨痕が残る。砂岩製であるが，非常にきめが細かい。23～32は磨石・敲石・凹石である。扁平な円礫を素材とするものが多く，平坦な表裏面だけでなく，側面にまで使用痕が及ぶものが多い。また，同じ個体の中で敲打痕と摩耗痕が併存するものも多く，磨石・敲石・凹石と明確に区別することも困難である。ここではこれらをまとめて磨石類と呼称し，使用痕については図面中に矢印で範囲を示した。原の辻遺跡では時期を問わず大量に出土する石器である。

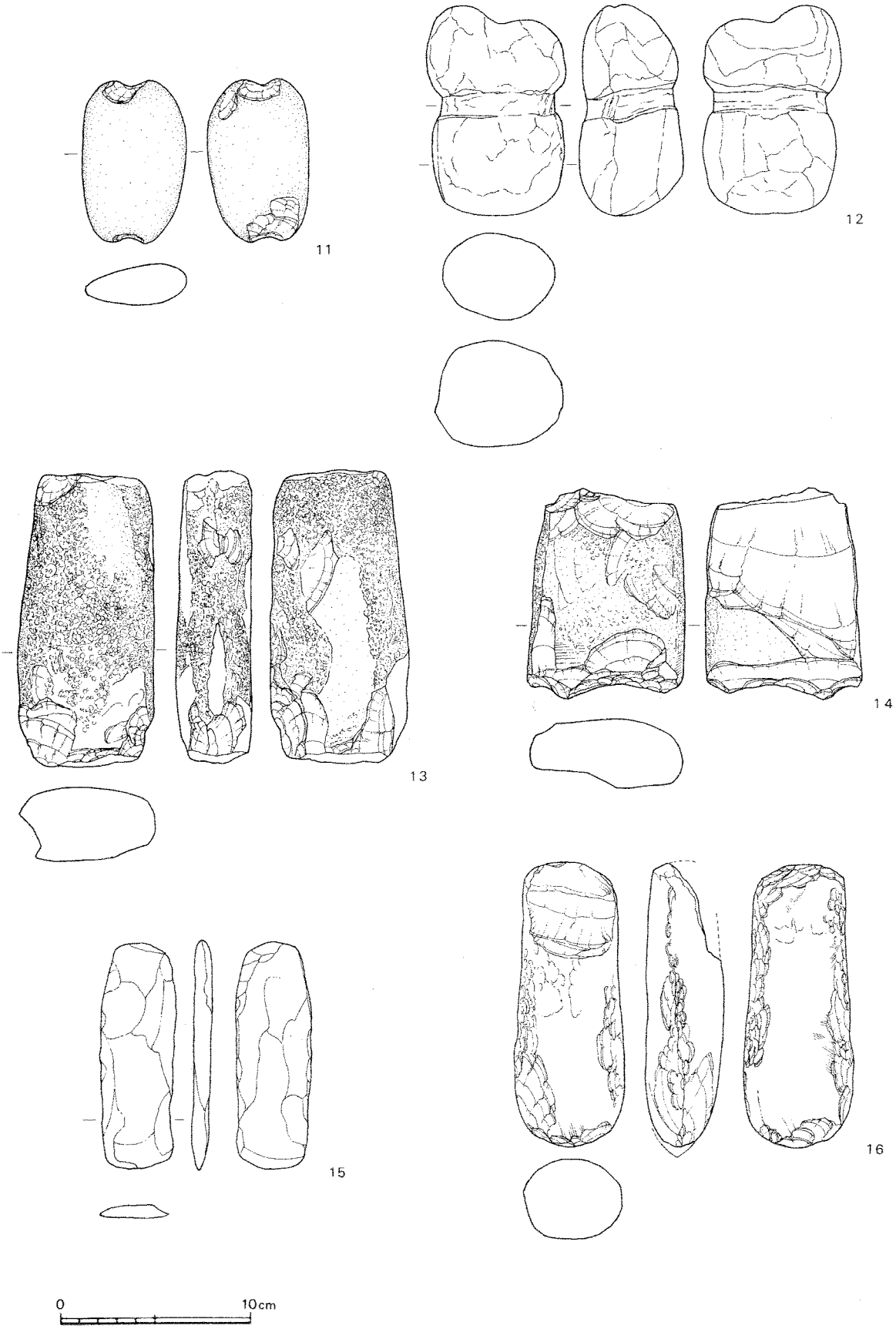
33～38は支脚形石製品である。八反地区ではＳＤ２からまとまって出土している。いずれも硬質の凝灰岩製である。一般的な多孔質玄武岩製に比べて被熱痕が明瞭に残っており，詳細に観察すると，つまみと反対側の側面に赤褐色の被熱痕，その周囲に煤が付着する傾向にある。なお，33・36については赤褐色の明瞭な被熱痕は認められないものの，被熱によるものとみられる若干の変色は認められる。他に比べて相対的に利用頻度が低かったものと考えられる。つまみの付け方に着目すると，明瞭

表２　八反地区遺構別石器組成表

遺構名	時期	狩猟具	農具		調理具			工具					武器	その他
			収穫具		植物加工具		煮沸具							
		石鏃	石庖丁	石鎌	磨石・敲石・凹石	石皿・台石	支脚形石製品	石匙	石斧	礫器	石杵	砥石	磨製石剣	
SD２Ⅰ層	弥生後期			1	12		7					2		
SD２Ⅱ層	弥生後期				1									
D区落ち込み	古墳初頭				65	5	1					6		

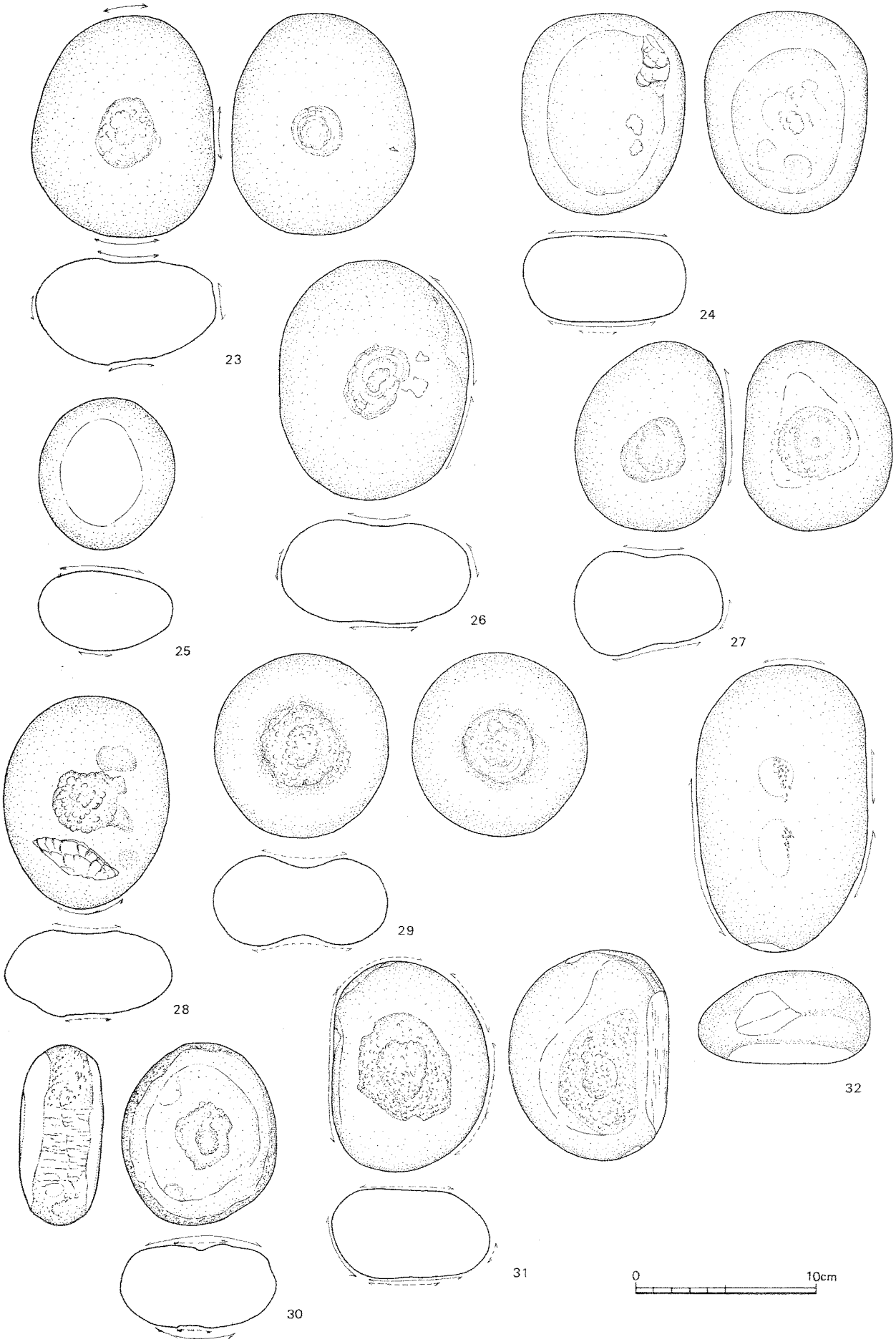


第22図　八反地区出土石器(1)（2/3）

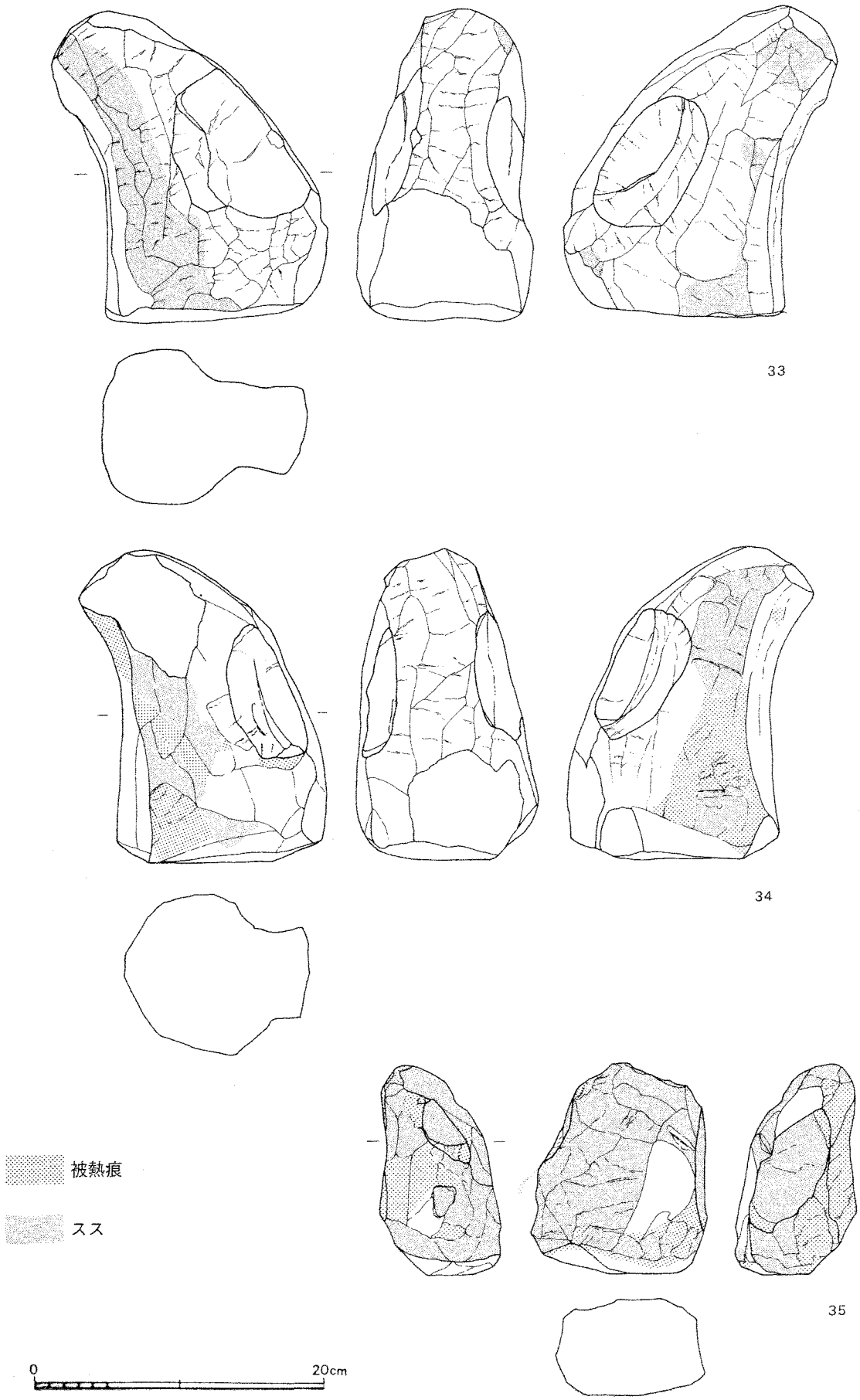


第23図　八反地区出土石器(2)（1／3）

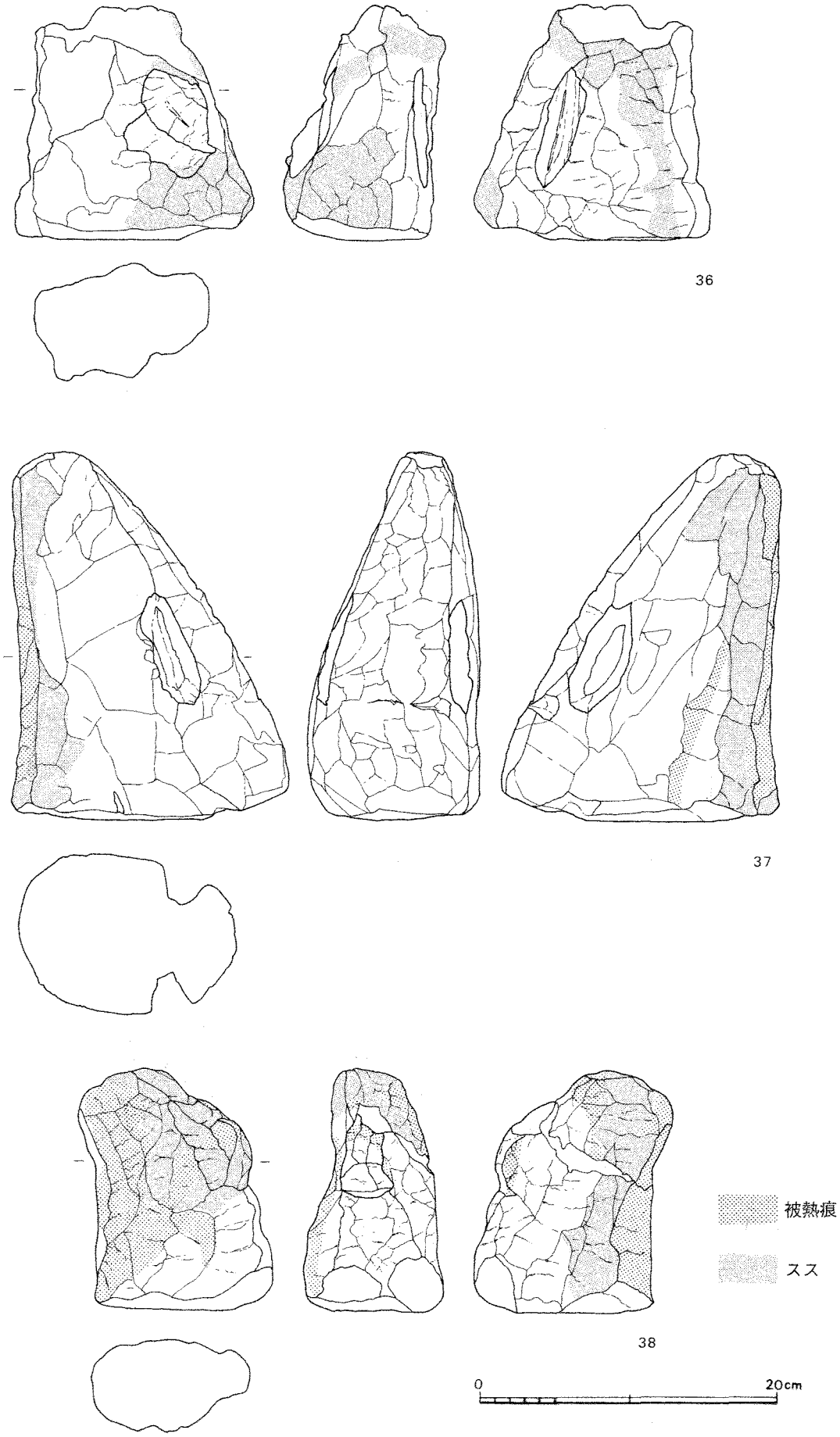
第24図　八反地区出土石器(3)（1／3）



第25図　八反地区出土石器(4)（1／3）※実線は摩耗痕，点線は敲打痕の範囲



第26図　八反地区出土石器(5)（1／4）



第27図　八反地区出土石器(6)（1／4）

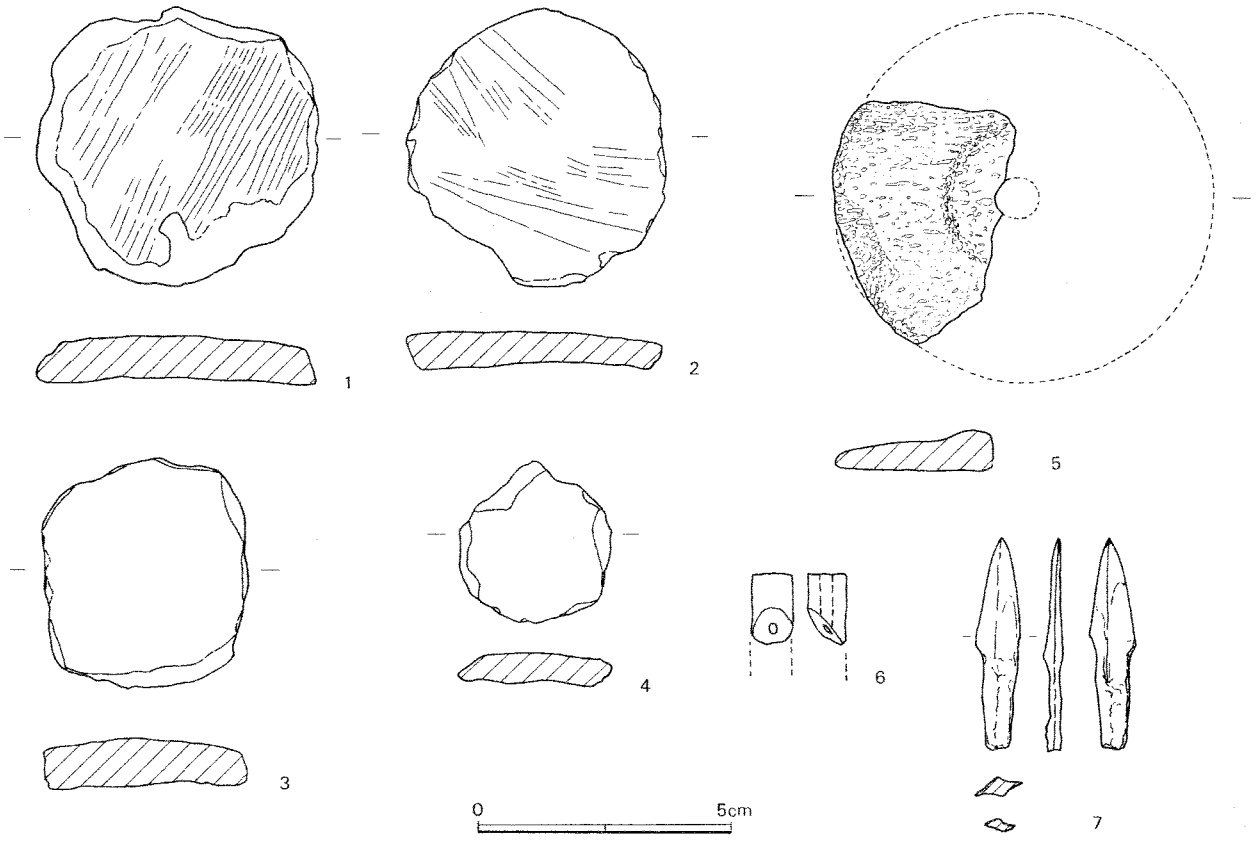
表３　八反地区出土石器その他観察表

図面番号	遺物名	遺構名	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
1	ナイフ型石器	C区Ⅲ層	CⅢ	黒曜石	4.7	1.7	0.95	5.4	先端部欠損
2	台形石器	A区Ⅱ層	A2	黒曜石	2.25	2.45	0.6	1.7	
3	ナイフ型石器	D区サブトレ	Dspstp	黒曜石	2.7	1.25	0.5	1.2	先端部のみ残存
4	打製石鏃	SD１Ⅰ層	AⅠSD１Ⅰ	安山岩	2.2.	1.9	0.4	0.7	
5	打製石鏃	落ち込み	D32ⅢB	黒曜石	1.95	1.4	0.35	0.6	
6	石鏃		表採	黒曜石	2.6	1.8	0.6	1.7	
7	石匙	落ち込み	D31Ⅳ	安山岩	8.6	4.6	1.4	40.9	
8	石鎌	D区サブトレ	Dspstp	頁岩	8.3	5.05	11.05	76.7	先端・基部欠損
9	磨製石剣	落ち込み	D31ⅢB	頁岩	10.15	2.8	1.1	27.6	先端部のみ残存
10	有孔石錘	落ち込み	D31Ⅳ	細粒砂岩	7.95	1.55	1.25	21.8	端部欠損
11	礫石錘	D区Ⅱ層	D29Ⅱ	安山岩	8.2	5.2	2.1	136.5	
12	石錘		表採		10.6	7.1	5.5	369.1	
13	石斧	D区Ⅱ層	D29Ⅱ	頁岩	14.5	5.6	4.1	495.7	基部欠損
14	石斧	C区Ⅲ層	CⅢ	頁岩	15.0	7.1	3.7	731.4	基部・刃部欠損。刃部にリタッチ
15	扁平片刃石斧	D区Ⅱ層	D22Ⅱ		11.4	3.8	0.6	66.0	
16	石斧	D区Ⅱ層	D23Ⅱ	頁岩	10.7	8	3.6	388.4	基部・刃部欠損。刃部にリタッチ
17	砥石	D区Ⅰ層	D２Ⅰ	頁岩	14.7	6.2	3.4	517.8	
18	砥石	SD２Ⅰ層	A17SD２Ⅰ	細粒砂岩	18.4	7.3	3.1	616.9	
19	砥石	落ち込み	D31Ⅳ	細粒砂岩	8.3	4.3	1.1	87.3	
20	砥石	落ち込み	D30ⅢB	砂岩	23.7	10.4	6.8	1719.4	
21	砥石	落ち込み	D31ⅢB	細粒砂岩	35.4	8.3	6.6	2735.4	
22	砥石	落ち込み	D32Ⅴ	細粒砂岩	12.4	10.5	2.3	591.7	
23	敲石	SD２Ⅰ層	A17SD２Ⅰ	安山岩	12.1	10.1	6.0	1156.4	
24	敲石	SD２Ⅱ層	A４SD２Ⅱ	安山岩	11.1	9.0	4.7	867.6	
25	敲石	SD２Ⅰ層	A17SD２Ⅰ	安山岩	8.3	7.6	3.9	438.3	
26	敲石	SD２Ⅰ層	A10SD２Ⅰ	玄武岩	13.2	10.4	5.3	1177.1	
27	敲石	SD２Ⅰ層	A17SD２Ⅰ	安山岩	10.4	8.2	5.7	794.2	
28	敲石	SD２Ⅰ層	A４SD２Ⅰ	安山岩	11.7	9.3	4.9	851.9	
29	敲石	SD２Ⅰ層	A10SD２Ⅰ	安山岩	10.1	9.6	4.9	764.2	
30	敲石	落ち込み	D31Ⅳ	安山岩	15.7	9.4	5.1	1248.7	
31	敲石	落ち込み	D31Ⅳ	安山岩	10.0	8.6	4.5	639.3	
32	敲石	落ち込み	D31Ⅳ	安山岩	11.6	8.7	4.7	834.8	
33	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	A17SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	21.2	19.0	12.2	4300	被熱痕あり
34	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	D22SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	21.2	17.0	12.5	3600	被熱痕あり
35	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	A10SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	14.2	8.2	12.1	1528.6	被熱痕あり
36	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	D22SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	15.8	16.1	11.1	2260.8	被熱痕あり
37	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	D22SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	24.8	18.8	11.8	4200	被熱痕あり
38	支脚形石製品	SD２Ⅰ層	A10SD２Ⅰ	硬質凝灰岩	16.3	13.3	9.6	1772.9	被熱痕あり

な突起を有するのは38のみで，他は側面の一部をＬ字状にカットするか，溝状に掘り込むことでつまみを作り出す点に特徴がある。35は明瞭なつまみはないものの，側面に面取り状の加工が施されており，つまみを意識した加工と考えられる。

八反地区の石器組成（表２）

表２に，八反地区出土の遺構別石器組成を提示した(表２)。この中には，本報告書で掲載しなかった石器も含めている。もっとも特徴的な点は，磨石・敲石・凹石（以下，磨石類）が各遺構とも主体となることである。特に，古墳時代初頭を中心としたＤ区落ち込みでも，磨石類が多数を占め，これに石皿類が伴う構成となる点は注目される。これらの石器は，堅果類の加工具と推定されており，縄文時代に一般的な石器と考えられている。原の辻遺跡では，古墳時代にいたっても堅果類の利用が頻繁に行われていたことを示しているといえよう。また，ＳＤ２Ⅰ層における支脚形石製品の出土も目立つ。これらの石製品は，原の辻遺跡で一般的な軟質の多孔質玄武岩と異なり，比較的硬質の凝灰岩を用いている。また，これに対応するように，つまみの付け方も側面から体部をＬ字状にカットした



第28図　その他の出土遺物（2/3）

り，溝状に彫り込む方法を用いており，突起を削り出す方法に比べて加工頻度の少ない方法を採用している。ＳＤ２は，時期的にも弥生時代後期後葉を中心に比較的まとまっており，この時期における支脚形石製品のあり方を示すものとして注目される。

③土製品（第28図）

１～４は土製円盤である。土器片の周辺を荒く打ち欠いて円形に整えている。周囲に研磨痕は認められない。

④石製品（第28図）

６は管玉である。碧玉製で下端部を欠損する。

⑤骨角製品（第28図）

５は紡錘車である。鯨骨製で，円盤状に加工し中央を穿孔する。穿孔部分は周囲よりもやや厚みがある。

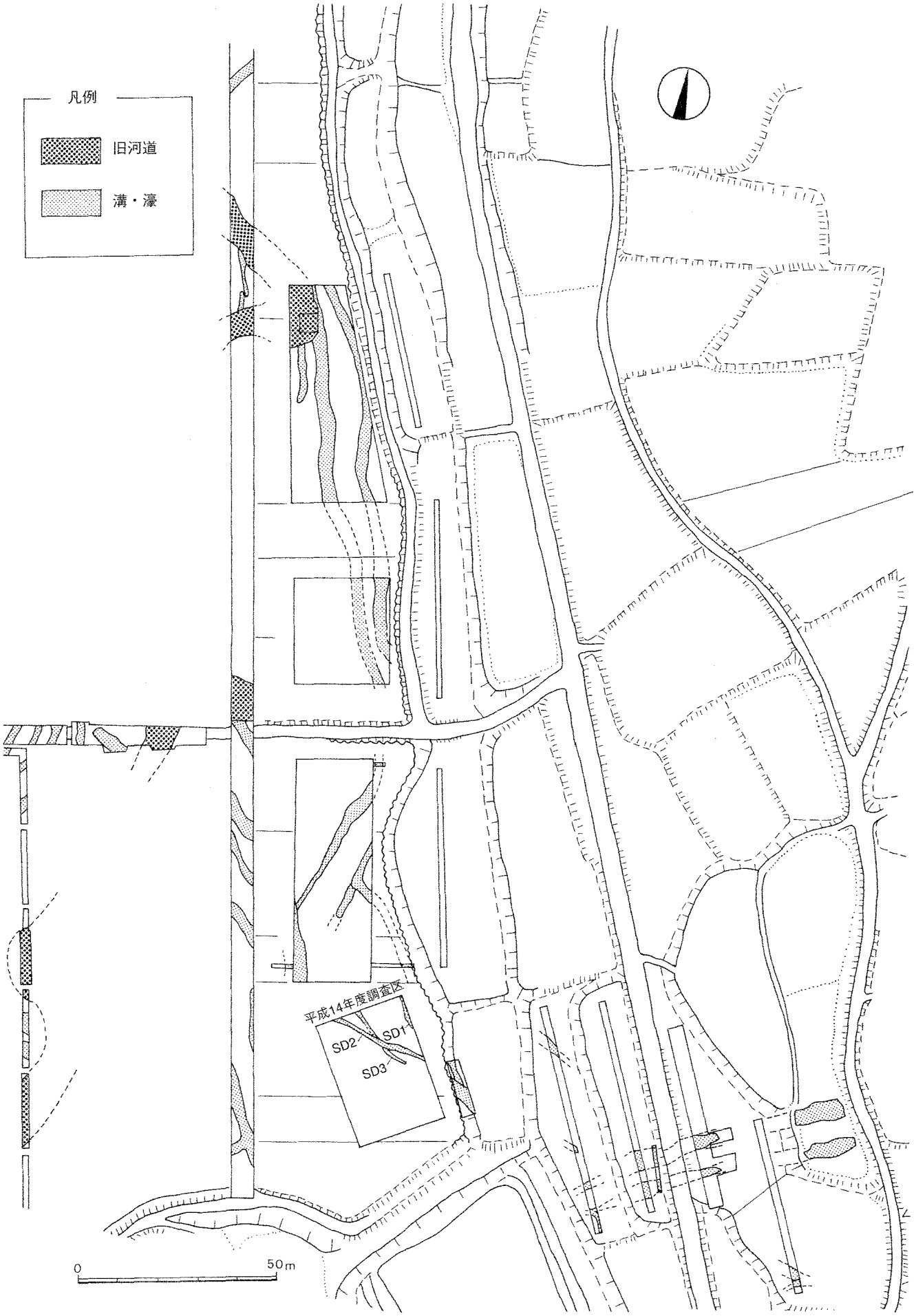
⑥金属製品（第28図）

７は銅鏃である。非常に扁平で鏑も不明瞭である。

(5) 小　結

八反地区の調査では，環濠２本・溝状遺構１本のほか，掘建柱建物と考えられる遺構を２棟分確認した。また，古墳時代初頭の沼状の落ち込みも検出している。環濠については，弥生時代中期後葉の環濠（ＳＤ３）と後期後葉の環濠（ＳＤ２）と時期を違えて掘削され，これらは切り合った状態で検出されている。ＳＤ２はN75°W方向に直線上にのびており，平成６年度を中心に調査が行われた丘陵を東西に横切る環濠２本の内の１本につながるものと考えられる。ＳＤ３を含めた低地部での環濠の展開については，現在県道のつけ替え工事に伴う緊急調査で検出されている環濠群につながるものと想定され，詳細な検討については後日行いたい。

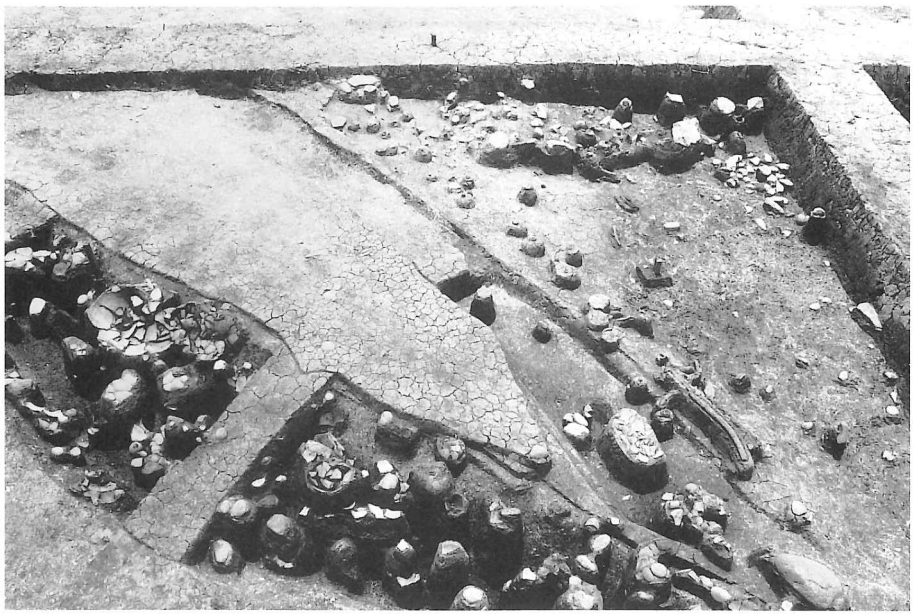
掘建柱建物については，原の辻遺跡の低地部では，これまで石製礎盤が数例確認されると共に，掘立柱建物も数棟確認されている。今回検出した建物は，当初１辺の長さが約3.5mの１間×３間の建物と推定していたが，南端の２本の柱穴の主軸がわずかにずれることや，同じく南端の西側の柱穴の深さが極端に深いことから，これら２本の柱穴をのぞく北側の６本で１軒の建物を構成していると判断した。したがって，建物の構造としては，１間×２間の長方形建物となる。なお，南端部の２本の柱穴については，構造は不明であるが，別の掘建柱建物であると判断している。これらの建物の時期は，柱穴内から遺物の出土を見なかったものの，ＳＤ２・ＳＤ３にきられている状況が確認されている。ＳＤ３の上限が弥生時代中期後葉であることから，この時期以前の建物であることは間違いない。また，２棟が同時に存在したか否かは，両者が分布を重ねることなく，主軸をほぼそろえて一定の間隔で配置されていると考えられることから，同時に存在していたものと考えたい。このように，集落からやや離れた低地部に掘建柱建物を配置する集落としては，佐賀県吉野ヶ里遺跡などがある。これらの建物の性格としては，高床倉庫もしくは物見櫓の可能性が考えられている。物見櫓と考えられる遺構は，吉野ヶ里遺跡を参考にすれば，環濠の張り出し部に構築されているが，原の辻遺跡の場合，遺構の切り合い関係から，建物跡は周辺の環濠よりも一段階古い遺構であることは疑いなく，低地部の環濠掘削以前の建物と考えられる。そうなると，この建物の位置づけとしては，西側低地部の耕作地を控えた高床倉庫群と理解する方が妥当であると考える。１間×２間の構造が，一般的な高床倉庫の構造と一致していることもこれを裏付けるものである。一方で，本年度調査区の北側に隣接する地域では，昨年度の調査で，Ｌ字に屈曲する環濠の一部が検出されており，環濠と併存する物見櫓が検出される可能性は十分考えられるであろう。今後の課題として指摘しておく。



第29図　台地西側低地部の主要遺構図

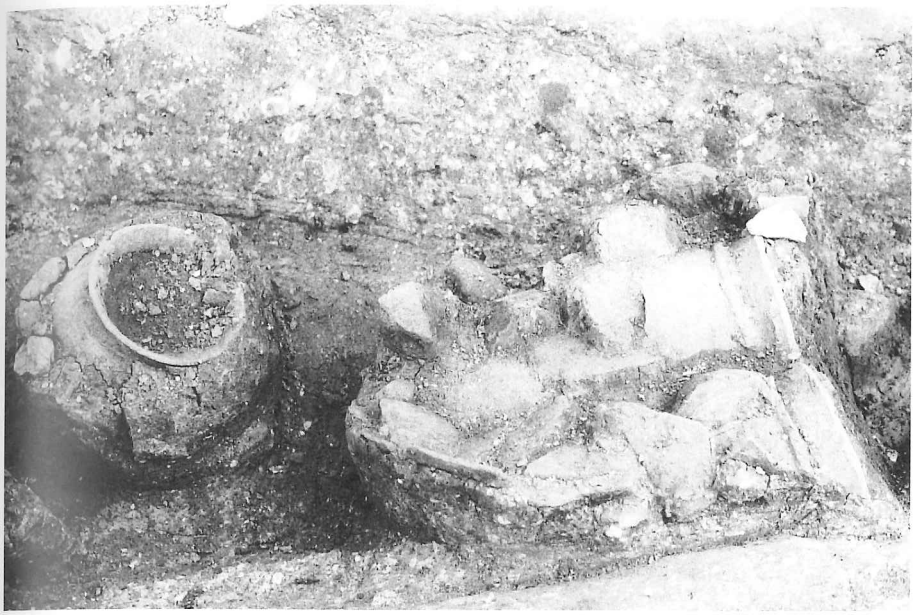
図版１

調査区全景（北から）

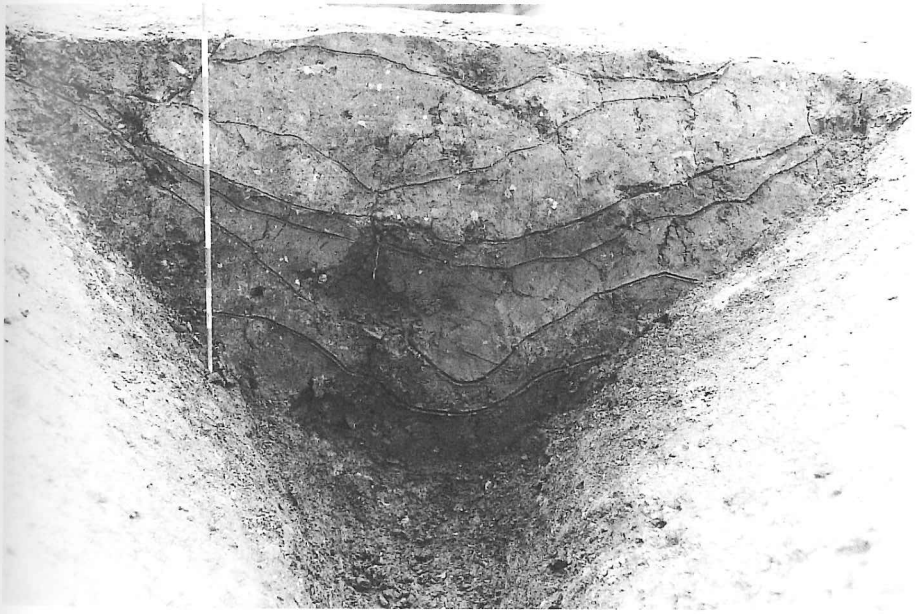


ＳＤ２・ＳＤ３検出状況

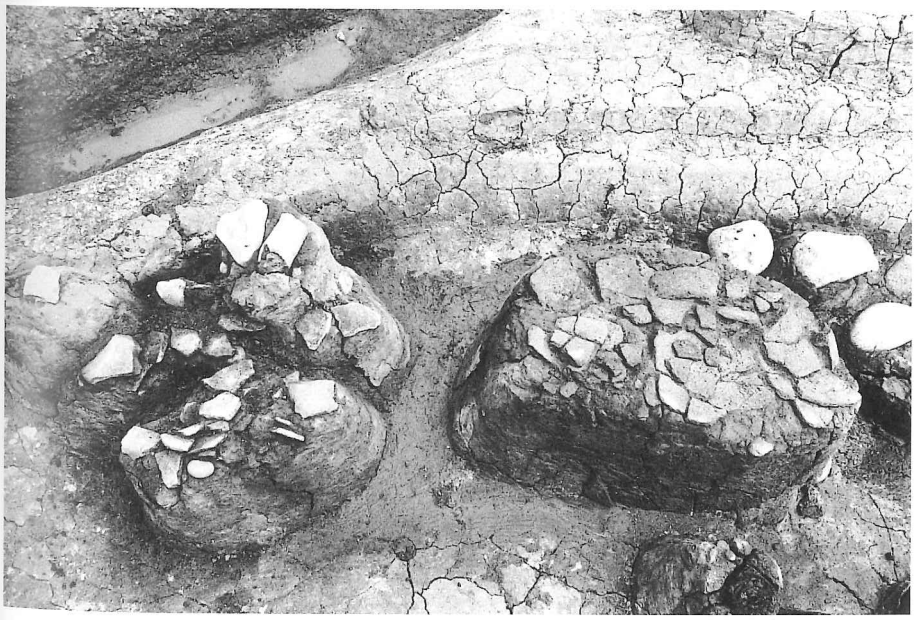
ＳＤ２遺物出土状況



ＳＤ２遺物出土状況

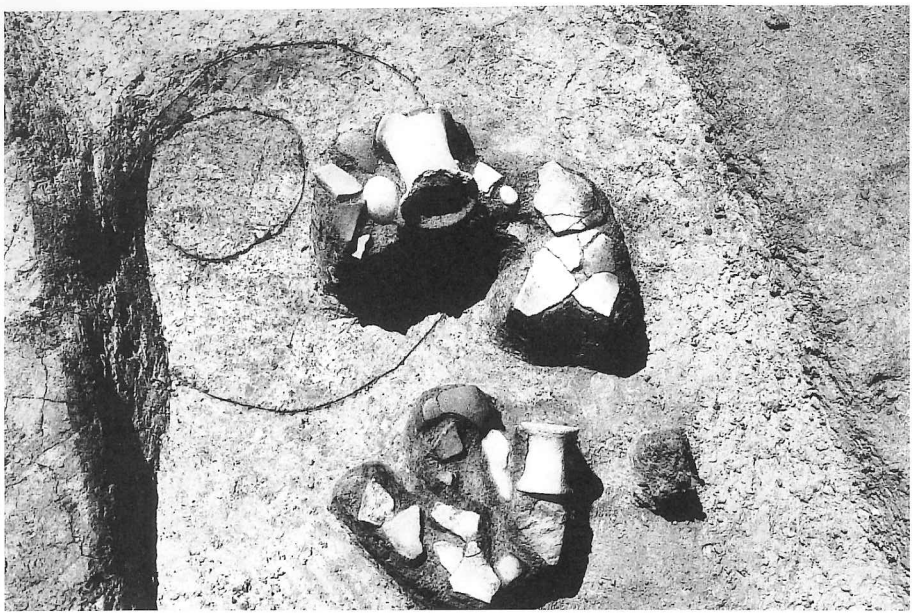


ＳＤ２断面土層



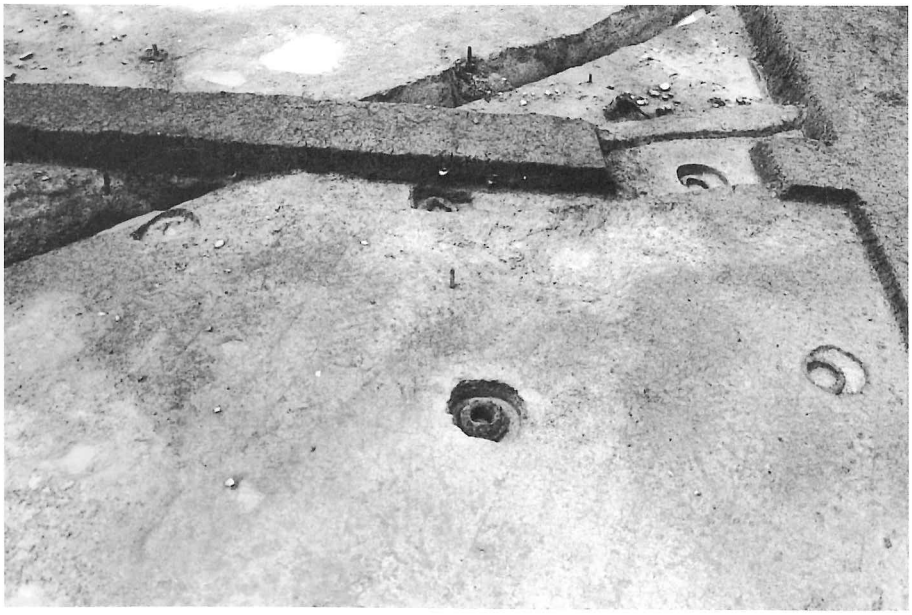
ＳＤ３遺物出土状況

図版 3



ＳＤ３遺物出土状況及び
１号建物跡柱穴検出状況

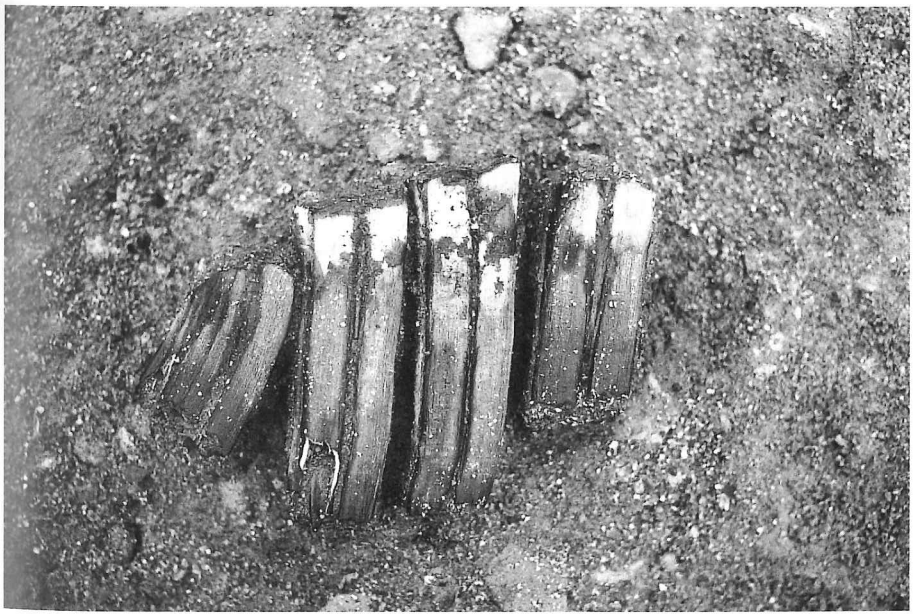
１号・２号建物跡柱穴
検出状況（北から）



１号建物跡柱穴検出状況
（東から）

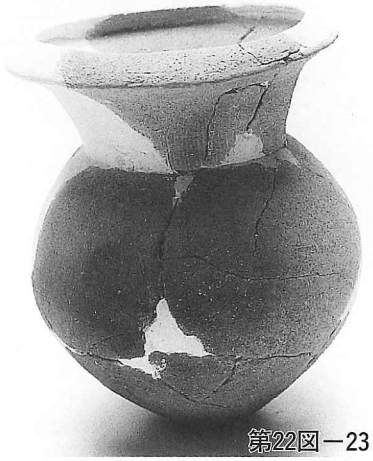
調査風景

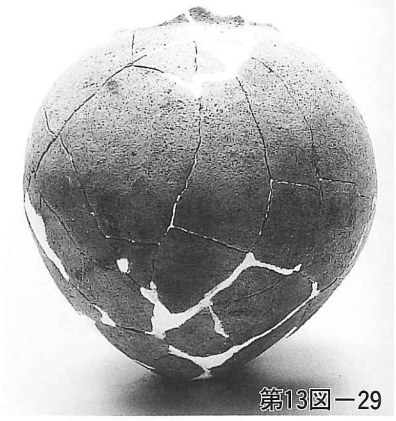
砥石出土状況



ウマの歯出土状況

第10図－1


第22図－23


第13図－29

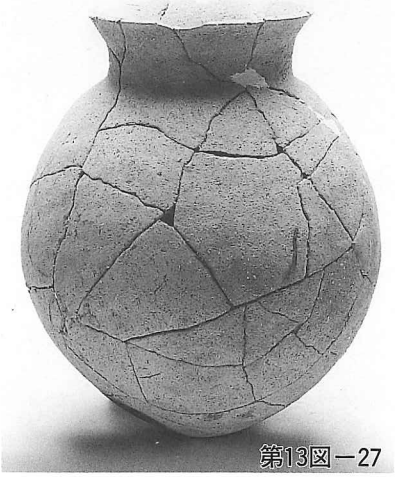
第12図－18

第15図－48

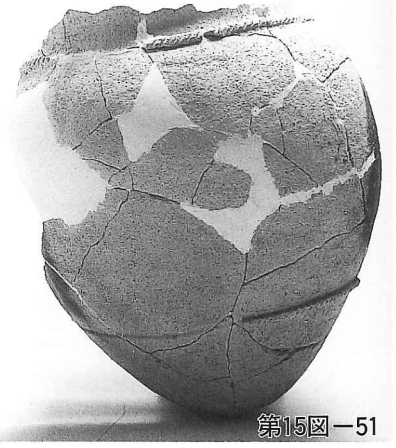
第12図－24

第12図－19

第15図－50


第13図－27

第12図－20


第15図－51

八反地区出土土器

第16図ー 5

第18図ー 6

第19図ー10

第16図ー 7

第18図ー 7

第19図ー12

第17図ー11

第26図・27図

第17図ー12

第26図・27図

八反地区出土土器・石器

2．高元地区の調査

(1) 調査概要（第３図，第30図）

台地上の遺構確認調査は，平成６年度の範囲確認調査以降，芦辺町教育委員会を主体として継続的に実施されている。特に，平成６年度の調査で，台地の最頂部から祭儀場址と考えられる遺構が検出されたことから，その後の調査も，この祭儀場周辺の状況を確認することに主眼がおかれた。一方，台地北部の先端部付近の調査は，平成６年度に芦辺町教育委員会による範囲確認調査が行われ，竪穴住居13棟，土壙30基，貯蔵穴２基，柱穴群600基を確認している。この調査成果に基づいて，本年度は，台地北部のより広範囲な遺構群の確認を目的として，平成６年度調査区の周辺に４カ所の調査区を設定し，約350㎡を対象として調査を行った。調査区は，旧耕作面の標高差に基づいて，北から高元Ⅰ～Ⅳ区とした。また，高元Ⅰ区・Ⅱ区については，東西10m間隔で５つに区分し，西側よりＡ区～Ｅ区とした。調査区一帯は耕作による削平が著しく，特に高元Ⅱ区西半からⅢ区・Ⅳ区にかけては遺構の残存状況は悪かった。一方，高元Ⅰ－Ｄ区やⅡ－Ｄ区では，竪穴住居址や土坑などが検出され，これらの遺構については調査区を拡張して面的な掘り下げを行った。その結果，竪穴住居址10棟以上，土坑５基，焼土坑２基のほか，多数のピット群を確認した。なお，住居址については，３棟のみ本格的な調査を実施し，他のものについては遺構の存在を確認して埋め戻した。

(2) 土層（第31図～第35図）

高元地区は，近年まで畑地や水田として利用されていたため，遺構検出面より上はすべて旧耕作土である。遺構面までの深さは非常に浅く，平均して30～40cmで遺構面に達する。旧地表面は西から東にかけて傾斜していたものと思われ，標高の高かった西側部分が相対的に削平が著しい。また，Ⅰ区の南側やⅡ区の北側では，饅頭畑耕作時の落ち込みも確認されている。

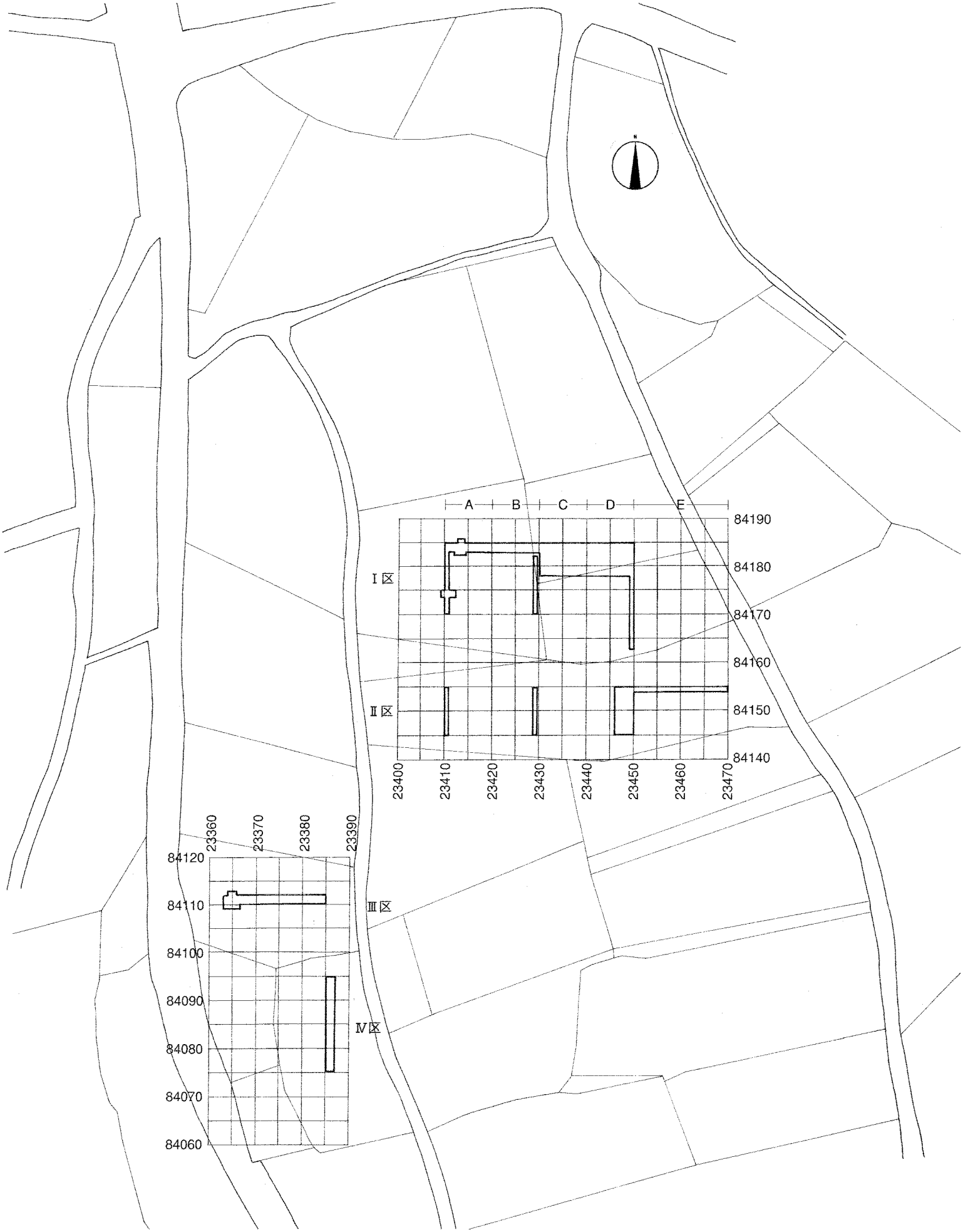
(3) 遺　　構

1．竪穴住居址

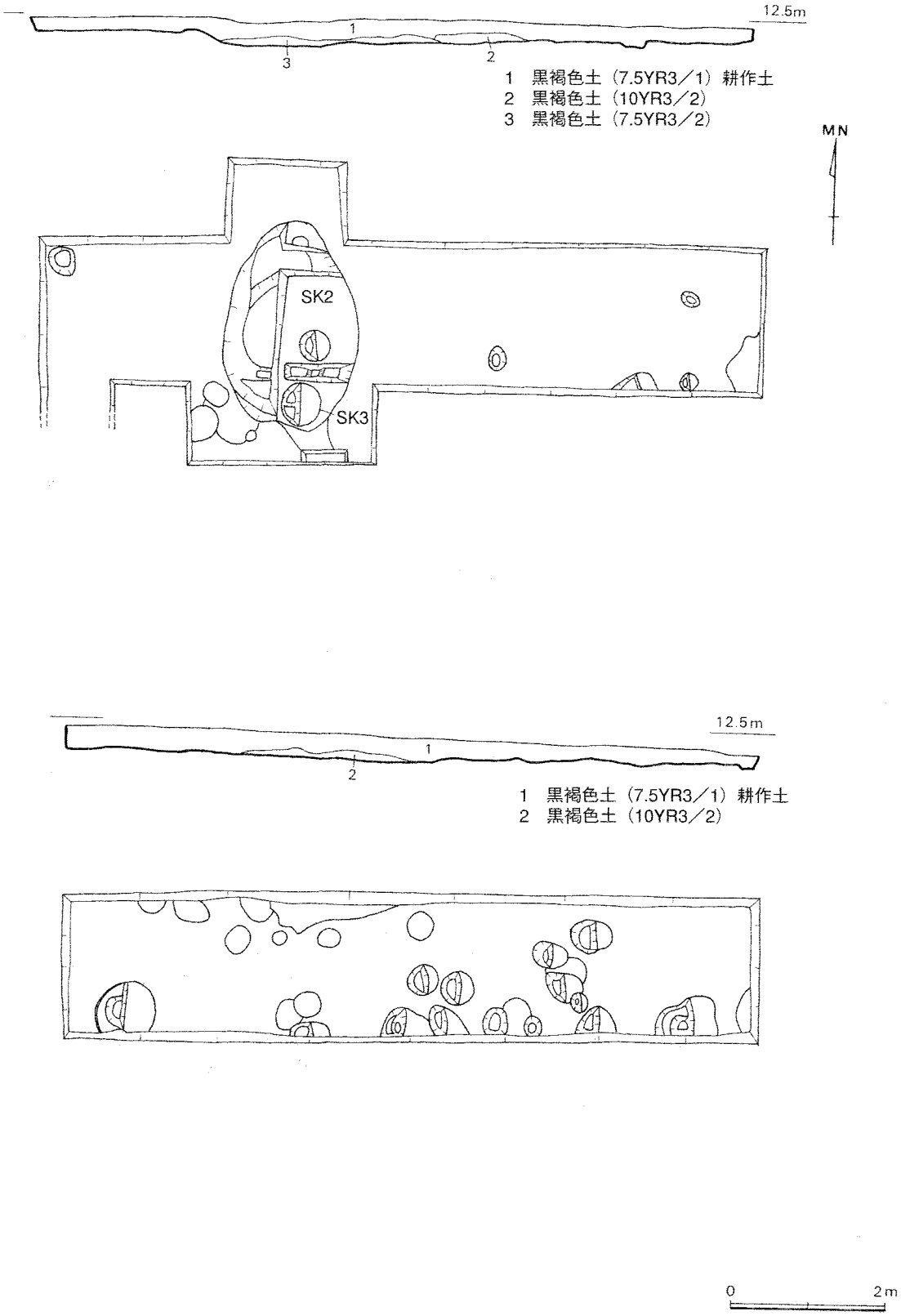
Ⅰ区・Ⅱ区の東半部を中心に，10棟以上検出している。いずれの住居址も後世の削平が著しく，比較的残りの良い遺構でも覆土は20cm足らずであった。したがって，遺構検出時点で住居址の切り合いが確認できず，任意に土層観察用のベルトを設定して，検出面の一部を全体的に掘り下げながら遺構の切り合いを確認した。その結果，切り合いが確認できたのは，Ⅰ区の４棟およびⅡ区の３棟であった（第32図）。

・１号竪穴住居址（ＳＢ１）（第36図）

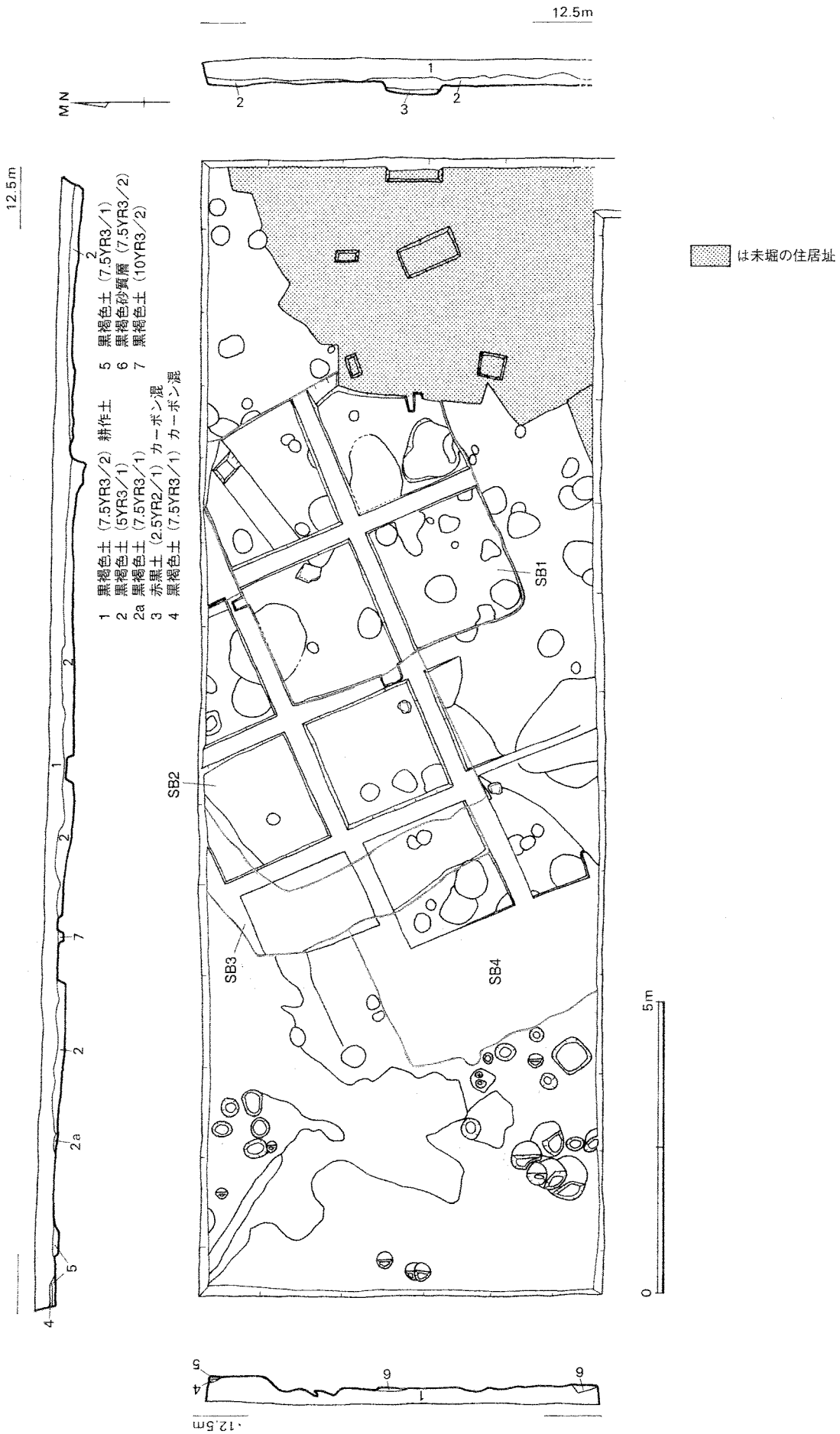
高元Ⅰ区で検出した住居址で，一辺が4.5～５mの方形となる。東側を未掘の住居址に切られるものの，比較的残りがよい。主軸はN59°Ｅで主柱は東西２本と考えている。南東隅にベッド状遺構の一部が確認できた。また，住居址中央部分を中心に，焼土やカーボンがブロック状に堆積しており，炉跡と考えられる。時期は，床面直上出土土器から古墳時代前期の住居址と考えられる。土器のほか，



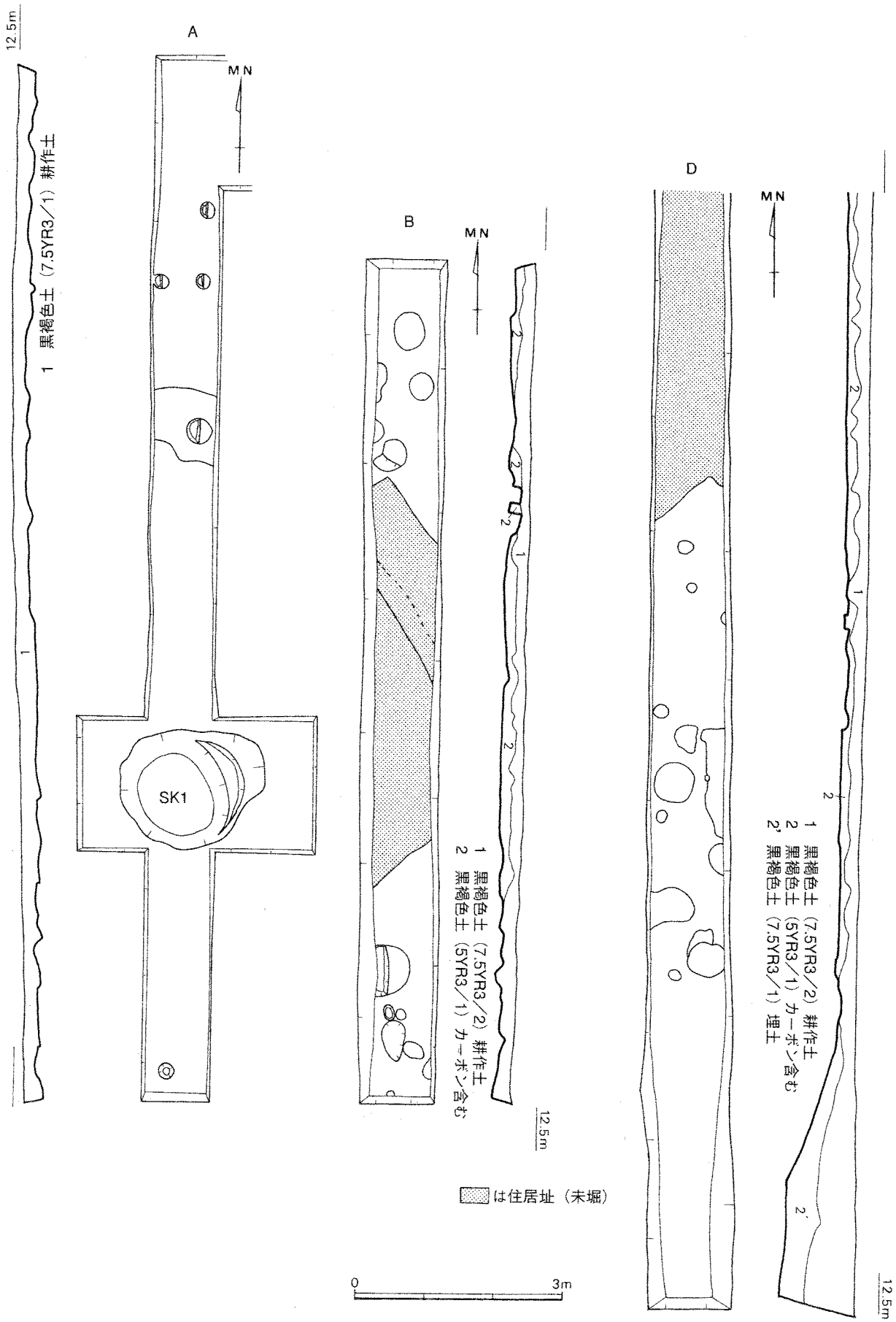
第30図　高元地区調査区位置図（1/1000）



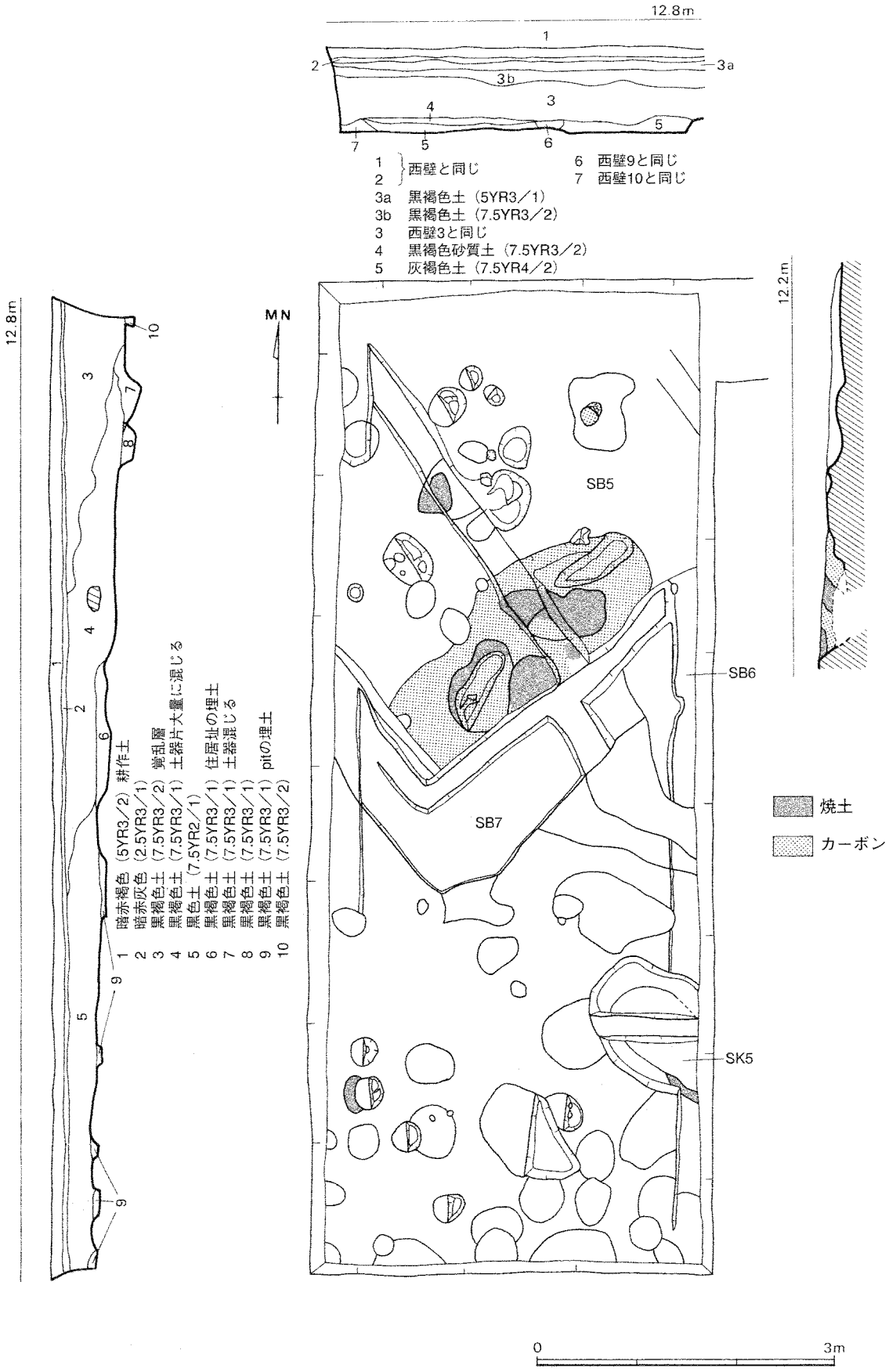
第31図　高元Ⅰ区A・B東西トレンチ遺構配置図及び土層図（1/80）



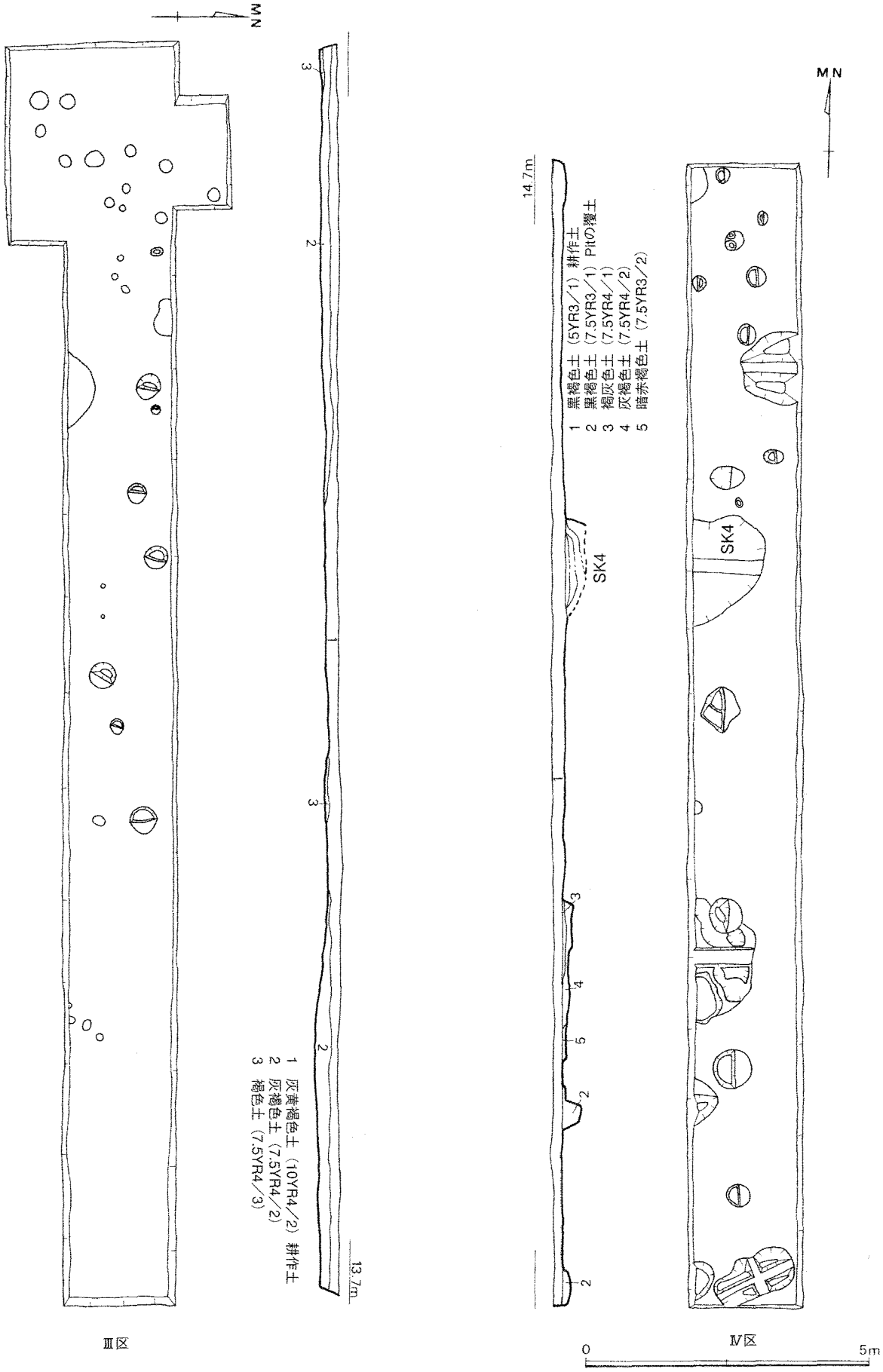
第32図　高元Ｉ区Ｃ・Ｄ東西トレンチ遺構配置図及び土層図（１/100）



第33図　高元Ⅰ区南北トレンチ遺構配置図及び土層図（1/80）



第34図　高元Ⅱ区遺構配置図及び土層図（1/60）



第35図　高元Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図及び土層図（1/100）

鉄鏃２点・ガラス小玉10点・砥石・石皿・敲石などが出土している。なお，住居址の床面より弥生時代中期の土壙（ＳＫ６）および溝状遺構（ＳＤ１）が検出されており，これらの遺構を削平する形で構築されている。また，土壌はすべて水洗いし，植物種子の検出も認められた。

・２号竪穴住居址（ＳＢ２）（第37図）

高元Ｉ区で検出した住居址で，南東部をＳＢ１に切られているが，床面の高さにほとんど差は認められない。長軸約５ｍ，短軸約４ｍの長方形になるものと思われ，主軸はN50°Ｅである。４本主柱の住居址と考えており，東半部では，この住居址に伴うものと見られる土壙を２基切り合った状態で検出している。なお，これらの土壙もＳＢ１によって切られていた。住居址の北辺および東辺では壁溝の一部が確認されている。また，北寄りの中央部では，赤褐色に強く焼けた部分があった。被熱痕は同心円状に二重になっており，中央部分はにぶい赤褐色（５YR4/4），外側は暗赤褐色土（５YR3/3）であった。特に中央部分は非常に堅く固結していた。時期は，床面直上出土土器から古墳時代前期と考えられる。

・３号竪穴住居址（ＳＢ３）（第37図）

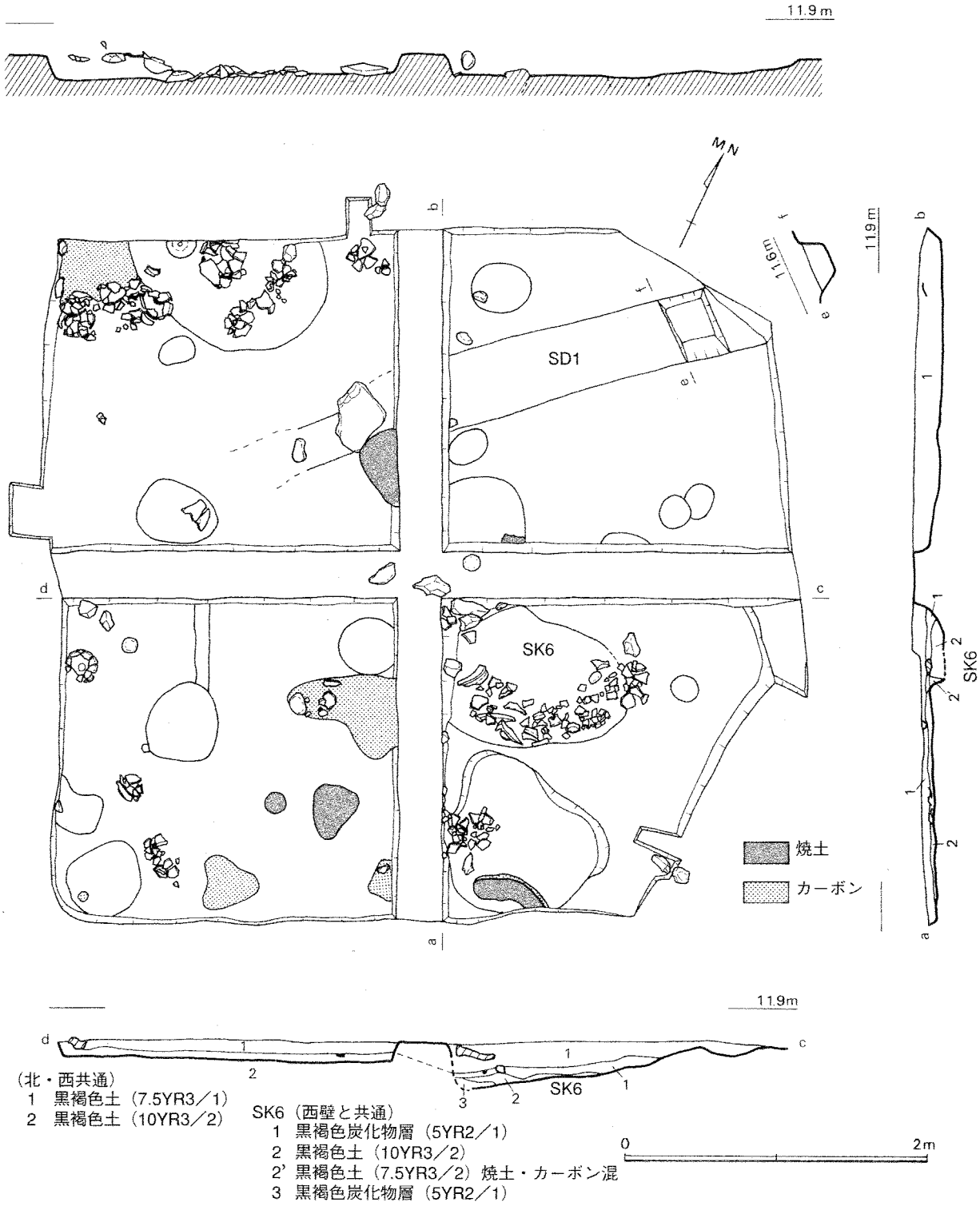
高元Ｉ区で検出した住居址で，大半をＳＢ２に切られており，住居址の東端部を確認したにすぎない。また，覆土も５㎝程度しか残存していなかった。推定される規模は，１辺約４ｍ程度で，主軸はN50°Ｅとなる。床面からは，古墳時代初頭の高坏の一部と，弥生時代中期の甕口縁部が出土しているが，この住居址の北西側に弥生時代中期の遺構群があることから，住居址自体の覆土が薄いことも考慮して，弥生時代中期の土器は混入と判断した。したがって，この住居址の時期は古墳時代初頭と考えている。

・４号竪穴住居址（ＳＢ４）（第32図）

高元Ｉ区で検出した。ＳＢ３に切られている。切り合いが確認できた段階で覆土の掘り下げを中止したため，住居址の構造等は不明である。主軸はN68°Ｅである。時期が判別できる資料は出土していないものの，ＳＢ３に切られていることから，弥生時代終末～古墳時代初頭頃としておく。

・５号竪穴住居址（ＳＢ５）（第34図）

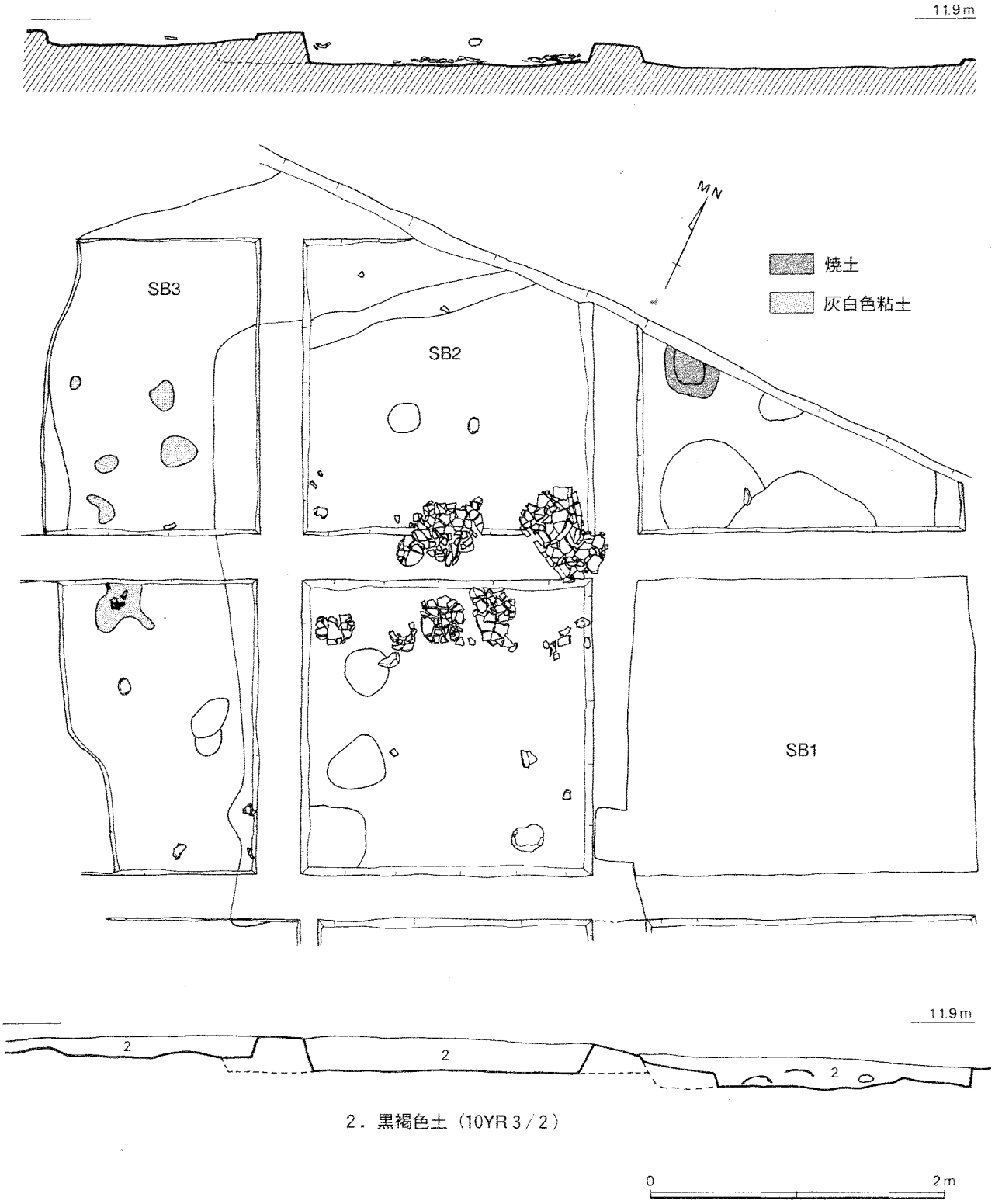
高元Ⅱ区で検出した住居址で，北半部は饅頭畑耕作時に削平されており，南半部のみ検出した。推定される規模は一辺が4.5m程度で，主軸はN34°Ｗである。構造等は推測の域を出ないものの，主柱は東西２本と考えられる。東西の壁沿いに，壁溝の一部を検出している。なお，南端部において，浅い溝状の落ち込みがあり。その中に焼土やカーボンが堆積している状況が確認された。焼土は部分的に固結しており，かなり被熱を受けていることがわかる。周辺からは，砥石・獣骨が出土している。部分的な掘り下げにとどまったものの，金属器とくに鉄器関連の工房跡の可能性も考えられる。住居址の床面からは時期を特定できる遺物は少なかったものの，若干の間層を挟んで，古墳時代前期の土器群が大量に廃棄されていた。住居址の廃絶時期とは若干の時期差があることは否めないものの，ＳＢ５も古墳時代前期の時期にあてておく。



（北・西共通）
1　黒褐色土（7.5YR3／1）
2　黒褐色土（10YR3／2）

SK6（西壁と共通）
1　黒褐色炭化物層（5YR2／1）
2　黒褐色土（10YR3／2）
2'　黒褐色土（7.5YR3／2）焼土・カーボン混
3　黒褐色炭化物層（5YR2／1）

第36図　ＳＢ１検出状況（１/40）



第37図　ＳＢ２・ＳＢ３検出状況（１/40）

・６号竪穴住居址（ＳＢ６）（第34図）

ＳＢ５に切られる形で，高元Ⅱ区で検出した。調査区内では住居址の隅の部分を検出したにすぎず，掘り下げも行わなかったため，住居址の構造や時期については不明である。主軸はＳＢ５と同じくＮ34°Ｗと考えられる。ＳＢ５より古いことから，一応古墳時代初頭頃と考えている。

・７号竪穴住居址（ＳＢ７）（第34図）

ＳＢ５とＳＢ６にきられており，ＳＢ５の南側で重なるように検出された。床面まで掘り下げは行っておらず，規模や構造については不明である。覆土中から時期を特定できる遺物は出土しなかったが，ＳＢ５・ＳＢ６よりも古いことから，弥生時代終末～古墳時代初頭頃と考えておく。

調査区内における竪穴住居址の展開

高元Ⅰ区の竪穴住居址は，切り合いが確認できた住居址についてはＳＢ４→ＳＢ３→ＳＢ２→ＳＢ１の順で構築されており，西側から東側へと建て替えられていったことが明らかである。ＳＢ１の東側にも，これを切るように新たな住居址が構築されており，このことを裏付けている。高元Ⅱ区の住居址は，ＳＢ７→ＳＢ６→ＳＢ５の順で構築され，南から北へと次々に建て替えられていったことがわかる。

２．土坑

土坑と考えられる遺構は多く検出されたが，実際に掘り下げを行ったのは６基である。

・１号土坑（ＳＫ１）（第38図）

高元Ⅰ区の西側で検出した楕円形の土坑である。長軸長約２ｍ，短軸長約1.5ｍで，深さは約55㎝である。土坑は二段掘りになっており，西半部を深く掘り下げている。土層はカーボンと黒褐色土の互層からなるが，地山に類似した３層を挟んで大きく上下に二分できる。遺物は下層の５層を中心に出土しており，弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式を中心とする丹塗りの土器が大量に出土している。また，これらの土器に伴って，甕棺が破砕された状態で出土している。

・２号土坑（ＳＫ２）（第39図）

高元Ⅰ区の西寄りで検出した焼土坑である。長軸約2.7ｍ，短軸約1.75ｍの楕円形で，さらに南側には２条の浅いシミ状の落ち込みを確認している。調査はこのうち西側半分を対象に実施した。土坑は二段掘りになっており，南半分は長軸1.75ｍ，短軸1.3ｍ，深さ約50㎝にわたって深掘りしている。この深掘り部分からは，壁面から床面にかけて，焼土やカーボンが張り付いた状態で検出された。特に，南壁沿いには固結した焼土が厚さ約５㎝にわたって張り付いている。焼土の上面には約５㎝の平坦面が形成されており，東側のサブトレンチでもこの焼土の延長を確認した。また，深掘り部分の北半部にはカーボンが薄く堆積しているが，東西トレンチによる土層の観察では，このカーボン層の下にも薄い焼土層を確認した。したがって，この深掘り部分の構造としては，壁面から床面にかけて焼土が張り付き，その上にカーボンが乗っていたものと推測される。さらに深掘り部分を遺構の機能部と考えれば，北側の浅い掘り込みは作業場として捉えられるであろう。土層は４層に分けられ，最下

層（４層）にカーボンが多く混じる黒褐色土が堆積し，その上に深掘り部分を埋めるように黄褐色土（２層・３層）が堆積し，最終的に黒褐色土（１層）で全体が埋まっている。最下層はこの遺構が機能していた頃の堆積物と考えられるが，廃絶後は時間差をおいて段階的に埋没していったものと考えられる。土器は３層を中心に出土しており，すべて弥生時代中期前葉～中葉の須玖Ⅰ式である。このほか，３層からは荒い敲打痕のついた礫が１点出土している。なお，覆土はすべて水洗したが，銅滓や鉄滓・鍛造剥片といった金属器生産時の副産物は検出されなかった。

・３号土坑（ＳＫ３）（第39図）

高元Ⅰ区で，ＳＫ２を掘り返すように構築されている焼土坑である。平面形は直径約50cmの円形で，深さ約30cmにわたって逆台形に掘り込まれている。土層の観察から，最初に土坑の壁面から床面にかけて厚さ２cm～10cmにカーボンを貼り付け，土坑の中央部分に細かく砕いた焼土を充填した後，土坑上面全体を再度カーボン混じりの土壌で覆っている。この構造は鍛冶炉の地下構造と非常によく類似している。掘り下げた覆土はすべて水洗したが，微細遺物は検出されなかった。周辺には，同時期のものと見られるピットを複数検出している。時期は，土坑の掘り込み部分に張り付いていた土器が須玖Ⅰ式であったことから，弥生時代中期前葉～中葉と考えている。なお，掘り下げは西半部を中心に実施し，東半部については現状保存している。

・４号土坑（ＳＫ４）（第38図）

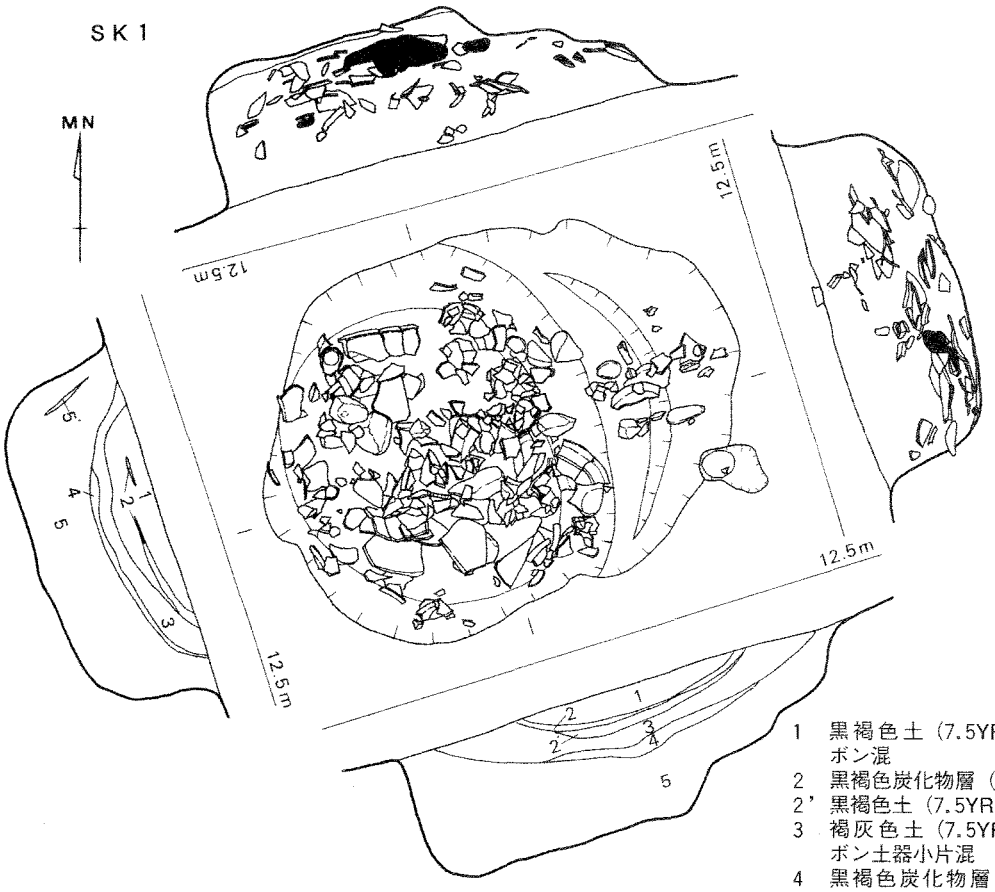
高元Ⅳ区で東半部のみ検出した。短軸約1.8mの不正楕円形と推測される。南側では，土坑の縁に沿って礫が配置されている状況が確認された。覆土中からは大量の礫が出土しており，これらの礫も本来は土坑の縁に配されていたのであろう。覆土は４層に分けられるが，地山類似の黄褐色混じりの土を間に挟む点で，ＳＫ１やＳＫ２と共通している。遺物は少ないものの，弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式の土器片が出土している。なお，この遺構は遺物を取り上げた後そのまま埋め戻しており，床面までの深さは確認していない。

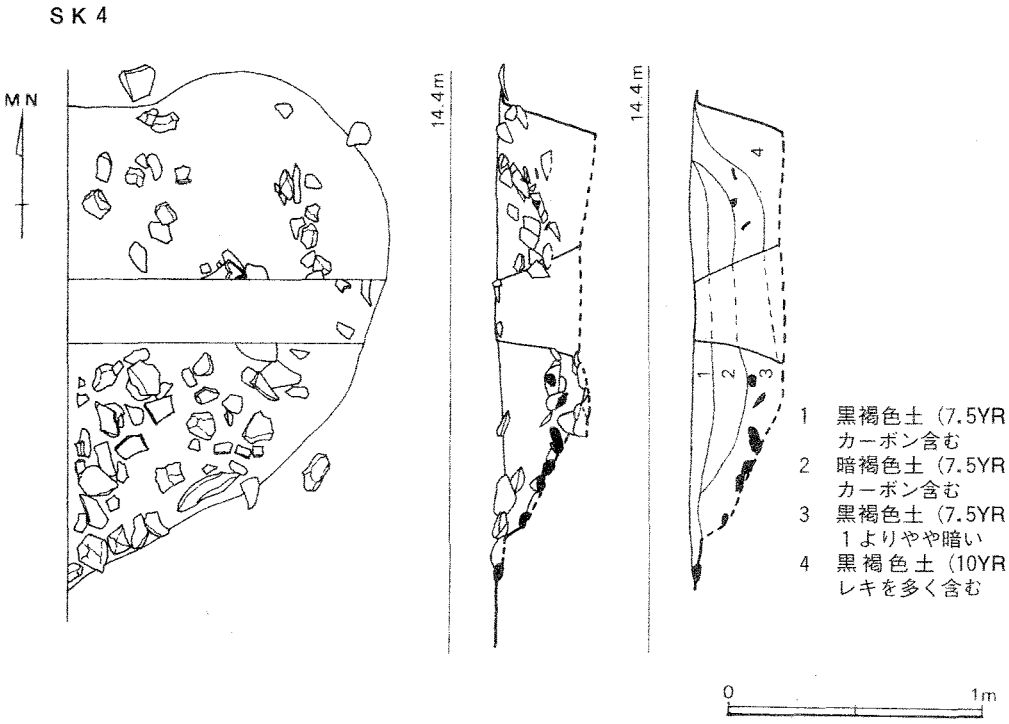
・５号土坑（ＳＫ５）（第34図）

高元Ⅱ区で確認している。西半部のみの検出で，短軸長約110cmの楕円形になるものと推測される。土坑は二段堀になっており，二段面の深掘り部分の壁面に沿って，固結した焼土が検出された。掘り下げは深掘り部分検出面で止めているため，詳細は明らかでないが，構造的には，二段掘りである点や深掘り部分に焼土が張り付くなど，ＳＫ２との共通点を指摘できる。時期を特定できる遺物は出土していないが，土坑検出面より若干の間層を挟んで，弥生時代中期後葉を中心とする土器群が出土しており，ＳＫ５の時期もこのころに位置づけられよう。

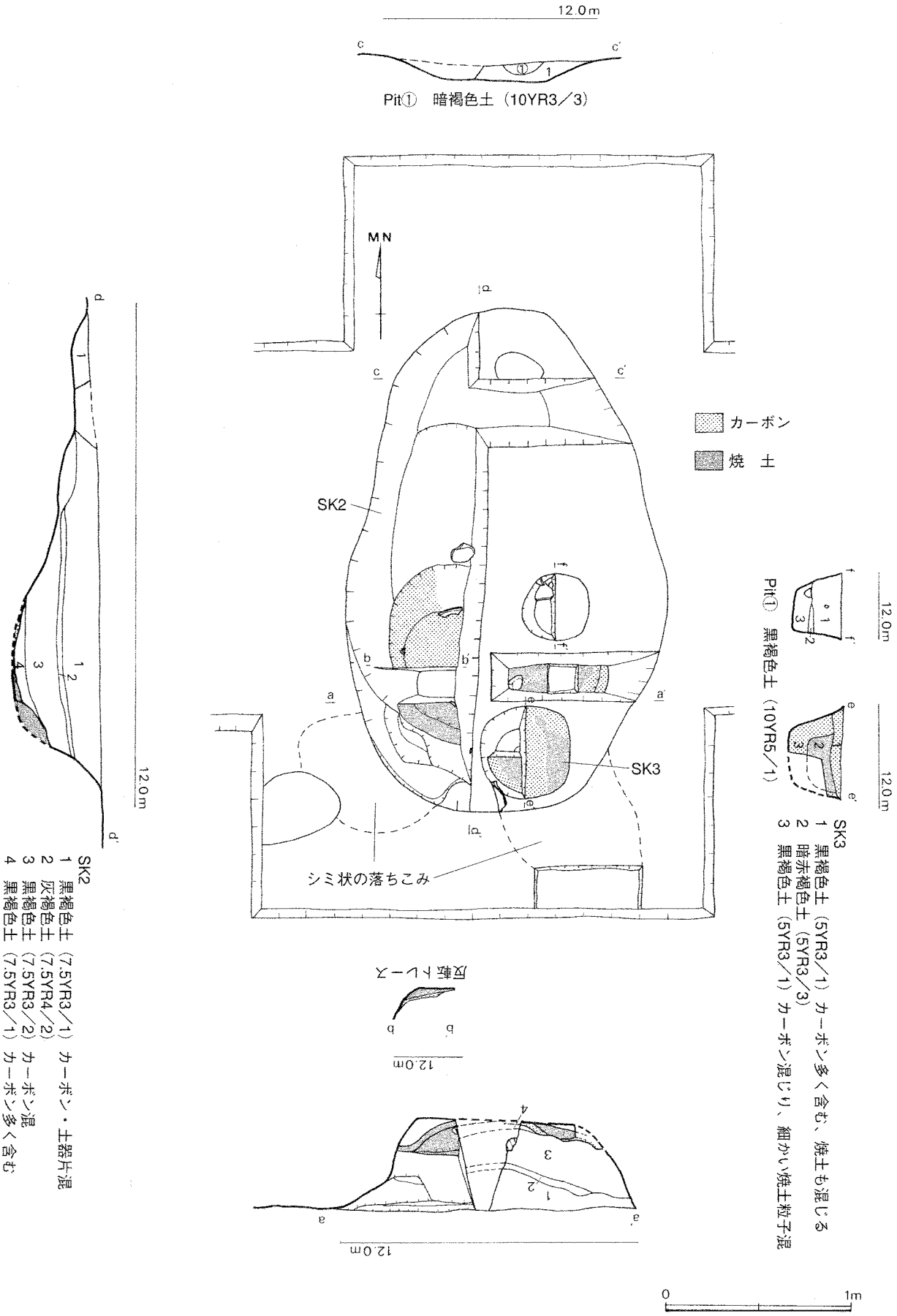
・６号土坑（ＳＫ６）（第36図）

高元１区のＳＢ１床面より検出した。土層観察用ベルトに一部かかるため全容は明らかでないが，長軸長約140cm，短軸長約90cmの楕円形になるものと思われる。遺物はＳＢ１の構築による削平を受けるものの，土坑の縁に沿って張り付いた状態で大量の土器を検出している。弥生時代中期後葉の土器を主体としており，丹塗りの土器が多い点でＳＫ１と共通する。この土坑はその存在を確認したの





第38図　ＳＫ１・ＳＫ４遺物出土状況及び土層図（1/30）



第39図　ＳＫ２・ＳＫ３遺構検出状況及び土層図（１/30）

みで，掘り下げを行わずに埋め戻した。

調査区内における土坑群の展開

今回検出した土坑のうち，掘り下げを行った６基については，いずれも弥生時代前葉～後葉の時期に該当するものであった。このうち，ＳＫ１とＳＫ６は，土坑の縁に沿って丹塗り土器が大量に検出された点で共通点がある。また，ＳＫ２とＳＫ５は，二段掘りの土坑である点と，深掘り部分の壁面から床面にかけて固結した焼土が張り付いている点で共通点がある。ＳＫ２・ＳＫ３・ＳＫ５は金属器関連の工房である可能性が高く，弥生時代中期には，様々な機能を持った土坑群がこの地域に展開していたことが推測される。

なお，ＳＢ４の北西部を中心に，弥生時代中期後半とみられるシミ状の遺構が確認できたが，詳細な調査は行わず，検出時の状況を作図して埋め戻した。(第32図)

３．溝状遺構

・１号溝（ＳＤ１）（第36図）

高元Ｉ区で検出した。幅20～25cm，深さ15cmで，南西から北東方向に断続的に約9.5m検出している。この溝はＳＢ１によって切られており，部分的に消滅しているが，北東部分は比較的残りがよい。部分的な掘り下げしか行わなかったが，覆土中からは弥生時代中期の土器小片が出土している。

(4) 遺　　物

①土器

ＳＢ１出土土器（第40図）

１は布留系の甕である。球胴状の胴部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。内面は横方向のケズリで，口縁部の立ち上がり付近は指頭圧痕が顕著である。２～４は鉢である。２はくの字形口縁で底部は丸底である。胴部は風化が著しいが，横方向の刷毛目の痕跡がわずかに残る。３・４は素口縁で丸底の鉢である。いずれも底部外面にケズリの痕跡残す。口縁端部は３が面取りされるのに対して４は尖り気味に仕上げる。５・６は高坏である。５は坏部が深く，底面から緩やかな稜を形成しつつ外反気味に口縁が立ち上がる。坏底部の外面には，横方向のケズリの痕跡残る。６もほぼ同様であるが，坏部内面には刷毛目と暗文様のヘラ調整が認められる。７・８は壺である。７は丸底の底部から胴部のやや上位に最大径を有し，直立気味に口縁が立ち上がる。口縁の付け根には低い三角突帯が一条巡る。胴部下半には縦方向のケズリ痕が顕著である。８は複合口縁の壺である。胴部上半には横方向の刷毛目が残り，内面はナデ調整であるが，底部付近は非常に薄く，ナデ調整に先立って内面ケズリを行っている。９・10は器台である。９は山陰系の鼓形器台，10は畿内系の小型器台である。いずれも内面は全面にケズリの痕跡を残す。11は脚坏の鉢もしくは甕の脚部である。

これらは古墳時代初頭の土器群で，井上編年の古墳前期１式にほぼ相当する。

ＳＢ２出土土器（第41図，第42図）

12・13はくの字形口縁の甕である。12は下膨れ気味の胴部に直立気味の口縁部がつく。胴部上半は斜め方向の刷毛目調整であるが，下半部には縦方向のケズリ痕を有する。また，胴部下半部に外面からの穿孔が認められる。13は球胴状の胴部から外反気味に口縁部が長くのびる。内外面ともに刷毛目調整である。14～16は底部資料である。14は凸レンズ状の平底で，胴部下半の外面には縦方向のケズリで調整する。15は尖り気味の丸底で，14と同じく胴部下半の外面に縦方向のケズリ痕が顕著である。16は平底で，弥生時代中期後葉の土器であろう。底部に穿孔が認められる。17～20は布留系の甕である。17は尖り気味の丸底で胴部上半に最大径を有し，口縁部は外傾しつつも直線的に立ち上がる。口縁端部はややつまみ上げている。胴部上半にはヘラ描き波状文が認められ，胴部最大径付近には横方向の刷毛目，それ以下は縦方向の刷毛目である。18～20は口縁部資料で，いずれも口縁部が内傾し，19・20は口縁端部をややつまみ上げる。内面はいずれも横方向のケズリ痕が顕著である。

これらは16をのぞいて古墳時代初頭の土器群で，井上編年の古墳前期１式にほぼ相当する。

ＳＢ３出土土器（第42図）

21は低脚の高坏もしくは台付き鉢の脚部と考えられる。破片資料であるが，脚部には穿孔が認められる。22は逆Ｌ字状口縁の甕口縁部である。口縁上面は平坦でやや内傾する。

ＳＢ３の土器はいずれも小片であるが，21は弥生時代終末～古墳時代初頭，22は弥生時代中期に位置づけられる。ＳＢ３の周囲には，弥生時代中期のシミ状の遺構が広がっており，ＳＢ３自体の残り具合が非常に悪いことを考慮すると，22の土器は周辺からの混入である可能性が高い。したがって，ＳＢ３の時期は21の土器から判断して，弥生時代終末～古墳時代初頭をあてておく。

ＳＢ５覆土中出土土器（第43図）

23は，くの字形口縁の甕である。口縁部の立ち上がりは直立に近く，胴部もあまり張らない。24～28は布留系の甕である。24の口縁は直線的に外反するのに対して，25～28は内湾気味に立ち上がる。いずれも端部に平坦面を持ち，24・26・28は口縁部内面をわずかにつまみ上げる。27は内外面とも丹塗りの痕跡残る。29は鉢である。口縁端部は平坦で，底部にかけて単純にすぼまる形態である。30は袋状口縁の壺である。太めで短い頸部から，やや内傾気味に口縁部が短く折れる。頸部の付け根には低い台形突帯が一条巡る。31は複合口縁の壺である。外反する頸部がいったんくびれて段を形成し，そこからさらに口縁部が外反する。32は口縁が内傾する壺の口縁であろうか。外反する頸部から明瞭な段を持ちつつ内側に屈曲する。内外面ともに粗めの刷毛目を残す。33・34は高坏の坏部である。いずれも浅い坏部から口縁が外反しながら立ち上がるが，立ち上がりの長さは34の方が長い。33には内外面ともに丹塗りの痕跡残す。35は高坏の脚部である。細い脚部から裾にかけて急激に開く。裾部が欠損しており透かしが確認できたのは１孔であるが，本来は３孔であったと考えられる。37は口縁の立ち上がりが長い複合口縁の壺である。口縁端部は尖り気味で付け根には低い三角突帯を持つ。36も複合口縁の壺で，口縁の立ち上がりが短いタイプである。口縁は短い頸部から直立気味に立ち上がる。

頸部には羽状文が描かれる。38は鼓形器台である。脚部内面はヘラケズリの痕跡残す。37～38は山陰系の土器群である。

以上，ＳＢ５覆土中出土土器は，古墳時代初頭に位置づけられ，井上編年の古墳前期１式に相当する。

ＳＫ１出土土器（第44図，第45図）

１～４は逆Ｌ字状口縁の甕である。１は断面三角形の口縁で内面にも突出し，胴部がわずかに張る。２も断面三角形に近く口縁端部は尖り気味である。胴部はあまり張らない。３は口縁部の厚みがほぼ一定となり，口縁上面がわずかに内傾している。口縁下に低い三角突帯が１条巡る。５～７はくの字形口縁の甕である。５・６は口縁端部をわずかにつまみ上げるもので，５は胴部もやや張り気味である。７は底部が締まり胴部上半が張るプロポーションで，口縁はくの字に折れる。８は蓋で，頂部はややくぼみ，つまみの部分はよく締まっている。９は甕棺である。同一個体とみられる接合しない口縁部・胴部・底部の破片から，図上で復元したものである。やや内傾するＴ字状口縁で，胴部が張り，口縁部直下に１条，胴部中位に２条の突帯がつく。橋口編年のＫⅢb式に相当する。10～16は丹塗り土器である。10は高坏で，内傾する深い坏部にＭ字突帯が２条巡る。11～13は壺である。12は鋤先状口縁の壺で，上面はわずかに外傾する。頸部の付け根にはシャープな三角突帯がつく。11・13は底部資料で，平底の底部から内傾気味に立ち上がり，胴部中位から内傾気味にすぼまりつつ頸部にいたる。14～16は高坏である。14は脚部で，細い脚部から裾にかけてラッパ状に開く。15・16は坏部で鋤先状の口縁部である。口縁上面はやや外傾する。16の口縁直下にはシャープな三角突帯が巡る。

以上，ＳＫ１出土土器は，弥生時代中期末～後期初頭に相当する。

ＳＫ２出土土器（第45図）

17・18はＳＤ２の３層から出土した逆Ｌ字状の甕口縁部である。いずれも口縁上面が平坦で，内面にわずかに突出する。口縁部の厚みはほぼ一定である。口縁直下には低い三角突帯を１条有する。弥生時代中期前葉～中葉（須玖１式古段階～新段階）の土器である。

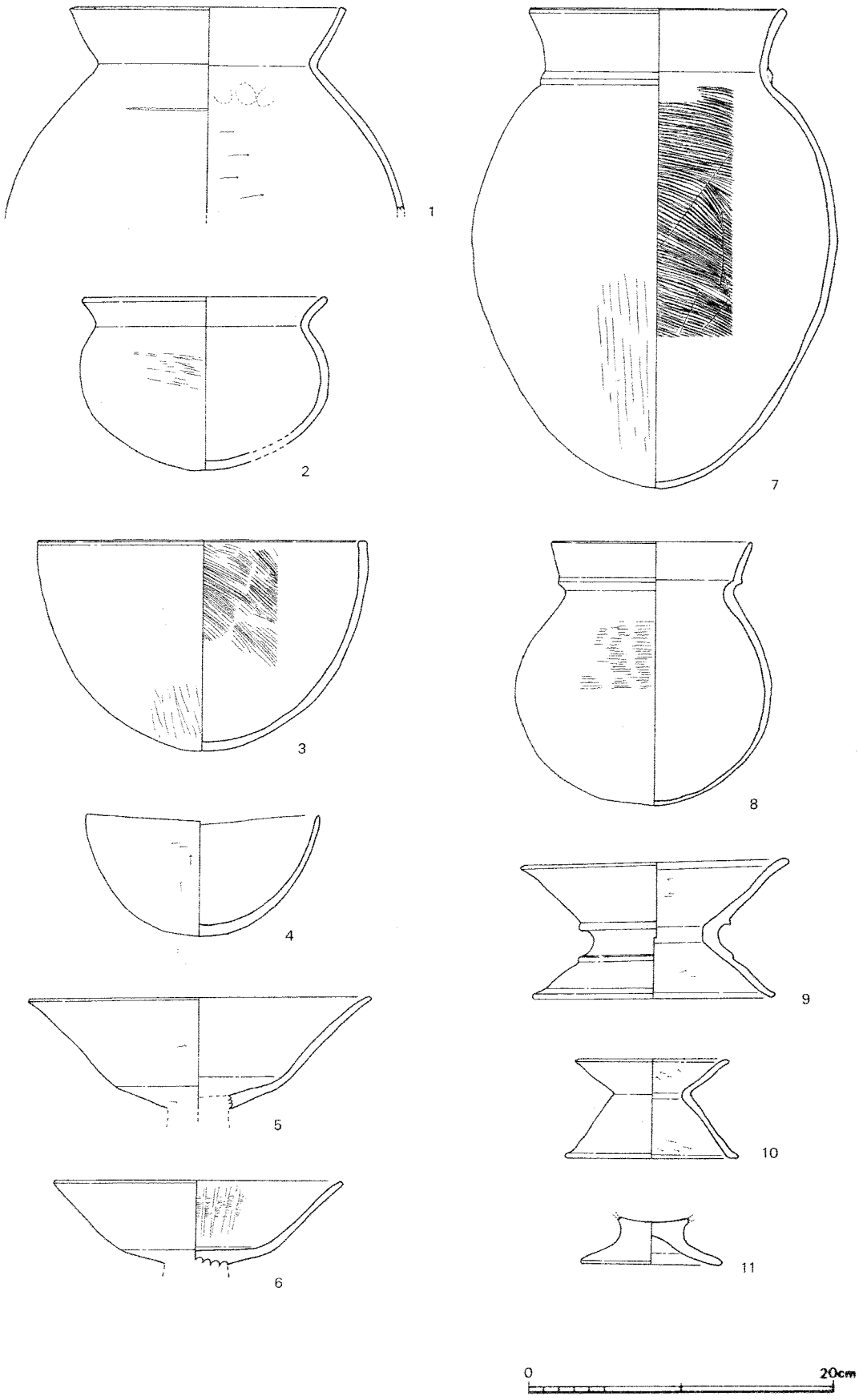
ＳＫ３出土土器（第45図）

19はＳＫ３の堀方部分から出土した逆Ｌ字状口縁の甕である。径1/4ほど残存しており，復元径は14.4cmである。口縁端部が内面にわずかに突出し，口縁部の厚みはほぼ一定である。口縁直下に三角突帯が一条巡る。ＳＫ２出土土器と同様，弥生時代中期前葉～中葉（須玖１式古段階～新段階）の土器である。

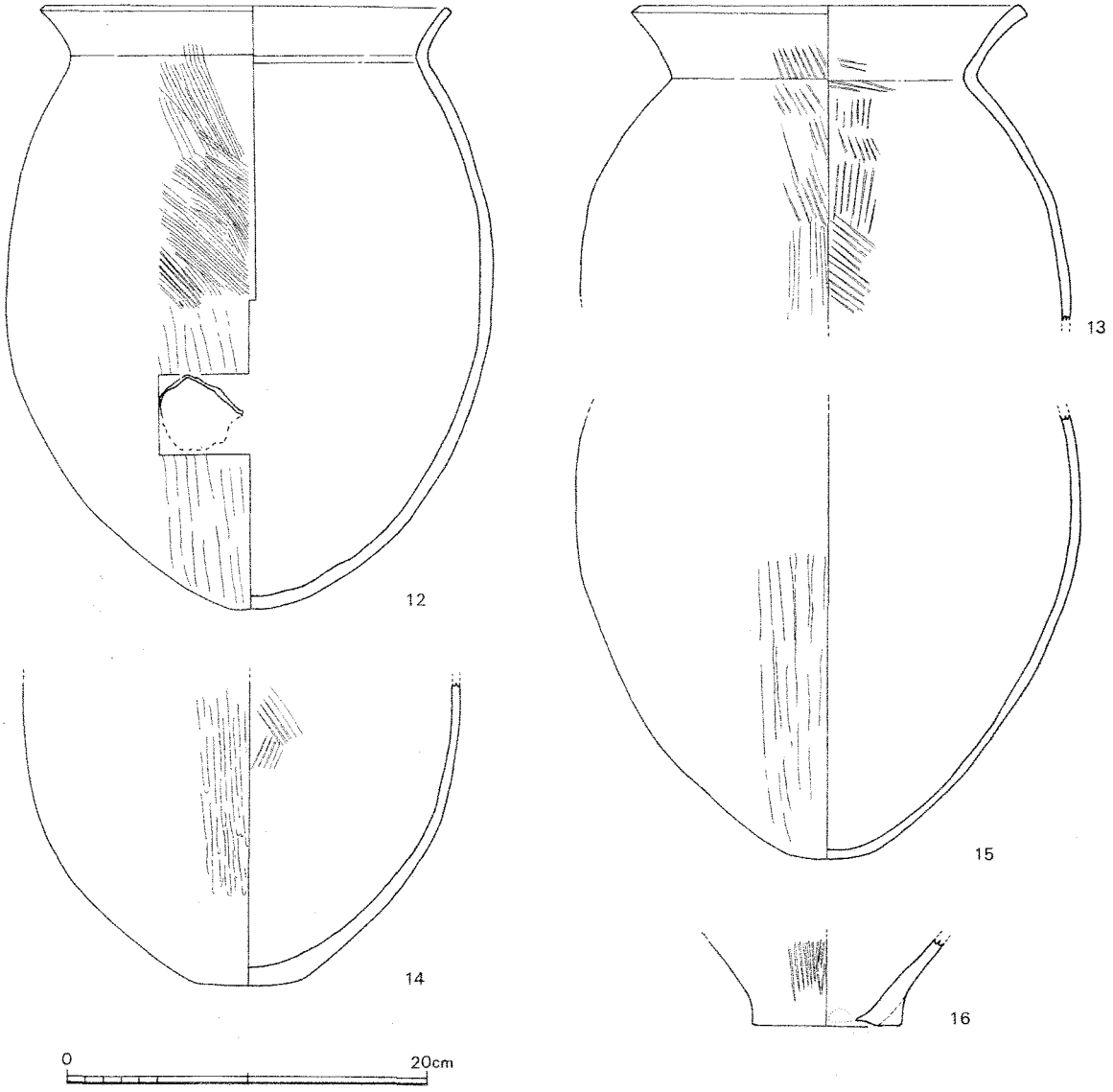
ＳＫ４出土土器（第46図）

１・２は逆Ｌ字状口縁の甕口縁部である。１は上面が丸みを帯び，端部はやや外傾し，内面は突出する。２は上面が平坦で，端部は内面にわずかに突出する。口縁の厚みはほぼ一定である。３は高坏の脚部である。脚部内面にはシボリ痕を有し，脚部外面と坏部内面には丹塗りの痕跡が残る。

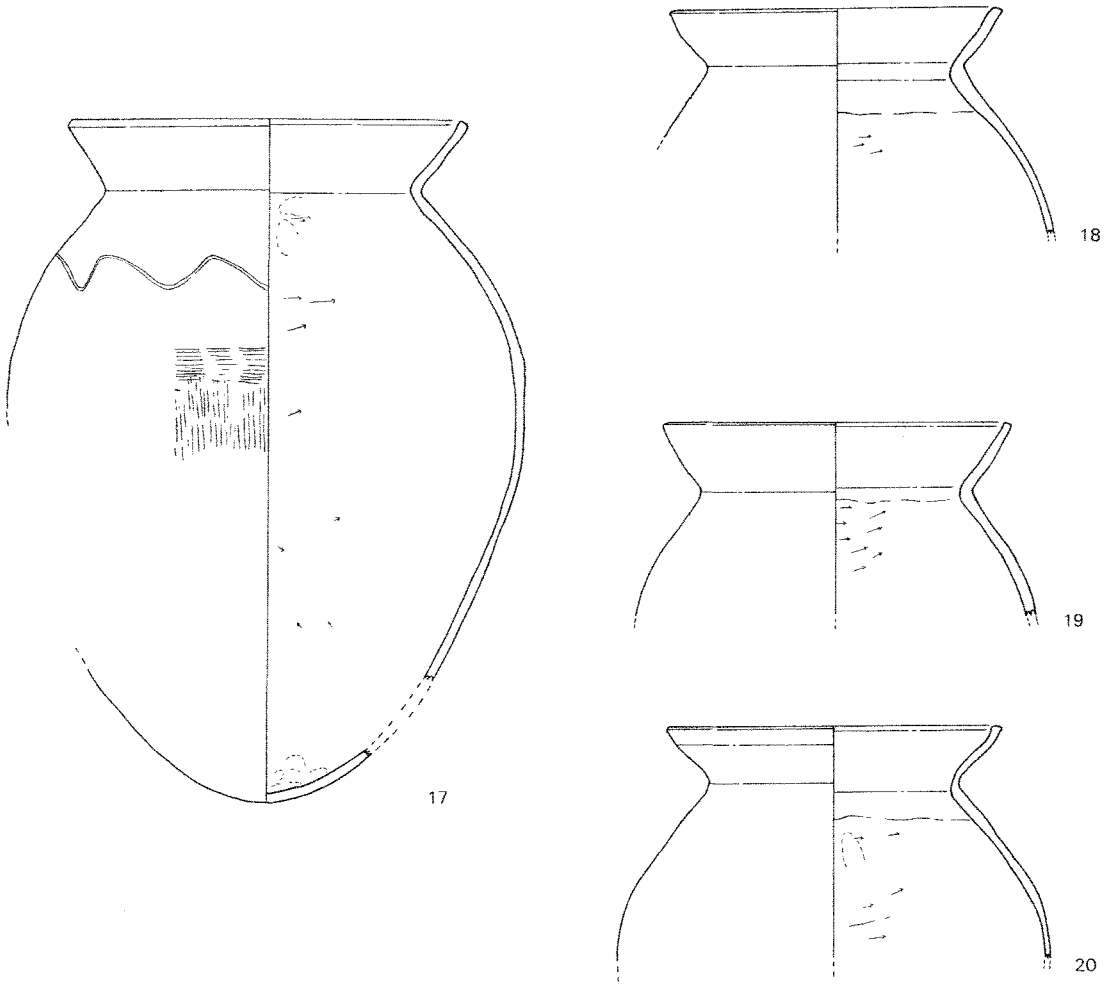
これらの土器は，弥生時代中期中葉～後葉に相当する。



第40図　ＳＢ１出土土器（1/4）

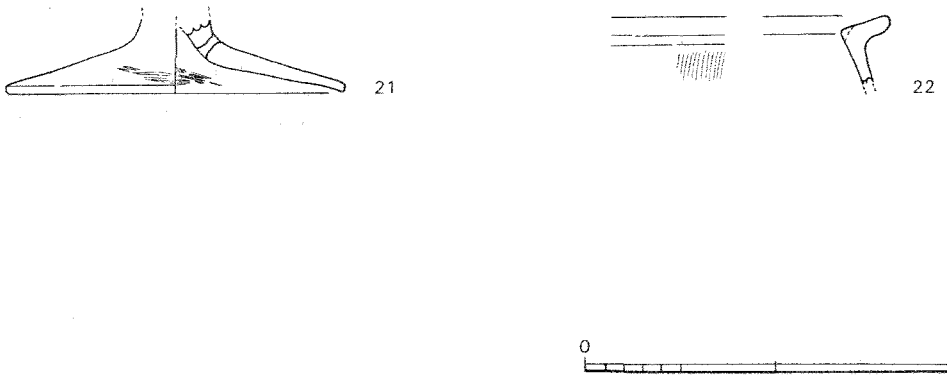


第41図　ＳＢ２出土土器(1)（１／４）

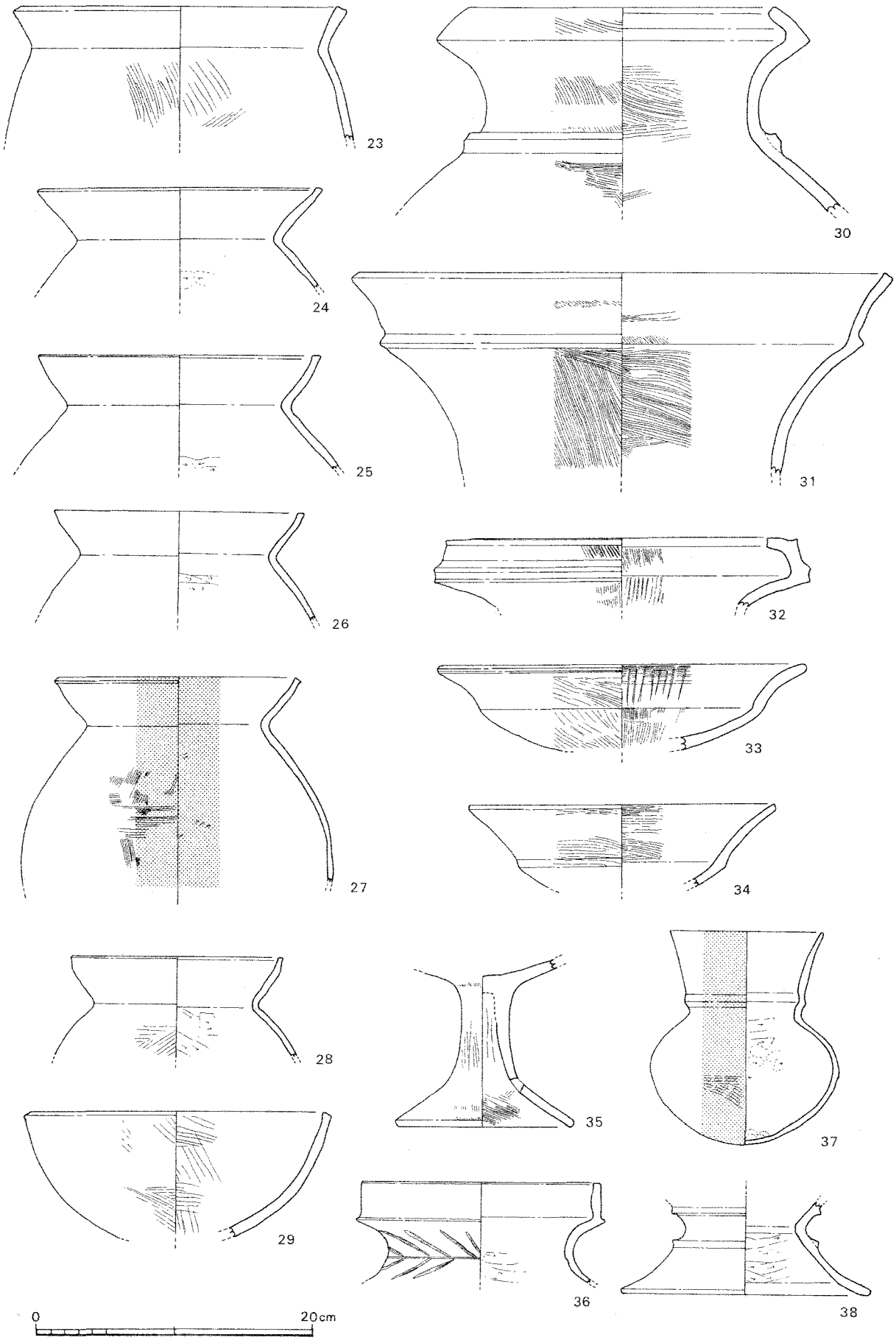


ＳＢ２

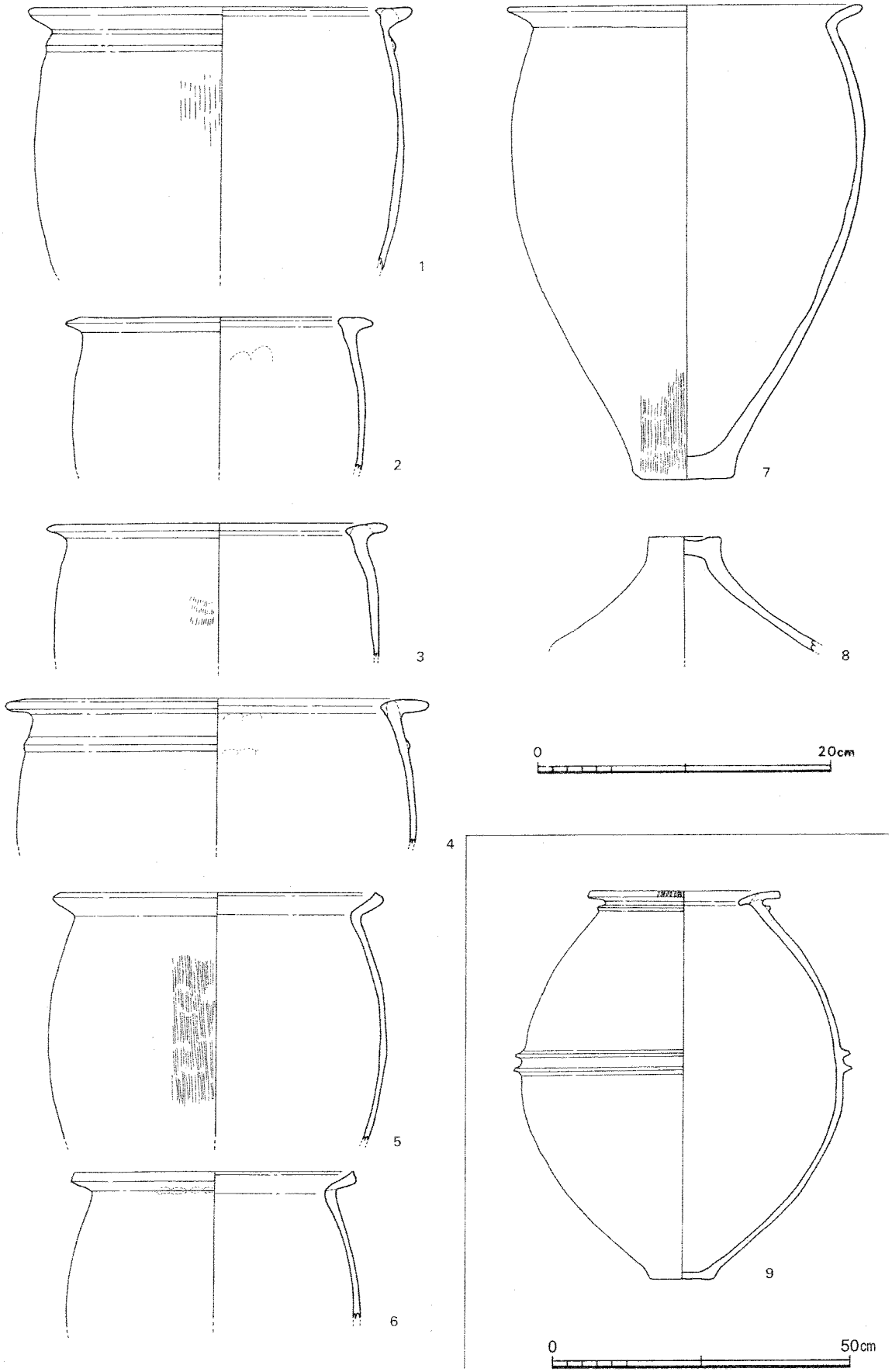
ＳＢ３



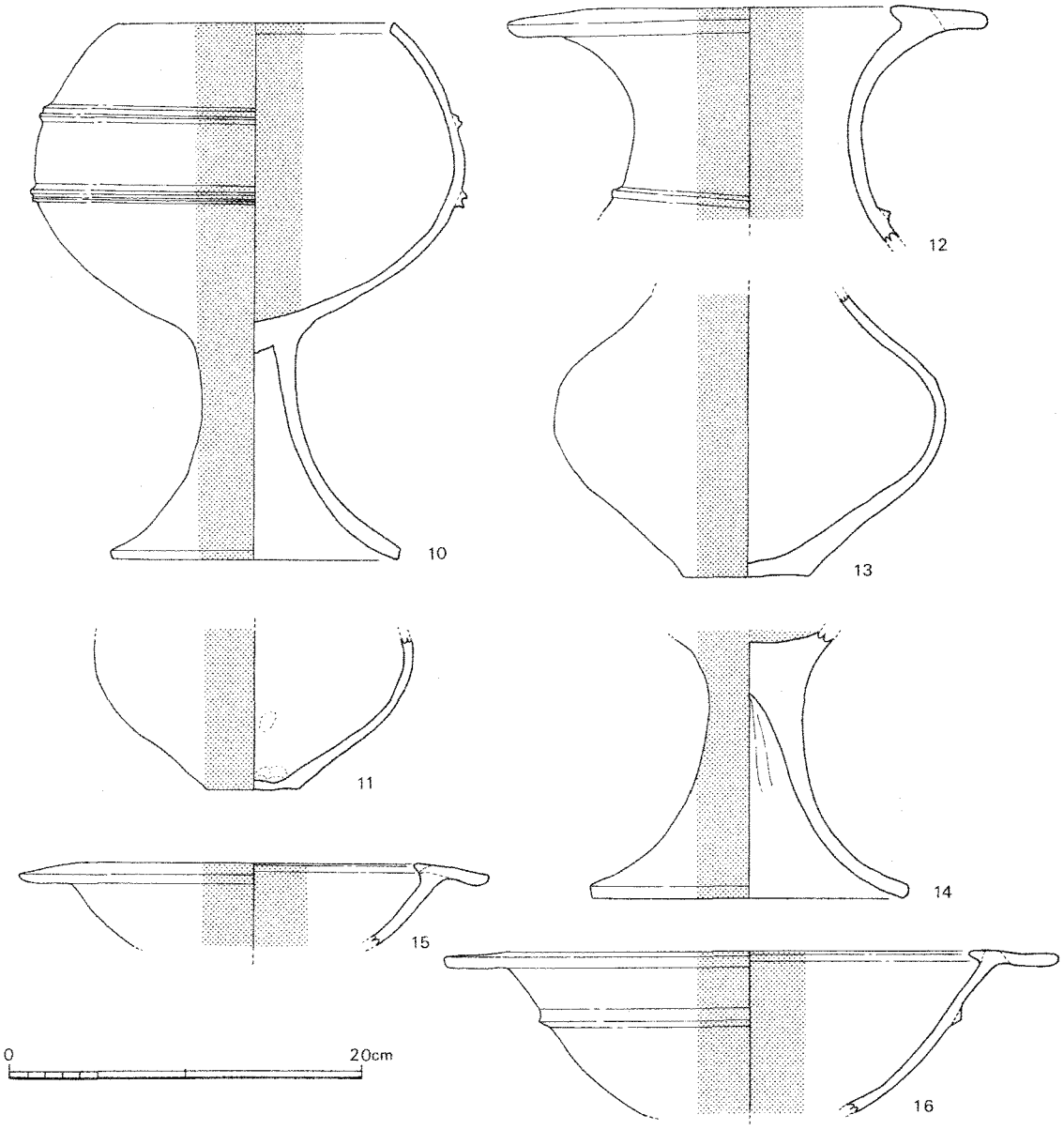
第42図　ＳＢ２出土土器(2)・ＳＢ３出土土器（１/４）



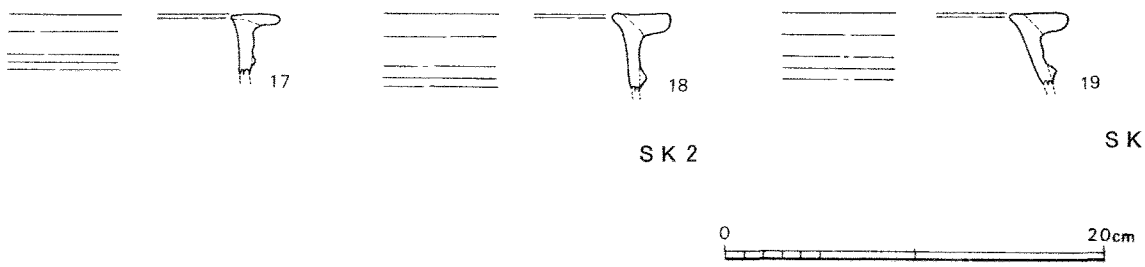
第43図　ＳＢ５覆土中出土土器（１/４）



第44図　ＳＫ１出土土器(1)（１～８は１/４、９は１/10）



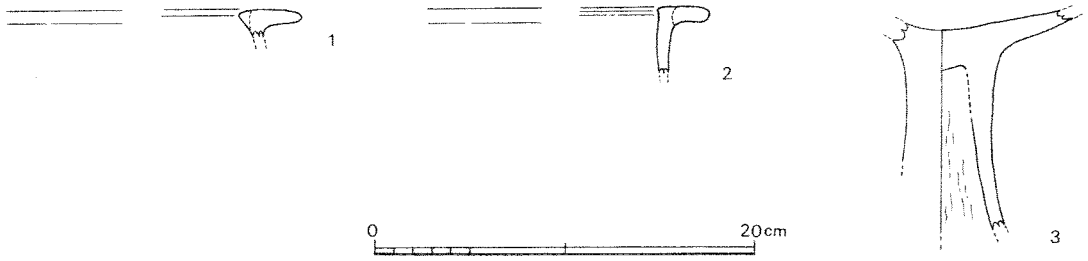
ＳＫ１



ＳＫ２

ＳＫ３

第45図　ＳＫ１出土土器(2)・ＳＫ２・ＳＫ３出土土器（1/4）



第46図　ＳＫ４出土土器（１/４）

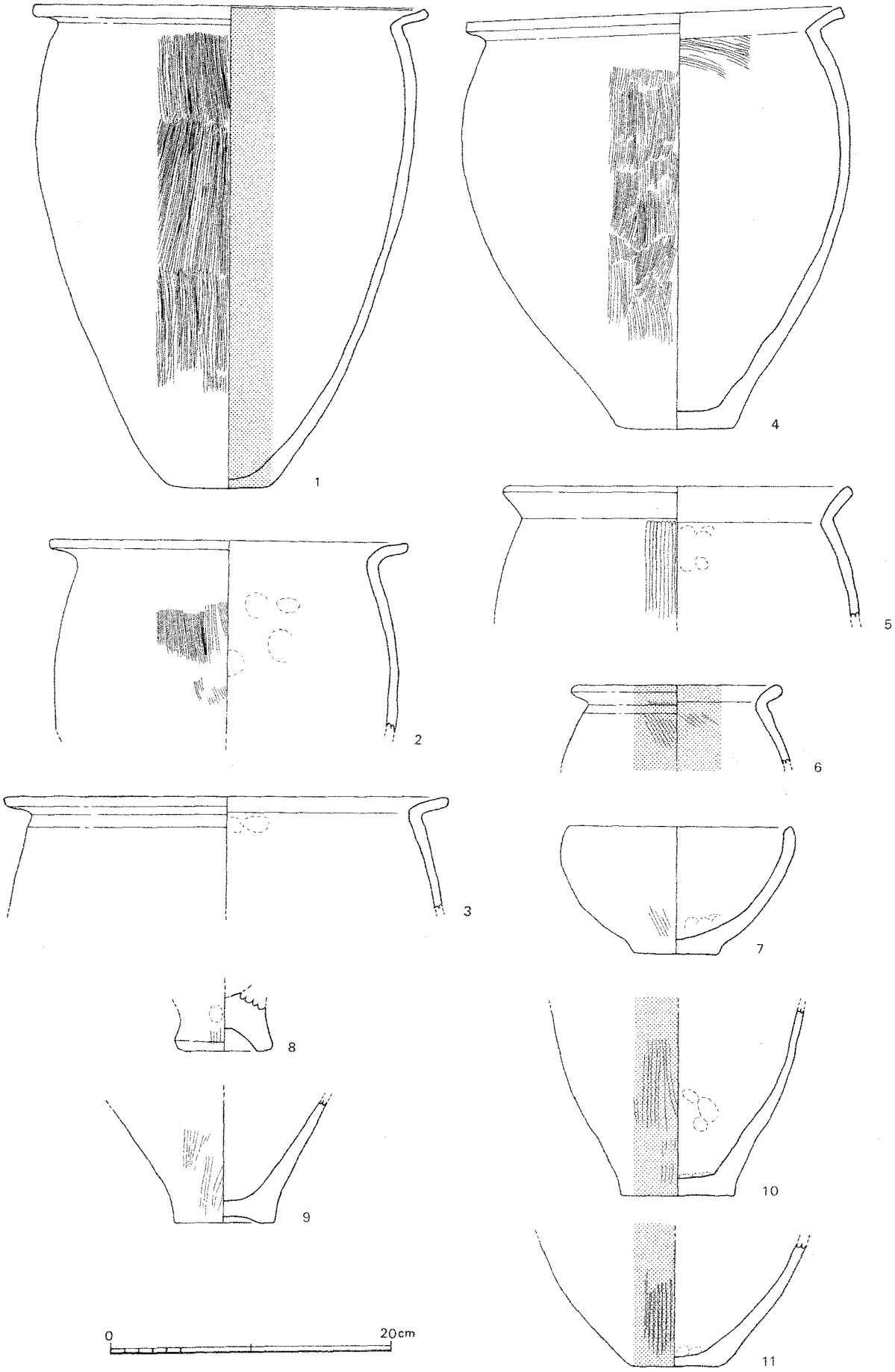
高元Ⅱ区中期包含層出土土器（第48図，第49図）

１～６はくの字形口縁の甕である。１は口縁端部をわずかにつまみ上げている。底部は平底であるが胴部との境は丸みを帯び，胴部の器形は砲弾形である。２は口縁が平坦に近いものの，胴部との屈曲部は丸みを帯び，胴部もあまり張らない。３は口縁部と胴部の屈曲部内面に稜を有する土器で，口縁部直下を強くヨコナデして三角突帯のような効果を上げている。４は屈曲部の内外面ともに明瞭な稜を持ち，口縁端部は面取りされる。胴部は張り気味で口縁部と同じ幅となる。５は口縁部の立ち上がりが直立に近く，胴部もあまり張らない。６も同様であるが，口縁端部は丸みを帯びる。口縁直下を強くヨコナデして三角突帯の効果を出している。７は鉢である。底部からいったん直立し，やや内傾しながら口縁部へといたる。10・11は甕の底部である。10は底部からいったん直立気味に立ち上がるもので，11は底部と胴部の境が丸みを帯び，外湾しながら胴部に移行する。12～20は丹塗り土器である。12～16は袋状口縁の壺である。12は頸部の付け根が締まらず，すぼまりながら立ち上がり袋状の口縁に移行する。頸部の付け根にシャープな三角突帯が１条巡る。13も同様の土器であるが，頸部はやや締まる。14は頸部がよく締まっており，口縁に向かってラッパ状に開くように立ち上がる。口縁の内傾もきつい。15・16は頸部が直立気味に立ち上がり，水平に横にのびた後斜め上方に立ち上がる。17・18は短頸壺である。17は胴部上方に最大径を持ち，緩やかに頸部がくびれて口縁部が短く外反する。18は袋状口縁の短頸壺で，袋部外面にはあまい稜線がはいる。19は高坏の坏部であろうか。丸みを持った胴部にシャープな台形突帯が１条巡る。20は高坏の脚部である。器高が低く裾にかけてラッパ状に開く。

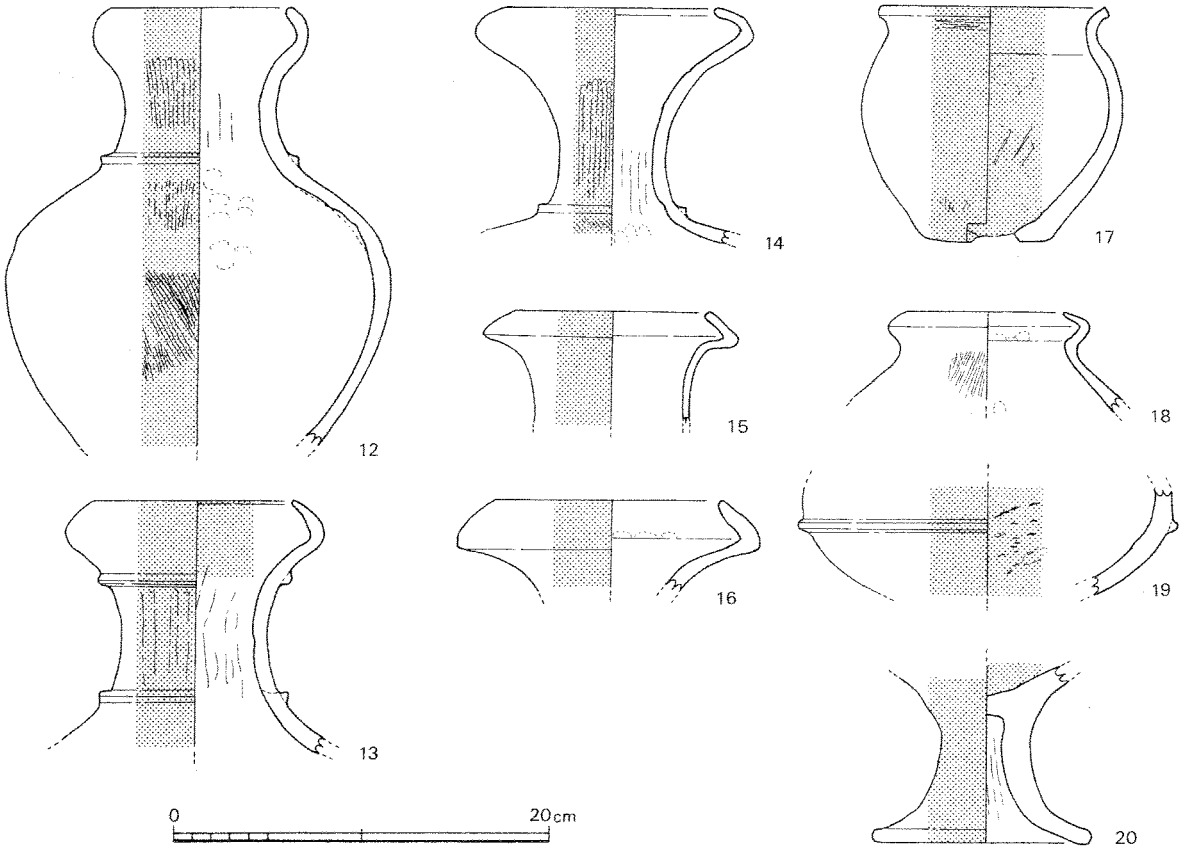
以上，これらの土器は，弥生時代中期末～後期初頭に相当する。

その他の土器（第49図）

１・２・３は楽浪系の土器である。１は鉢の口縁部で，肥厚し面取りされた口縁端部はやや内傾する。轆轤による整形の痕跡が顕著である。２は大型壺の胴部であろうか。横方向に５本の沈線が確認できる。３は鉢の底部直上部分である。４・５は瓦質土器で，表面にはそれぞれ格子目文（４），縄蓆文（５）がついている。６は楽浪系の土器であろうか。やや軟質である。

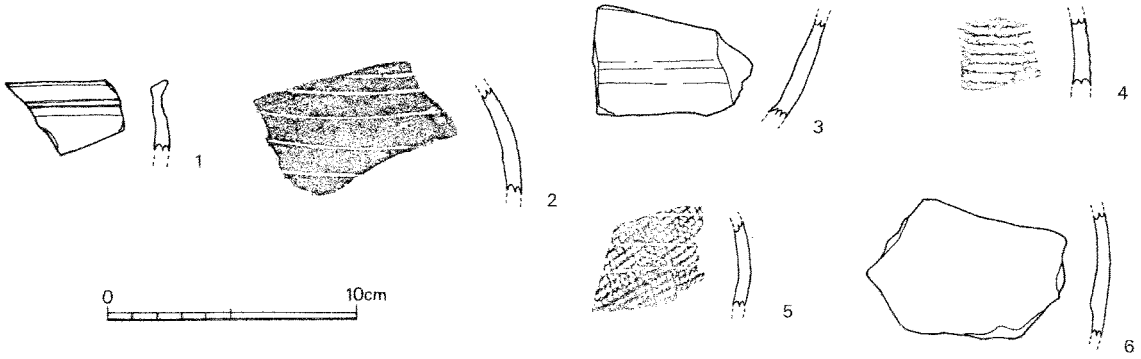


第47図　高元Ⅱ区中期包含層出土土器(1)（1／4）



中期包含層出土土器

半島系土器



第48図　高元Ⅱ区中期包含層出土土器(2)（1／4）及び半島系土器（1／3）

表4　高元地区出土土器観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法	備考
1	SB1・Ⅲ	甕	灰黄 2.5YR 6/2		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	外：なで 内：けずり，なで	
2	SB1・Ⅲ	甕	赤 10YR 5/8		石英・長石・砂粒	ほぼ完形	外：なで 内：なで	
3	SB1・Ⅲ	鉢	にぶい橙 7.5YR 7/4		石英・長石・金雲母	口縁部～底部	外：けずり，なで 内：はけめ，なで	
4	SB1・Ⅲ	鉢	橙 5YR 7/6		石英・金雲母	ほぼ完形	外：けずり，なで 内：なで	
5	SB1・Ⅲ	高坏	橙 2.5YR 6/6		石英・長石・金雲母	坏部片	外：けずり，なで 内：なで	
6	SB1・Ⅲ	高坏	灰黄褐 10YR 6/2		石英・金雲母	坏部	外：なで 内：はけめ，なで，暗文	内面，炭化物付着
7	SB1・Ⅲ	甕	橙 2.5YR 7/6		石英・長石	完形	外：けずり，なで 内：はけめ，なで	
8	SB1・Ⅲ	壺	橙 2.5YR 7/8		石英・長石・金雲母	完形	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
9	SB1・Ⅲ	器台	明褐灰 5YR 7/2		石英・長石・砂粒	完形	外：なで 内：けずり・なで	山陰系
10	SB1・Ⅲ	器台	橙 2.5YR 7/6		石英・長石・砂粒	口縁～脚部	外：なで 内：けずり・なで	畿内系
11	SB1・Ⅲ	高坏	橙 5YR 6/6		金雲母	脚部	内外面ともなで	
12	SB2・Ⅲ	甕	橙 5YR 6/8		石英・長石・砂粒	ほぼ完形	外：はけめ・けずり・なで 内：はけめ・なで	胴部に穿孔有り
13	SB2・Ⅲ	甕	褐 7.5YR 4/4		石英・長石	口縁～胴部	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで	
14	SB2・Ⅲ	甕	褐 7.5YR 4/3		石英・長石	底部～胴部	外：けずり，なで 内：はけめ，なで	
15	SB2・Ⅲ	甕	にぶい橙 7.5YR 7/3		石英・長石・砂粒	底部～胴部	外：けずり，なで 内：なで	
16	SB2・Ⅲ	甕	にぶい褐 7.5YR 5/3		石英・長石	底部片	外：はけめ，なで 内：なで	底部に穿孔有り
17	SB2・Ⅲ	甕	にぶい橙 7.5YR 7/3		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：はけめ・なで，内：けずり・なで	
18	SB2・Ⅲ	甕	橙 5YR 6/6		石英・長石	口縁～胴部	外：なで，内：けずり・なで	
19	SB2・Ⅲ	甕	橙 5YR 6/6		石英・長石・金雲母	口縁～胴部片	外：なで，内：けずり・なで	
20	SB2・Ⅲ	甕	黄橙 7.5YR 8/8		石英・長石・金雲母	口縁～胴部	外：なで，内：けずり・なで	
21	SB3・Ⅲ	高坏	にぶい橙 7.5YR 6/4		金雲母	脚部片	外：なで 内：はけめ，なで	
22	SB3・Ⅲ	甕	にぶい褐 7.5YR 5/3		石英・長石	口縁部片	外：はけめ，なで 内：なで	
23	SB5覆土	甕	灰褐 7.5YR 5/2	にぶい黄橙 10YR 5/2	石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともはけめ，なで	
24	SB5覆土	甕	橙 7.5YR 7/6	橙 5YR 7/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで 内：けずり，なで	
25	SB5覆土	甕	にぶい黄橙 10YR 7/4	橙 5YR 6/8	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで 内：けずり，なで	
26	SB5覆土	甕	にぶい黄橙 7.5YR 6/4		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで 内：けずり，なで	
27	SB5覆土	壺	橙 5YR 6/6	褐灰 10YR 4/1	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：はけめ，なで 内：けずり，なで	丹塗り有り
28	SB5覆土	甕	橙 2.5YR 6/8	橙 5YR 6/8	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：はけめ，なで 内：けずり，なで	
29	SB5覆土	鉢	橙 5YR 7/6		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	内外面ともはけめ，なで	
30	SB5覆土	壺	灰白 7.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/1	石英・雲母	口縁部～頸部	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで	
31	SB5覆土	壺	にぶい黄橙 10YR 7/3	橙 2.5YR 6/8	石英・長石	口縁部～肩部	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで	
32	SB5覆土	壺	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 6/4	石英・長石	口縁部片	外：はけめ，なで 内：はけめ	
33	SB5覆土	高坏	橙 5YR 7/6	にぶい黄橙 10YR 7/4	石英・長石・黒雲母・砂粒	坏部片	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで，暗文	
34	SB5覆土	高坏	橙 7.5YR 6/6		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで，暗文	
35	SB5覆土	高坏	橙 5YR 6/8		石英・長石・金雲母	脚部	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで	
36	SB5覆土	二重口縁壺	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	石英・長石・金雲母	口縁部～頸部	外：なで 内：けずり，なで	山陰系
37	SB5覆土	二重口縁壺	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/8	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：はけめ，なで 内：けずり，なで	丹塗り有り
38	SB5覆土	器台	橙 5YR 7/6		石英・長石・金雲母	脚部片	外：なで 内：けずり，なで	
1	SK1・Ⅱ	甕	明赤褐 2.5YR 5/8	橙 5YR 6/8	石英・長石	口縁～胴部	外：はけめ，なで 内：なで	
2	SK1	甕	橙 5YR 6/6		石英・長石・金雲母	口縁～胴部	内外面ともなで	
3	SK1・Ⅱ	甕	橙 7.5YR 6/6	浅黄橙 10YR 8/4	石英・長石	口縁～胴部	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
4	SK1・Ⅱ	甕	にぶい黄橙 10YR 7/4	浅黄橙 10YR 8/3	石英・長石・金雲母	口縁～胴部	外：なで 内：なで，指おさえ	
5	SK1	甕	にぶい黄橙 10YR 7/3		石英・長石	口縁～胴部	外：はけめ，なで 内：なで	
6	SK1・Ⅱ	甕	にぶい黄褐 10YR 5/3	黒褐色 2.5YR 3/1	石英・長石	口縁～胴部	外：はけめ，なで 内：なで	
7	SK1・Ⅱ	甕	橙 5YR 7/8		石英・長石	ほぼ完形	外：はけめ，なで 内：なで	
8	SK1・Ⅱ	壺	浅黄橙 10YR 8/3		石英・長石	頸部欠損	内外面ともなで	
9	SK1・Ⅱ	甕棺	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	石英・長石・金雲母	口縁～底部	内外面ともなで	
10	SK1・Ⅱ	高坏	橙 5YR 6/6		石英・長石	完形	内外面ともなで	丹塗り有り
11	SK1・Ⅱ	壺	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 5/6	石英・長石	底部～胴部	外：なで 内：なで，指おさえ	丹塗り有り
12	SK1	壺	橙 5YR 6/6		石英・長石	口縁～頸部	外：はけめ，なで 内：なで	丹塗り有り
13	SK1・Ⅱ	長頸壺	橙 5YR 6/6		石英・長石・砂粒	底部～胴部	内外面ともなで	丹塗り有り
14	SK1	高坏	橙 5YR 6/8		石英・長石・砂粒	脚部	内外面ともなで	丹塗り有り
15	SK1・Ⅱ	高坏	橙 5YR 6/6	明赤褐 2.5YR 5/8	石英・赤色粒子	坏部	内外面ともなで	丹塗り有り
16	SK1・Ⅱ	高坏	淡赤橙 7.5YR 7/4	橙 2.5YR 6/6	石英・長石・金雲母	坏部	内外面ともなで	丹塗り有り
17	SK2・Ⅲ	甕	明赤褐 5YR 5/6		石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
18	SK2・Ⅲ	甕	明赤褐 5YR 5/6		石英・長石・砂粒	口縁部片	内外面ともなで	
19	SK3・Ⅰ	壺	にぶい黄橙 10YR 6/3		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
1	SK4・Ⅰ	甕	にぶい黄褐 10YR 5/3		石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
2	SK4・Ⅰ	甕	にぶい黄橙 10YR 6/4		石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
3	SK4・Ⅰ	高坏	橙 7.5YR 6/6		石英・長石	脚部	内外面ともなで	丹塗り有り
1	中期包含層	甕	灰赤 2.5YR 4/2		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：はけめ 内：なで	丹塗り有り
2	中期包含層	甕	橙 5YR 7/6	にぶい褐 7.5YR 5/3	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
3	中期包含層	甕	浅黄橙 10YR 8/3	灰白 10YR 8/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
4	中期包含層	甕	にぶい橙 5YR 6/4		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで，指おさえ	
5	中期包含層	甕	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
6	中期包含層	甕	橙 2.5Y 6/6	橙 2.5Y 6/6	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部片	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで	丹塗り有り
7	中期包含層	鉢	にぶい褐 7.5YR 5/4	にぶい褐 7.5YR 5/4	石英・長石・金雲母	口縁～底部	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
8	中期包含層	甕	灰白 10YR 7/1	黒 10YR 2/1	石英・長石・金雲母	底部	外：はけめ，指おさえ 内：なで	
9	中期包含層	甕	にぶい橙 2.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	石英・長石・金雲母	底部	外：はけめ，なで 内：なで	
10	中期包含層	甕	にぶい橙 7.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR 7/2	石英・長石・雲母	底部	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	丹塗り有り
11	中期包含層	甕	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄褐 10YR 5/3	石英・長石・金雲母	底部	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
12	中期包含層	壺	橙 5YR 6/6	にぶい黄橙 10YR 7/3	石英・長石・金雲母	底部欠損	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	丹塗り有り
13	中期包含層	長頸壺	橙 2.5YR 6/8	にぶい黄橙 10YR 7/3	石英・長石・金雲母	口縁～頸部	内外面ともなで	丹塗り有り
14	中期包含層	長頸壺	赤橙 10R 6/8	橙 2.5YR 6/8	石英・長石・金雲母	口縁～頸部	内外面ともなで	丹塗り有り
15	中期包含層	壺	明赤褐 2.5Y 5/6	褐灰 7.5YR 4/1	石英・長石・金雲母	口縁～頸部	内外面ともなで	丹塗り有り
16	中期包含層	壺	橙 2.5Y 6/6	褐灰 10YR 4/1	石英・長石・雲母	口縁部片	外：なで 内：なで，指おさえ	丹塗り有り
17	中期包含層	壺	明赤褐 2.5YR 5/8	明赤褐 2.5YR 5/8	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：なで 内：ヘラナデ，なで	丹塗り有り，底部に穿孔有り
18	中期包含層	壺	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	石英・長石・金雲母	口縁部～頸部片	外：はけめ，なで 内：なで，指おさえ	
19	中期包含層	高坏	橙 2.5YR 6/8	灰黄 2.5Y 6/2	石英・長石・金雲母	胴部片	外：なで 内：なで，指おさえ	丹塗り有り
20	中期包含層	高坏	灰白 2.5Y 8/2	灰白 10YR 7/1	石英・長石	脚部	内外面ともなで	丹塗り有り
1	I区サブトレ	半島系土器	灰黄褐 10YR 5/2		雲母	口縁部片	内外面とも回転なで	楽浪系
2	SK4・Ⅰ	半島系土器	灰黄 2.5Y 6/3		石英	胴部片	外：なで・沈線，内：なで	楽浪系
3	SB2・Ⅰ	半島系土器	黄灰 2.5Y 4/1		雲母	胴部片(底部直上)	内外面とも回転なで	楽浪系
4	SB3・Ⅰ	半島系土器	黄灰 2.5Y 4/1		石英・金雲母	胴部片	外：縄叩き，内：なで	瓦質土器
5	SB5覆土	半島系土器	黄褐 2.5Y 5/3		石英・雲母	胴部片	外：格子目叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
6	SK1・Ⅲ	半島系土器	灰色 5Y 5/1		石英	胴部片	内外面ともなで	楽浪系か

②**石器**（第49図～第51図）

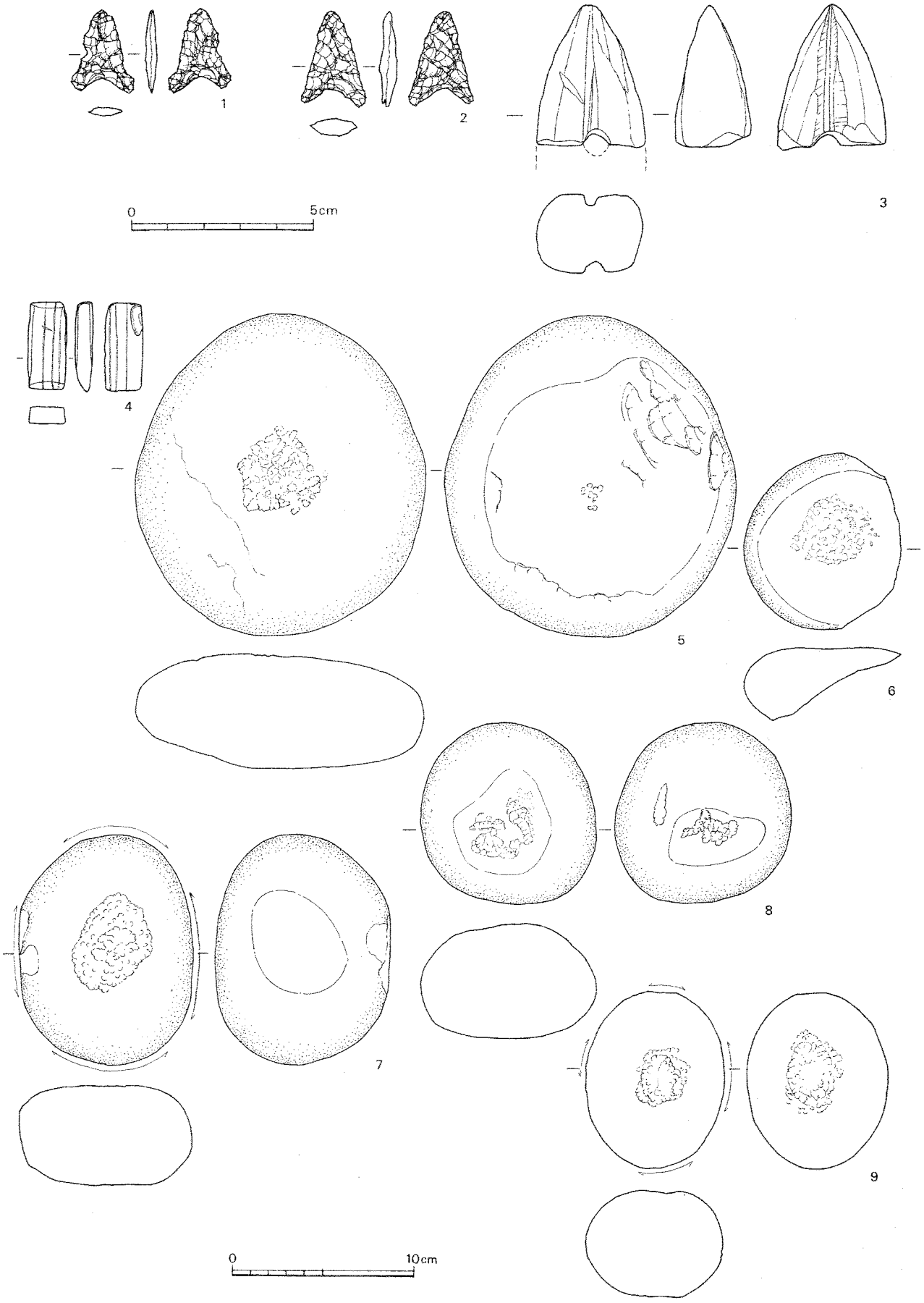
1・2は石鏃である。いずれも黒曜石製の凹基鏃で,2の両側縁が直線的であるのに対して1は側縁がやや内湾する。入念な調整で断面レンズ状に整えている。3は石錘である。滑石製で体部に穿孔があり，これを結ぶように長軸に沿って溝が巡る。4は扁平片刃石斧である。節理の縞模様が表裏面で観察でき，節理と直行するように刃部を作り出している。5～9は敲石・磨石である。いずれも体部中央に敲打痕が集中して認められる。また5～8には磨り面も認められる。7・9については，側面にも敲打痕が集中する。10・11も敲石であるが，SK2周辺から出土したもので別に扱った。10は据わりの良い扁平な礫の両面に，大きめの敲打痕が観察できる。表面は深くしっかりとした敲打痕がまばらに認められるが，裏面の敲打痕は浅く面的に広がる。11は表面中央に細かい敲打痕が集中して平坦面を形成している。裏面は角のあるシャープな敲打痕が散在する。正面左上方の側面には赤化した被熱痕が認められるが，この部分はやや沸いた状態となっており，かなりの熱を受けたことが推測される。12～15は砥石である。いずれも研磨面が認められるが，13～15には，研磨面を切るようにシャープな線状の研ぎ跡が残る。石材はいずれもきめの細かい砂岩製である。16・17・19は支脚形石製品である。16・19多孔質玄武岩製，17は凝灰岩製である。19には明確なつまみの痕跡を残すものの，16・17はつまみを持たない。全体として表面の加工の痕跡は荒く，横断面の形状も方形を意識しつつもやや不規則な形状となっている。18は石皿である。扁平な礫のほぼ全面にわたって摩滅痕が面的に広がり，色調も使用部分のみ褐色に変色している。裏面にもやや段を有する摩滅面が広がる。

高元地区の石器組成（表5）

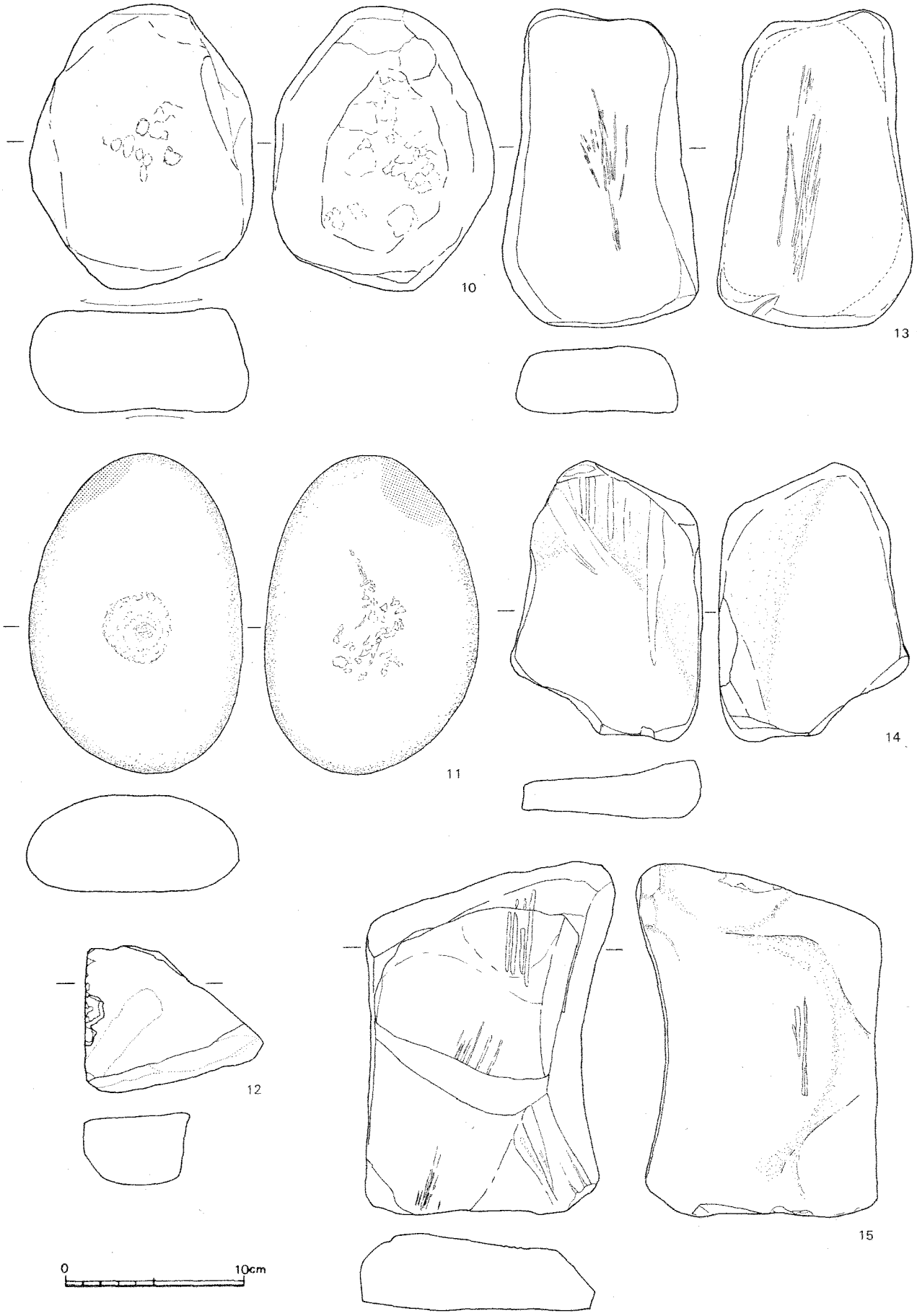
高元地区の遺構は，弥生時代中期後葉と古墳時代初頭に分かれる。これらの遺構から出土した石器の特徴は，まず，いずれの時期の遺構も植物質加工具が突出して多い点が指摘できる。古墳時代初頭の住居址からも，磨石類と石皿がセットで出土していることは，この段階でも堅果類の利用が行われていたことを示しているであろう。また，SB5の覆土からは支脚形石製品がまとまって出土しているが，八反地区のSD2出土分と比較して，石材がいずれも多孔質玄武岩製である点や，つまみを持たないものが多く，体部の整形加工も粗雑となる点を特徴としてあげることができる。時期的にはSB5覆土出土資料がやや新しく，時期的な傾向として把握できるかもしれない。あるいは低地部と台地上での使用方法の違いを反映している可能性も考えられる。

表5　高元地区遺構別石器組成表

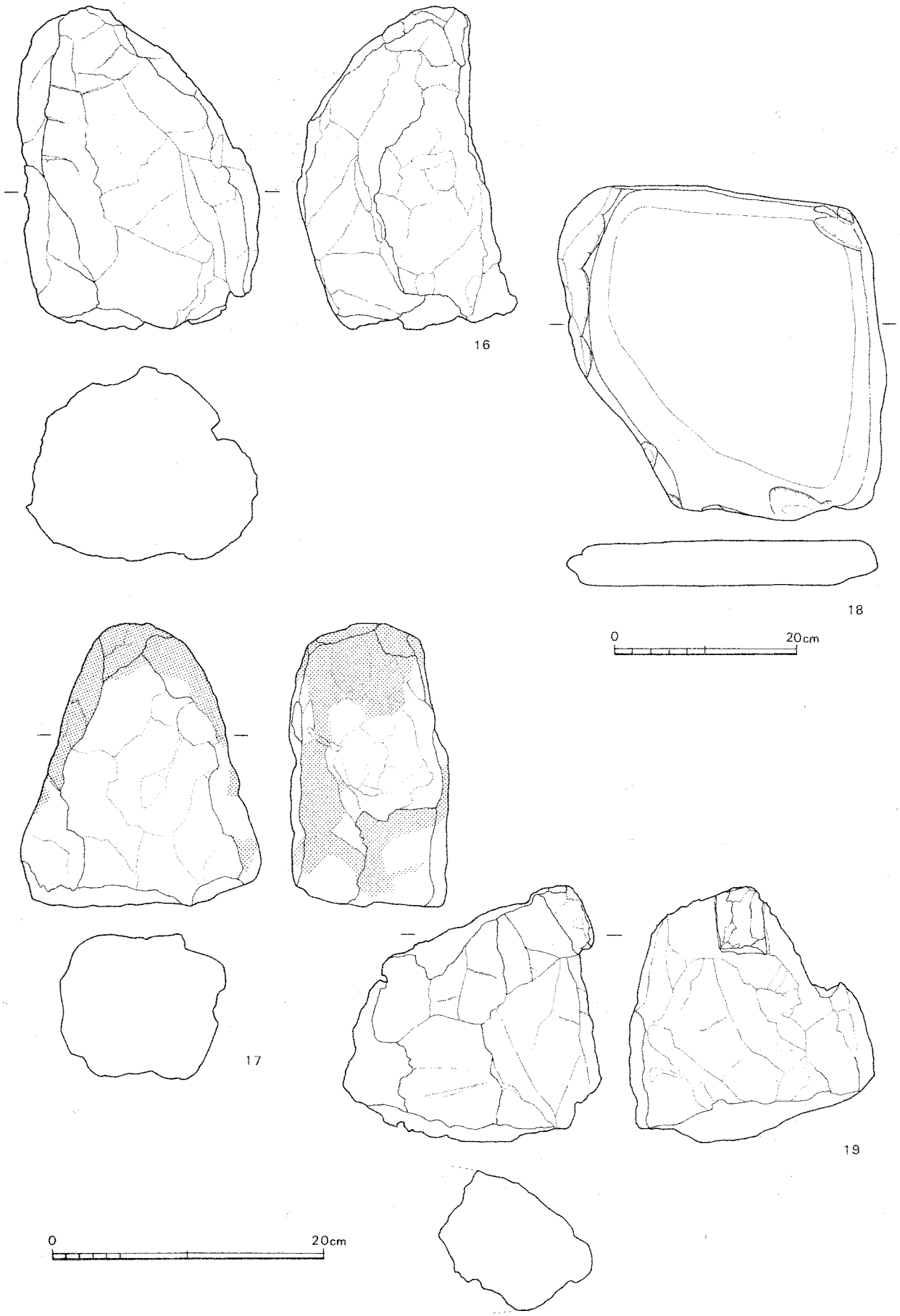
遺構名	時期	狩猟具	農具		調理具			工具					武器	その他
			収穫具		植物加工具		煮沸具							
		石鏃	石庖丁	石鎌	磨石・敲石・凹石	石皿・台石	支脚形石製品	石匙	石斧	礫器	石杵	砥石	磨製石剣	
SK1	弥生中期				6	2						1		
土器だまり	弥生中期				7	1						3		
SB1床面	古墳初頭				3	2						2		鉄鏃2，ガラス小玉10，ガラス管玉1
SD2床面	古墳初頭					1	1							鉇1
SB3床面	古墳初頭				1									
SB5覆土	古墳初頭				3		3					1		



第49図　高元地区出土石器(1)（1～4は2/3、5～9は1/3）



第50図　高元地区出土石器(2)（1／3）



第51図　高元地区出土石器(3)（16、17、19は１／４、18は１／６）※アミかけは被熱痕

表6　高元地区出土石器その他観察表

	図面番号	遺物名	遺構名	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
石器	1	石鏃	Ⅱ区4層	高元 D18・Ⅳ	黒曜石	2.3	1.7	0.3	0.8	
	2	石鏃	Ⅱ区4層	高元 D18・Ⅳ	黒曜石	2.6	1.8	0.5	1.4	
	3	石錘	Ⅰ区1層	高元 B10 Ⅰ	砂岩	3.8	2.9	2.2	21.8	
	4	扁平片刃石斧	Ⅲ区2層	高元Ⅲ・Ⅱ	頁岩	4.8	2.1	0.9	17.4	
	5	敲石	SB 1 床直	15Aj ハ・SB 1 Ⅲ	安山岩	17.5	15.9	6.1	2460	
	6	敲石	SB 3 床直	15Ai ニ・SB 3 Ⅲ	安山岩	9.6	8.5	3.9	307.8	
	7	敲石	SB 1	15Aj ハ・SB 1	安山岩	12.4	9.5	5.5	1097	
	8	敲石	SB 5 覆土	15Ay ニ・V	安山岩	9.9	9.6	6.2	900.2	
	9	敲石	中期包含層	15Ee ロ・V	安山岩	9.5	7.6	6.1	6625	
	10	敲石	SK 2 Ⅰ層	15Ag ハ・SK 2 Ⅰ	砂岩	15.5	12.2	5.2	1820	
	11	敲石	SK 3 Ⅰ層	15Ag ハ・SK 3 Ⅰ	安山岩	17.4	11.8	5.3	1740	
	12	砥石	中期包含層	15Ee ロ・V	砂岩	7.9	9.80	3.9	367.3	
	13	砥石	SB 1 床直	15Aj ハ・SB 1 Ⅲ	頁岩	17.3	10.8	3.6	1100	
	14	砥石	中期包含層	15Ee ロ・V	砂岩	15.3	10.5	3.2	6377	
	15	砥石	SB 5 覆土	15Ay ニ・SB 5	細粒砂岩	19.2	13.5	4.2	1360	
	16	支脚形石製品	SB 5 覆土	15Ay ニ・V	多孔質玄武岩	23.4	17.8	14.0	3940	
	17	支脚形石製品	中期包含層	15Ee ロ・V	凝灰岩	20.6	17.6	11.5	3740	
	18	石皿	SB 1 床直	15Aj ハ・SB 1 Ⅲ	安山岩	36.7	36.5	5.1	12900	
	19	支脚形石製品	SB 5 覆土	15Ay ニ・V	多孔質玄武岩	18.5	18.9	10.3	2660	
土製品	1	円盤状土製品	SB 1 床直	15Aj ハ・SB1・Ⅲ	土器片	4.7	4.4	1.1	26.5	
	2	円盤状土製品	Ⅰ区1層	15An ロ・C 1	土器片	5.6	5.4	0.7	23.2	
金属器	3	棒状銅製品	Ⅱ区4層	高元ⅡA18・Ⅳ	青銅	3.4	0.8	0.5	4.3	
	4	銅鏃	Ⅱ区1層	高元ⅡD19・Ⅰ	青銅	4.6	1.1	0.4	5.0	
	5	銅鏃	Ⅱ区4層	高元ⅡD18・Ⅳ	青銅	4.6	1.3	0.5	4.1	
	6	銅鏃	Ⅱ区4層	高元ⅡD18・Ⅳ	青銅	4.4	1.2	0.45	4.3	
	7	銅鏃	SB 5 覆土	15Ay ニ・V	青銅	3.4	0.9	0.3	2.8	
	8	銅鏃	Ⅱ区2層	高元ⅡD17・Ⅱ	青銅	1.3	0.5	0.3	0.9	
	9	銅鏃	Ⅰ区1層	15Ai ニ・Ⅰ	青銅	1.1	1.0	0.35	1.0	
	10	鉄鏃	Ⅰ区1層	15Aj ハ・Ⅰ	鉄	9.7	2.6	1.0	31.6	
	11	鉄鏃	SB 1 Ⅰ層	15Ao イ・SB 1 Ⅰ	鉄	7.8	3.3	1.1	22.6	
	12	鉄鏃	Ⅰ区1層	高元ⅠCD ベルト	鉄	5.7	1.8	0.8	10.7	
	13	鉄鏃	Ⅱ区1層	15Ej ニ・Ⅰ	鉄	4.5	0.9	0.6	3.3	
	14	鉄鏃	Ⅰ区1層	高元 B10・Ⅰ	鉄	6.0	1.9	0.5	8.8	
	15	扁平棒状鉄製品	SB 2 Ⅰ層	15Ej ハ・SB2・Ⅰ・Ⅰ	鉄	2.7	2.2	0.6	6.5	鉋か
	16	扁平棒状鉄製品	Ⅱ区5層	高元 D18・V	鉄	3.1	1.1	0.4	3.1	鉋か
	17	鉄鎌	Ⅰ区2層	高元 D10・Ⅱ	鉄	8.4	3.8	1.5	55.1	
	18	鉄鎌	Ⅰ区2層	高元 D11・Ⅱ	鉄	8.9	3.9	1.2	49.3	
	19	棒状鉄製品	Ⅱ区4層	高元ⅡD18・Ⅳ	鉄	9.7	2.3	0.9	40.8	
	20	棒状鉄製品	中期包含層	15Ee ロ・V・Ⅰ-1	鉄	8.3	1.2	0.8	23.9	
	21	鉄滓	Ⅰ区1層	高元ⅠCD ベルト	鉄	3.8	3.9	1.3	26.8	
ガラス玉	22	管玉	Ⅰ区表採	高元Ⅰ・H	碧玉	1.1	0.4	0.3	0.1	
	23	管玉	Ⅰ区表採	高元Ⅰ・C10・H	碧玉	1.5	0.25	0.25	0.1	
	24	管玉	SB 1 床直	15Aj ハ・SB 1・Ⅲ	碧玉	0.5	0.3	0.3	0.1未満	
	25	管玉	Ⅰ区1層	高元ⅠD11	ガラス	1.2	0.5	0.4	0.5	
	26	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Aj ハ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.3	0.4	0.2	0.1未満	
	27	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Ao イ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.45	0.4	0.3	0.1未満	
	28	ガラス小玉	SB 1 床直	15Aj ハ・SB 1・Ⅲ	ガラス	0.25	0.25	0.2	0.1未満	
	29	ガラス小玉	SB 1 Ⅱ層	15Ao イ・SB 1・Ⅱ	ガラス	0.5	0.5	0.3	0.1	
	30	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Ao イ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.35	0.35	0.2	0.1未満	
	31	ガラス小玉	SB 1 Ⅱ層	15Ao イ・SB 1・Ⅱ	ガラス	0.4	0.4	0.25	0.1未満	
	32	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Aj ハ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.25	0.25	0.15	0.1未満	
	33	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Aj ハ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.35	0.3	0.25	0.1未満	
	34	ガラス小玉	Ⅱ区4層	高元ⅡD18・Ⅳ	ガラス	0.45	0.45	0.3	0.1未満	
	35	ガラス小玉	SB 1 Ⅰ層	15Aj ハ・SB 1・Ⅰ	ガラス	0.3	0.35	0.25	0.1未満	
	36	ガラス小玉	SB 1 覆土	15Ao イ・SB 1	ガラス	0.2	0.15	0.1	0.1未満	
	37	ガラス小玉	SB 4 Ⅲ層	15Ai ニ・SB 4・Ⅲ	ガラス	0.45	0.5	0.3	0.1未満	
	38	ガラス小玉	Ⅰ区1層	15Ai ニ・A・Ⅰ	ガラス	0.3	0.3	0.2	0.1未満	
	39	ガラス小玉	Ⅰ区1層	高元 B10	ガラス	0.45	0.5	0.25	0.1未満	
	40	ガラス小玉	Ⅰ区1層	高元 C11・Ⅰ	ガラス	0.65	0.3	0.6	0.1	
骨製品	41	骨	Ⅱ区1層	高元ⅡD19・Ⅰ	鹿角	6.4	1.2	0.5	5.9	

③金属器（第52図）

3～9は青銅製品，10～21は鉄製品である。3は棒状の青銅製品で，上端部に両側からの穿孔が認められる。横断面は扁平な楕円形である。下端部両側縁に面取り様の平坦面がある。銅鐸の舌であろうか。4～9は銅鏃である。平面形が柳葉形で基部と体部の境が不明瞭なもの（4・6・7・8）と，角張った関部を有し体部と基部が明瞭に区別できるもの（5）がある。横断面は欠損資料をのぞいて体部は扁菱形，基部は楕円形がほとんどであるが，7は体部・基部ともに菱形となる。10～14は鉄鏃である。10は体部が長六角形で基部には一部木質を残す。横断面は体部・基部ともに矩形となるが，基部に比べて体部の方が扁平である。11は体部が菱形で，11と同様，体部の方が基部よりも厚みがない。12は柳葉形の鉄鏃で，基部の横断面は方形となるのに対して体部は扁菱形に近く，正面の長軸には鎬が認められる。13も柳葉形の鉄鏃で，基部は断面円形となるのに対して体部はレンズ状となり，相対的にやや扁平である。14は凹基式の鉄鏃で，横断面レンズ状となる。15・16は扁平な棒状鉄製品で，断面がやや湾曲していることから，鉋（やりがんな）の可能性もある。17・18は直刃の鉄鎌である。17は基部のみ残存し，切っ先を左に置いて手前側に端部を折り曲げている。銹化がかなり進んでいるが，断面は片刃になるものと考えられる。18は先端部付近のみ残存する。19・20は厚みのある棒状の鉄製品で，鉄素材であろうか。いずれも横断面が矩形となる。21は鉄滓と考えられる。扁平で中央部がややくぼんでいる。

④石製品（第52図）

22～24は碧玉製の管玉である。いずれも深緑色である。

⑤ガラス製品（第52図）

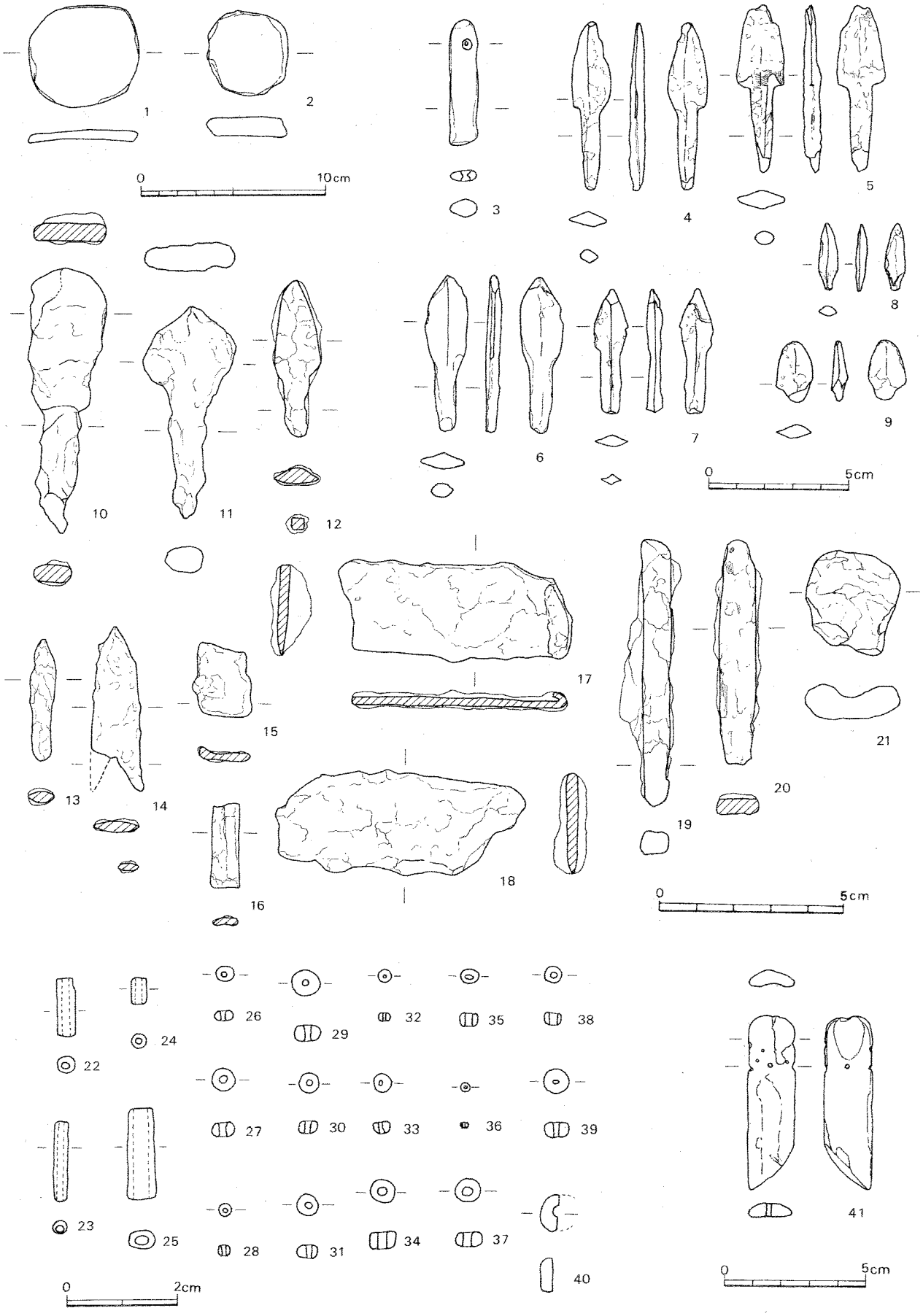
25は管玉である。黄白色を呈し風化が著しい。26～40は小玉である。円形もしくは楕円形で扁平なものがほとんどであるが，40は厚みのあるタイプである。色調の違いから，藍色（27・34・40），コバルトブルー（29・31・37～39），エメラルドグリーン（26・28・30・32・33・35・36）に分けられる。

⑥骨角製品（第52図）

41は，弓の握り部分に装着する弭（ゆづか）である。鹿角製で断面は扁平なかまぼこ形である。上端付近に穿孔があり，その周囲に刺突痕が4カ所認められる。この刺突痕は未貫通である。また，穿孔部付近の両側縁には，左右2カ所ずつ刻みがあり，上端にも1カ所の刻みがある。裏面は非常に平滑に整えているが，上端部は平面ハート形に浅く掘り込んでくぼませている。

⑦土製品（第52図）

1・2は土製円盤である。弥生時代後期とみられる土器片の周囲を荒く打ち欠いて，円形に整えている。



第52図　その他の出土遺物（土製品・金属製品・ガラス製品・骨角製品）
（1～2は1/3，3～9は1/2，10～21は2/3，22～40は1/1，41は1/2）

(5) 小　結

高元地区の調査では，10軒以上の住居址のほか，焼土坑など重要遺構が検出された。ここでは，これらの遺構を中心に，既往の調査成果を参考にしながら今回の調査成果の位置づけを行いたい。

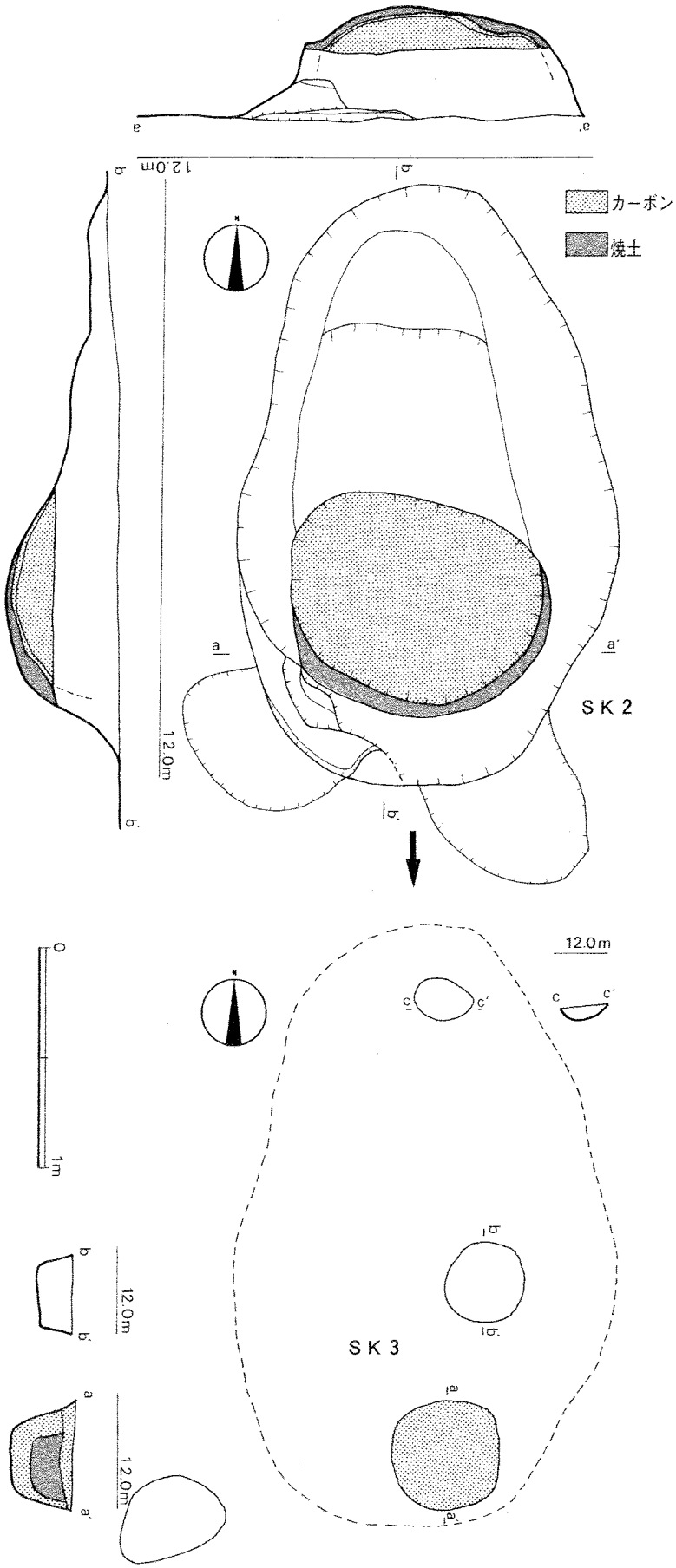
①焼土坑について

本年度の調査では，住居址や土坑の一部に，強い被熱痕をもつ箇所が散発的に認められた。特に，高元Ｉ区で検出されたＳＫ２・ＳＫ３は，明瞭な掘り込みを持ち，壁面から床面にかけて焼土やカーボンが分布する点で注目される。ＳＫ２・ＳＫ３は互いに切り合っており，ＳＫ２→ＳＫ３の順に構築されたことが明らかであるが，出土土器にはほとんど差がなく，弥生時代中期前葉～中葉（須玖Ｉ式古段階～新段階）である。半裁による調査のみで全容は明らかでないが，ここでは遺構の構造復元を試みながら，これらの遺構に関する現段階での所見を述べたい。

Ａ．ＳＫ２について（第53図）

最初に構築されたＳＫ２は，長軸約2.5m，短軸約1.5mの長楕円形で，北半部は深さ約15cm程度であるが，土坑南壁から約１mの範囲は，楕円形にさらに深く掘り込まれ，最深部では約65cmに達する。この深掘り部分の壁面から床面にかけて，焼土およびカーボンの互層が確認された。半裁して調査した時点では，南壁沿いには固結した焼土のみが分布していたが，土層の観察から，本来はこの焼土の上にもカーボンが乗っていたことが想定される。また，固結した焼土の上端は，幅約５cmにわたって平坦面が形成されている。この平坦面は東側の東西サブトレンチにおいても確認されており，少なくとも土坑を半周していたことは間違いない。この平坦面の上には，おそらく円筒状もしくは半円筒状の何らかの構築物が乗っていた可能性が考えられるであろう（第53図）。

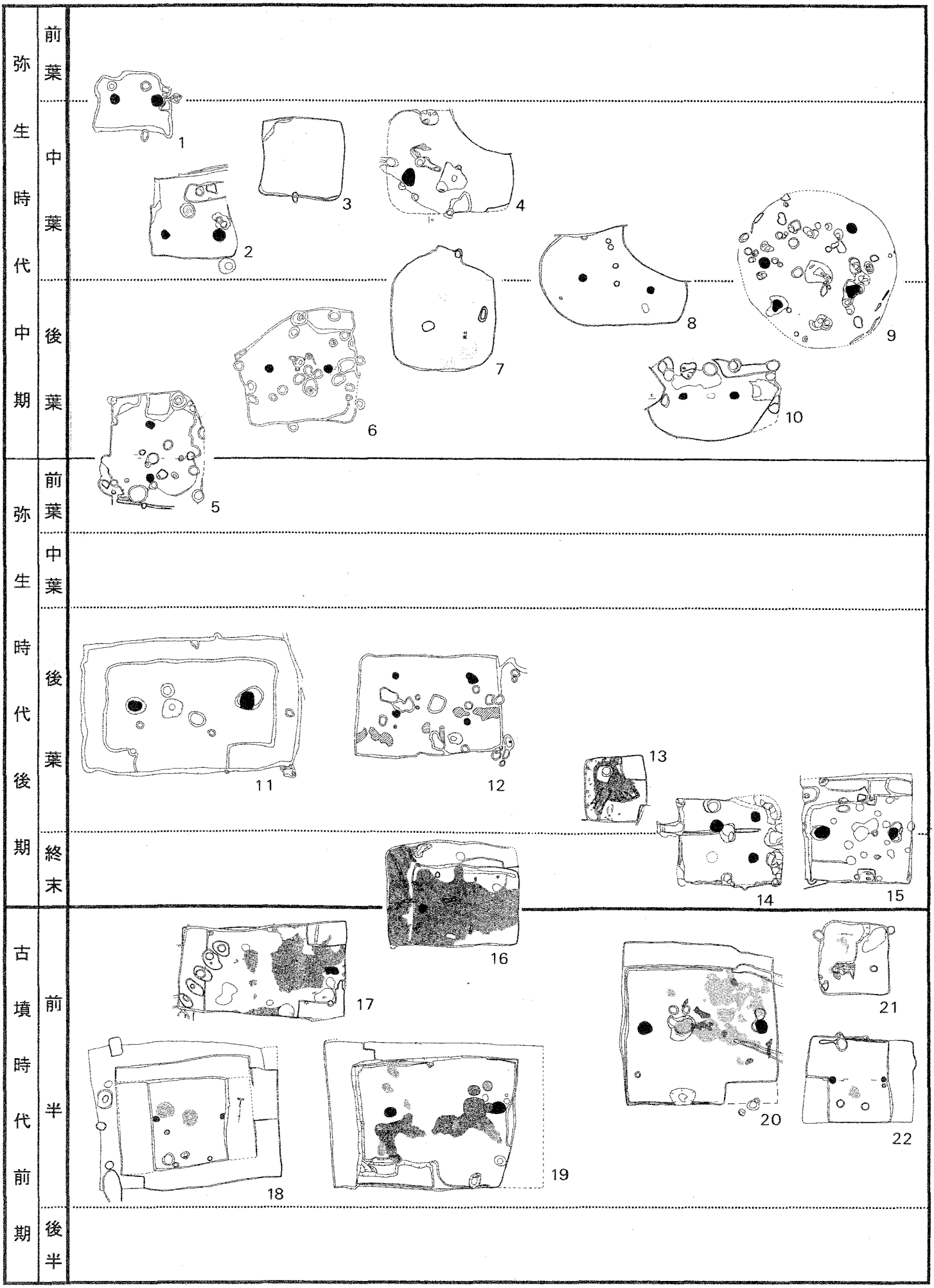
この遺構の性格については，まず考えられるのが金属器生産との関連性である。しかし，先述したとおり，この遺構からは鉄滓や鍛造剥片，銅滓といった生産時の副産物や，砥石などの生産用工具は検出されておらず，また，従来研究が行われてきた弥生時代の鍛冶遺構とは，規模や構造の面で大きな違いがあるため（村上1998，松井2000），位置づけは困難であるといわざるを得ない。一方で，強い被熱痕を持つ土坑や，土坑周辺に焼土面を形成したりカーボンが厚く堆積するような遺構については，佐賀県鳥栖市の大久保遺跡，大久保北遺跡（徳永ほか2001）や神崎町吉野ヶ里遺跡など，北部九州を中心に近年散見されるようになってきた（註１）。これらの遺構は，集落の中心から離れた丘陵の斜面などに群集して形成され，時期的にも弥生時代中期～後期初頭であることから，規模や被熱の具合など細部では異なるものの，今回検出した遺構との共通点は多い。これらの遺構については，「火を焚いた跡であることは疑いないが，鉄滓等の出土もないため具体的な用途に関しては不詳である」（徳永2001ｐ.92）として，金属器関係の生産遺構である可能性を有しながらも，積極的な評価はなされてこなかった。しかし，鉄器生産に関しては，比較的低温での簡単な鍛冶操業であった場合や，不純物の少ない精錬された素材を用いた場合，鉄滓はほとんど生じない可能性が指摘されており（村上2000），青銅器生産についても同様に，あらかじめ合金されたインゴットを用いて鋳造すれば，銅滓が生成しない可能性も考えられるであろう。したがって，鉄滓等出土しないこれらの遺構について



第53図　ＳＫ２・ＳＫ３構造推定図（1/30）

も，金属器関連の生産遺構である可能性は残されているものと考える。一方で，金属器関連の生産遺構と考えた場合，何をどのように生産していたかが問題となる。この点については，今回検出した遺構については現時点では具体的に言及する材料を有しないが，ＳＫ２の固結した焼土をサンプリングして焼成温度を測定する分析を試みており，この分析結果を待って再度検討したい。

いずれにしろ，原の辻遺跡においては，弥生時代後期の旧河道から，鉄素材となる板状鉄斧や鍛冶具である金槌・鉄鑿が出土し（杉原編2000），また，平成９年度調査で検出した１号竪穴住居址（古墳時代前期）からは，棒状の鉄素材や鉄滓と考えられる資料も出土している（宮崎編1999）。これらのことから，遺跡内において鉄器生産を行っていたことは確実である。また，弥生時代の遺跡としては突出した出土量を誇る銅鏃をはじめ，青銅器類も多く出土しており，鋳型の出土例は未だないものの，遺跡内における青銅器生産の可能性も指摘できよう。今回は調査面積も少なく，点的な確認にとどまったが，これらの焼土坑と関連する遺構群はより広範囲に広がることが想像される。高元Ⅱ区において壁面に沿って焼土が張り付



第54図　住居址の変遷（1/200）※黒塗りは主柱穴

いた土坑（ＳＫ５）の一部が確認されているが，これもＳＫ２と関連するものであろう。このように，高元地区一帯で弥生時代中期において何らかの工房群が存在した可能性が高く，今後さらに詳細な調査を行いながら全容を明らかにしたい。

なお，ＳＫ２の埋没後に形成されるＳＫ３については，カーボンと焼土が互層で堆積し，地下構造を持つ鍛冶炉である可能性も考えられた（第53図）。しかし，カーボンの密度が低い点や，焼土が土坑内で焼成して形成されたものでなく，別の地点で焼成した焼土を二次的に充填している点は，一般的な地下構造を持つ鍛冶炉とは異なるようである（註２）。したがって，ＳＫ３については，何らかの生産遺構である可能性を残しつつもその性格については保留し，ＳＫ２と同様，周辺の調査を待って再度検討することにしたい。

②竪穴住居址について

原の辻遺跡では，平成７年度の範囲確認調査以降，遺跡の中枢である台地上の調査が積極的に行われ，これまでに確認されただけで117棟以上の住居跡が確認されている（註３）。このうち，竪穴住居は102棟で，時期も弥生時代中期から古墳時代前期まで及ぶ。これらの遺構については，調査ごとに報告されてはいるものの，遺跡全体の動向としてまとめられることはほとんどなかった（註４）。ここでは，これまでの調査成果をひもときながら，台地上を中心とした竪穴住居群の変遷についてまとめる（註５）。

Ａ．竪穴住居址の形態

原の辻遺跡における住居址の形態的特徴と変遷を第54図にまとめた（第54図）（註６）。原の辻遺跡においては，弥生時代中期中葉～後葉と弥生時代終末～古墳時代にかけて集中して竪穴住居が築かれる。平面形の特徴としては，弥生時代中期には円形・方形・隅丸方形の３者が存在し，方形・隅丸方形については２本主柱が一般的である。ベッド状遺構は基本的に中期には存在せず（註７），明確に現れるのは弥生時代後期以降である（第54図）。後期後葉以降は円形・隅丸方形の住居址はなくなり，方形もしくは長方形となる。中期と比べて明らかに大型の住居が現れ，ベッド状遺構もかなりの頻度で敷設されるものの，敷設される位置にはバラエティーがある。住居の構造については，４本主柱が後期後葉～古墳時代初頭にかけて出現するものの，数は非常に少なく，２本主柱が主体である。また，４本主柱の住居址には，基本的にベッド状遺構が伴わない点も指摘できる。方形の住居址は，弥生時代終末から古墳時代初頭に現れるが，古墳時代前期前半にいたっても数的には少なく，長方形でベッド状遺構を持つタイプが一貫して主流である。

Ｂ．住居址の群の広がり

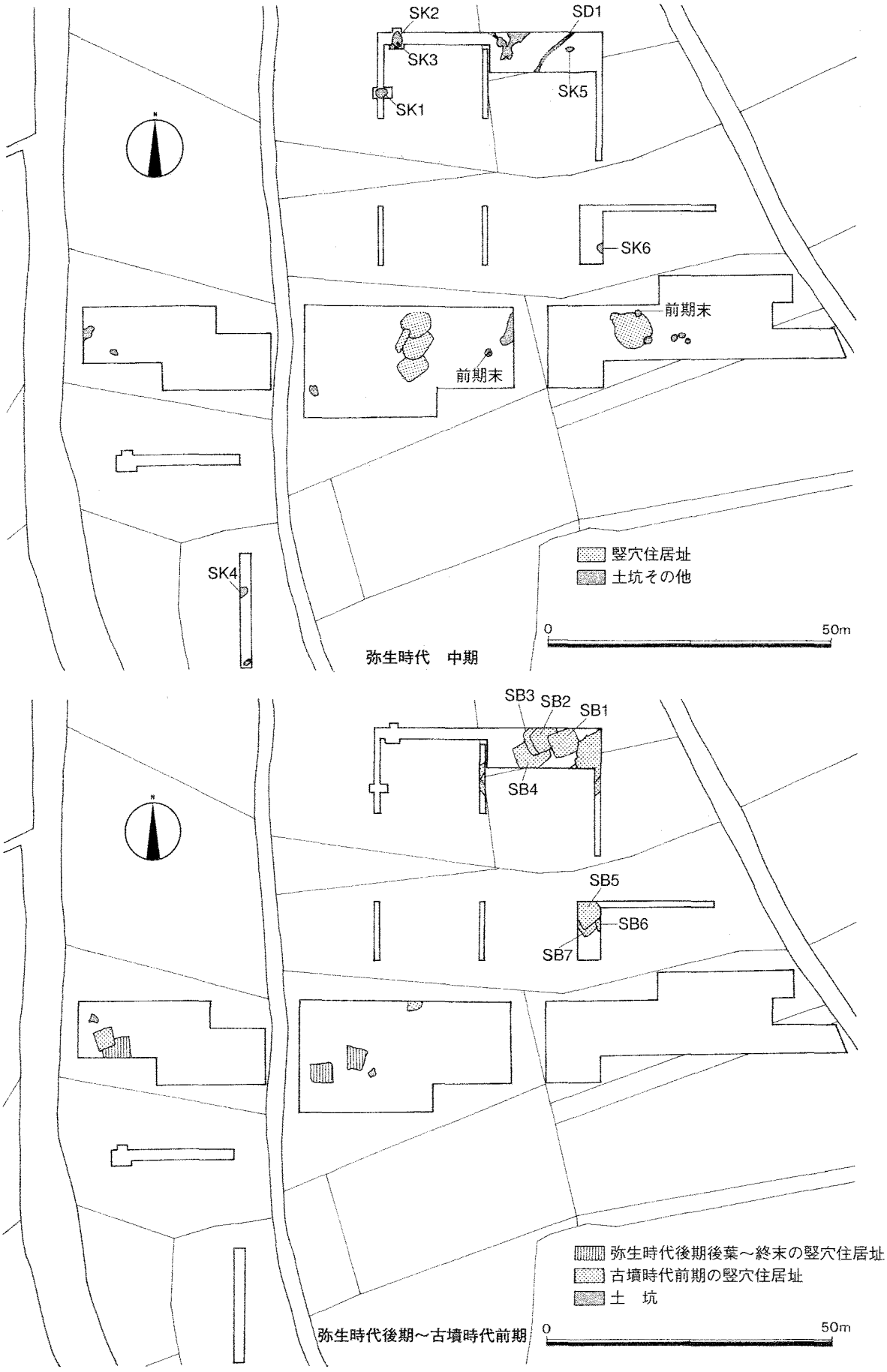
原の辻遺跡における住居址検出地点は，調査地点の偏りを反映して，台地においても分布の偏りが認められ，現在のところ台地最上部の祭儀場周辺の原地区と，台地の先端付近の高元地区に集中している。これらの地区における竪穴住居址の分布を時期別に示したのが第55図である（第55図）。弥生時代中期には，祭儀場の北側を中心に群集する傾向にあるものの，その他の地区においては散漫な分布となる。一方，弥生時代後期後葉以降は，竪穴住居の数が増加するとともに，調査地点全域に住居

第55図　竪穴住居址時期別分布図（1/4000）

址の分布が拡大する。弥生時代中期の住居址と切り合って検出される場合も多いが，特に祭儀場の東側を中心に濃密に分布している。この傾向は古墳時代前期にも継続しており，祭儀場周辺に加えて丘陵の先端部付近まで分布するようになり，分布範囲としてはもっとも拡大する時期である。また，弥生時代中期に整備された祭儀場にもこの時期の竪穴住居が築かれており，この時期の旺盛な住居址群の展開が読みとれる。

C．高元地区の遺構群と今年度調査区の位置づけ

より詳細な事例として，今回調査を行った高元地区の遺構群を検討する（第56図）。高元地区の遺構群は，主に竪穴住居址・土坑・貯蔵穴・ピット群であるが，このうち貯蔵穴２基が弥生時代前期末に構築される。その後，中期中葉～後葉を中心に竪穴住居址が数軒建てられるものの，分布は散漫で，



第56図　高元地区時期別遺構配置図（1/1000）

むしろ土坑群が積極的に掘削され，かなりの広がりを持つ。また，焼土坑をはじめとする工房群が展開するものこの時期で，今回は詳細な調査は行わなかったものの，高元Ｉ区で検出した溝状の遺構や不定型なシミ状の落ち込みも，この工房群に伴う遺構であると考えられる。弥生時代後期後葉以降，再び竪穴住居址が構築されるが，分布がもっとも拡大するのは，古墳時代前期からである。この時期は弥生時代中期の土坑群や工房群にまで竪穴住居の分布が拡大し，本年度検出のＳＤ１は，弥生時代中期後葉の土坑（ＳＫ５）を切るように構築されていた。このように，高元地区では，弥生時代中期の土坑群および工房群が展開する段階から，古墳時代前期の住居址群が展開する段階へと変遷しており，時期別の土地利用のあり方に比較的明瞭な違いが看取される。

Ｄ．まとめ

原の辻遺跡における竪穴住居の特徴は次の２点である。

１．竪穴住居址の平面形は，弥生時代中期における円形・方形・隅丸方形から，弥生時代後期～古墳時代にかけての方形・長方形へという変遷が認められた。弥生時代後期後葉～古墳時代前期にかけては，４本主柱建物の出現や平面形において方形に近くなるなど，北部九州における竪穴住居址の変遷において画期となる時期である（寺井1995）。原の辻遺跡においても同様の傾向は看取されるものの，古墳時代前期前半段階でも長方形で２本主柱の竪穴住居が依然として主体となる点は，比較的在地的な様相として理解できよう。

２．竪穴住居址の分布では，弥生時代後期後葉に大きな画期があることを指摘した。この時期以降，台地上における分布の拡大が認められ，この傾向は古墳時代前期まで継続する。原の辻遺跡の変遷については，弥生時代後期後葉段階に環濠が埋められるとともに，集落自体も次第に衰退したことが指摘されているが（宮崎2001），今回検討した台地上の竪穴住居址の展開を見る限り，環濠埋没後の古墳時代前期においては，むしろ住居址数の増加や分布の拡大が認められる。環濠埋没後の原の辻遺跡のあり方と集落消滅の経緯については，筆者自身未だ明確な答えを持ち合わせていないが，環濠や掘建柱建物といった竪穴住居址以外の遺構群の動向と併せて，今後の重要な検討課題の一つである。

【註】

１．村上恭通氏のご教示による。

２．村上恭通氏のご教示による。

３．平成14年度芦辺町調査分はこれに含まれていない。

４．近年，宮崎貴夫氏により，原の辻遺跡の変遷と画期について詳しく論じられている（宮崎2001）。

５．建物跡としては竪穴住居のほかにも掘建柱建物が考えられる。現在，原の辻遺跡調査指導委員の宮本長二郎先生により，これまでの調査で出土したピット群を基に掘建柱建物の検討が行われており，住居址群全体についてはこの成果を待って再度検討したい。また，芦辺町主体の平成14年度調査でも，弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴住居址が多数検出されている。これらの成果についても今回は割愛した。

６．第54図の時期区分は，北部九州との比較を容易にするために，弥生時代後期～古墳時代前期については寺井1995と同一にした。具体的には，弥生時代後期前・中・後葉は柳田康雄氏の後期２式・後期３式・後期４・５式に相当する。弥生時代終末は庄内式平行期で柳田氏の土師器Ｉ式・井上裕弘氏の弥生後期後葉３式，

古墳前期前半は布留式古・中段階で柳田氏の土師器Ⅱ式・井上氏の古墳時代１・２・３式，古墳時代前期後半は布留式新段階で，柳田氏の土師器Ⅲ式・井上氏の古墳前期４・５式に相当する（井上1995)。

７．第54図１に示した住居址は，ベッド状遺構を持つ住居址として報告されているが，主柱穴が短軸に平行すること，およびベッド状遺構と住居址の幅が一致していないことから，一軒の住居址とは考えにくく，複数の住居址が切り合っているものと判断した。したがって，一番最後に掘り込まれた面を１軒の住居址と判断し，図を一部改変した。

【参考文献】

井上裕弘1991「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会

杉原敦史2000『原の辻遺跡　原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅱ（環濠等状況調査)』原の辻遺跡調査事務所　報告書第19集　長崎県教育委員会

寺井誠1995「古墳出現前後の竪穴住居の変遷過程－北部九州の事例を基に－」『古文化談叢』第34集　九州古文化研究会

徳永貞紹ほか2001『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集佐賀県教育委員会

松井和幸2000「中国山地に見る弥生時代鉄器生産の実体－広島県庄原市和田原Ｄ地点遺跡を中心に－」『製鉄史論文集』たたら研究会

宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号　西海考古同人会

村上恭通・溝口孝司・北條芳隆2000『古墳時代像を見なおす』青木書店

柳田康雄1991「土師器の編年－九州－」『古墳時代の研究』６　雄山閣

【報告書一覧】

松永泰彦1995『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第９集　芦辺町教育委員会

宮崎貴夫1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所報告書第11集　長崎県教育委員会

山口　優2001『特別史跡原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第12集　芦辺町教育委員会

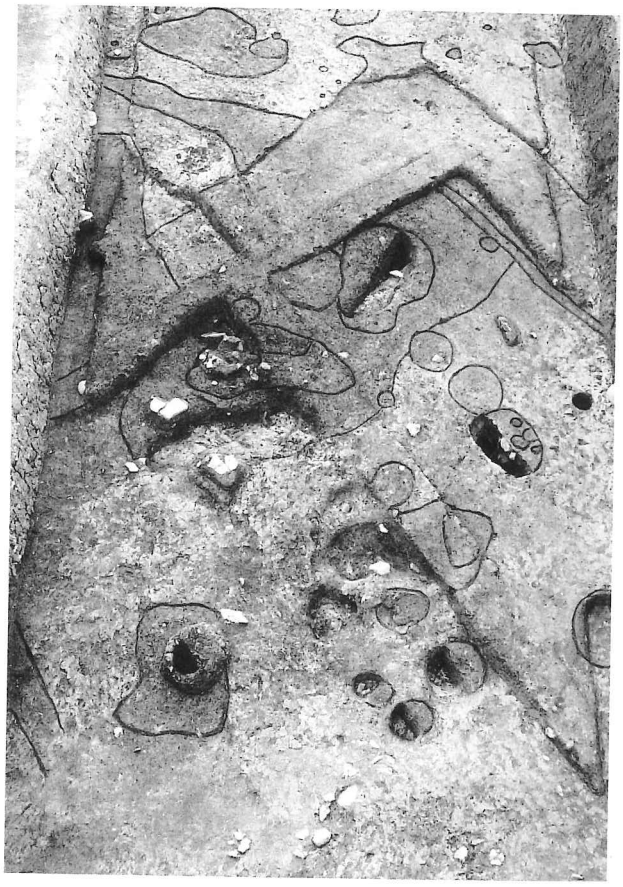
山口　優2002『特別史跡原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第13集　芦辺町教育委員会

【第54図出典一覧】

１．芦辺町12集Ｈ12－５号住／２．芦辺町13集１号住／３．芦辺町12集Ｈ11－２号住／４．芦辺町９集７号住／５．芦辺町13集６号住／６．芦辺町12集Ｈ12－６号住／７．芦辺町12集Ｈ11－２号住／８．芦辺町９集８号住／９．芦辺町９集12号住／10．芦辺町９集９号住／11．芦辺町12集Ｈ12－１号住／12．芦辺町12集Ｈ12－８号住／13．事務所11集Ｈ９－13号住／14．芦辺町９集３号住／15．事務所11集Ｈ８－４号住／16．事務所11集Ｈ９－13号住／17．事務所11集Ｈ９－３号住／18．事務所11集Ｈ７－２号住／19．事務所11集Ｈ９－１号住／20．芦辺町13集２号住／21．事務所11集Ｈ８－１号住／22．事務所11集Ｈ７－１号住

＊「芦辺町」は芦辺町教育委員会発行の報告書，「事務所」は原の辻遺跡調査事務所発行の報告書をさす。

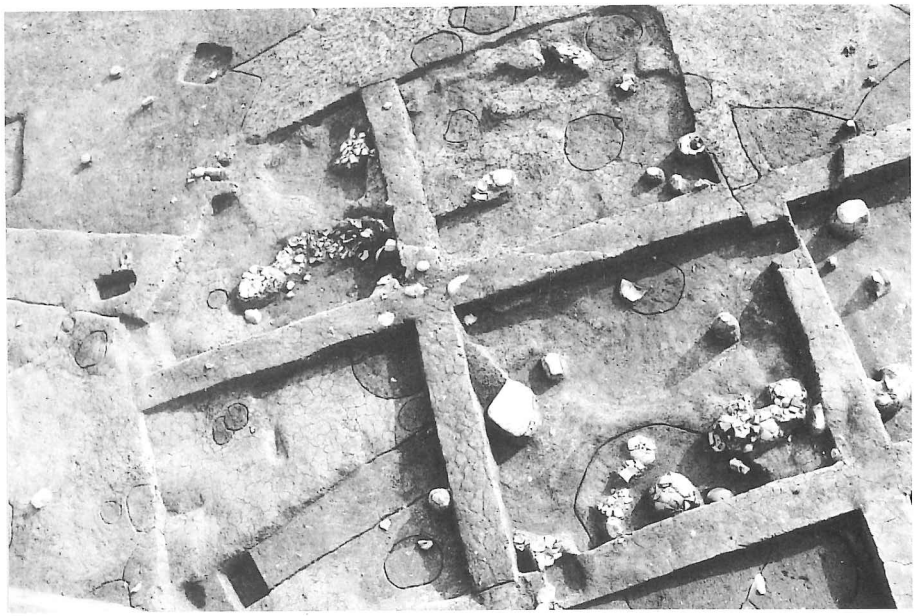
Ⅰ区住居址群 半掘状況（東から）



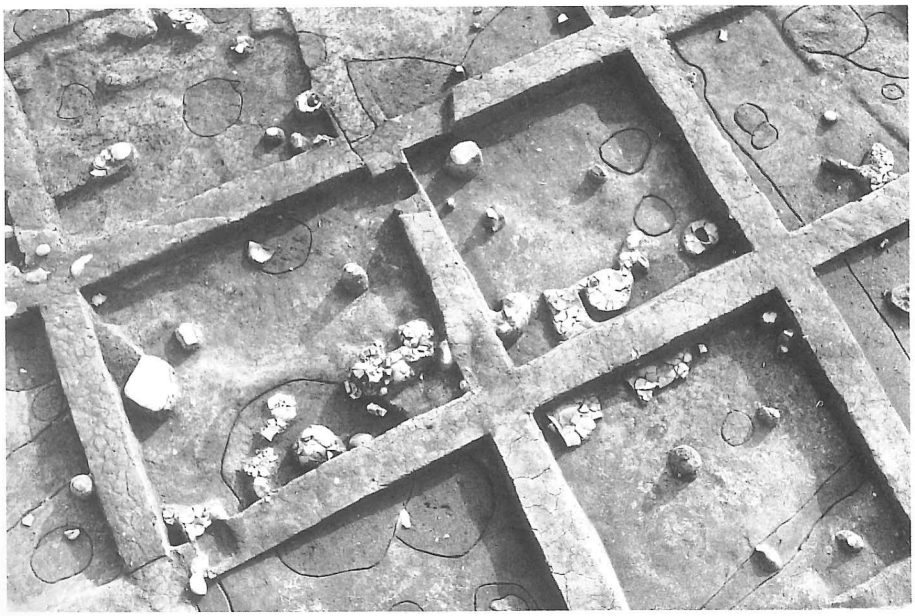
Ⅱ区ＳＢ５・６・７ 検出状況

Ⅱ区 全景（北から）

図版８

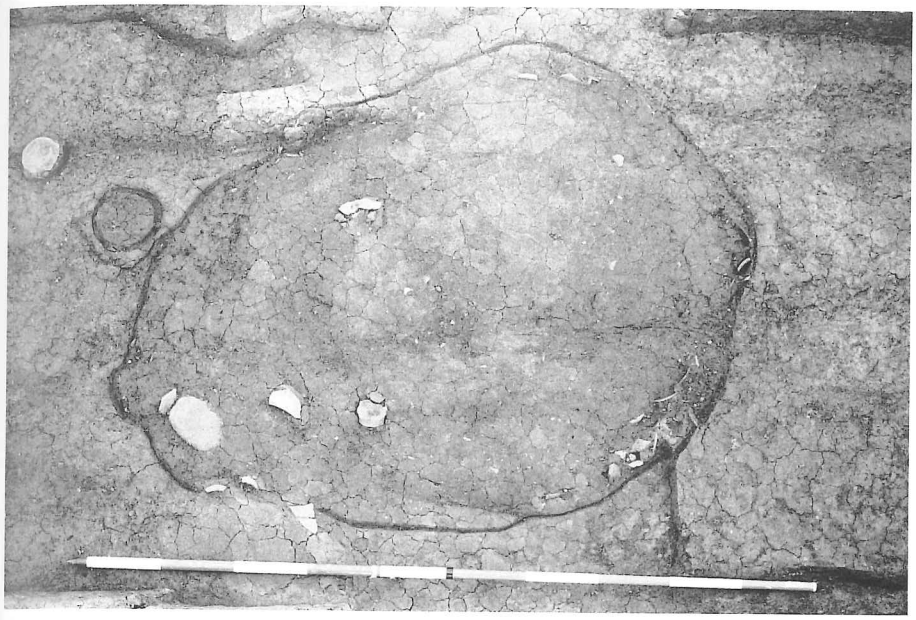


Ⅰ区ＳＢ１検出状況

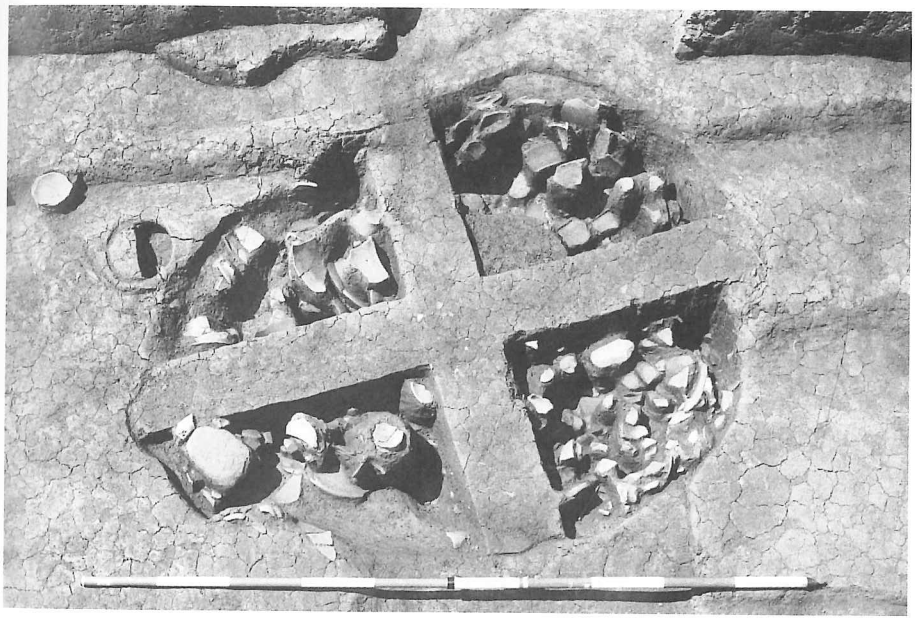


Ⅰ区ＳＢ２検出状況

Ⅰ区ＳＢ３検出状況



ＳＫ１検出状況



ＳＫ１遺物出土状況

高元Ⅳ区ＳＫ４遺物出土状況

図版10

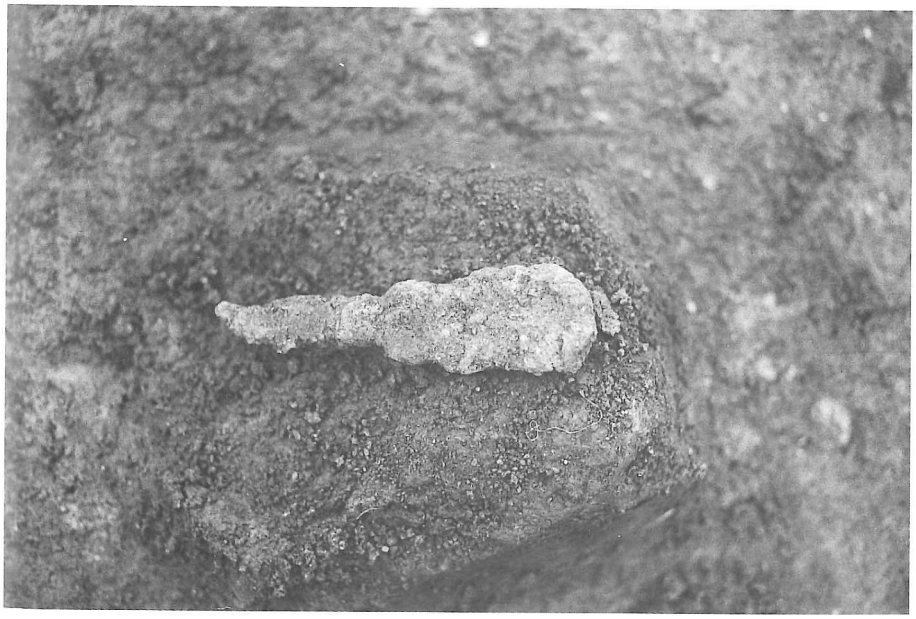
Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況

Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況

Ⅱ区ＳＢ５覆土遺物出土状況

Ⅱ区棒状銅製品出土状況

ＳＢ１鉄鏃出土状況



ＳＢ１鉄鏃出土状況

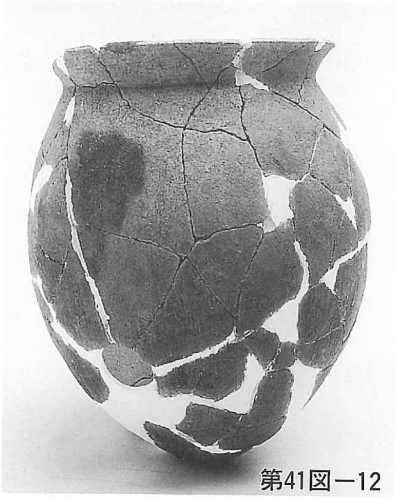
図版12

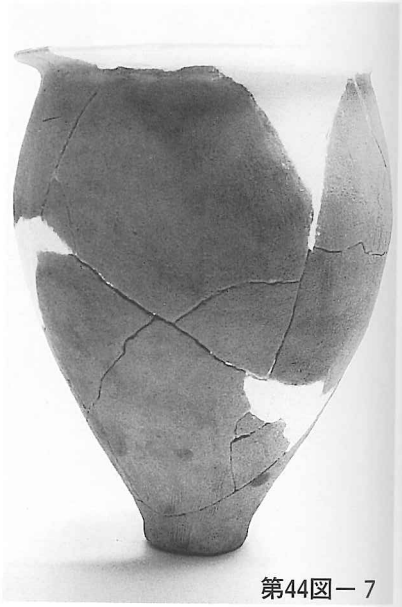
第40図ー2

第40図ー10

第45図ー10

第40図ー7


第41図ー12


第44図ー7

第40図ー8

第43図ー37

第47図ー1

第40図ー9

高元地区出土遺物

第47図ー 4

第47図ー 7

第48図ー17

第48図ー20

3．石田高原地区の調査

(1) 調査概要（第３図，第57図）

調査区は台地東側低地部の非農用地に，北区12×30m（360㎡），中央区15×40m（650㎡），南区20×15m（300㎡）の３つの調査区を設定した。調査面積の合計は1260㎡である。中央区の北から10m・20m・30m地点にそれぞれ東西のベルトを残し，北からⅠ区～Ⅳ区とした。また，南区の東から10m地点に南北のベルトを残し，東からⅤ区・Ⅵ区とした。北区についても北から15m地点にベルトを残し，北からⅦ区・Ⅷ区とした。これらの調査区は，耕作面の上に厚いところで約１m程度の客土を盛っていたため，調査区内の遺構検出面がかなり深く，浅いところでも約1.5mである。作業時の安全面を考慮して北区・中央区は西壁に傾斜をつけ，南区は耕作土を堀り下げた段階でさらに壁際から１m幅を残し段堀することとした。

調査事務所では，本年度から，国土座標をもとにして遺跡全体に200m，50m，10m，５mのグリッドを設定した。遺物の取り上げ等はこの５mグリッドを利用して行った。

この地区は，平成５年度に調査を行っており，台地の裾に沿って巡る多重の環濠や道路状遺構といった重要な遺構が検出されている。本年度の調査はこれらの遺構群の広がりやつながりを明らかにし，東側低地部の土地利用のあり方を明らかにすることを目的として調査区を設定した。調査に際しては，遺構保存の観点から，遺構検出後はできるだけ部分的な掘り下げにとどめ，遺構の規模や時期を判断することとした。

調査の結果，道路状遺構の延長部分を検出するとともに，計14条の環濠や落ち込みが確認され，平成５年度の調査分と併せて，台地東側低地部が弥生時代前期末から古墳時代初頭まで，それぞれの時期ごとに様々な遺構が展開していたことが明らかになった。

またⅦ区・Ⅷ区では傾斜の緩やかな谷状の地形を確認している。

(2) 土層（第62図～第66図）

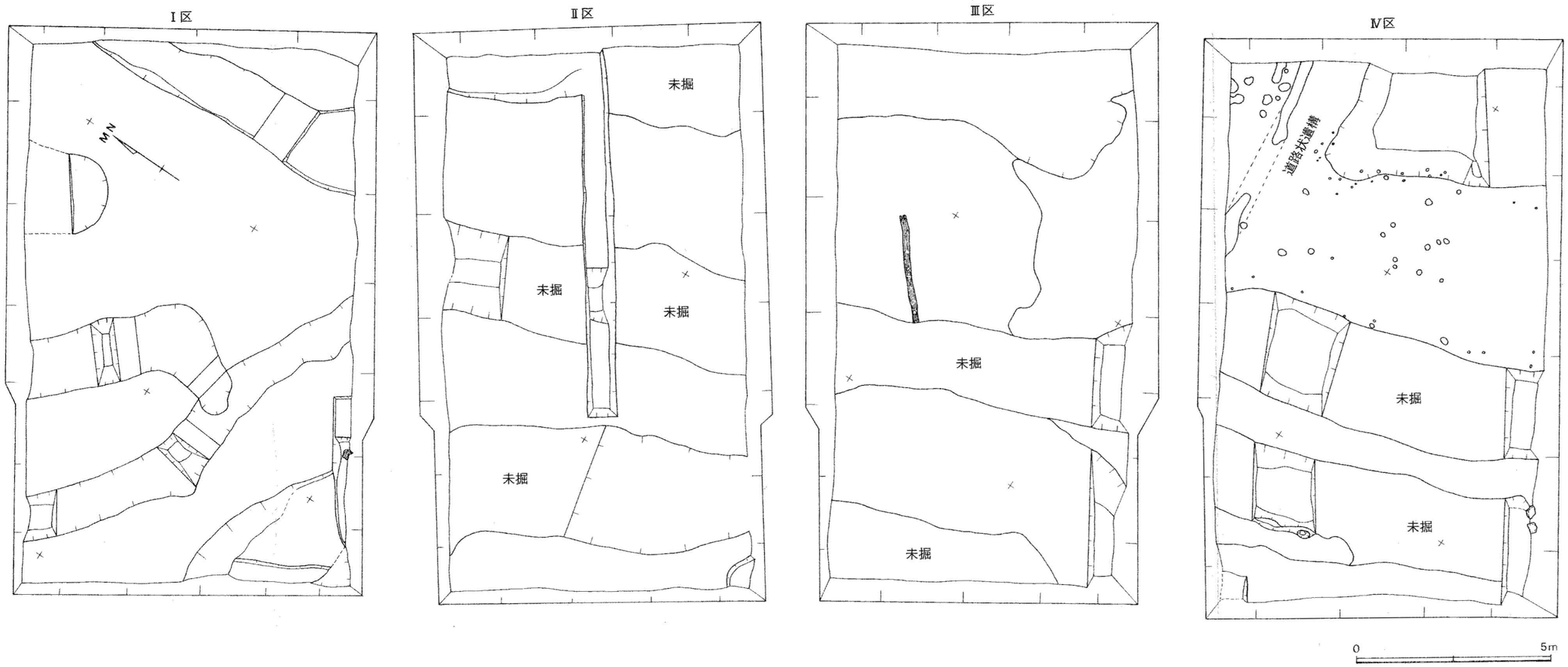
１層は客土である。２層～７層が旧耕作土で北区・中央区ではほぼ水平堆積をしていた。３層には杭が打ち込まれた跡があり，長い時間を通してこの地区が水田として使用されていたことが伺える。

弥生時代の遺構は，基本的に地山を掘り込む形で検出している。一方で，弥生時代前中期と後期の遺構が交錯する地点では，両時期の遺構が複雑に切り合い，遺構の検出や切り合いの確認を困難にしている。

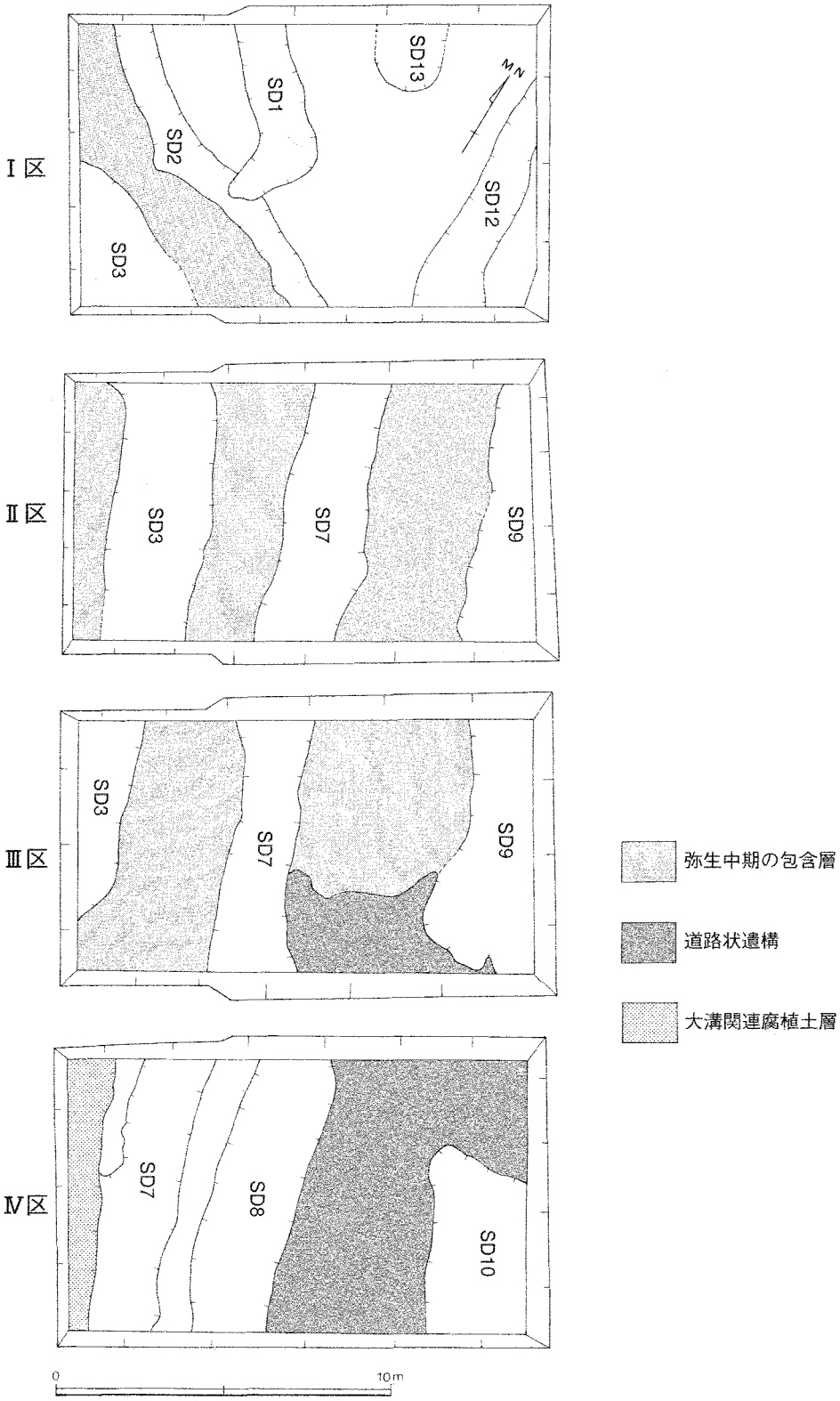
Ⅱ区・Ⅲ区では，８’８”層中から，弥生時代中期の土器が数多く出土している（第62図，第63図）。Ⅱ区に設定した東西方向のトレンチ土層（第66図）を見ても，地山の上に中期の包含層を確認できる。この層はⅡ区・Ⅲ区の広い範囲に広がっており，弥生時代中期に湿地状の氾濫源が形成されていたことが想定できる。弥生時代後期の環濠はこの層を堀込んで構築されており，特にⅢ区では，弥生時代中期の包含層を切るように後期の環濠が掘削されている状況が平面的にも確認できる。（第59図）。

一方，Ⅲ区～Ⅵ区にかけての西壁際では，地山直上に木質を残す淘汰の悪い腐植土が堆積しており，前期末の土器が数点出土している。平成５年の調査で確認した大溝の最下層には，同様の腐植土が堆積するとともに，弥生時代前期末の土器が出土していることから，この腐植土は大溝関連の堆積層で

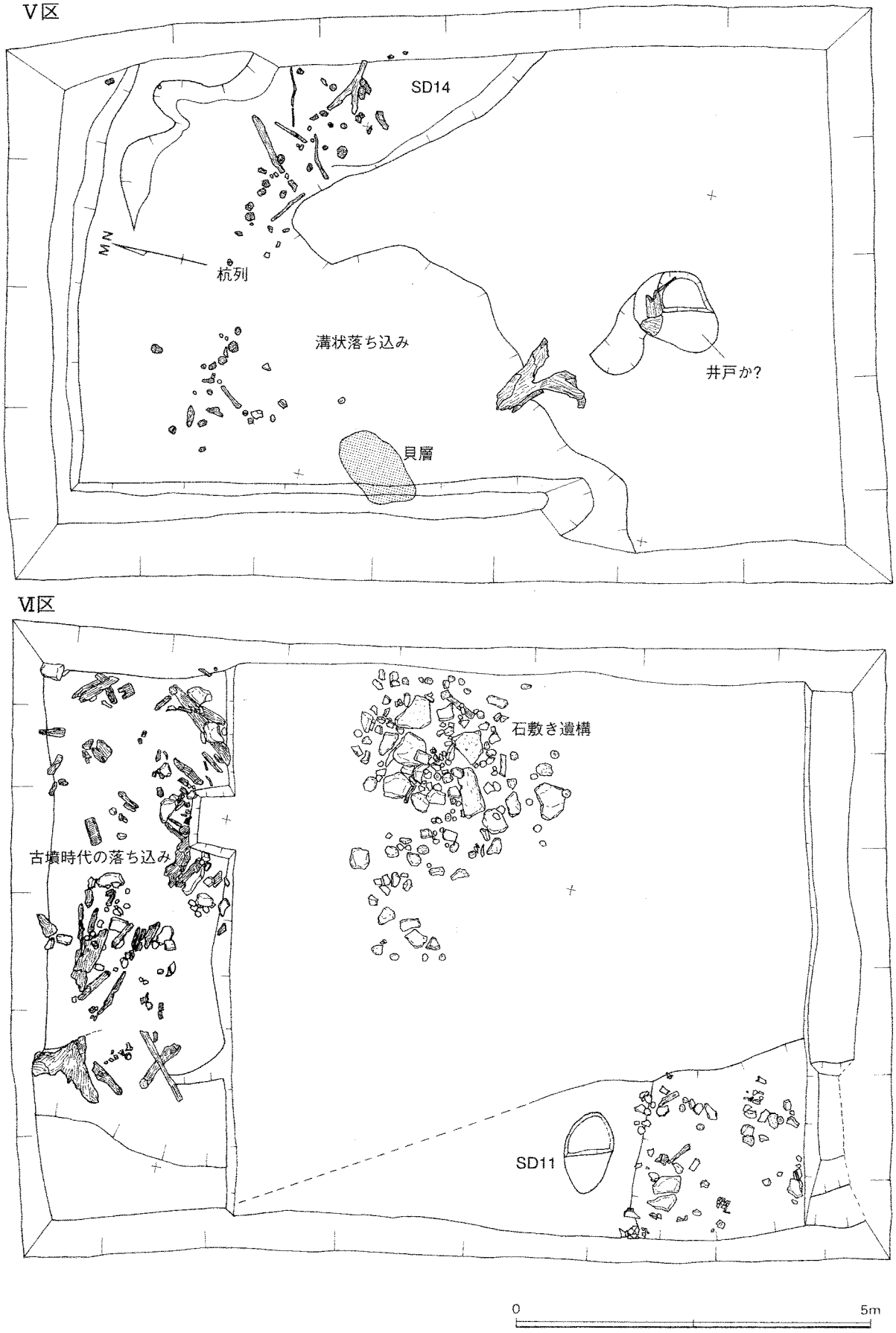
第57図　石田高原地区調査区位置図（1/750）



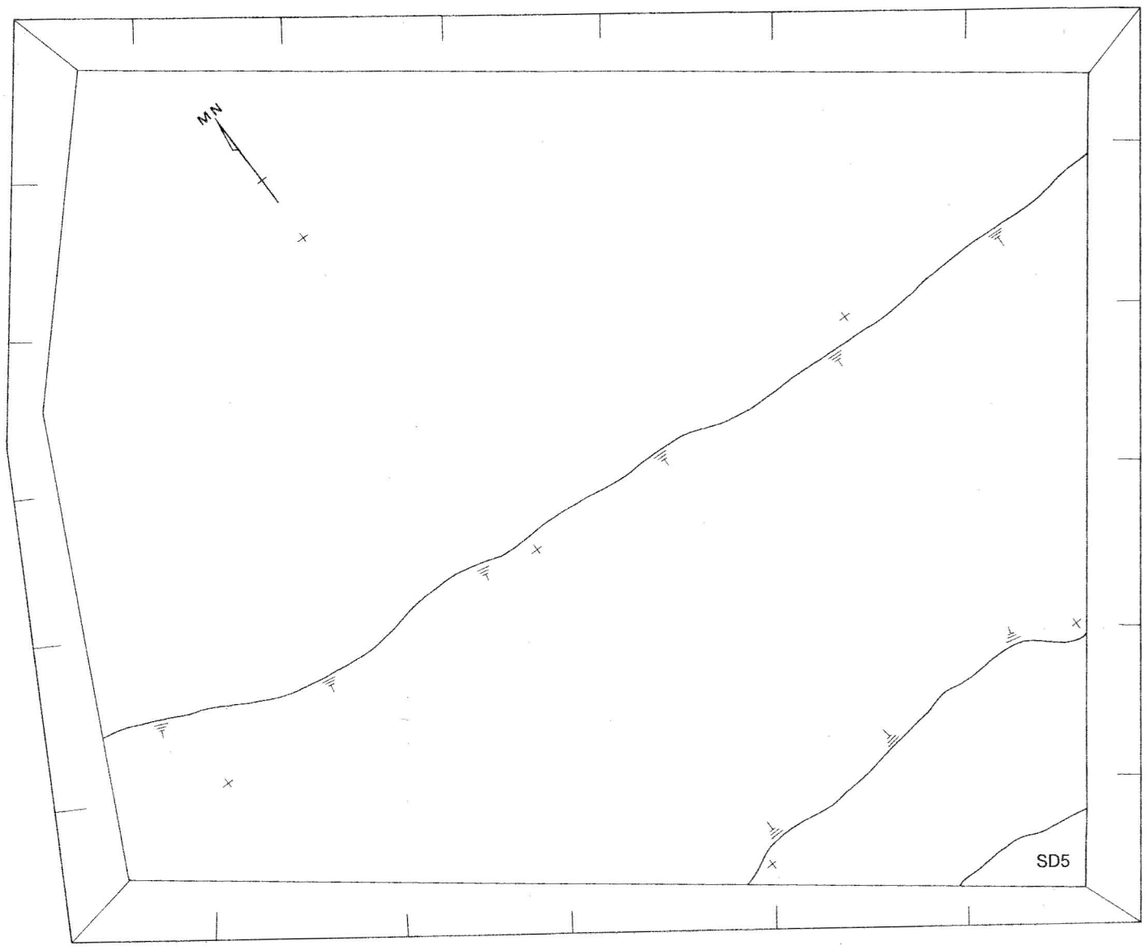
第58図　石田高原中央区遺構配置図（1/120）



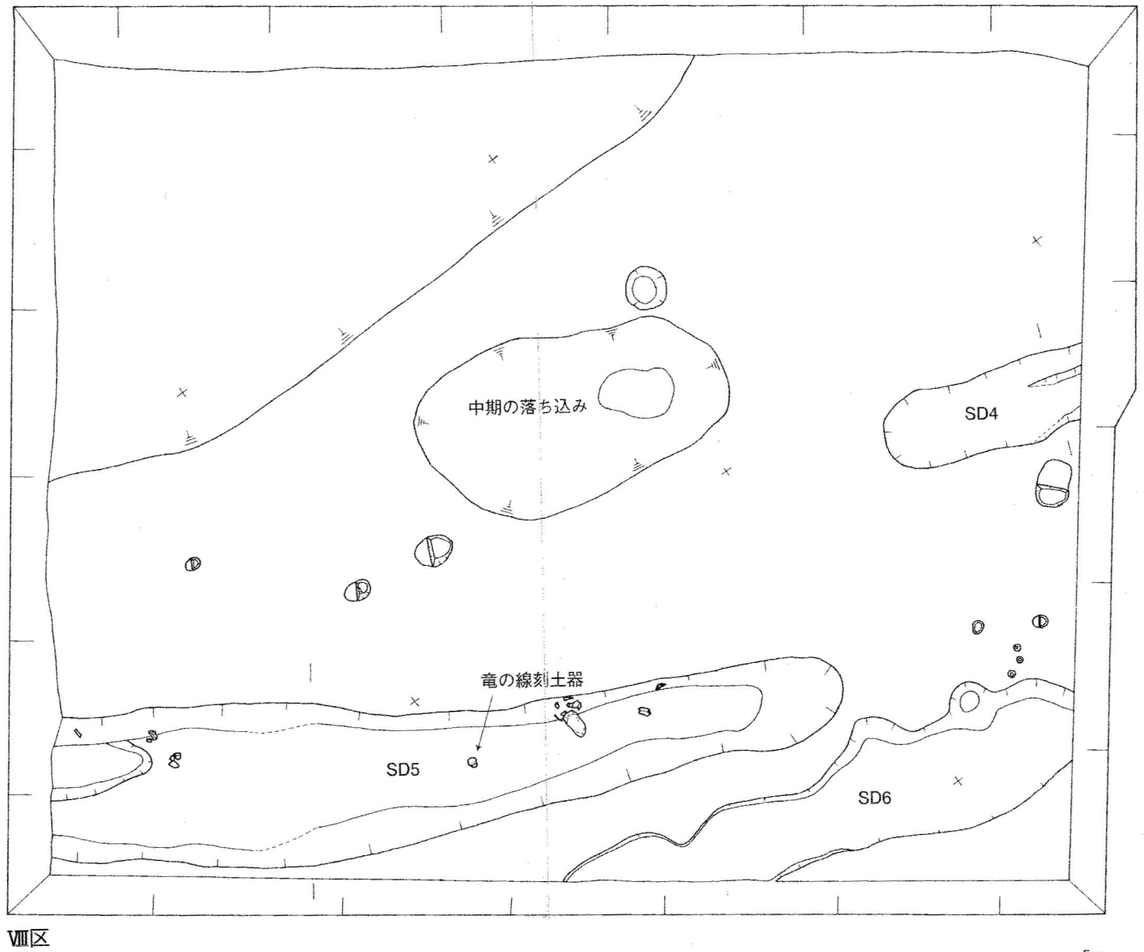
第59図　石田高原中央区主要遺構配置図（1/80）



第60図　石田高原南区遺構配置図（1/60）



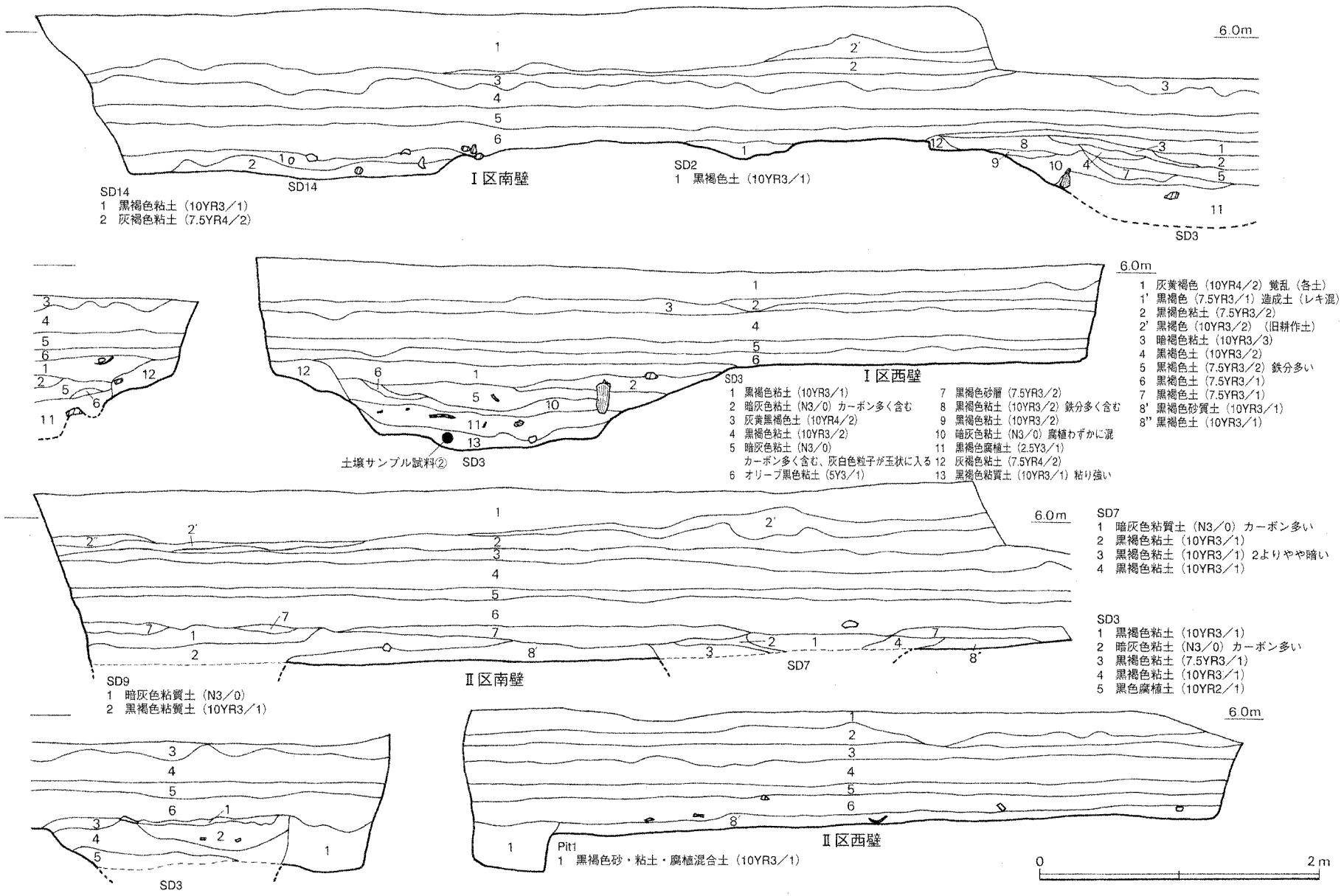
Ⅶ区



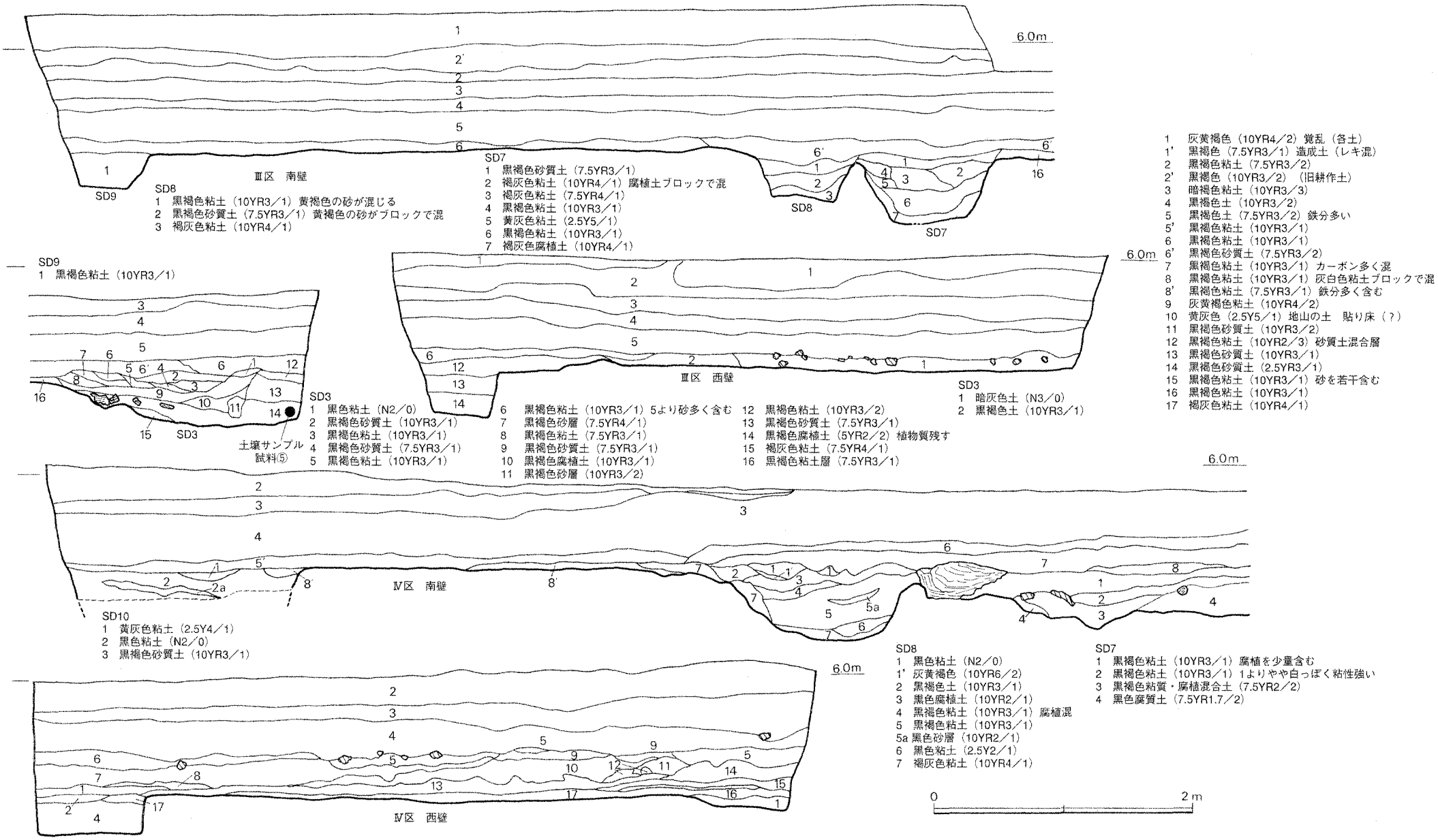
Ⅷ区

0 5m

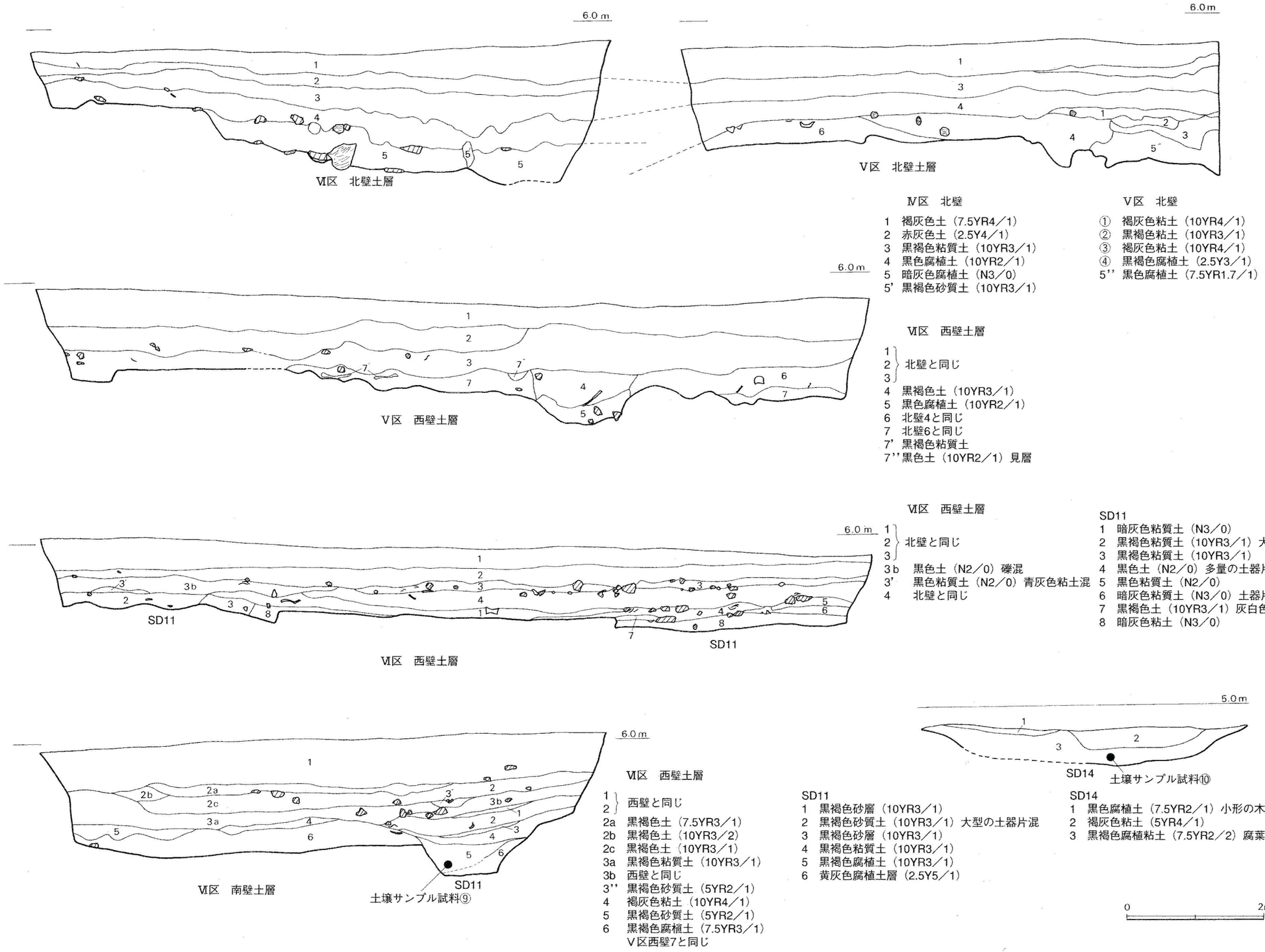
第61図　石田高原北区遺構配置図（1/100）



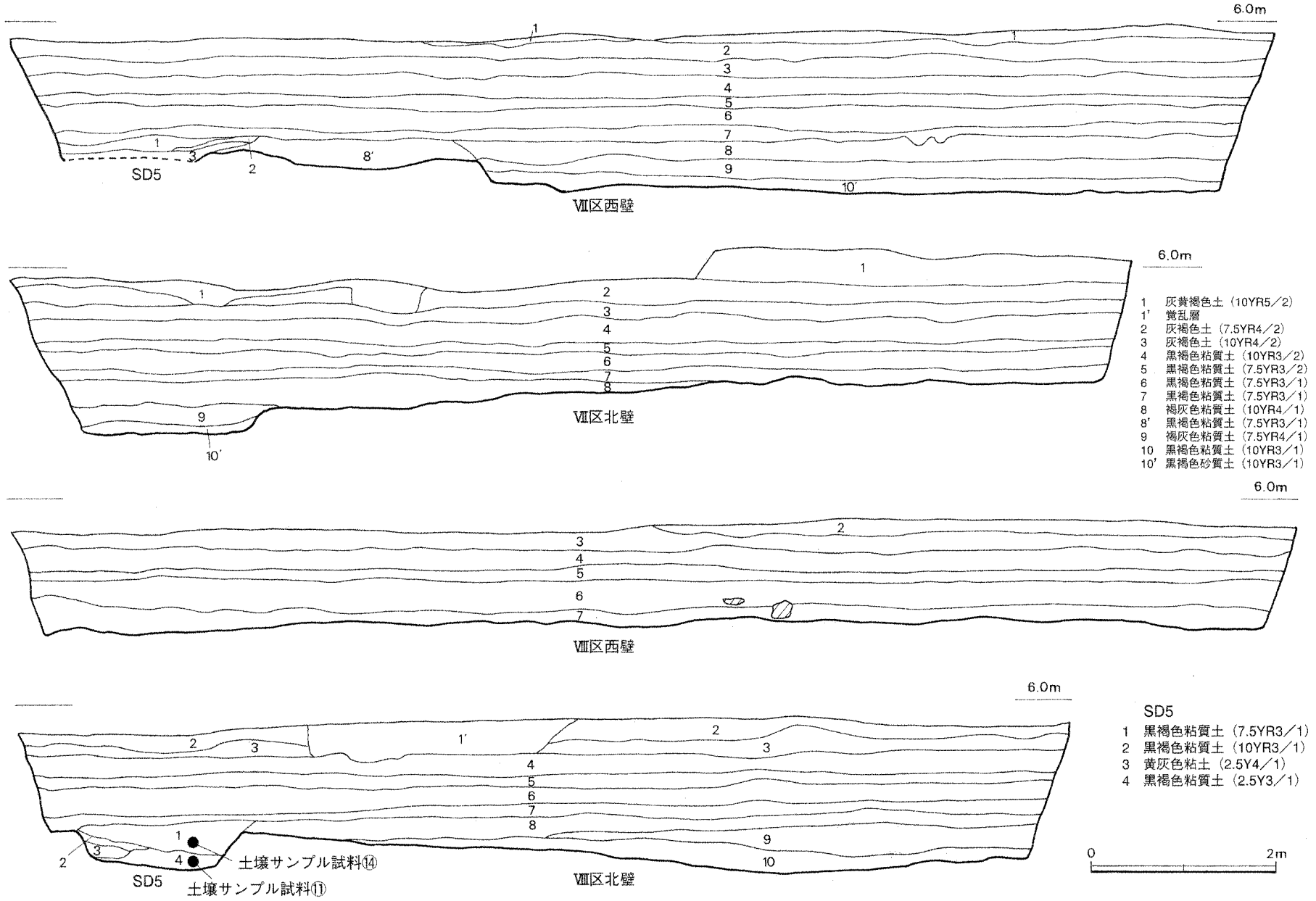
第62図　Ⅰ・Ⅱ区南壁・西壁土層図（1/60）



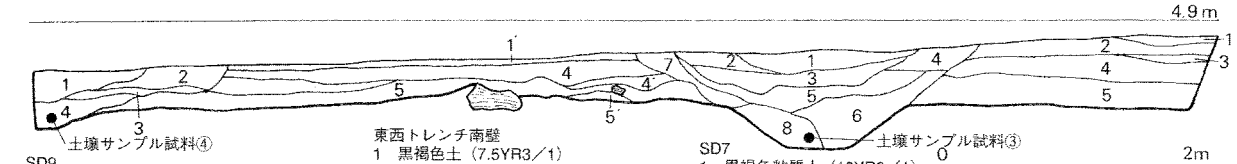
第63図　Ⅲ・Ⅳ区南壁・西壁土層図（1/60）



第64図　Ⅴ・Ⅵ区土層図及びＳＤ14土層図（１／60）



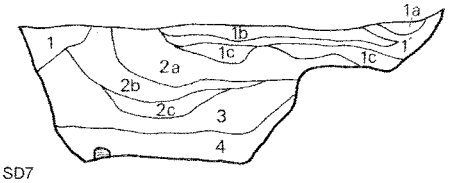
第65図　Ⅶ・Ⅷ区北壁・西壁土層図（1/60）



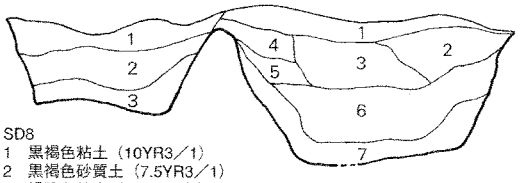
SD9
1 オリーブ黒色粘質土（5Y3／1）
2 黒褐色粘質土（10YR3／1）
3 黒褐色腐植土（10YR3／1）
4 オリーブ黒粘質土（5Y3／1）

東西トレンチ南壁
1 黒褐色土（7.5YR3／1）
1' 黒褐色土（10YR3／1）
2 黒褐色粘質土（10YR3／1）
3 黒褐色砂質土（10YR3／1）
4 黒褐色砂質土（5YR3／1）
4' 黒褐色粘質土（7.5YR3／1）
5 黒褐色腐植土（7.5YR3／1）
5' 黒褐色腐植土（2.5Y3／1）

SD7
1 黒褐色粘質土（10YR3／1）
2 黒褐色粘質土（7.5YR3／1）
3 黒色腐植土（7.5YR2／1）
4 黒褐色粘質土（5YR3／1）
5 黒褐色腐植土（7.5YR3／1）
6 黒褐色粘質土（10YR3／1）
7 黒褐色砂質土（10YR3／1）
8 黒褐色腐植土（10YR3／1）

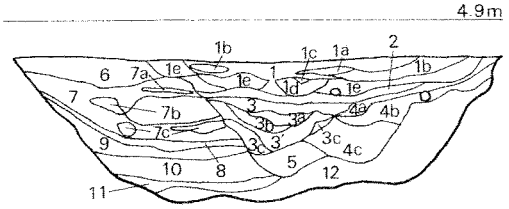


SD7
1 オリーブ黒砂質土（7.5Y3／1）
1' 暗灰色土（N3／0）カーボン多く含む
1a 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）
1b 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）1aよりきめが荒い砂
1c 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）
2a 黒褐色粘土（10YR3／1）
2b 黒褐色砂質土（10YR3／1）腐植多く混
2c 黒褐色粘土（10YR3／1）
3 黒褐色粘土（10YR3／1）灰白色粘土がまばらに混じる
4 黒褐色腐植土（2.5Y3／1）カーボン多量に含

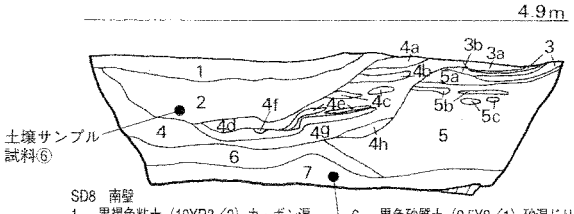


SD8
1 黒褐色粘土（10YR3／1）
2 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）
3 褐灰色粘土（10YR4／1）

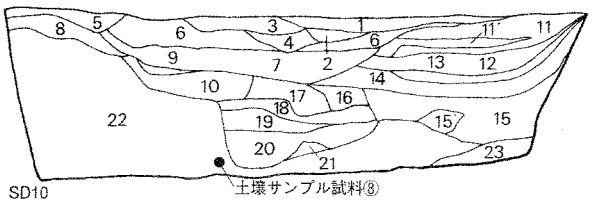
SD7
1 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）
2 褐灰色粘土（10YR4／1）
3 褐灰色粘土（7.5YR4／1）
4 黒褐色粘土（10YR3／1）
5 黄灰色粘土（2.5Y5／1）
6 黒褐色粘土（10YR3／1）
7 黒褐色粘土（10YR4／1）



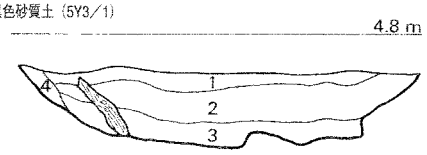
SD8 北壁
1 黒褐色砂質土（10YR3／1）砂利・カーボン含む
1a 黒褐色砂利（7.5YR3／1）
1b 黒褐色砂質土（7.5YR3／2）
1c 黒褐色細砂質土（7.5YR3／1）
1d 褐灰色粘土（10YR4／1）
1e 黒褐色砂質土（10YR3／1）
2 黒褐色砂質土（10YR3／1）
3 黒色砂質土（10YR2／1）カーボン・腐植含む
3' 黒褐色土（10YR3／1）カーボン・腐植含む
3a 褐灰色粘土（10YR4／1）
3b 黒色粘土（10YR2／1）
3c 黒褐色細砂土（10YR3／1）
4a 黒色粘土（10YR2／1）
4b 黒褐色土（10YR3／1）
4c 黒褐色粘質土（10YR2／1）
5 黒色粘土（10YR2／1）カーボン・腐植含む
6 黒褐色粘土（10YR3／1）カーボン多い
7 黒色粘土（10YR2／1）腐植・砂質土混ぜる
7a 黒褐色砂質土（10YR3／1）
7b 黒褐色細砂層（10YR3／2）
7c 黒褐色砂質土（10YR3／1）
8 黒褐色粘土（10YR3／1）
9 黒色粘土（10YR3／1）腐植混じる
10 黒色粘土（2.5Y2／1）
11 黒褐色粘土（10YR3／1）
12 黒褐色砂質土（2.5Y3／1）腐植混じる



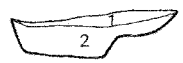
SD8 南壁
1 黒褐色粘土（10YR3／2）カーボン混
2 赤黒色腐植土（2.5YR2／1）
3 黒褐色粘土（10YR3／1）砂を含む
3a 黒褐色砂質土（10YR3／1）炭化物多い
3b 黒褐色砂質土（10YR3／1）
4 黒褐色土（10YR2／1）腐植含む
4a 黒褐色粘土（10YR3／1）砂混じり
4b 黒褐色砂土（2.5Y3／1）
4c 黒褐色砂質土（10YR3／1）
4d 黒色砂質土（10YR2／1）
4e 黒色砂質土（10YR2／1）
4f 黒褐色砂質土（10YR3／1）
4g 黒色砂質土（10YR2／1）
4h オリーブ黒色砂質土（5Y3／1）
5 オリーブ黒色粘土（5Y3／1）砂混じり・カーボン・腐植含む
5a 黒褐色砂土（2.5Y3／1）
5b 黒色砂質土（2.5Y2／1）
5c オリーブ黒色砂質土（5Y3／1）
6 黒色砂質土（2.5Y2／1）砂混じり，腐植含む
7 褐灰色粘土（10YR4／1）



SD10
1 黒色土（7.5YR2／1）
2 黒褐色土（7.5YR3／1）
3 黒褐色砂礫層（10YR3／2）
4 黒褐色土（10YR3／1）
5 黒褐色土（10YR3／1）
6 黒褐色土（7.5YR3／1）
7 黒色土（7.5YR2／1）
8 黒褐色土（10YR3／1）
9 黒褐色砂礫層（10YR3／1）
10 黒色粘土（10YR3／1）腐植混
11 黒褐色土（10YR2／1）
11' 黒褐色砂質土（7.5YR3／1）
12 黒褐色砂層（10YR3／2）
13 黒色粘土（10YR2／1）
14 黒色粘質土（10YR2／1）腐植混
15 黒褐色砂質土（2.5Y3／1）
15' 黒褐色粘土（10YR3／1）
16 黒褐色粘質土（2.5Y3／1）腐植混
17 黒色砂質土（7.5YR2／1）腐植混
18 黒褐色粘土（10YR3／1）腐植混
19 黒色粘土（2.5Y2／1）
20 黒褐色粘土（10YR3／1）腐植混
21 黒色砂層（2.5Y2／1）
22 黒褐色粘土（10YR3／1）カーボン・腐植混
23 褐灰色粘土（10YR4／1）



SD5
1 黒褐色粘土（7.5YR3／1）
2 褐灰色粘土（7.5YR4／1）
3 褐灰色粘土（10YR4／1）
4 褐灰色粘土（7.5YR4／1）



SD4
1 黒褐色土（7.5YR3／2）
2 灰褐色土（7.5YR4／2）

0 1m

第66図　Ⅱ区東西トレンチ土層図（1/60）及びＳＤ土層図（1/40）

あり，Ⅲ～Ⅳ区の西壁付近が大溝の東限になると推測される。また，Ⅴ・Ⅵ区でも，自然の落ち込みに同じような腐植土の堆積が確認されているが，この腐植土は弥生時代後期以降に堆積したことが明らかで，大溝最下層のものとは直接結びつかない。前期末～中期にかけての大溝は，南へはあまり延びないようである。このように，この地域は周辺から水が流れ込み，腐植土が厚く堆積するような帯水環境にあったと考えられる。この帯水地点は，時期によって地点や規模を異にしながらも，環濠が掘削されるどの時期にも存在し，環濠や溝の起点となったものと推測される。

なお，Ⅴ～Ⅵ区では，最下層から粘土と腐植土が上下に複雑に入り組んだ状況を確認している。遺物は出土しないことから，一応地山として判断した。このような堆積が起こる要因は不明であるが，周辺では湧水点がかなりあることから，湧水の作用で土層が攪乱されたことが考えられる。また，珪藻分析では海水の影響が指摘されており，干満による攪乱の可能性も考えられる。

(3) 遺　構

調査区全体で，14本の溝状遺構と弥生時代後期の大型の落ち込み，および古墳時代の落ち込みを検出している。またこの他にも弥生時代中期にⅠ～Ⅲ区にかけて氾濫原のような浅い湿地状の落ち込みがあったことが確認された。これらの遺構群は，調査区内で分岐・合流，あるいは切り合ったり止まったりしながら複雑に展開している。また，Ⅷ区では，窪地状の落ち込みに弥生時代中期の遺物が廃棄された状態で検出された。

ＳＤ１（第58図，第67図）

Ⅰ区北壁から南東方向に伸び，やや西に曲がって，ＳＤ２を切った状態で止まっている。長さ約5.2m，幅約1.6m，断面は逆台形形で深さ約65cmである。溝の上面からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が出土している。面的な掘り下げは１層まで行い，土層の観察用に約50cm幅で底まで掘り下げた。溝は北西方向へ伸びていくと思われる。

ＳＤ２（第58図，第67図）

Ⅰ区北壁から南東方向に延び，約9.5m，幅1.1m，深さ約30cmである。Ⅱ区では検出できなかったので，Ⅰ区とⅡ区を分ける土層観察用ベルトで止まるものと考えられる。面的な掘り下げは１層まで行い，溝の断面土層観察のため約50cm幅で底まで掘り下げた。溝の上面からは弥生時代中期の土器が出土している。中央部でＳＤ１に切られていた。溝は北西方向に伸びていくと思われる。

ＳＤ３（第58図，第68図）

Ⅰ区南西隅からⅢ区西壁にかけて，中央区の北軸と平行して延びる環濠である。検出した長さは約20m，幅約３mで深さ約90cmである。大部分を遺構上面までの検出にとどめ，面的に掘り下げたのはⅠ区とⅡ区においてだけである。遺構の上面からは，弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器に混じって，獣骨類（イヌの顎骨など）が出土している。Ⅰ区西壁での土層の観察では，溝を掘り直したあとが伺え，下層からは弥生時代中期の土器が出土している。また，Ⅱ区では後述する弥生時代中期の包含層と切り合って検出している。この溝は出土遺物の状況などから，平成５年度に検出した４号溝および後述するＳＤ11につながるものと考えられる。

ＳＤ４（第61図）

Ⅷ区南壁際で検出した環濠で，南に向かって延びていく。確認できた長さは約2.6m，幅１m，最も深いところが約30cmで，ここから徐々に深くなるものと思われる。遺物は小片が多いものの，弥生時代中期の土器口縁部片が出土している。

ＳＤ５（第61図）

Ⅶ区南西隅から南に向かって伸び，次第に浅くなってⅧ区内で止まる。確認された長さは約14.3m，幅2.1m，最も深いところで約60cmで，弥生時代中期から弥生時代終末期の土器が出土している。溝の底に近いところから，竜の線刻画が描かれた弥生時代後期後葉～終末の小壺が出土している。ＳＤ４とＳＤ５はⅧ区内の近接した位置でそれぞれ止まっているが，東西に距離を置いて止まっており，これらの環濠の間が，弥生時代中期における台地への入り口のひとつであった可能性もある。周辺では複数のピット群が確認された。

ＳＤ６（第61図）

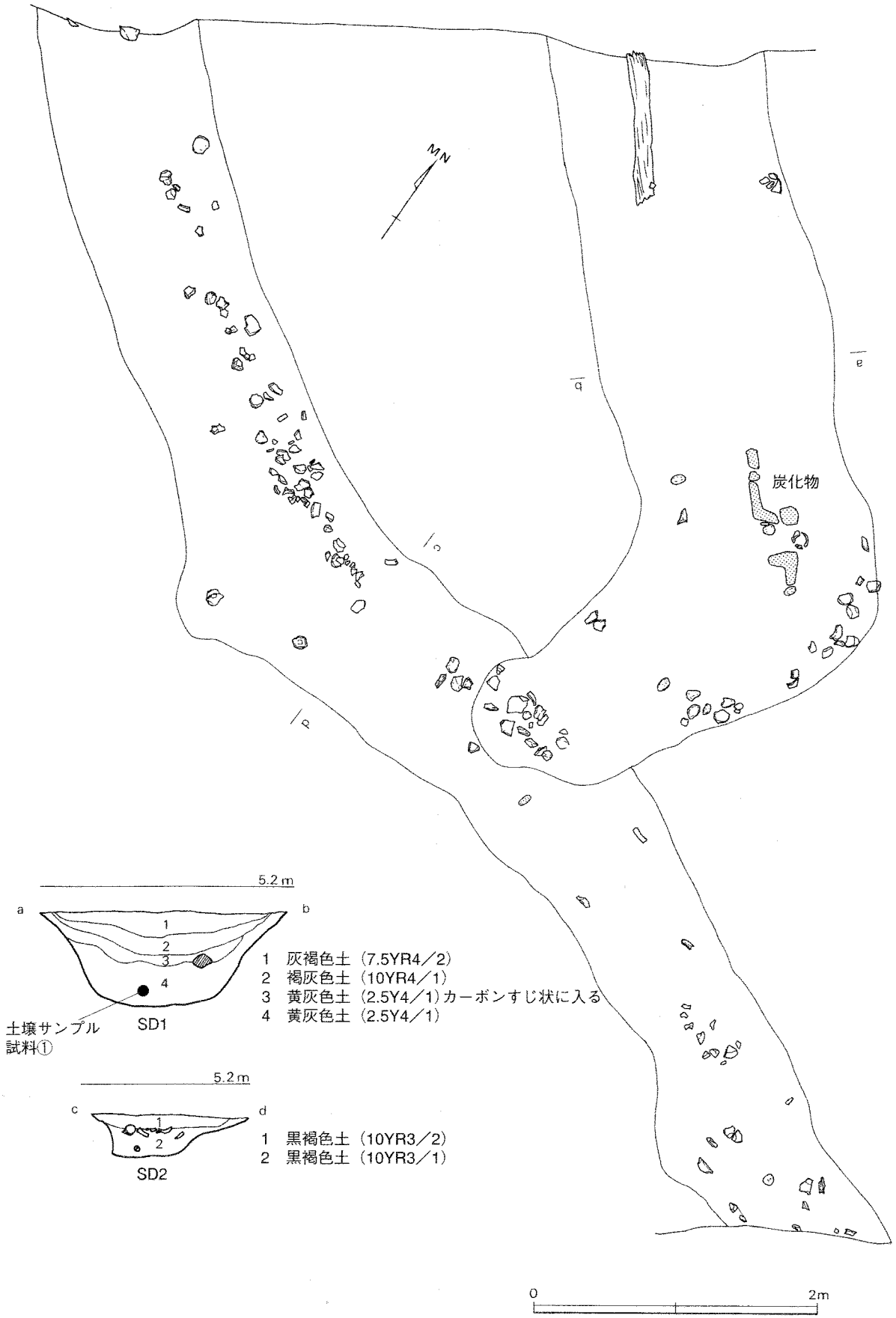
Ⅷ区西壁際で確認した。確認した長さは約７m，幅1.6m，最も深いところで約10cm程度で，細い杭が打ってあった。出土遺物はないが，この杭がＳＤ５の土層断面でも確認できることから，ＳＤ６と杭列が一連のものと考えれば，ＳＤ６の掘削はＳＤ５埋没後と考えられる。

ＳＤ７（第58図，第69図）

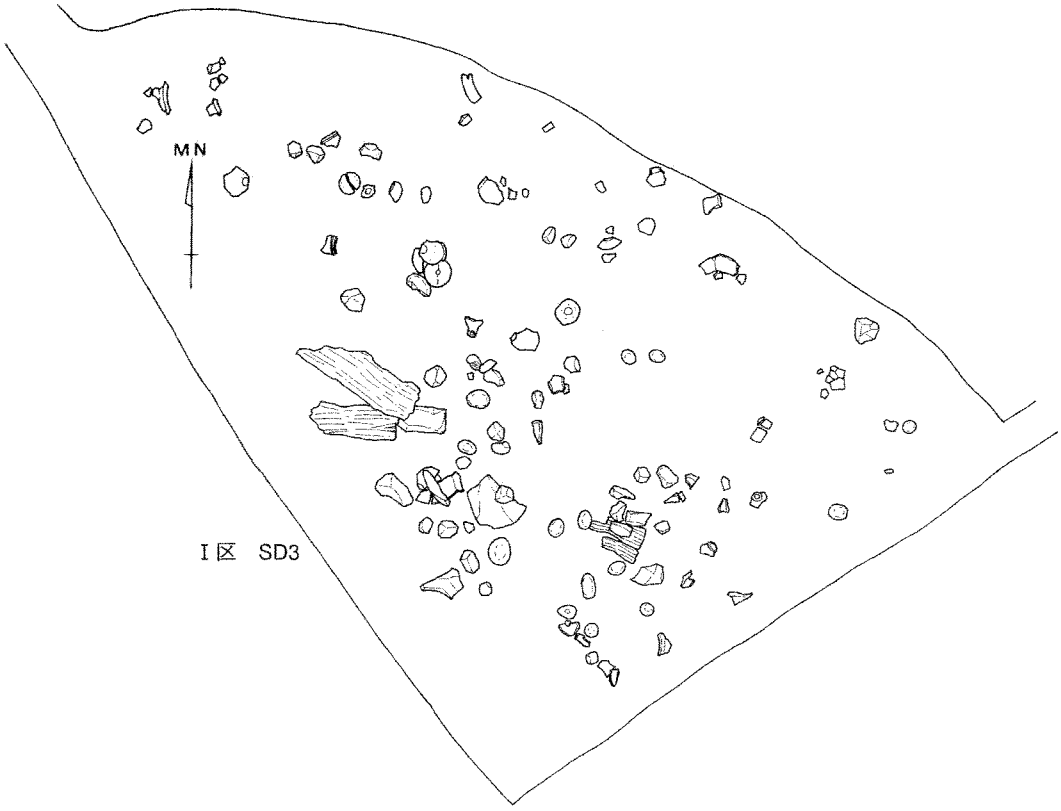
Ⅱ区～Ⅳ区の中央に南北にのびる環濠で，長さ約28mにわたって検出した。この環濠はⅠ区では検出されず，Ⅰ区とⅡ区を分ける土層観察用ベルトで止まるものと考えられる。この環濠も面的には掘り下げず，Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区でそれぞれ幅１mから1.5mのサブトレンチを設定し，土層の観察と遺物の取り上げを行った。Ⅱ区北壁際は，地山の白灰色粘土層を堀込んで幅約2.2m，深さ約95cmにわたって掘削しているが，Ⅱ区中央の東西トレンチ部分では，弥生時代中期の包含層である黒褐色粘土を堀込んで構築されていた。この環濠は，Ⅲ区南壁際で二股に分かれ，ＳＤ８と南北に併走して南に延びる。Ⅲ区南壁沿いのサブトレンチ南北壁面の観察では，北壁で１本であったＳＤ７が南壁では２本に分かれており，ＳＤ７が分岐する状況が具体的に観察できる（第63図）。分岐した後，Ⅳ区になると溝は徐々に浅くなり，深さ約30cm程度になる。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が中心で，流木が多く見られるという特徴があった。

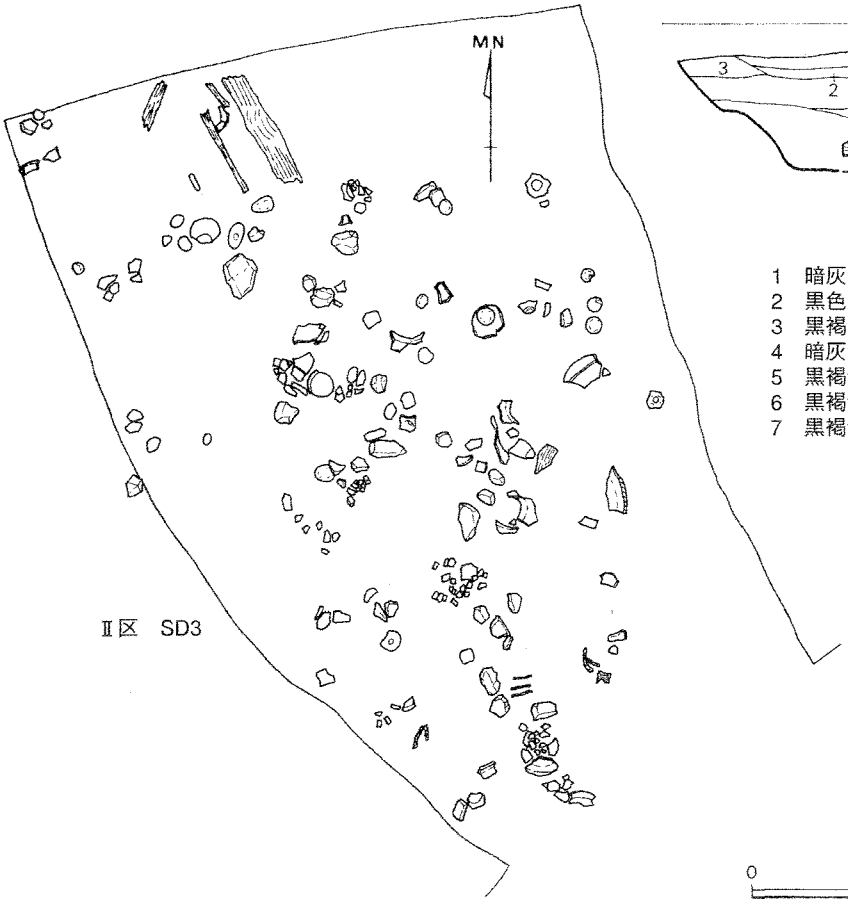
ＳＤ８（第58図）

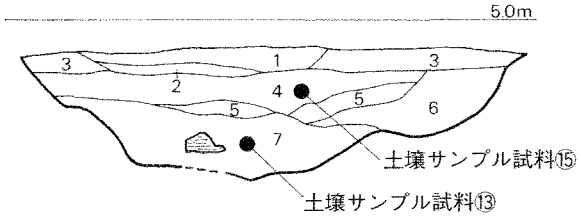
Ⅲ区とⅣ区を分ける土層観察用ベルト付近でＳＤ７から分岐し，南へ伸びていく。灰白色の地山を堀込んで遺構が構築されており，検出した長さは約8.2mで，幅2.6m，深さ1.1mとなる。Ⅳ区中央付近で幅約２mを掘り下げ，土層を観察した。トレンチ内の土層は，北壁では砂と粘土が交互に堆積する一方，南壁では腐植土と粘土を中心に堆積していた。わずか約２mしか離れていないにかかわらず，堆積状況が全く異なっており，複雑な堆積を繰り返したものと推測される。また，溝の堀直しのあとも確認された。出土した遺物はわずかであるが，時期を特定できる遺物として，弥生時代後期中葉の高坏片が出土している。なお，東側の掘り込みの際付近には，柵列とみられる杭列の跡が複数確認された。ＳＤ９・ＳＤ10とともに，道路状遺構に関連する遺構であると推測される。



第67図　ＳＤ１・２遺物出土状況及び土層図（１/40）



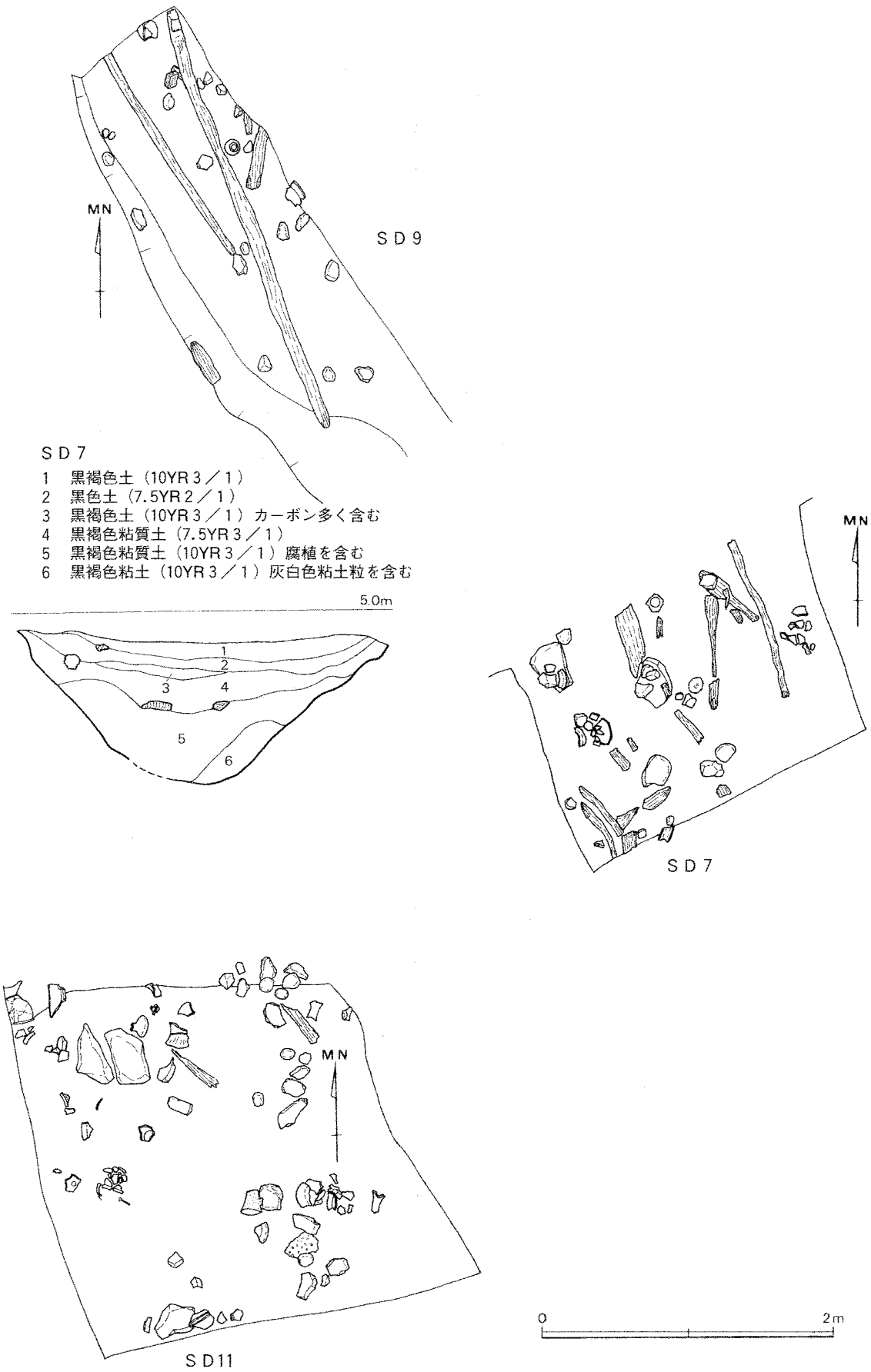




1	暗灰色土	N3／0
2	黒色土	N2／0
3	黒褐色粘質土	7.5YR3／1
4	暗灰色粘質土	N3／0
5	黒褐色砂層	10YR3／1
6	黒褐色粘質土	10YR3／1
7	黒褐色腐植土	10YR3／1

0　2m

第68図　ＳＤ３遺物出土状況及び土層図（１/40）



第69図　ＳＤ９・７・11遺物出土状況及び土層図（１/40）

ＳＤ９（第58図，第69図）

Ⅱ区の北東隅から調査区に平行に東壁際に長さ約17.5mを検出した。東側が壁に入り込んでいるため，溝の幅・深さを確認できない。南端はⅢ区南東隅でとまっているように見えるが，Ⅳ区で検出したＳＤ10とともに道路状遺構の側溝を形成しているので，大きく曲がって東に延びていく可能性もある。弥生時代後期後葉の土器と流木に混じって，柱材とおもわれる木製品も出土している。

ＳＤ10（第58図）

Ⅳ区の南東隅で灰白色の地山を堀込んだ形で，長さ約5.6m，深さ約1.3mを確認した。遺物はほとんど含まれず，土器小片が数点と敲石２点のみであった。ＳＤ９と同じく道路状遺構の側溝を形成していたと考えられ，溝の落ち込みの際のところに柵列を打ち込んだ穴を十数カ所確認した。

ＳＤ11（第60図，第69図）

Ⅵ区西壁で現れ，南に向かって延びる長さ約９ｍ，深さ約１ｍを確認した。面的な遺構の掘り下げは南壁際で遺物が出土した４層までを行った。上面には弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が多く出土した。土層を観察してみると，ここでも溝の掘り直しの状況が観察された。下層からは，弥生時代中期後半の土器や獣骨が出土している。この溝は平成５年度調査の４号溝，また本年度調査のＳＤ３につながるものと思われる。また，この溝はⅤ・Ⅵ区で検出した溝状落ち込みの腐植土を切るように掘られていた。

ＳＤ12（第58図）

Ⅰ区東側で，南北方向へ延びる溝約7.7m，深さ約10cmを検出した。Ⅱ区では検出できなかったので，北へ向かって延びる可能性が高い。遺物は少なかったが，弥生時代中期の土器片が出土している。

ＳＤ13（第58図）

Ⅰ区北壁から南東方向へ，約２ｍ，深さは約10cmと浅く，恐らく北東方向へ延びていくのだろう。遺物は弥生時代中期の土器片が出土している。

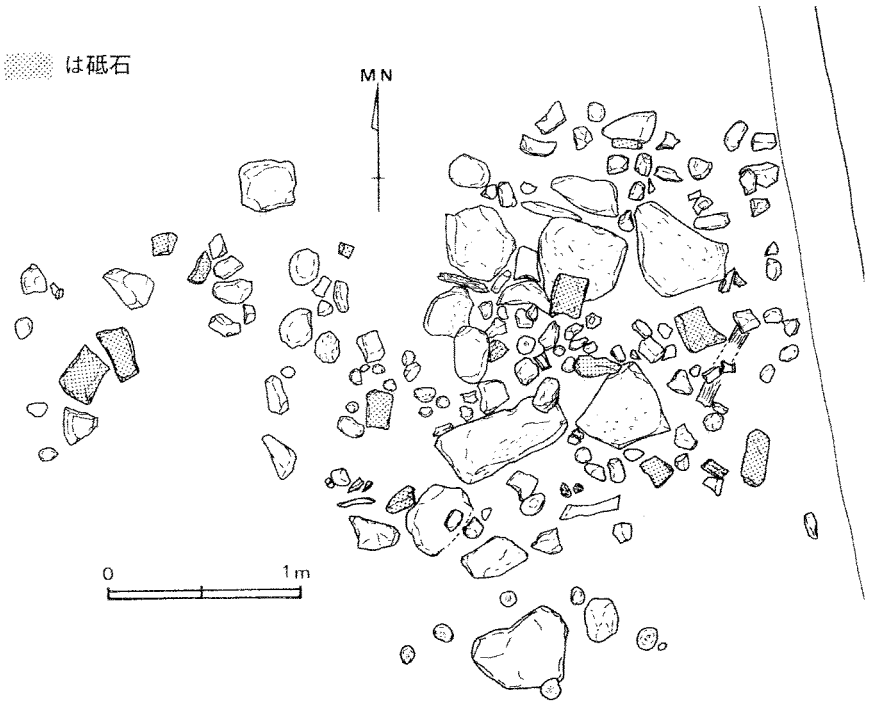
ＳＤ14（第60図）

Ⅴ区の溝状落ち込み状から分岐するかたちで検出し，溝は南東方向へ向かって伸びていくと思われる。明確に時期のわかる土器は出土しなかったものの，ＳＤ14で出土した机の脚部が，後述する溝状落ち込み内から出土していることや，ＳＤ14の覆土も，溝状落ち込みと同じく木質を多く含む腐植土であることなどから，ＳＤ14は溝状落ち込みと同じ時期に存在したと考えられる。

道路状遺構（第70図）

Ⅲ区からⅣ区にかけて検出した。今回検出した遺構は，平成５年度の調査で検出されていたものの西側の延長線上に位置する。ＳＤ９・ＳＤ10がそれぞれ途中で止まり，その間の地山（灰白色粘土）が道路状遺構の進入口になるものと考えられる。さらに道路はＳＤ８にぶつかり南に折れ，調査区外へと延びていく。ＳＤ10・ＳＤ８の堀込みの際に沿って小ピットが列状に並んでおり，道路状遺構に併走する柵列と考えられる。また，道路状遺構の中央部に幅約25cmの浅い溝や柵列とは異なる覆土のピットも複数確認されていることから，何らかの施設があった可能性もある。道路状遺構の調査区外での展開については，南側調査区のⅤ区・Ⅵ区では検出されていないことから，現在の農道付近から再び西へと進路をかえて，台地上に達するものと考えられる。

第70図　道路状遺構検出状況（1／40）



第71図　石敷き遺構検出状況（1/40）

溝状落ち込み（第60図）

Ⅴ区・Ⅵ区で検出した。調査区南側では灰白色の地山が確認されているので北へ向かって落ち込んでいく。出土遺物は弥生時代後期の土器が中心で，下層には木質を多く含む腐植土が厚く堆積していた。

Ⅴ区落ち込みの際の部分には，掘り込み部分に板を敷いて補強した井戸のような遺構も確認した。またこの遺構のそばには，脚部を取り口縁部を規則的に打ち欠いた高坏が出土していて，水に関連する何らかの祭りが行われた可能性も考えられる。

石敷き遺構（第60図，第71図）

Ⅵ区で溝状落ち込みが埋没した跡の覆土上層で検出した。長径約４ｍ，短径約３ｍの範囲に扁平な石が意図的に配置されていた。これらの石に混じって砥石が比較的多く出土し，銅鏃が３本出土している。これらのことから，ここが何らかの工房跡である可能性も考えられる。

杭列（第60図）

Ⅴ区で検出した。溝状落ち込みが埋没した後に打ち込まれている。東西方向に約６ｍを検出し，列の中央部は80cm程度空いていた。

貝層（第60図）

Ⅴ区の西壁際で検出した。長軸約２ｍ，短軸約１ｍ，厚さ約15cmの小規模な貝層である。貝殻は小片化しており，貝層の残りはあまりよくない。貝層内からは貝類のほか，魚骨・植物種子を中心に多量の自然遺物が出土している。なお，自然遺物の同定を奈良文化財研究所の松井章氏に依頼し，玉稿を賜った。詳細については後述の付編を参照していただきたい。

古墳時代の落ち込み（第60図）

Ⅵ区北側で検出した。北壁から２ｍだけ掘り下げたので全体的な広がりは確認できなかったが，Ⅴ区西壁では，この落ち込みの覆土と思われる粘土が浅く堆積するのみなので，そこまで大きくは広がらないと思われる。北壁の土層で見ると，溝状落ち込みの最下層の腐植土を切るようにこの落ち込みの覆土が堆積している。流木や木製品も大量に含まれ，出土遺物は古墳時代前期の土器が中心であったが，三韓系瓦質土器や陶質土器といった韓半島系の土器をはじめ，６世紀後半の須恵器も１点出土しており，長い期間にわたって利用されていた状況が伺える。

(4) 遺　物

①土器

ここでは，遺構出土土器を中心に紹介する。なお，掲載した土器については観察表をつけたので，併せて参照願いたい（表７）。

ＳＤ１出土土器（第72図）

１は，袋状口縁壺の口縁部である。頸部は比較的締まり，折り返した口縁部は直線的である。端部は丸く収めている。２は，小型丸底壺の口縁部片である。丸みを持った胴部がいったんくびれ，やや内湾気味に口縁が立ち上がる。口縁端部は尖り気味である，胴部内面はケズリの痕跡残す。３は袋状口縁壺の口縁部であろうか。口縁部はあまり内傾せず，頸部のくびれも弱い。これらの土器は，弥生時代後期前葉～古墳時代初頭に相当する。

ＳＤ２出土土器（第72図）

４・５は逆Ｌ字状口縁の甕である。いずれも口縁部が内面にわずかに突出し，口縁の付け根から端部にかけて徐々に厚みを減じ，端部を丸く収める点で共通するものの，４の口縁上面が水平であるのに対して，５の口縁上面がややたちあがる点が異なる。６は甕の底部である。底部は薄く，底部から胴部への立ち上がりも直線的である。７は壺である。頸部から口縁部を欠損する。底部の径は大きいが厚みは薄く，外側にやや踏ん張り気味である。胴部中位に最大径を有し，徐々に内傾しながら頸部へと移行する。これらの土器は，弥生時代中期中葉～後期初頭の土器である。

ＳＤ３出土土器（第72図，第73図）

８～９は逆Ｌ字状口縁の甕である。８は口縁上面が丸みを持ち，内面にやや突出する。口縁から胴部にかけてはややふくらみを持つ。９・10は口縁が内面に突出しないタイプで，9の口縁上面は平坦であるのに対して10の口縁上面は丸みを持ちやや外傾する。11～13は蓋である。11は甕に伴う蓋で，上面からややくびれてラッパ状に裾が広がる。12・13は小型の短頸壺に伴う蓋で，いずれも背が低く，左右対称に２孔ずつ有する。外面丹塗りである。14・15は小型の短頸壺である。いずれも外面丹塗りである。14は口縁部がやや内傾し，胴部最大径を下半部に持ちやや内湾気味に底部にいたる。15は口縁部がより立ち上がり，胴部最大径も中位～上位にあがっている。底部は据わりが悪く，凸レンズ状平底である。16は短頸壺の口縁部であろうか。底部～胴部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面は丹塗りである。17～19は鉢である。17は丸底の底部から丸みを持って胴部にいたり，わずかにくびれて口縁部が短く外反する。18はやや尖り気味の丸底で，胴部最大径を上位に持ち，口縁部は長く立ち上がりも直立に近くなる。19は凸レンズ状の平底で，胴部上半に最大径を持ち，口縁部が短く立ち上がる。体部中央には外面からの穿孔が認められる。20は脚付きの鉢であろうか。脚部はラッパ状に広がる。21～23は甕である。21は口縁部が直立に近く，底部は平底であるが非常に厚みがある。内面には指頭圧痕が顕著で，粗雑な作りである。22は口縁が直立に近く胴部も長胴で，底部も凸レンズ状となる。23は布留系の甕である。口縁にはやや内湾し，端部はやや丸みを帯びる。内面は横方向のケズリが顕著である。24は袋状口縁の壺である。比較的短い頸部から口縁部が丸みを持って内傾し

ている。

以上，ＳＤ３の土器は弥生時代中期～古墳時代前期まで幅があるものの，弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式と弥生時代終末～古墳時代初頭の２時期にまとまっている。

ＳＤ５出土土器（第74図）

25～27はいずれも甕である。25・26はいずれも逆Ｌ字状口縁で，口縁上面は25がほぼ水平で，26はやや内傾している。口縁部の厚みは25はほぼ一定であるのに対して26は付け根から先端にかけて徐々に薄くなり，端部は丸く収めている。26の口縁下には低い三角突帯が１条めぐる。27はくの字形口縁の甕で，胴部には張りがある。胴部中央には内面からの穿孔が認められる。これらの土器は，弥生時代中期中葉～後葉と弥生時代後期中葉に相当する。

ＳＤ７出土土器（第74図）

28は甕である。くの字形の口縁で胴部には張りがある。29は壺で，球胴状の胴部にラッパ状に開く口縁を持つものである。これらの土器は，弥生時代後期中葉～後葉に相当する。

ＳＤ８出土土器（第74図）

30は高坏で，浅めの坏部から直立気味に外反しながら口縁が立ち上がる。31は鉢で，平底の底部から緩やかに外反しながら胴部へと立ち上がる。32は高坏の脚部である。裾にかけてラッパ状に広がる形態である。これらの土器は，弥生時代後期前葉～中葉に相当する。

ＳＤ９出土土器（第74図）

33は壺である。球胴状の胴部にラッパ状に開く口縁がつく。底部は凸レンズ状の平底である。34は小型の短頸壺で，底部は丸底で最大径を胴部中位に持ち，口縁部の立ち上がりは直立に近い。35は鉢である。平底の底部から内湾気味に胴部が立ち上がる。これらの土器は弥生時代後期中葉～後葉に相当する。

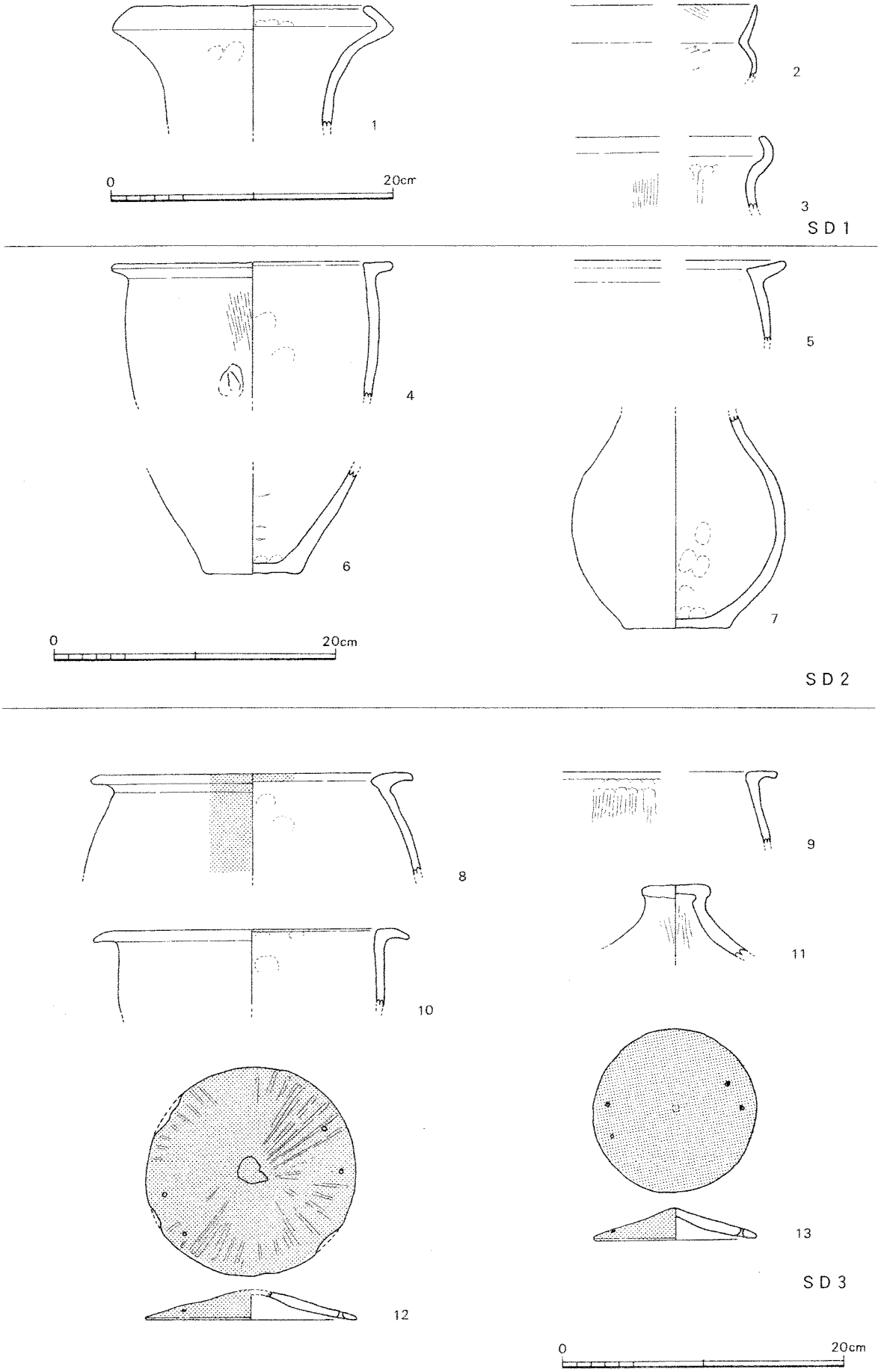
ＳＤ11出土土器（第75図）

36は逆Ｌ字状口縁の甕である。下膨れ気味の胴部に幅広の底部がつく。口縁は内面にわずかに突出し，上面は丸みを帯びてやや外傾する。内外面ともに丹塗りが施される。37は甕である。直立気味の口縁で胴部は張りがなく長胴となる。38は山陰系の二重口縁壺である。口縁部は外傾気味で，付け根には明瞭な突出部を持ち，短い頸部からなだらかに胴部へと移行する。胴部内面には横～斜め方向のケズリ痕が顕著である。39は鉢である。平底で緩やかに内湾しながら胴部が立ち上がり，やや開き気味に口縁へといたる。最大径は口縁部にある。40は高坏で，坏部が深く口縁部はやや外反する。36は弥生時代中期末に，ほかは後期後葉から古墳時代前期に位置づけられる。36は下層出土,38が崩落土出土でほかは上層出土土器である。

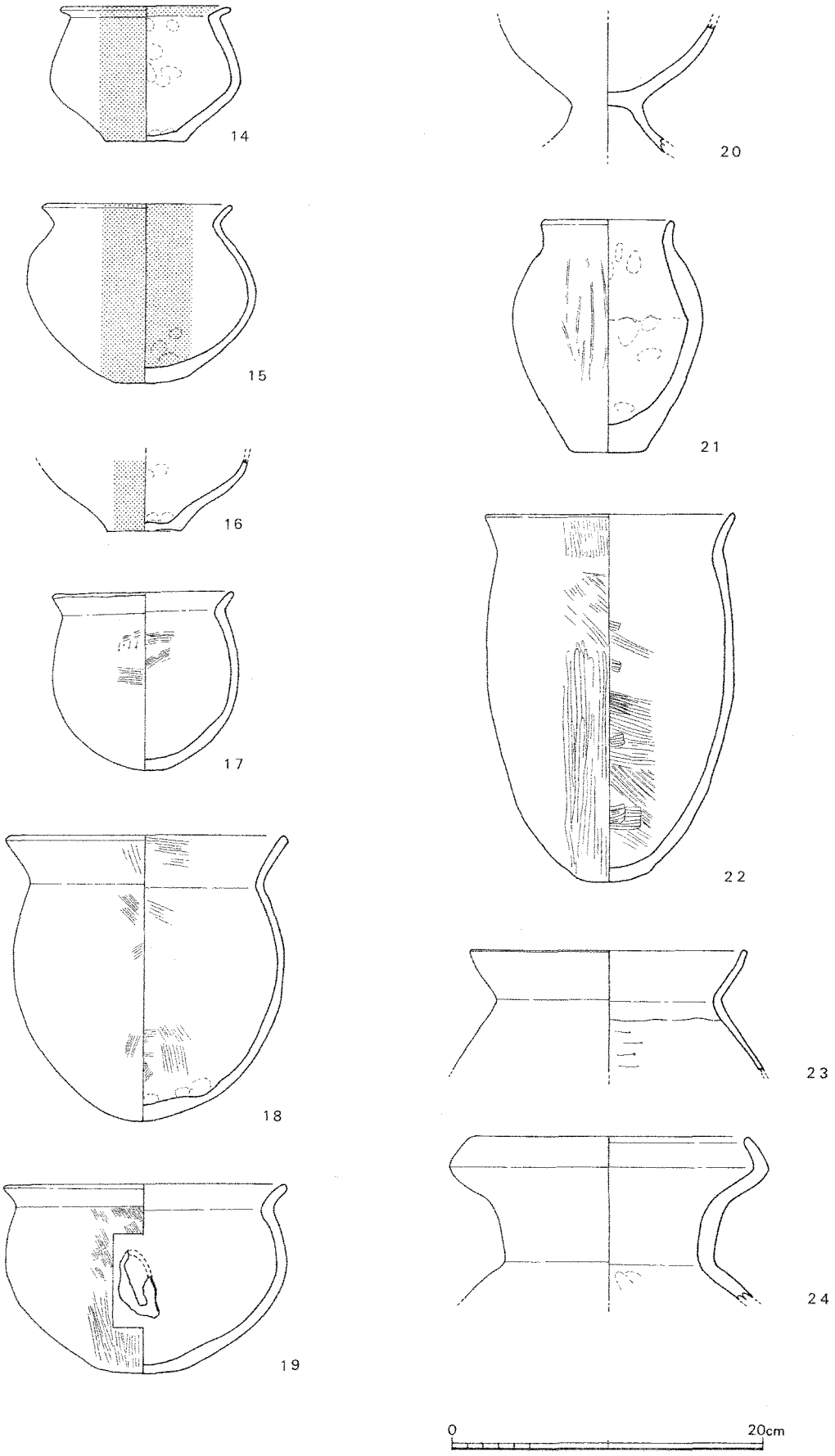
ＳＤ12出土土器（第76図）

41・42は甕である。41は底部で薄手の平底である。42は口縁部で，上面が水平で付け根から先端部にかけて徐々に厚みを減じ丸く収めている。これらの土器は弥生時代中期中葉である。

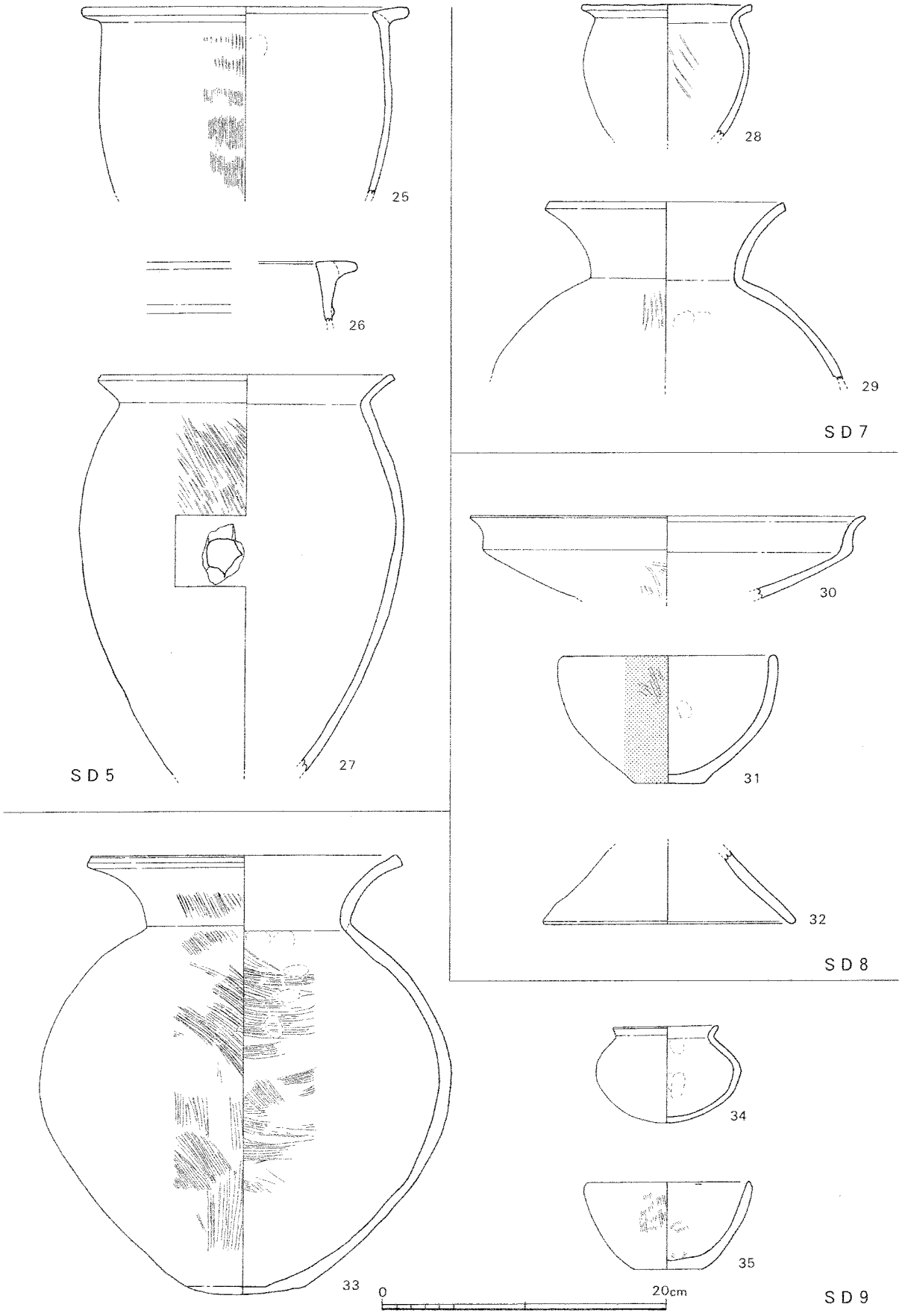
ＳＤ13出土土器（第76図）



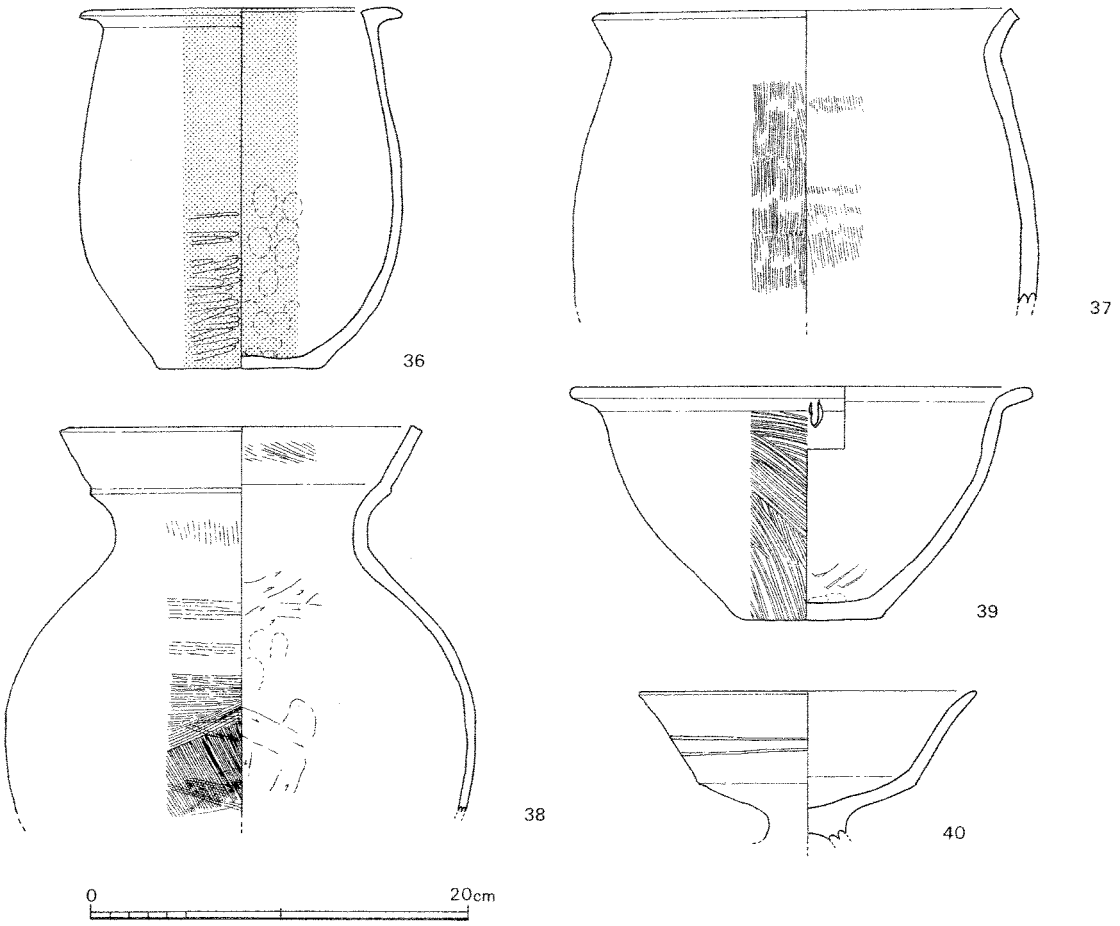
第72図　ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３出土土器(1)（１/４）



第73図　ＳＤ３出土土器(2)



第74図　ＳＤ５・ＳＤ７・ＳＤ８・ＳＤ９出土土器（1/4）



第75図　ＳＤ11出土土器（1/4）

43・44は甕の口縁部である。61は上面が丸みを帯び端部がやや外傾する。44は上面がほぼ水平で，内面にやや突出し，厚みもほぼ一定である。端部に浅い刻みを有する。45は鋤先状口縁の壺である。上面はややくぼみ，内面に大きく突出する。端部は丸みを帯びているこれらの土器は，弥生時代中期後葉に相当する。

Ⅰ～Ⅳ区中期包含層出土土器（第76図）

46・47は逆Ｌ字状口縁の甕である。46の口縁は内面にやや突出し，端部は外傾する。47の口縁も内面に突出するが，上面は水平である。口縁下に低い三角突帯を持つ。48～50は小型の短頸壺である。いずれも左右対称に２孔ずつ有し，48・50には丹塗りの痕跡が残る。口縁部はいずれもややくの字状に立ち上がり，底部は48・49がやや上げ底,50は平底である。49には内面からの穿孔が認められる。51・52は蓋である。左右対称に２孔ずつ有しており，48～50のような小型短頸壺に対応するものであろう。いずれも外面に丹塗りの痕跡を残す。53は鉢である。直立気味の口縁から胴部にかけてややすぼまり，底部付近でいったんくびれて底部にいたる。底部内面は入念に指おさえされ，胴部との間に明瞭な段が認められる。54は突帯文系の甕である。如意状の口縁で端部に刻みが施され，口縁部から

やや下位に刻目突帯が一条巡る。刻みの間隔は密で，突帯の付け根は横ナデで整えられている。これらの土器は54をのぞき弥生時代中期後葉に相当する。54は前期後葉まで遡るもので，後述する大溝関連遺物と同時期と考えられることから，大溝からの混入の可能性を指摘しておく。

大溝関連遺物（第76図）

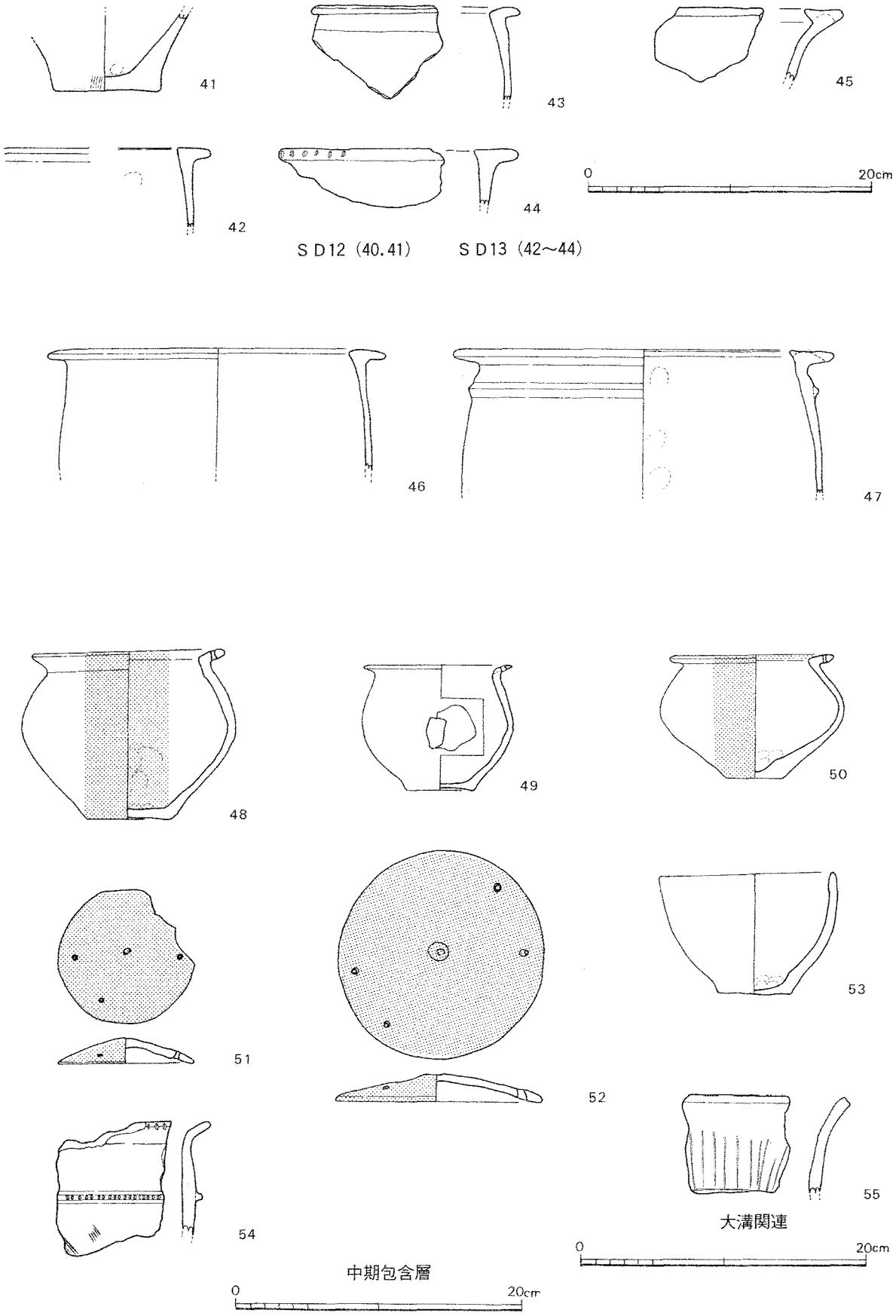
平成５年度の調査で検出した遺構で，本年度調査区のⅢ区～Ⅳ区の西隣に位置する大溝と関連する遺物である。本年度調査区Ⅳ区では，西壁沿いで淘汰の悪い腐食土層が検出され，この大溝最下層の堆積物との関連が想定された。この腐植土層から出土したのが55である。胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部は面取りされている。口縁下から胴部にかけて縦方向の刷毛目もしくはヘラ描き様の浅い沈線が数条認められる。この土器は弥生時代前期末の土器と考えられ，時期的にも大溝最下層出土土器と一致する。

Ⅷ区落ち込み出土土器（第77図）

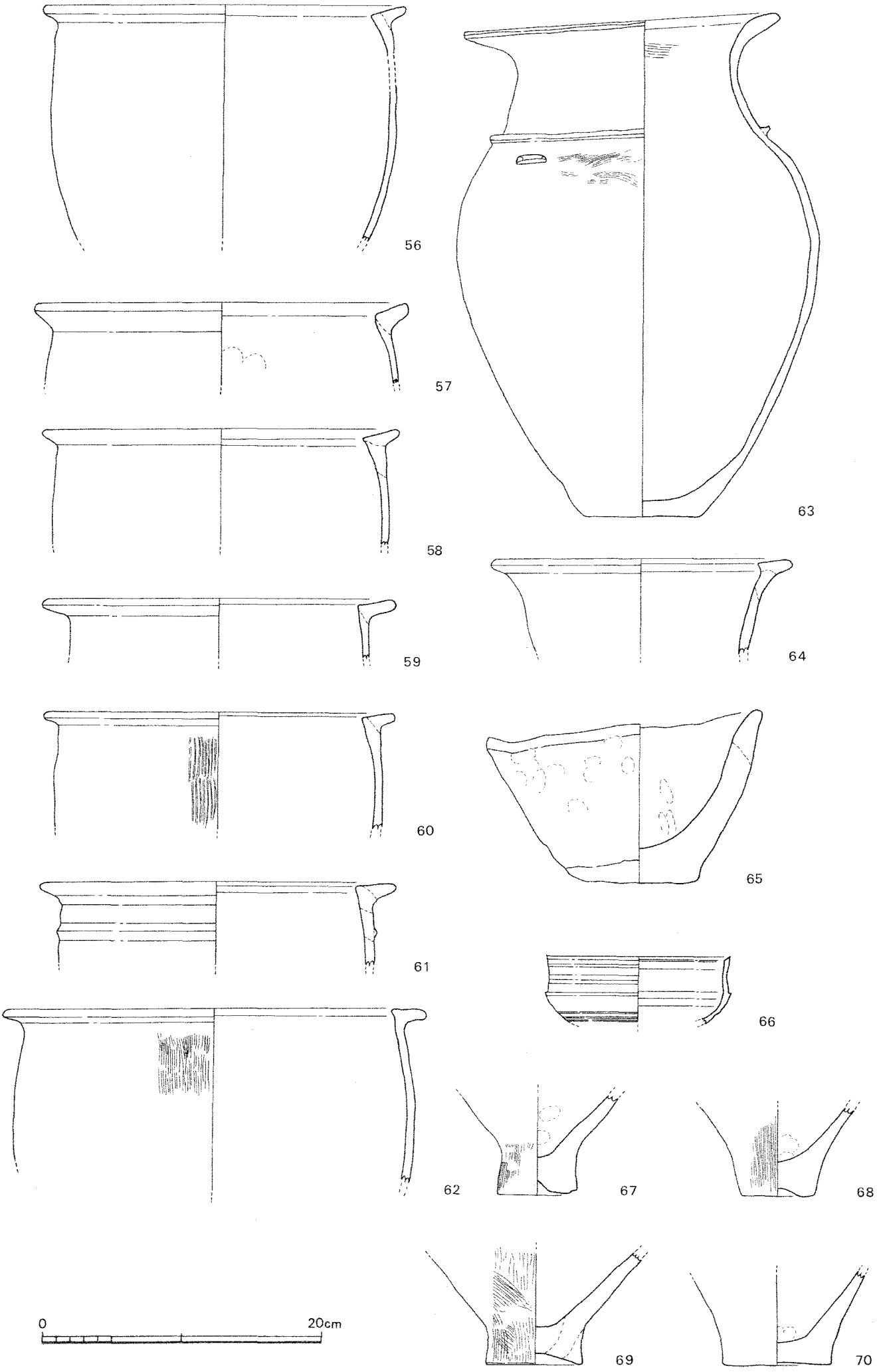
56～62は逆Ｌ字状口縁を持つ甕である。口縁部の特徴から，口縁が内傾して内面への突出が認められず，口縁の付け根から端部に向けて徐々に厚みを減じる56・57・59・60と，同様に口縁が内傾して内面への突出が認められる58・61，および口縁上面が水平になり，口縁部の厚みもほぼ一定となる62に分けられる。また，56は胴部がやや張るものの，他はすべて砲弾形の胴部になるものと思われる。61には口縁部下に浅い三角突帯を持つ。63・64は壺である。63の口縁は，上面がやや面取りされており，鋤先状口縁の名残をとどめる。頸部の付け根には突帯を持つが，その下にも短い突起を有する。本来２条の突帯が付されていた可能性も考えられるが，明確な貼り付け痕が確認できず，部分的な突起と判断した。64は鋤先状口縁の壺で，口縁上面はやや内傾し，内面にやや突出している。65は手ずくねの鉢である。内外面ともに指頭圧痕を有し粗雑な作りである。器形もいびつで非常に厚手である。内面から外面にかけて黒斑を持つ。66は須恵器の坏である。受け部が外側にわずかに突出し，立ち上がりは長く，直立気味である。５世紀後半のものである。67～70は甕の底部である。67は厚手で細く締まっており，くぼみ底となる。68・69も同様であるが，67に比べて底部のしまりがゆるんでいる。70は厚みが薄くなりわずかに上げ底になる。これらの土器は，66をのぞいて弥生時代中期前葉～後葉までの土器を含む。５世紀後半の須恵器は原の辻遺跡ではほとんど出土例がなく，近隣の大塚山古墳との関連で注目される。

Ⅴ区溝状落ち込み出土土器（第78図）

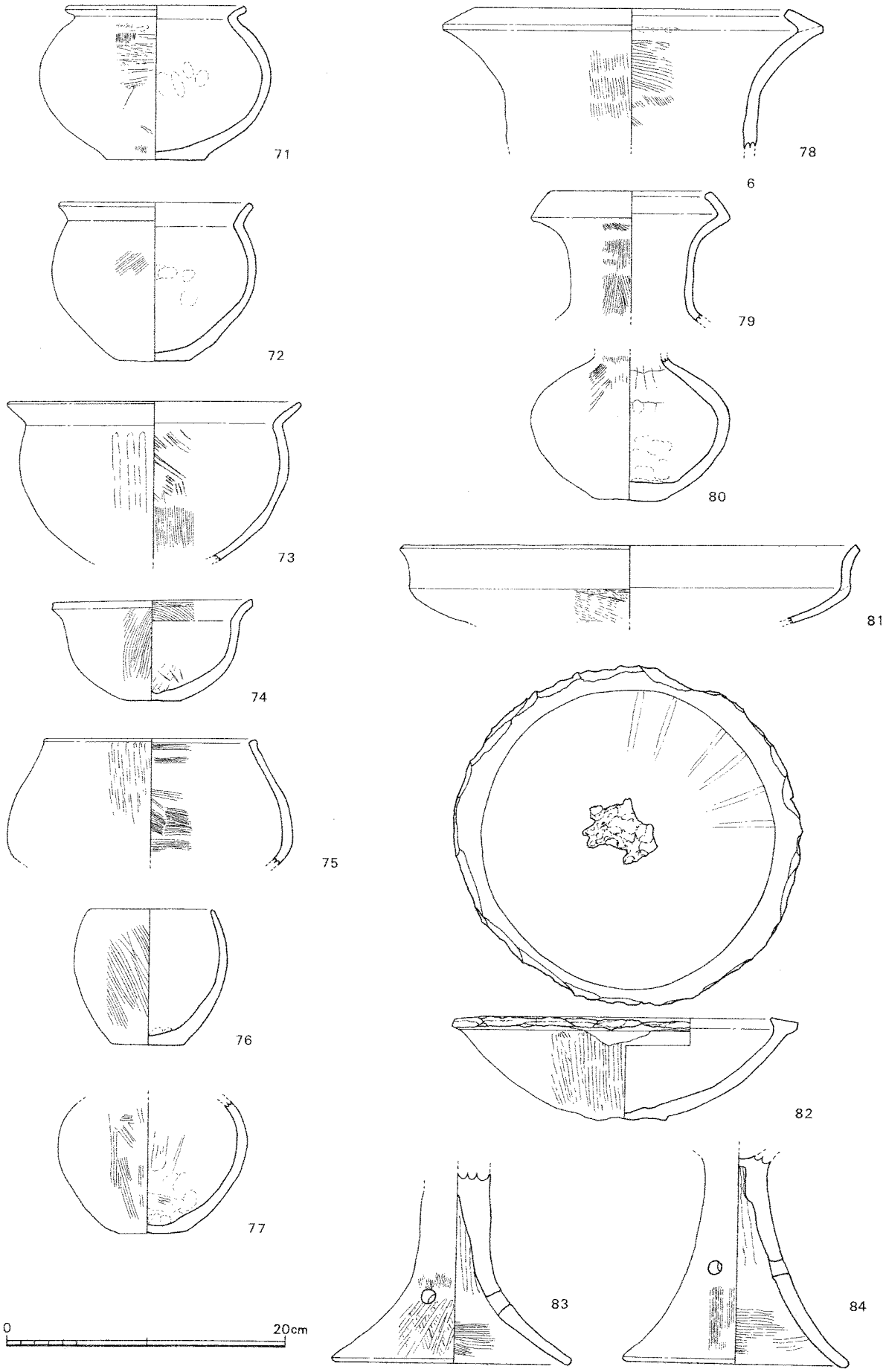
71～74は鉢である。71は器高が低く，胴部がよく張って短く外反する口縁がつく。72は器高がやや高くなり，口縁の立ち上がりもよりきつくなる。73は胴部があまり張らず，口縁部の付け根でわずかにくびれて口縁部にいたる。74は口縁部付け根のくびれも不明瞭となり，内面に屈曲部の稜を残すのみとなる。75は豊前系の高坏の坏部であろうか。下膨れの胴部からそのまま内傾して口縁部にいたる。76は小型の鉢である。平底の底部から内湾気味に立ち上がり，ややすぼまって口縁部にいたる。77・80は壺の胴部である。いずれも平底で最大径は胴部のやや上位にある。78・79は袋状口縁の壺である。78は太めの頸部で口縁部はきつく内傾する。79の頸部は比較的細く締まっており，口縁部の立ち上が



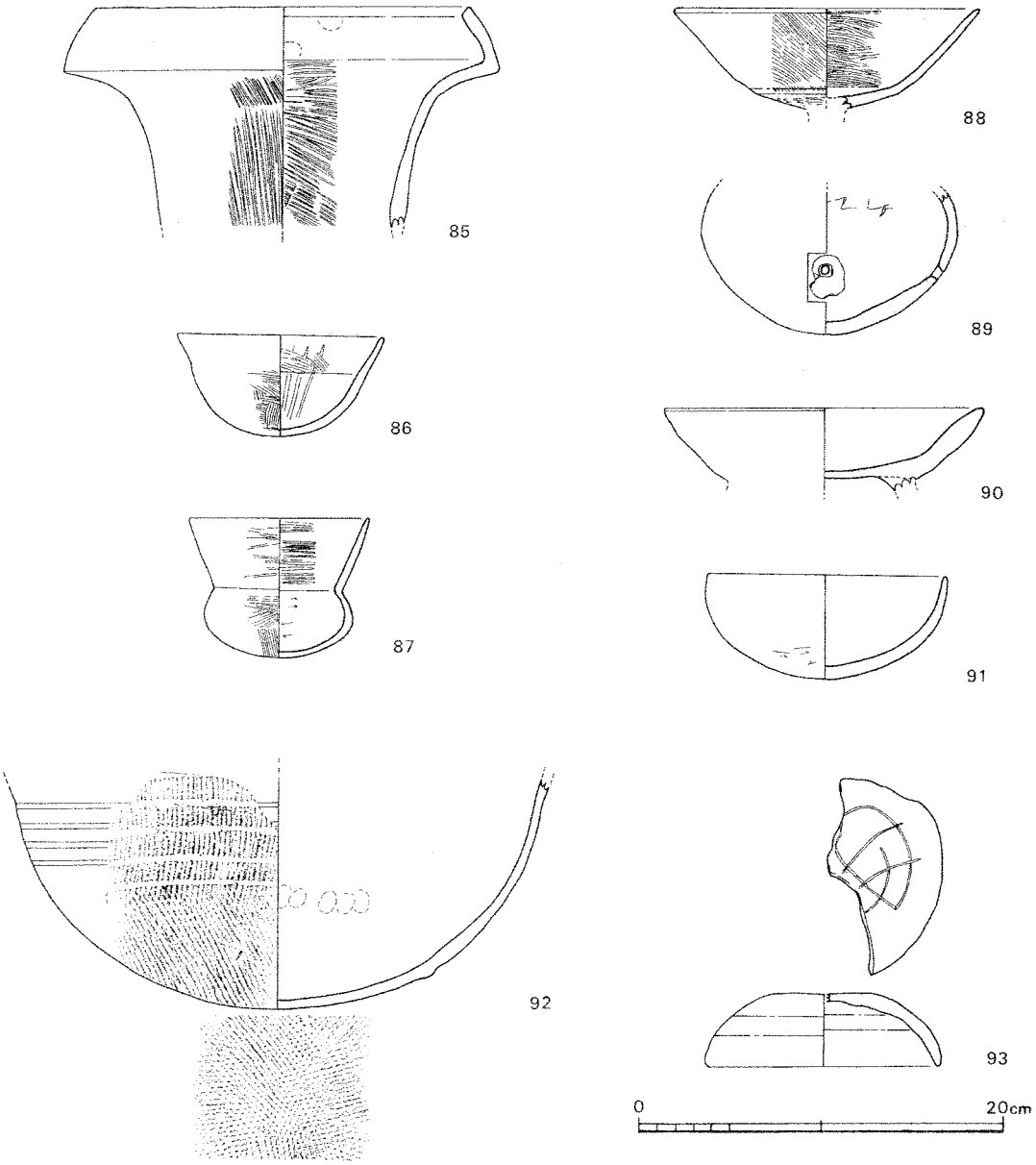
第76図　SD12・SD13・Ⅰ～Ⅳ区中期包含層・大溝関連出土土器（1/4）



第77図　Ⅷ区落ち込み出土土器（1/4）



第78図　Ⅴ区溝状落ち込み出土土器（1/4）

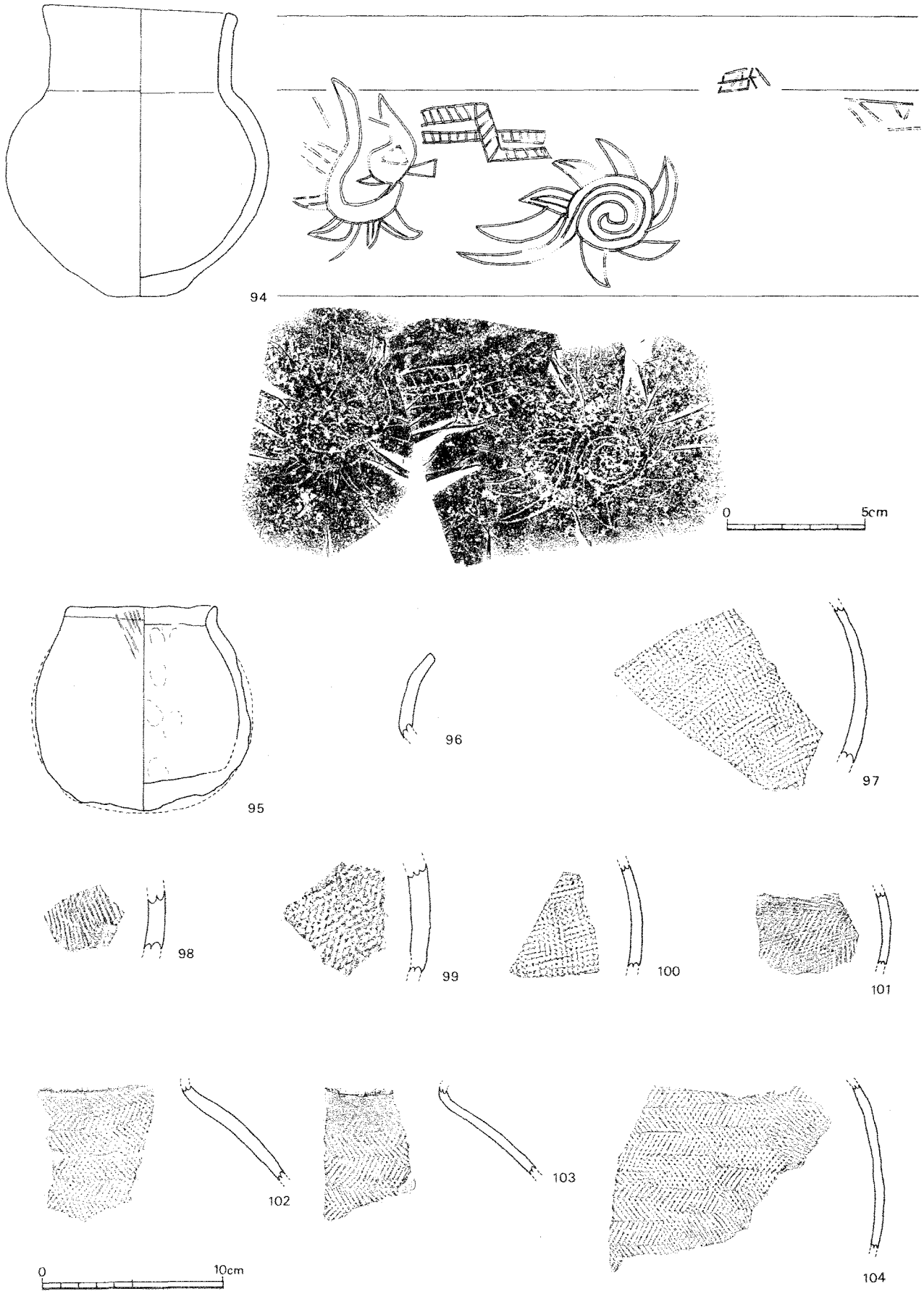


第79図　Ⅵ区古墳時代前期落ち込み出土土器（1/4）

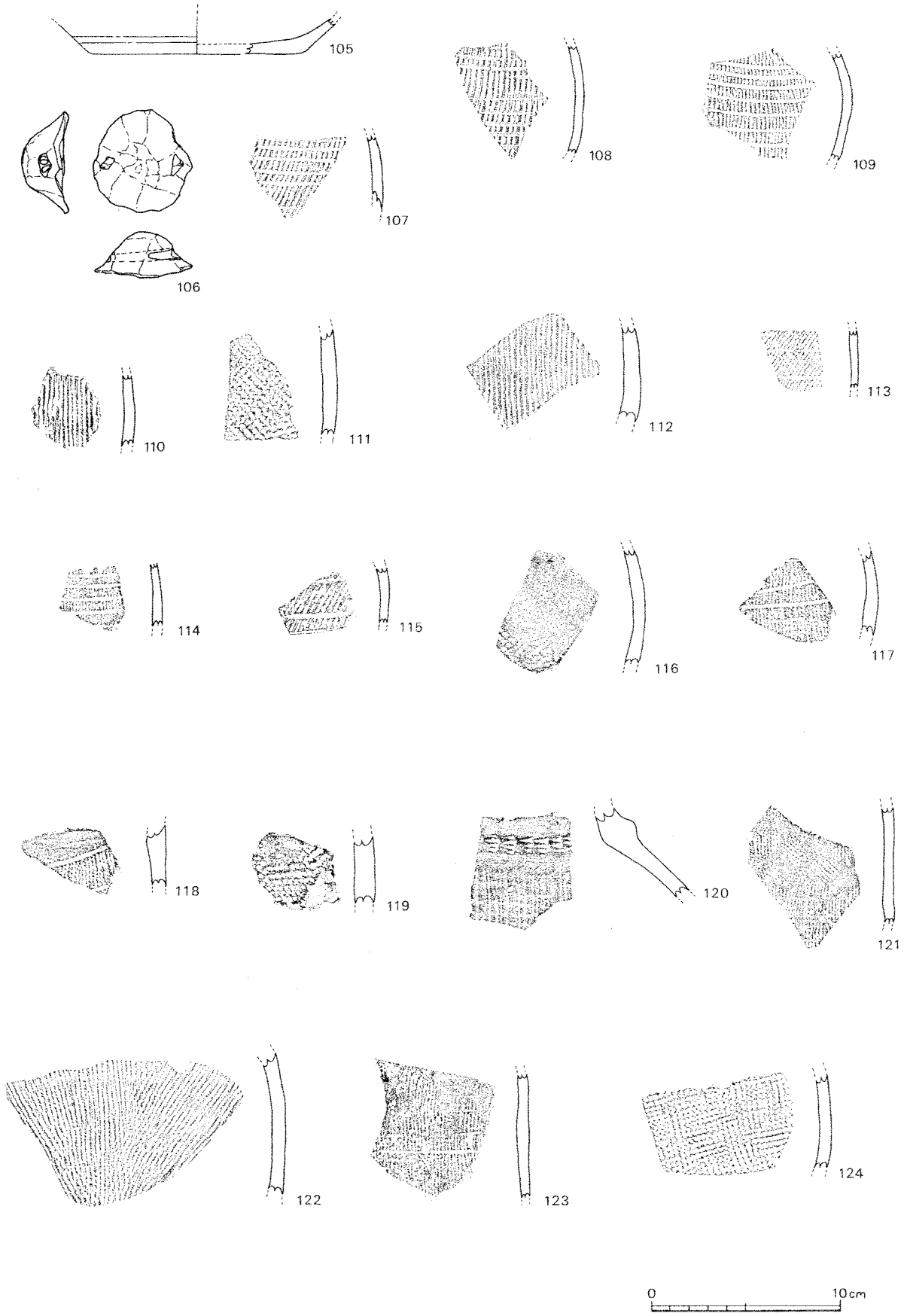
りはより直立に近い。81は高坏である。浅めの坏部で，口縁部は直立気味に外反しながら立ち上がる。82は鋤先状口縁の高坏であるが，口縁端部を荒く打ち欠き，脚部を意図的に折り取って，内面には敲打痕を有する。Ⅴ区の溝状落ち込み南側で検出した板敷きの土坑の肩部に裏返した状態で配置されていたものである。83・84は高坏の脚部である。いずれも裾に向けてラッパ状に広がり，脚部には3孔を有する。これらの土器は，弥生時代後期前葉～後葉にかけての時期に相当する。

Ⅵ区古墳時代前期落ち込み出土土器（第79図）

85は袋状口縁の壺である。細く締まった頸部が急激に外半し，やや直立気味の口縁にいたる。86・87は小型丸底壺である。86は胴部と口縁部の区別が不明瞭で，内面にわずかに稜として残るのみである。87は口縁部が長くのび，胴部内面にはヘラケズリの痕跡を残す。88は高坏である。坏部は深く口



第80図　その他の出土土器及び半島系土器(1)（94は１／２，95～104は１／３）



第81図　半島系土器(2)（2/3）

縁部が長くのびる。89は壺の胴部であろうか。丸底で最大径は胴部のやや上位にある。胴部下半よりに外側からの穿孔が認められる。90は土師質土器であろうか。薄手の底部から厚みを持って口縁部まで立ち上がる。底部には幅広の高台の痕跡をとどめる。轆轤による回転ナデ調整の痕跡を残す。91は土師器の坏である。丸底でやや内湾気味に立ち上がる。外面底部付近には横方向のヘラケズリの痕跡を残す。93は須恵器の蓋である。平坦な天井からやや丸みを帯びて裾にいたる。天井部には格子目状のヘラ描き沈線がある。92は陶質土器である。丸底の壺底部と考えられ,4条の螺旋状沈線が確認できる。外面には縄目の叩きが顕著で，叩きの方向は沈線付近は縦方向であるのに対して，沈線以下は斜め方向の叩きとなり，底部では重なり合って部分的に格子目状となる。焼成は非常に堅緻である。これらの土器は，弥生時代後期後葉～古墳時代後期（６世紀末）に相当する。

その他の土器（第80～81図）

94はＳＤ５から出土した小型壺で線刻絵画土器である。線刻は胴部を一周していたものと考えられるが，約１／４ほど剥落している。２匹の竜と見られる線刻と，これらを繋ぐように梯子状のモチーフが縦横にのびる。この梯子状の文様は摩滅が著しいものの，部分的に頸部付近で散見される。時期は凸レンズ状の平底となる底部の特徴から，弥生時代後期後葉～終末と考えられる。95は短頸壺である。胴部以下表面の剥落が著しいが内面には指頭圧痕を残し粗雑な作りである。朝鮮半島の無文土器の系統であろうか。96～124は韓半島系もしくは楽浪系と考えられる土器をまとめた。明確に楽浪系と認識できる土器は96・105のみで，他は三韓系瓦質土器との区別が困難である。特徴的なものとしては，同一個体と考えられる101～104で，綾杉状の叩きが表面に認められる。内面は横方向のケズリ調整である。また,120は頸部の付け根に三角突帯を有し，この突帯上に３つ単位の三角刺突文が施されている。胴部には縦方向の浅い沈線が確認できる。

表７　石田高原地区出土土器観察表

遺物番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法	備考
1	SD1・Ⅰ	壺	にぶい黄橙 10YR 7/2		石英・長石	口縁部	風化により不明	
2	SD2・Ⅰ	鉢	灰黄 2.5Y 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/4	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで 内：ケズり，なで	
3	SD2・Ⅰ	壺	橙 7.5YR 6/6		石英・長石	口縁部片	外：はけめ，なで 内：なで	
4	SD2・Ⅱ	甕	灰黄褐 10YR 6/2		石英・長石	口縁部片～胴部片	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで，指おさえ	
5	SD2・Ⅰ	甕	にぶい褐 7.5YR 5/4		石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
6	SD2・Ⅰ	甕	灰黄 2.5Y 7/2		石英・長石	底部	外：なで 内：なで，指おさえ	
7	SD2・Ⅰ	壺	にぶい黄橙 10YR 6/3		石英・長石・金雲母	底部～胴部	外：なで 内：なで，指おさえ	
8	SD3	甕	明赤褐 5YR 5/6		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面共なで	丹塗り有り
9	SD3	瓮	浅黄橙 10YR 8/3		石英・長石	口縁部片	内外面共なで	
10	SD3	甕	にぶい黄橙 10YR 7/2		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで 内：なで 指おさえ	
11	SD3・Ⅰ	瓮	灰黄 2.5Y 6/2		石英・長石・金雲母	頸部	外：はけ目，なで 内：なで	
12	SD3	壺	にぶい黄橙 10YR 7/3		石英・長石・金雲母	頸部欠損	外：なで 暗文 内：なで	丹塗り有り
13	SD3	蓋	にぶい橙 7.5YR 7/4		石英・長石・金雲母	完形	内外面共なで	丹塗り有り
14	SD3	蓋	にぶい黄橙 10YR 7/3		石英・長石・金雲母	口縁部～底部	外：なで 内：なで 指おさえ	丹塗り有り
15	SD3	壺	灰黄褐 10YR 6/2		石英・長石	口縁部～底部	外：なで 内：なで 指おさえ	丹塗り有り
16	SD3	鉢	明褐灰 7.5YR 7/2		石英・長石・砂粒	底部	外：なで 内：なで 指おさえ	丹塗り有り
17	SD3・Ⅰ	鉢	灰黄 2.5Y 7/2		石英・長石	完形	外：ケズり はけめ なで 内：はけめ なで	
18	SD3	甕	褐灰 10YR 6/1		石英・長石・雲母	口縁部～底部	外：はけめ なで 内：はけめ，なで，指おさえ	
19	SD3・Ⅰ	鉢	灰黄 2.5Y 7/2		石英・長石	ほぼ完形	外：はけめ，なで 内：なで	穿孔有り
20	SD3	台付甕	灰黄 2.5Y 7/2		石英・長石	脚部～胴部	内外面共なで	
21	SD3	壺	橙 7.5YR 7/6		石英・長石	口縁部～底部	外：はけ目，なで 内：なで，指おさえ	
22	SD3・Ⅰ	甕	灰黄 2.5Y 6/2		石英・長石・金雲母	口縁部～底部	外：けずり，はけめ，なで 内：はけめ，なで	
23	SD3・Ⅰ	甕	にぶい褐 7.5YR 5/4		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：なで うち：けずり，なで	
24	SD3・Ⅰ	壺	灰黄 2.5Y 7/2		石英・長石・金雲母	口縁部～頸部	内外面共なで	
25	SD5	甕	暗灰黄 2.5Y 5/2		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：はけめ，なで 内：なで	
26	SD5	壺	にぶい橙 7.5YR 6/4		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
27	SD5	甕	明褐灰 7.5YR 7/2		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：はけめ，なで 内：なで	
28	SD7	甕	にぶい橙 7.5YR 5/4		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：なで 内：ヘラナデ	
29	SD7・Ⅰ	壺	明褐灰 5YR 7/1		石英・長石・砂粒	口縁部～胴部	外：はけめ，なで 内：はけめ，なで，指おさえ	

表７　石田高原地区出土土器観察表（つづき）

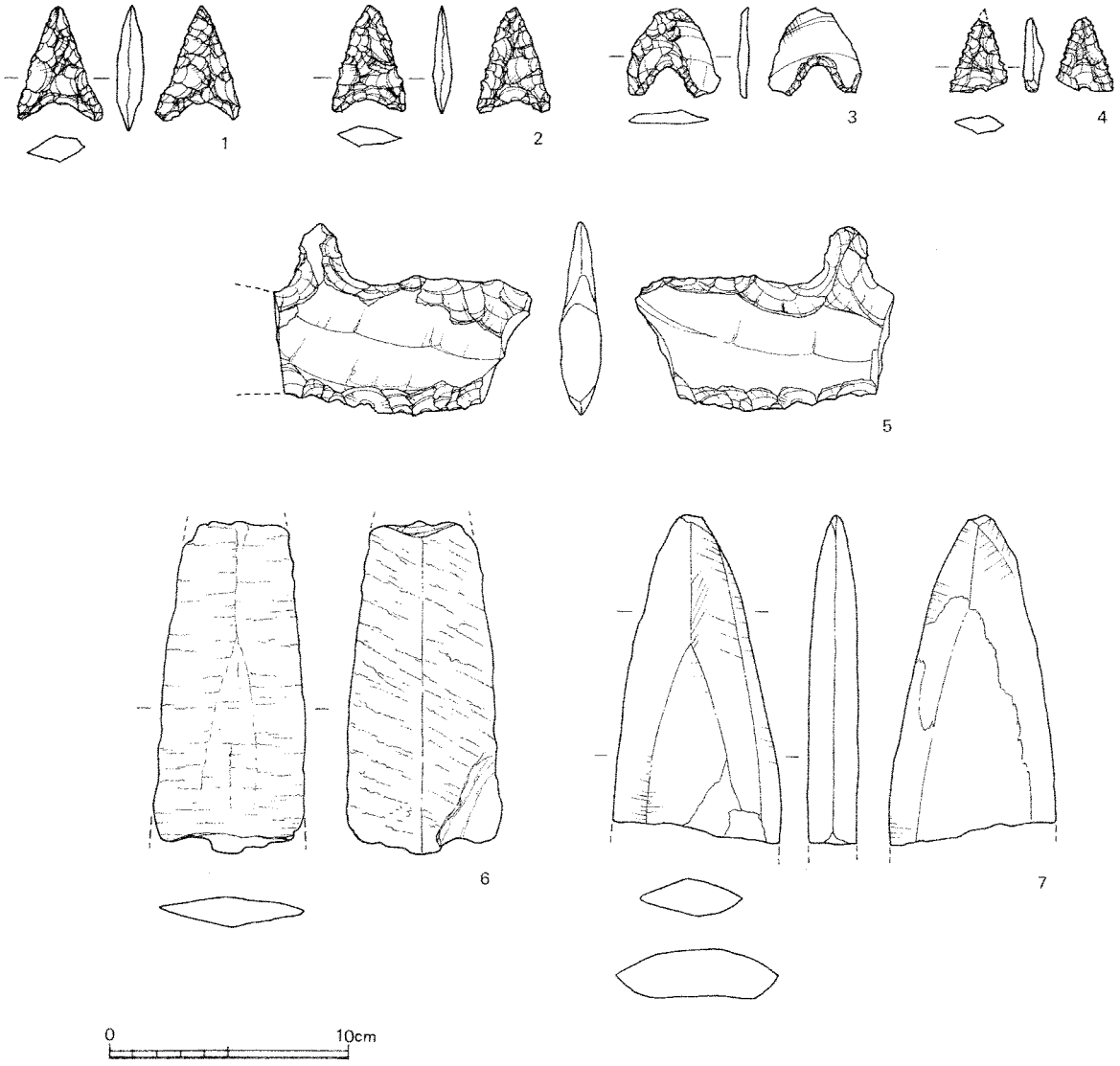
遺物番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法	備考
30	SD８・Ⅰ	鉢	にぶい黄橙　10YR　7/3		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ほけめ，なで　内：なで	
31	SD８・Ⅰ	高坏	灰黄褐　10YR　6/2		石英・長石・金雲母	口縁部～底部片	外：けずり，なで　内：なで，指おさえ	丹塗り有り
32	SD８・Ⅰ	高坏？	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・雲母	脚部片	内外面ともなで	
33	SD９	甕	明褐灰　5YR　7/1		石英・長石・砂粒	口縁部～底部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで，指おさえ	外面にスス付着
34	SD９・Ⅰ	壺	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・金雲母	完形	外：なで　内：なで，指おさえ	
35	SD９	鉢	明褐灰　7.5YR　7/1		石英・長石・砂粒	口縁部～底部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで，指おさえ	
36	SD11	甕	明赤褐　2.5YR　5/6		石英・長石・金雲母	完形	外：なで　内：なで，指おさえ	丹塗り有り
37	SD11	甕	明褐灰　7.5YR　7/2		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで	外面にスス付着
38	SD11・H	甕	にぶい黄橙　10YR　7/3		石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：ほけめ，なで　内：ケズり，なで	外面にスス付着
39	SD11・Ⅰ	鉢	にぶい黄橙　10YR　6/3		石英・長石・金雲母	口縁端部欠損	外：ほけめ，なで　内：なで，ヘラナデ	口縁部に穿孔有り
40	SD11・Ⅰ	高坏	にぶい黄橙　10YR　7/3		石英・長石	坏部	外：なで　内：なで	
41	SD12・Ⅰ	甕	灰黄　2.5Y　6/2		石英・長石・金雲母	底部	外：ほけめ，なで　内：なで	
42	SD12・Ⅰ	甕	にぶい褐　7.5YR　5/4		石英・長石・砂粒	口縁部片	内外面ともなで	
43	SD12・Ⅰ	甕	橙　7.5YR　6/6		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
44	SD12・Ⅰ	甕	にぶい黄橙　10YR　6/3		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
45	SD13・Ⅰ	壺	明褐　7.5YR　5/6		石英・長石・黒雲母	口縁部片	内外面ともなで	
46	中期包含層	甕	赤灰　2.5YR　5/1		石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
47	中期包含層	甕	にぶい黄褐　10YR　5/3		石英・長石・金雲母	口縁部	外：なで　内：なで，指おさえ	外面にスス付着
48	中期包含層	壺	灰黄　2.5Y		石英・長石	完形	外：なで　内：なで，指おさえ，ヘラナデ	丹塗り有り
49	中期包含層	壺	にぶい褐　7.5YR　6/3		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	内外面ともなで	胴部に穿孔有り
50	中期包含層	壺	灰白　5YR　8/1		石英・長石・金雲母	完形	内外面ともなで	丹塗り有り
51	中期包含層	壺	明赤褐　5YR　5/6		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：なで　内：なで，指おさえ	丹塗り有り
52	中期包含層	壺	浅黄橙　7.5YR　8/6		石英・長石・砂粒	完形	内外面とも：なで	丹塗り有り
53	中期包含層	鉢	灰白　5Y　7/2		石英・長石	完形	外：なで　内：ヘラナデ，なで，指おさえ	
54	中期包含層	甕	灰　5Y　6/1		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ほけめ，なで　内：なで，指おさえ	
55	H５大溝	甕	にぶい黄褐　10YR　5/4		石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	スス付着
56	中期落ち込み	甕	浅黄・黒褐　2.5YR7/3-2.5YR3/1	灰黄　2.5Y　7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	外：ほけめ，なで　内：なで	
57	中期落ち込み	壺	明赤褐　5YR　5/6	にぶい黄橙　7.5YR　5/4	石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
58	中期落ち込み	甕	にぶい褐　7.5YR　5/4	にぶい黄褐　10YR　5/4	石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
59	中期落ち込み	甕	にぶい褐　7.5YR　5/4	橙　5YR　6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
60	中期落ち込み	甕	褐　7.5YR　4/4	にぶい黄褐　10YR　7/3	石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ほけめ，なで　内：なで	
61	中期落ち込み	甕	褐　7.5YR　4/4	灰黄・橙　2.5Y6/2-7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部片	内外面ともなで	
62	中期落ち込み	甕	にぶい褐　7.5YR　5/4		石英・長石・砂粒	口縁部	外：ほけめ，なで　内：なで	
63	中期落ち込み	壺	橙　2.5YR　7/8		石英・長石・砂粒	完形	外：ほけめ，なで　内：なで	
64	中期落ち込み	広口壺	橙　7.5YR　7/6	にぶい黄橙　10YR　7/4	石英・長石	口縁部片	内外面ともなで	
65	中期落ち込み	鉢	灰白　7.5YR　8/2		石英・長石・雲母	ほぼ完形	内外面ともなで，指おさえ	スス付着
66	中期落ち込み	須恵器坏	灰　N　5/		緻密な粘土	口縁部片	内外面とも回転なで	
67	中期落ち込み	甕	橙　5YR　6/6	橙　5YR　6/6	石英・長石・砂粒	底部	外：ほけめ，なで　内：なで，指おさえ	
68	中期落ち込み	甕	黒褐　2.5Y　3/2	橙　5YR　6/6	石英・長石・金雲母	底部	外：ほけめ，なで　内：なで，指おさえ	
69	中期落ち込み	甕	にぶい黄橙　10YR　7/3	にぶい黄褐　10YR　5/3	石英・長石・砂粒	底部	外：ほけめ，なで　内：なで，指おさえ	
70	中期落ち込み	甕	明赤褐　5YR　5/6	灰黄褐　10YR　5/2	石英・長石	底部	内外面とも：風化により不明	
71	後期落ち込み	壺	暗灰黄　2.5Y　5/2		石英・長石・金雲母	口縁部～底部	外：ほけめ，ヘラみがき　内：なで，指おさえ	
72	後期落ち込み	壺	灰黄褐　10YR　6/2		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：なで　内：なで，指おさえ	
73	後期落ち込み	壺	灰褐　10YR　4/1		石英・長石・雲母	口縁部～胴部	外：けずり，なで　内：ほけめ，なで	外面にスス付着
74	後期落ち込み	壺	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・金雲母	口縁端部欠損	外：ほけめ，なで　内：ヘラナデ，ほけめ，なで	
75	後期落ち込み	鉢	にぶい黄橙　10YR　7/2		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ほけめ，なで，暗文　内：ほけめ，なで	
76	後期落ち込み	鉢	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・雲母	口縁端部欠損	外：ほけめ，なで　内：なで	
77	後期落ち込み	壺	にぶい黄橙　10YR　6/3		石英・長石・金雲母	底部～胴部	外：ほけめ，なで　内：ヘラナデ，なで，指おさえ	
78	後期落ち込み	壺	黒褐　10YR　3/2		石英・長石・金雲母	口縁部～頸部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで，指おさえ	
79	後期落ち込み	壺	にぶい黄橙　10YR　7/3		石英・長石・金雲母	口縁部～頸部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで	
80	後期落ち込み	壺	橙　7.5YR　7/6		石英・長石	口縁部～胴部	外：ほけめ，なで　内：なで，指おさえ	外面にスス付着
81	後期落ち込み	高坏	にぶい黄褐　10YR　5/3		石英・長石・金雲母	口縁部片	外：ヘラナデ，なで　内：なで	
82	後期落ち込み	高坏	暗灰黄　2.5Y　6/2		石英・長石・金雲母	坏部のみ	外：なで，暗文　内：なで，暗文	丹塗り有り，口縁端部打ち欠き
83	後期落ち込み	高坏	灰黄　2.5Y　6/2		石英・長石・金雲母	脚部	外：ほけめ，なで，暗文　内：ほけめ，なで	
84	後期落ち込み	高坏	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・金雲母	脚部	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで	
85	イシジキ	壺	にぶい橙　7.5YR　6/4		石英・長石・金雲母	口縁部～頸部片	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで，指おさえ	
86	古墳落ち込み	鉢	灰黄　2.5Y　6/2		石英・雲母	完形	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで，暗文	内面炭化物付着
87	古墳落ち込み	坩	灰黄　2.5Y　6/2		石英・金雲母	完形	外：ほけめ，ヘラミガキ　内：へらけずり，ヘラミガキ	
88	古墳落ち込み	高坏	淡黄　2.5Y　8/3		粒子なし	口縁部片	外：ほけめ，なで　内：ほけめ，なで	
89	古墳落ち込み	鉢	暗灰黄　2.5Y　5/2		石英・長石・金雲母	底部～胴部	外：ほけめ，なで　内：なで	胴部に穿孔有り
90	古墳落ち込み	鉢	にぶい橙　7.5YR　7/3		金雲母	脚部欠損	内外面とも回転なで	
91	古墳落ち込み	鉢	灰黄　2.5Y　7/2		石英・長石・雲母	口縁端部欠損	外：けずり，なで　内：けずり，なで	
92	古墳落ち込み	壺	灰褐　7.5YR　6/2		石英・長石・砂粒	底部～胴部	外：縄席叩き・沈線，内：指おさえ・なで	陶質土器
93	古墳落ち込み	須恵器蓋	灰　N　5/		緻密な粘土	天井～縁部	内外面とも回転なで	天井部外面にヘラ記号有り
94	SD５	壺	にぶい黄　2.5Y　6/3		石英	完形	内外面ともなで	龍の線刻画あり
95	後期落ち込み	壺	灰黄褐　10YR　5/2		石英・長石・金雲母	ほぼ完形	外：ほけめ　内：指おさえ	表面，剥落著しい
96	古墳落ち込み	半島系土器	灰　5Y　6/1		緻密な粘土	口縁部片	内外面とも回転なで	楽浪系
97	古墳落ち込み	半島系土器	灰　5Y　5/1		細砂粒	胴部片	外：格子目叩き，内：回転なで	瓦質土器
98	SD12・H	半島系土器	灰　N　5/		細砂粒	胴部片	外：縄席叩き，内：なで	瓦質土器
99	古墳落ち込み	半島系土器	灰　5Y　5/1		石英	胴部片	外：粗めの縄席叩き，内：なで	瓦質土器
100	古墳落ち込み	半島系土器	灰　5Y　5/1		細砂粒	胴部片	外：格子目叩き，内：回転なで	瓦質土器
101	Ⅳ区Ⅲ層	甕？	灰黄褐　10YR　5/2		石英・長石・雲母	胴部片	外：綾杉状叩き，内：ケズり	
102	Ⅵ区Ⅳ層	甕？	灰黄褐　10YR　5/2		石英・長石・雲母	胴部片(口縁直下)	外：綾杉状叩き，内：ケズり	
103	Ⅵ区Ⅳ層	甕？	灰黄褐　10YR　5/2		石英・長石・雲母	胴部片(口縁直下)	外：綾杉状叩き，内：ケズり	
104	Ⅳ区Ⅲ層	甕？	灰黄褐　10YR　5/2		石英・長石・雲母	胴部片	外：綾杉状叩き，内：ケズり	
105	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	黄灰　2.5Y　5/1		金雲母	底部～胴部	内外面とも回転なで	楽浪系
106	後期落ち込み	把手	にぶい黄橙　10YR　7/2		石英・長石・金雲母	把手	外：指おさえ，内：なで	
107	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　5Y　6/1		緻密な粘土	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
108	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　N　5/		細砂粒	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
109	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　N　5/		石英	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
110	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　N　5/		緻密な粘土	胴部片	外：縄席叩き，内：なで	陶質土器
111	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	黒褐　2.5Y　3/2		細砂粒	胴部片	外：格子目叩き，内：なで	瓦質土器
112	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　5Y　5/1		石英	胴部片	外：縄席叩き，内：なで	瓦質土器
113	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　N　5/		細砂粒	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
114	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰　5Y　6/1		緻密な粘土	胴部片	外：縄席叩き・沈線，外：なで	やや軟質
115	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰白　5Y　7/1		細砂粒	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
116	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰白　5Y　7/1		石英・雲母	胴部片	外：格子目叩き，内：なで	瓦質土器
117	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰白　5Y　7/1		石英	胴部片	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
118	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰白　5Y　7/1		石英	頸部付近	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
119	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	灰白　5Y　7/1		緻密な粘土	胴部片	外：格子目叩き，内：なで	瓦質土器
120	Ⅵ区Ⅳ層	半島系土器	にぶい黄褐　10YR　5/4		石英・雲母	頸部～胴部	外：ほけめ・なで，内：ほけめ・なで	
121	Ⅱ区Ⅱ層	半島系土器	黒褐　2.5Y　3/1		石英	胴部	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
122	表採	半島系土器	灰黄　5Y　6/2		石英・雲母	胴部	外：縄席叩き，内：なで	瓦質土器
123	Ⅱ区Ⅲ層	半島系土器	黒褐　2.5Y　3/1		石英	胴部	外：縄席叩き・沈線，内：なで	瓦質土器
124	表採	半島系土器	暗灰　N　3/		石英	胴部	外：格子目叩き，内：なで	瓦質土器

②**石器**（第82図～87図）

1～4は石鏃である。いずれも黒曜石製の凹基鏃である。1・2は両面に丁寧な調整を加え，断面レンズ状に整える。3は主要剥離面および作業面を残す剥片鏃である。4は両側縁が鋸歯状となる。5は石匙である。安山岩質の石材で，横長の剥片を用い，両面から剥離を加えて横長の刃部を形成する。横軸中央に小さなつまみを有する。6・7は磨製石剣である。6は表面の風化が著しいが，頁岩製で両面の中央部にはわずかに鎬の痕跡を残し断面レンズ状となる。7は先端部で，断面が横長の六角形を呈し，先端部のみ鎬を有する。8～12は石包丁である。10が直刃であるほかは，いずれも外湾刃である。また，石材は頁岩を基本とするものの，10・11は小豆色の輝緑凝灰岩製で，北九州地域からの搬入品と考えられる。穿孔は9～11が両側から錐状工具で穿孔されるのに対して，8は風化が著しいものの，敲打を併用して穿孔しているようである。12～16は石鎌である。いずれも破片資料で，13・16が先端部資料，14・15が基部資料，12が刃部のみの資料である。いずれも頁岩製で，研磨が全面に及ぶ13～15，刃部のみ研磨する16，研磨痕が認められない12がある。刃部の形態はいずれも直刃である。17～26は石斧類である。17は扁平打製石斧である。両側縁から調整を加えて短冊形に仕上げている。18は扁平片刃石斧である。基部から刃部にかけて緩やかに幅が広がる撥形で，研磨は全面に及ぶ。19は小型の両刃石斧である。体部には研磨面を切るように両側縁からの剥離痕が顕著で，刃部には欠損後の刃部再生を意図するとみられる剥離痕が認められる。20は柱状片刃石斧である。頁岩製で頂部付近に入念な調整剥離が認められるものの，他は節理面で研磨面は認められない。21は扁平な小型石斧の一部で体部全面に研磨痕が認められる。22は柱状片刃石斧の一部か。表裏両面の研磨痕が顕著である。23は両刃の小型石斧で，基部から刃部にかけて撥形に広がる形態である。両側縁には，装着痕とみられる緩やかな段が認められる。24は小型石斧の一部か。欠損後敲石として再利用されている。25は両刃の石斧の刃部である。刃こぼれが著しいが，刃部側面寄りには敲打痕も認められる。26は伐採斧とみられる大型の両刃石斧である。刃部再生を意図した剥離痕が顕著で，刃部先端は丸みを帯びて摩滅し，刃部と直行する線状痕が顕著である。研磨を行わずそのまま石斧として利用したの

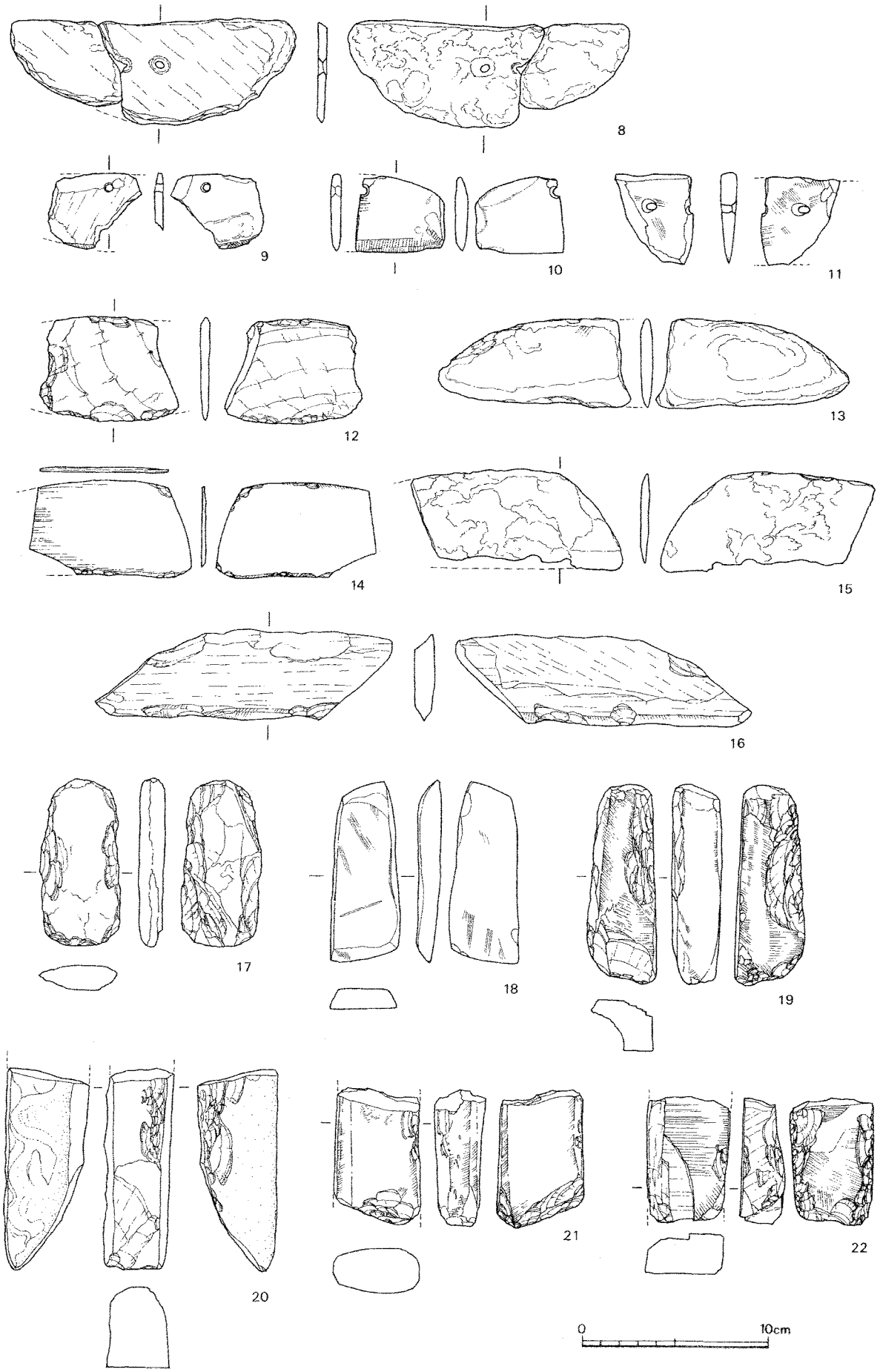
表8　石田高原地区遺構別石器組成表

調査地区	遺構名	時期	狩猟具	農具		調理具			工具					武器	その他
				収穫具		植物加工具		煮沸具							
			石鏃	石庖丁	石鎌	磨石・敲石・凹石	石皿・台石	支脚形石製品	石匙	石斧	礫器	石杵	砥石	磨製石剣	
石田高原地区	Ⅷ区落ち込み	弥生中期			1					1					
	Ⅰ～Ⅲ区落ち込み	弥生中期			1	2	1								
	SD1	弥生後期～古墳初頭				2									
	SD2	弥生後期～古墳初頭				2									
	SD3	弥生後期～古墳初頭			1	26	2						3		朱の付着した礫1，扁平片刃石斧未製品1
	SD7	弥生後期～古墳初頭			2		3								
	SD8	弥生後期～古墳初頭				1									
	SD11	弥生中期～古墳初頭		1		11	3	3					3		
	SD12	弥生後期～古墳初頭				6				1			2		
	SD13	弥生後期～古墳初頭				1									
	Ⅴ区落ち込み	弥生後期	2		2	32	4	1	1	1	1		6		
	Ⅵ区石敷き遺構	弥生後期				8	2						16		
	Ⅵ区落ち込み	古墳時代前期～後期		1	1	76	29	1		1		1	19	1	

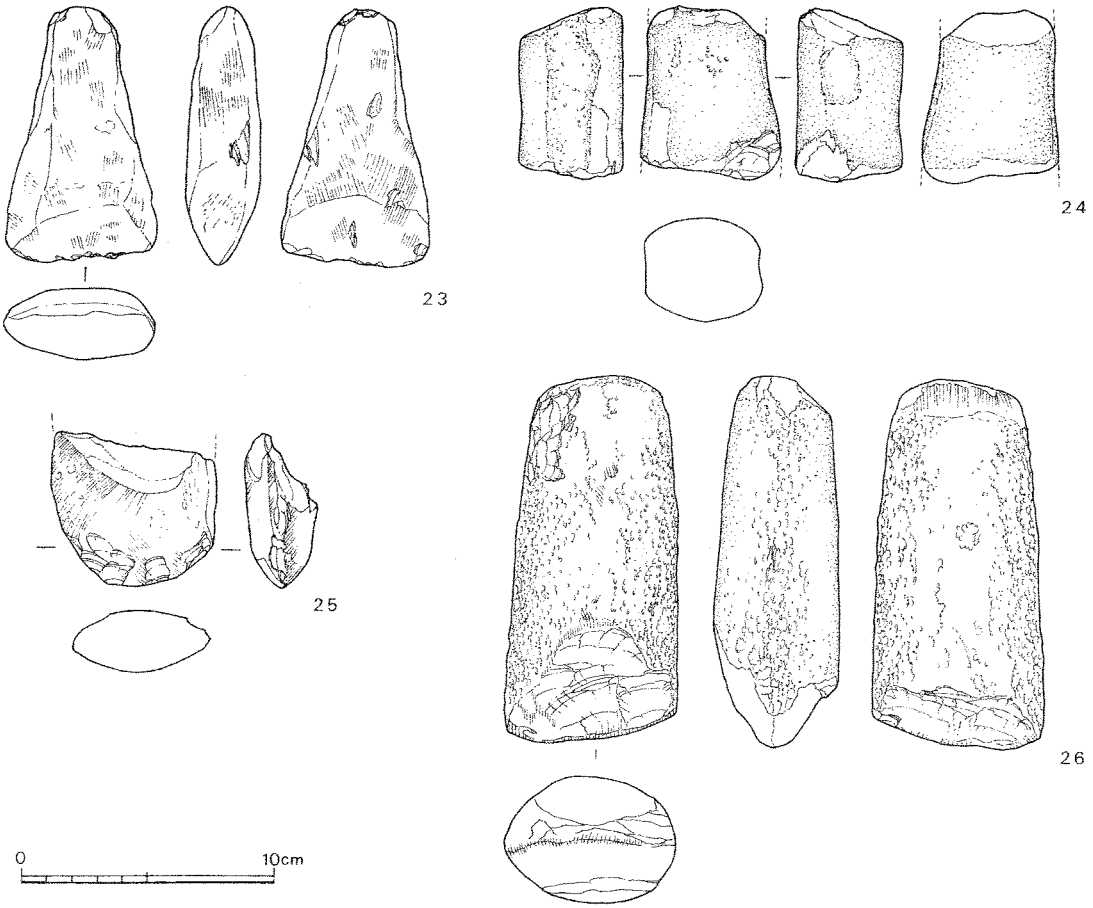


第82図　石田高原地区出土石器(1)（1／3）

かもしれない。27～33は砥石である。いずれも大型で，33をのぞいて他はすべてⅥ区石敷き遺構から出土したものである。いずれも面砥石であるが，30・32には溝状の研ぎ痕も認められる。また，27は研ぎ面に鼠歯状の敲打痕が認められる。石材は中流～細粒砂岩が主体となるが，30は花崗岩が用いられている。34・35は石皿である。34は大型，35は小型である。34は扁平な礫の中央部が摩滅して浅くくぼんでいる。裏面には敲打痕が面的に広がる。35も同様に扁平な礫の表裏両面に敲打痕を持ち，両面とも浅くくぼんでいる。また，敲打痕の周りには磨面や長楕円形の敲打痕が帯状に広がる。36・37はそれぞれ凹石・敲石である。36は表裏面ともに体部中央が摩滅してくぼんでいる。37は大きめの荒い敲打痕が表裏面ともに面的に広がる。38は石杵である。平面Ｌ字状で底面には磨り面が認められる。また，側面や握り部にも敲打痕が認められる。39は朱のついた円礫である。側縁を中心に付着する。40は石錘であろうか。欠損するものの，本来は平面円形で断面ドーム状を呈し中央に穿孔が貫通して



第83図　石田高原地区出土石器(2)（1／3）



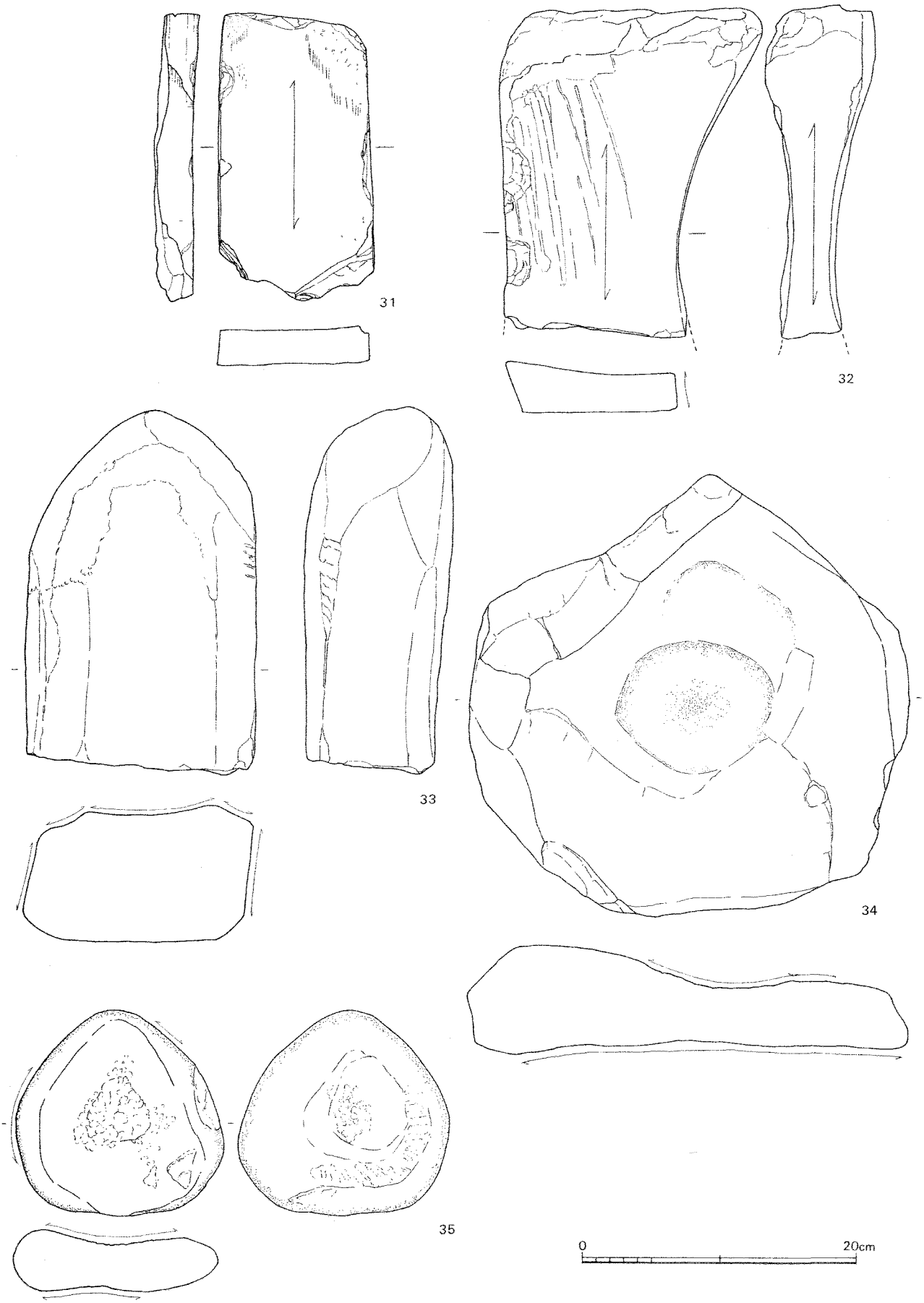
第84図　石田高原地区出土石器(3)（1／3）

いたものと考えられる。多孔質玄武岩製である。41は支脚形石製品である。平面台形で側面の中位につまみを有する。多孔質玄武岩製である。

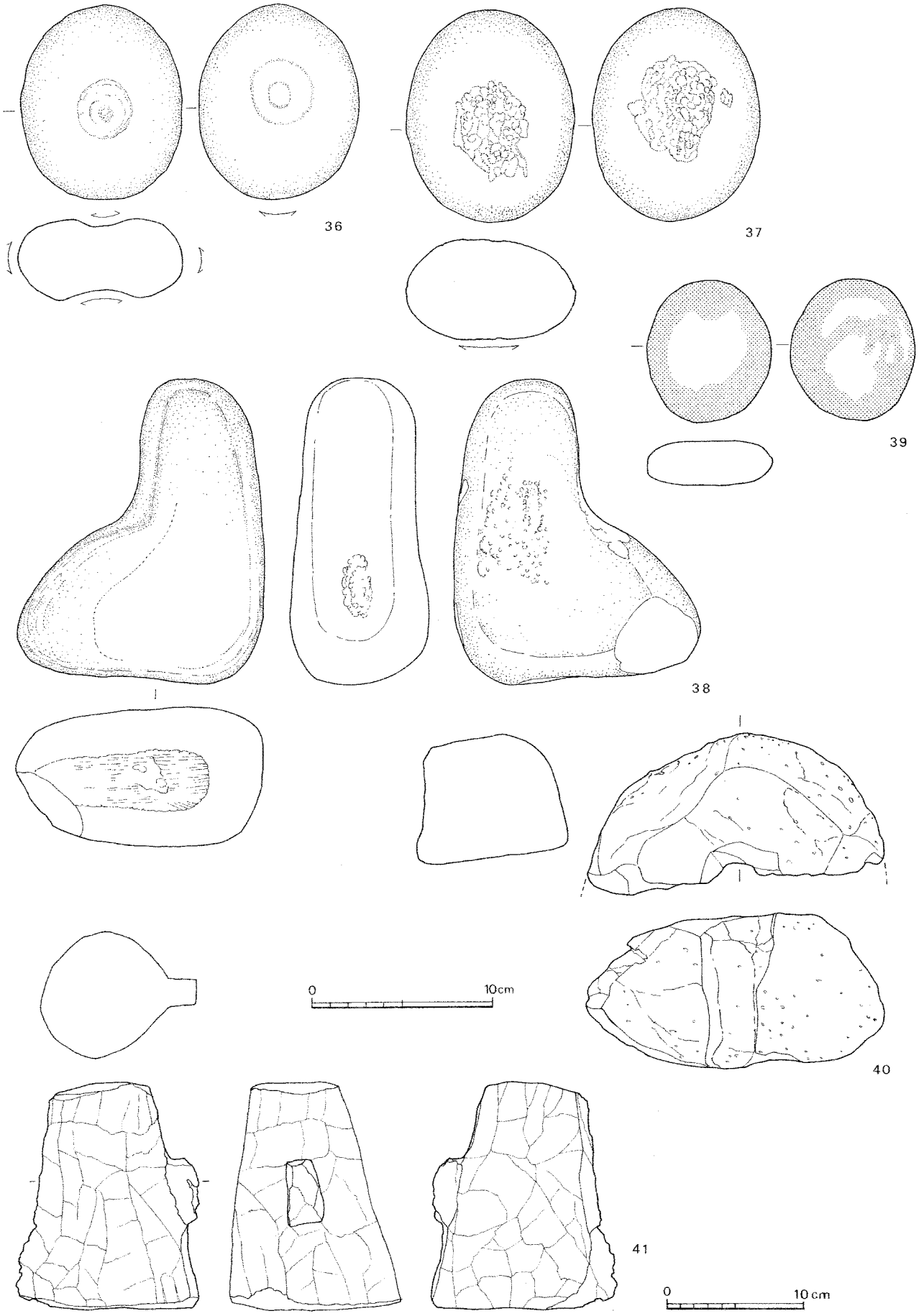
石田高原地区の石器組成（表８）

第８表に遺構別の石器組成を示した（第８表）。いずれの遺構も部分的な掘り下げで，石器の多寡は必ずしも遺構の全容を反映しているとは限らないが，概要は把握しえよう。特徴としては，磨石類が突出して多いことがあげられる。これは八反地区・高元地区の組成ですでに指摘した点であり，原の辻遺跡の特徴として指摘できる。また，磨石類と石皿類がセットで出土している点も見逃せない。この背景には堅果類の頻繁な利用が想定できる。また，弥生時代後期以降の遺構では砥石の出土の顕著である。農工具全体で言えることであるが，弥生時代後期後葉にいたっても，数は少ないものの，石器が器種に偏ることなくまんべんなく出土している点が注目される。収穫具である石鎌・石包丁の出土量を比較すると，全体として石鎌の出土量が多く，農耕のあり方を反映している可能性がある。

第85図　石田高原地区出土石器(4)（1／4）



第86図　石田高原地区出土石器(5)（1／4）



第87図　石田高原地区出土石器(6)（36～40は１／３，41は１／４）

※アミかけは朱の付着範囲

表９　石田高原地区出土石器観察表

図面番号	遺物名	遺構名	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
1	石鏃	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	黒曜石	2.3	1.8	0.55	1.3	
2	石鏃	Ⅳ区３層	石高Ⅳ・Ⅲ	黒曜石	2.2	1.5	0.4	0.9	腰岳
3	剥片鏃	後期落ち込み	16Ef ロ・Ⅳ	黒曜石	1.3	1.9	0.2	0.8	腰岳
4	石鏃	Ⅵ区４層	15Hj ハ・Ⅳ	黒曜石	1.55	1.2	0.4	0.5	
5	石匙	後期落ち込み	16Ef ロ・Ⅳ	玄武岩	5.4	3.8	0.8	17.8	
6	磨製石剣	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ	頁岩	6.9	3.2	0.6	17.0	表面風化
7	磨製石剣	SD11H	15Hj ハ・SPSTP	頁岩	6.8	3.5	0.95	27.3	
8	石庖丁	Ⅷ区３下層	9Oo イ・Ⅲ下	頁岩	15.1	5.6	0.5	68.6	表面風化
9	石庖丁	SD11	15Hj ハ・SD11	安山岩	4.9	4.1	0.4	10.6	
10	石庖丁	Ⅳ区３層	石高Ⅳ・Ⅲ	輝緑凝灰岩	4.7	4.1	0.7	23.1	立岩産
11	石庖丁	Ⅵ区４層	15Hj イ・Ⅳ	輝緑凝灰岩	4.3	4.7	0.9	19.2	立岩産
12	石鎌	Ⅲ区表採	15Dn ニ	頁岩	7.4	5.5	0.5	33.3	
13	石鎌	Ⅳ区３層	石高Ⅳ・Ⅲ	頁岩	10.3	4.8	0.6	52.6	表面風化
14	石鎌	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅴ	硬質頁岩	8.6	5.1	0.2	27.7	
15	石鎌	中期落ち込み	9On ロ・落	頁岩	11.4	5.40	0.5	29.7	表面風化
16	石鎌	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ	頁岩	15.9	4.8	1.1	117.0	
17	扁平打製石斧	Ⅲ区４層礫群	15Dn イ・Ⅳレキ	頁岩	9.0	4.2	1.3	70.1	
18	扁平片刃石斧	後期落ち込み	16Ef ハ・Ⅳ	頁岩	9.6	3.70	1.2	72.5	
19	磨製石斧	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅳ	頁岩	10.6	3.5	2.8	171.0	
20	柱状片刃石斧	Ⅱ区３下層	15Dd ハ・Ⅲ下	頁岩	10.6	4.2	3.6	255.3	
21	磨製石斧	中期落ち込み	9On イ・落	頁岩	7.3	4.6	2.3	141.1	
22	柱状片刃石斧	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ	頁岩	6.8	4.4	2.1	112.2	
23	磨製石斧	SD11表採	15Hj ハ・SPSTP	蛇紋岩	10.0	5.9	2.9	208.7	表面風化
24	磨製石斧	Ⅳ区４層礫群	15Ds ロ・Ⅳレキ	硬質砂岩	6.9	5.5	4.1	234.3	欠損後再利用
25	磨製石斧	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	頁岩	6.1	6.45	2.9	116.2	
26	太形蛤刃石斧	SD12	15Hj ハ・SD12	頁岩	14.7	6.7	5.1	736.7	
27	砥石	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅳ	砂岩	28.2	10.7	6.4	3960	
28	砥石	イシジキ	15Hj ロ・石敷	細粒砂岩	28.6	16.5	4.6	3720	
29	砥石	イシジキ	15Hj ロ・石敷	灰青色頁岩	22.4	14.9	6.1	3320	
30	砥石	イシジキ	15Hj ロ・石敷	花崗岩	29.6	12.6	10.0	5360	
31	砥石	イシジキ	15Hj ロ・石敷	細粒砂岩	22.7	11.5	2.7	1144	
32	砥石	イシジキ	15Hj ロ・石敷	砂岩	24.0	19.6	3.6	3120	
33	砥石	古墳落ち込み	15He ハ・落	砂岩	26.7	16.8	9.9	7440	
34	石皿	後期落ち込み	16Ef ロ・Ⅳ	凝灰岩	32.2	32.2	8.0	10460	
35	石皿	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅳ	安山岩	14.8	15.45	4.5	1583	
36	敲石	SD３Ⅰ層	15Dh ニ・SD３Ⅰ	安山岩	10.4	8.7	4.4	653	
37	敲石	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅳ	安山岩	10.7	9.3	5.5	960	
38	石杵	古墳落ち込み	15He ニ・Ⅳ	砂岩	16.6	13.5	7.7	1960	
39	朱のついた礫	古墳落ち込み	15He ニ・南北トレ	安山岩	7.8	6.8	2.4	220.2	
40	石錘	Ⅳ区４層礫群	15Ds ロ・Ⅳレキ	多孔質玄武岩	16.4	8.8	7.1	1062	半欠
41	支脚形石製品	SD11	15Hj ハ・SD11	多孔質玄武岩	16.6	13.6	12.7	1560	

③石製品（第88図）

第88図９は碧玉製の管玉である。円柱状で穿孔は両端部から施されている。

④金属器（第88図）

金属製品は青銅製品が多く，鉄製品は１点にすぎない。特にＶ区弥生時代後期の落ち込みからの出土例が多く，保存状態もきわめて良好であった。

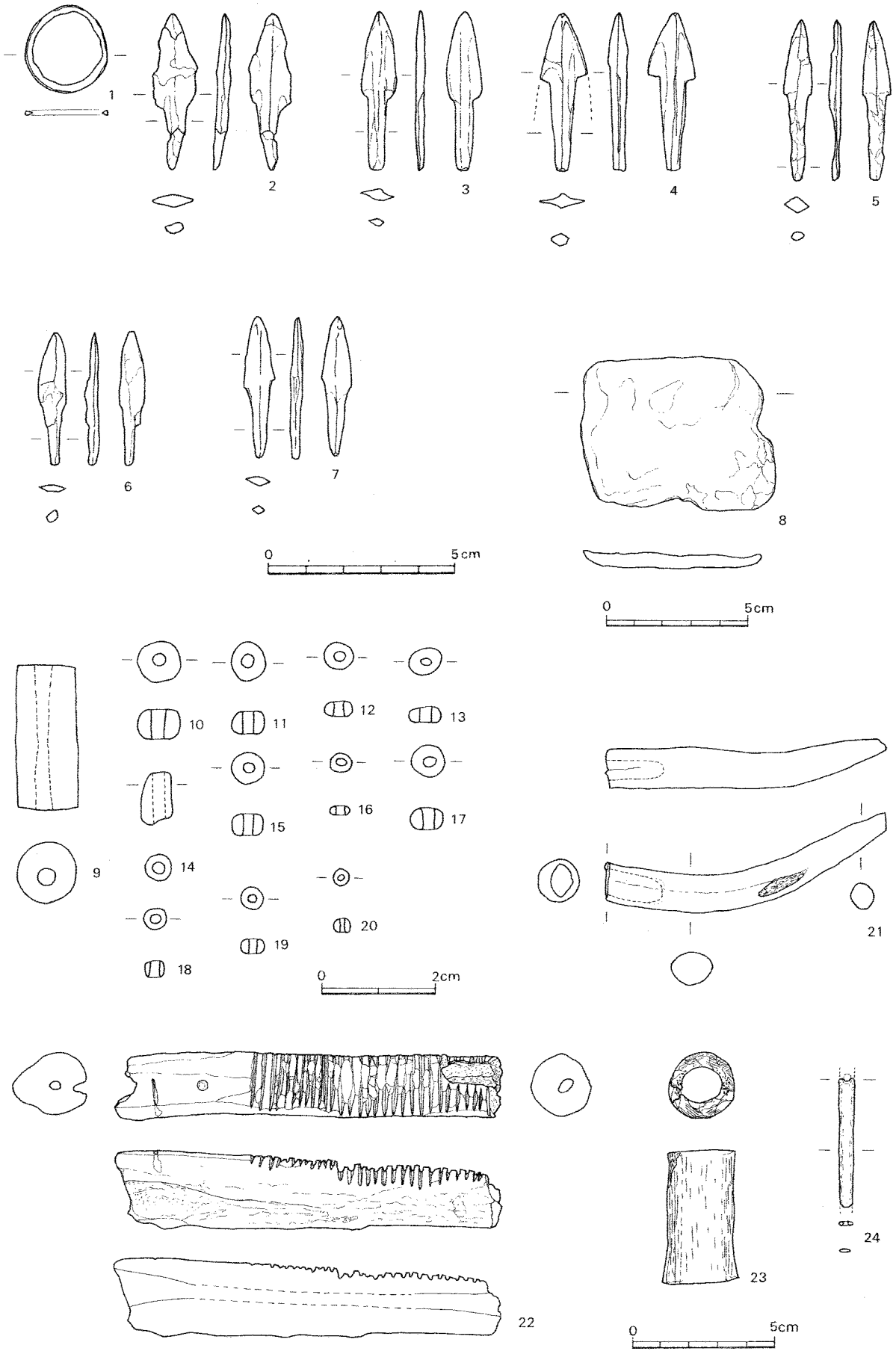
１は青銅製の指輪である。直径約2.3㎝，幅約２㎜で，断面は扁平な二等辺三角形となり，内側にはにぶい稜線がつく。銹化が進んでおらず全体的に赤銅色を呈す。２～７は銅鏃である。いずれも有茎であるが，平面形態から体部が三角形で逆刺を持つもの（４）と，逆刺のない柳葉形（２・３・５・６・７）に分けられる。後者はさらに関部に角を持つもの（３・５・７）と丸みを持つもの（２・６）に細分される。横断面に着目すると，体部が扁菱形で基部が円形のもの（２・５），体部が扁菱形で基部も菱形となるもの（６・７），基部から体部にかけて丸みのある鎬が通り，扁平な翼がつくもの（３・５）とバリエーションが認められる。４については，体部両側に樋が通るが，本来は基部まで樋が通っていた痕跡があり，大型の銅鏃もしくは他の青銅製利器の先端部を再加工して銅鏃とした可能性が考えられる。また，３は銹化が進んでおらず，赤銅色を保っている。８は板状の鉄製品である。薄く剥がれるような錆の特徴から，鍛造製品と考えられる。長軸の両端は緩く反っており，欠損が著しいものの，鋤先の可能性も考えられる。

⑤ガラス製品（第88図）

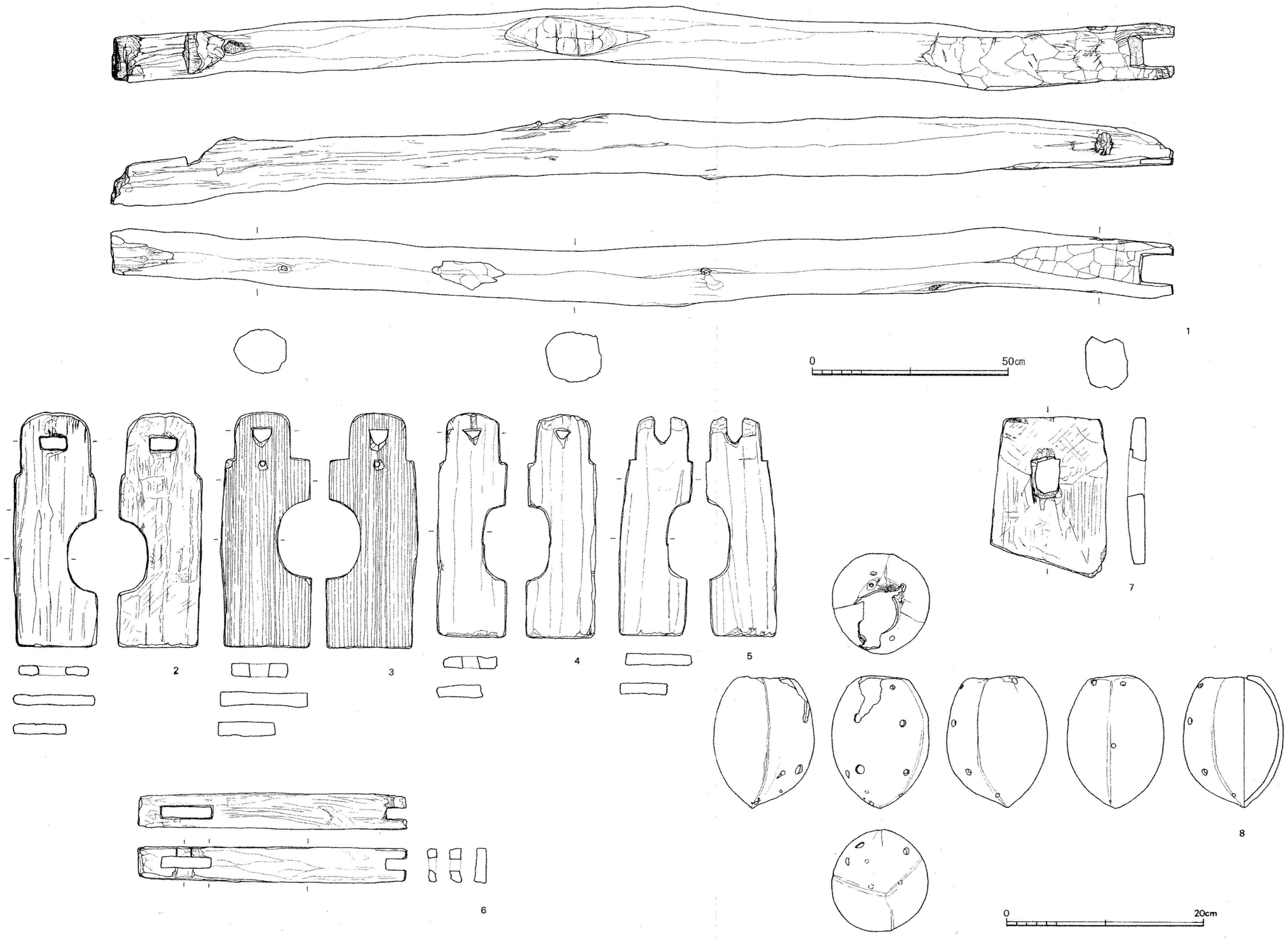
10～13，15～20はガラス小玉である。正円形もしくは楕円形で，比較的扁平である。ガラスの色調から，コバルトブルー（16・19・20）と藍色（10～13・15・17・18）に二分できる。14は管玉である。下部を欠損する。色調はエメラルドグリーンである。

⑥骨角器（第88図）

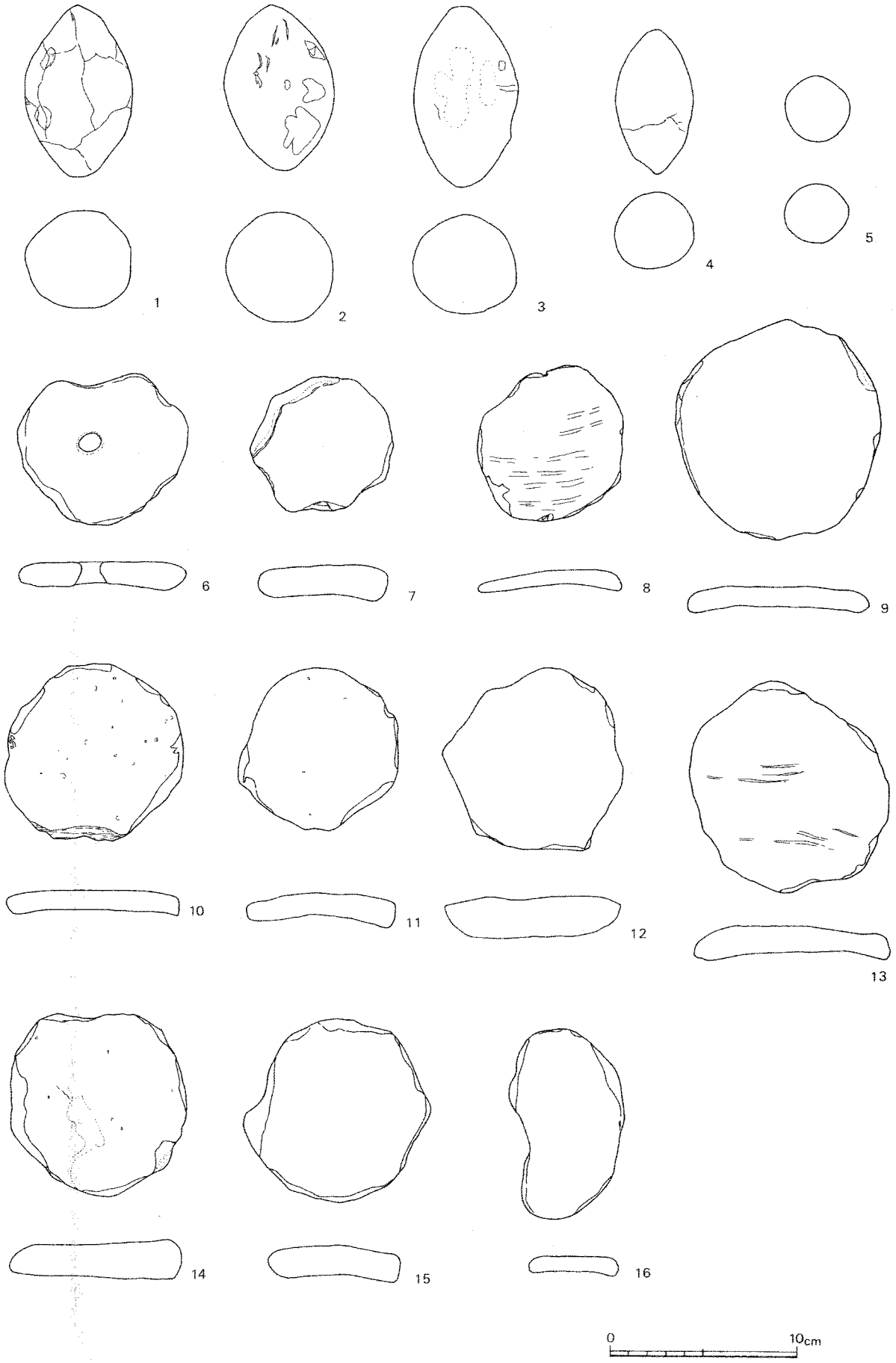
21は刀子柄である。鹿角製で多孔質の髄を刳りぬいて着柄部とする。22は刻骨である。鹿角製で，端部は欠損するものの，現状で30本の切り込みが確認できる。切り込みの断面は両側縁が平行となっており，奈良文化財研究所の松井章氏のご教示によれば，鋸で加工されたものである。体部には長軸に沿って穴が貫通し，未貫通ではあるが目釘穴と考えられる穿孔もあることから，本来は刀子柄として使用されていたのであろう。刻み部分は欠損が著しく，擦痕等の使用痕は認められない。23も刀子柄であろうか。骨製と考えられ，円筒状に両端をカットした後，両側縁が内湾するように表面を削り，多孔質の髄を断面レンズ状になるように刳りぬいている。上端部は平坦ではなく，やや内傾している。23は扁平な棒状骨製品である。両端を欠損するものの，上端部には穿孔の痕跡が認められる。簪もしくは網針の可能性があろうか。



第88図　金属製品・石製品・ガラス製品・骨角製品（1～7は2/3，8，21～23は1/2，9～20は1/1）



第89図　木製品（1は1/10，2～8は1/4）



第90図　土製品（2/3）

⑦木製品（第89図）

今回の調査では，Ｖ区の弥生時代後期落ち込みを中心に，大量の木製品が出土している。時間的な制約からそのすべてを図化しえなかったが，重要遺物を中心に説明を加える。

１は大型の建築部材である。長さ約270cm，幅約13cmである。長軸に沿ってやや湾曲している。先端部は二股に分かれ，股の部分は斜めにカットされている。また，二股部分の付け根付近の両側縁には，浅いくぼみが確認できる。先端部周辺は両面とも面的に加工されており，他の部位の横断面が円形であるのに対して，先端部付近は丸みを帯びた四角形となる。体部には枝をはった痕跡が顕著に残る。下端部付近には片側からの抉りが残り，下端部は二次的に切断されている。

２～６は組み合わせ式の机の部材である。２～５が脚部で６は天版と脚部を固定する補強材である。脚部はいずれも扁平な長方形の板状素材を利用し，片側側縁を半円形に刳りぬき，上端は段をつけてやや細く仕上げている。ほぞ穴は方形と逆三角形がある。補強材は，細めの板状素材に，長方形の穴が両端にあいている。長方形の穴の幅は５の脚部のほぞの幅にほぼ一致する。これら組み合わせ式机の出土例としては，福岡県雀居遺跡がある。雀居遺跡では脚部から天板までほぼ完全な形で出土しているが，脚部の寸法やほぞの開け方など，今回出土したものとほぼ一致する。原の辻遺跡例も同様の構造であったと推測される。

７は木製鍬である，長方形で，穴の周囲はやや厚みを持って作られている。先端部は欠損している。

８はココヤシ製笛である。原の辻遺跡では２例目である。中空のココヤシ果皮を利用し，現状で９カ所に穿孔が認められる。このほか，貫通はしないものの，７カ所に穿孔を意識したくぼみがある。

⑧土製品（第90図）

１～４は投弾である。平面は紡錘形で断面は円形である。いずれも手ずくねで作られる。５は土玉で，ほぼ球形に整えている。６～16は土製円盤である。いずれも土器片の周囲を荒く打ち欠いて円形に整えており，側面には明瞭な研磨痕は認められない。直径はいずれも４cm～６cmでおさまり，６のみ体部中央に穿孔が認められるものの他は無孔である。時期は破片資料で判然としないものの，いずれも弥生時代後期の土器を転用したものと考えられる。

表10　石田高原地区出土その他観察表

	図面番号	遺物名	遺構名	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
金属器	1	指輪	古墳落ち込み	15Hj ロ・SNTP・Ⅳ	青銅	1.3	1.2	0.1	0.9	
	2	銅鏃	SD３	15Dc ハ・SD３	青銅	4.2	1.2	0.35	3.6	
	3	銅鏃	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ	青銅	4.2	1.0	0.3	2.9	
	4	銅鏃	Ⅵ区４層	15Hj ハ・Ⅳ	青銅	4.2	1.4	0.4	5.1	
	5	銅鏃	SD３Ⅰ層	15Dk ニ・SD３・Ⅰ	青銅	4.2	0.8	0.4	2.6	
	6	銅鏃	Ⅲ区３層	15Dn ニ・Ⅲ	青銅	3.5	0.7	0.2	2.1	
	7	銅鏃	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ	青銅	3.7	0.8	0.25	2.5	
	8	不明鉄製品	古墳落ち込み	15He ニ・Ⅴ	鉄	5.4	6.9	0.7	47.1	鋤先か？
石製品	9	管玉	Ⅳ区サブトレ	高原Ⅳ・NTP	碧玉	2.4	1.0	1.0	5.4	
ガラス製品	10	ガラス玉	古墳落ち込み	15He ニ・Ⅳ		0.7	0.75	0.5	0.5	
	11	ガラス玉	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ		0.7	0.6	0.4	0.2	
	12	ガラス玉	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ		0.5	0.5	0.3	0.1	
	13	ガラス玉	後期落ち込み	16Ef ロ・Ⅳ		0.5	0.6	0.3	0.1	
	14	管玉	SD２Ⅰ層	15Dc ハ・SD２・Ⅰ	ガラス	0.9	0.6	0.45	0.4	
	15	ガラス玉	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ		0.6	0.6	0.4	0.1	
	16	ガラス玉	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ		0.35	0.4	0.2	0.1未満	
	17	ガラス玉	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ		0.6	0.6	0.4	0.1	
	18	ガラス玉	Ⅳ区３層	高原Ⅳ・Ⅲ		0.3	0.3	0.2	0.1未満	
	19	ガラス玉	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ		0.4	0.35	0.25	0.1未満	
骨角製品	20	ガラス玉	Ⅳ区３層	高原Ⅳ・Ⅲ		0.3	0.3	0.2	0.1未満	
	21	刻骨	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ	鹿角	13.7	2.6	2.8	49.7	
	22	刀子柄	後期落ち込み	16Ea ハ・Ⅳ	鹿角	9.9	1.4	1.2	10.6	
	23	筒状骨製品	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ	骨	4.2	2.7	2.3	19.0	
骨角製品	24	扁平棒状骨製品	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅴ	骨	4.5	0.5	0.2	0.5	簪か？
木製品	1	建築部材	中期包含層	15Di ニ・Ⅳ	木製	270.2	12.7	14.2		
	2	組合式案(机)部材	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	木製	23.9	8.3	1.1		脚部
	3	組合式案(机)部材	SD14	16Ef ロ・Ⅴ	木製	22.8	7.0	1.3		脚部
	4	組合式案(机)部材	SD14	16Ef ロ・Ⅴ	木製	23.9	9	1.4		脚部
	5	組合式案(机)部材	SD14	16Ef ロ・Ⅴ	木製	22.35	6.85	1.2		脚部
	6	組合式案(机)部材	SD14	16Ef ロ・Ⅴ	木製	27.2	3.6	1.2		補強材
	7	鋤先	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	木製	16.3	11.9	1.8		
	8	ココヤシ製笛	後期落ち込み	15Hj ハ・Ⅳ	ココヤシ	13.5	9.8	10.2		
土製品	1	投弾	Ⅵ区４層	15Hj ハ・Ⅳ	土製	4.1	2.8	2.6	30.3	
	2	投弾	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅴ	土製	4.4	2.9	2.9	35.2	
	3	投弾	Ⅵ区３層	15Hj ニ・Ⅲレキ	土製	4.8	2.8	2.6	31.0	
	4	投弾	後期落ち込み	16Ef ロ・Ⅳ	土製	3.9	2.1	2.0	15.8	
	5	投弾	後期落ち込み	16Ea ハ・Ⅳ	土製	1.7	1.7	1.5	4.9	
	6	紡錘車	SD３Ⅰ層	15Dk ニ・SD３・Ⅰ	土製	4.0	4.5	0.7	14.3	
	7	円盤状土製品	SD11Ⅱ層	15Hj ハ・SD11・Ⅱ	土器片	3.9	3.6	1.0	16.8	
	8	円盤状土製品	SD７	15Di イ・SD７	土器片	4.1	3.8	0.6	8.9	
	9	円盤状土製品	SD11Ⅰ層	15Hj ハ・SD11・Ⅰ	土器片	5.5	5.8	0.7	24.4	
	10	円盤状土製品	SD３	9 On ニ・SD３	土器片	4.6	4.7	0.7	17.1	
	11	円盤状土製品	古墳落ち込み	15He ハ・Ⅳ	土器片	4.3	4.3	0.9	15.6	
	12	円盤状土製品	後期落ち込み	16Ea ハ・Ⅳ	土器片	4.8	4.8	1.1	26.4	
	13	円盤状土製品	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	土器片	5.8	5.6	0.9	28.3	
	14	円盤状土製品	Ⅵ区４層	15Hj ハ・H	土器片	4.7	4.8	1.0	29.2	
	15	円盤状土製品	Ⅵ区４層	15Hj ロ・Ⅳ	土器片	5.0	4.7	1.0	24.4	
	16	円盤状土製品	後期落ち込み	16Ef イ・Ⅳ	土器片	3.0	5.0	0.55	9.6	

(5) 小　結

①石田高原地区における遺構群の変遷

石田高原地区の調査では，弥生時代後期～古墳時代初頭の14条の環濠と２カ所の落ち込みのほか，道路状遺構や弥生時代中期の包含層を確認した。本年度調査区の西側に隣接する地域は，平成５年度にすでに調査が行われ，弥生時代中期～古墳時代にかけての環濠が多数検出されている（副島1995）。ここでは本年度調査区内での遺構群のつながりについて検討した後，平成５年度の成果と本年度の調査成果を照合し，丘陵北東部における遺構群の変遷についてまとめる。

A．遺構群のつながり（第91図）

平成５年度検出の遺構群のうち，本年度検出分の遺構と関連するとみられる遺構は，１～６号溝・10号溝・13～14号溝・16号溝・19号溝の11条の環濠とみられる遺構群と，13号溝と14号溝に挟まれた道路状遺構である。本年度調査検出分のうち，Ⅰ～Ⅲ区のＳＤ３とⅥ区検出のＳＤ11が中期～後期にかけての遺物を出土しており，環濠内の堆積も最下層の灰褐色系土層（弥生時代中期）や黒褐色腐食土（弥生時代後期）という共通した土層堆積が認められ，平成５年度調査時の４号溝を介して南北につながるものと考えられる。また，この流れは平成５年度調査時の３号溝を介して，北側の５号溝に

つながってゆく可能性がある。また，平成５年度検出の16号溝は弥生時代後期のもので，Ⅰ区検出のＳＤ１につながる可能性が高い。また，Ⅷ区検出のＳＤ４とⅠ区検出のＳＤ13が中期の環濠でつながる可能性がある。東側へはＳＤ10が東へ延びて平成５年度検出の13号溝とつながり，道路状遺構の南側を通る環濠になるであろうか。ただし，ＳＤ10の幅は13号溝と比べてかなり広く，あるいは10号溝と13号溝に分岐して，東と南へ展開していくのかもしれない。平成５年度検出の大溝は，今年度の調査でⅢ～Ⅳ区西壁付近で止まることが確認された。したがって，大溝というより人工的な大型の水溜場とした方が実体に近い。この大溝を中心として，北側から東側にかけて弥生時代中期の浅い包含層が形成され，南側にも同じく弥生時代後期の浅い落ち込みが形成されている。なお，道路状遺構は，平成５年度検出地点から西側へ直線的にのび，ＳＤ９とＳＤ10に挟まれた陸橋を通って南に折れ，Ⅳ区とⅤ区の間でさらに西へ折れて，丘陵状に達するものと推測される。

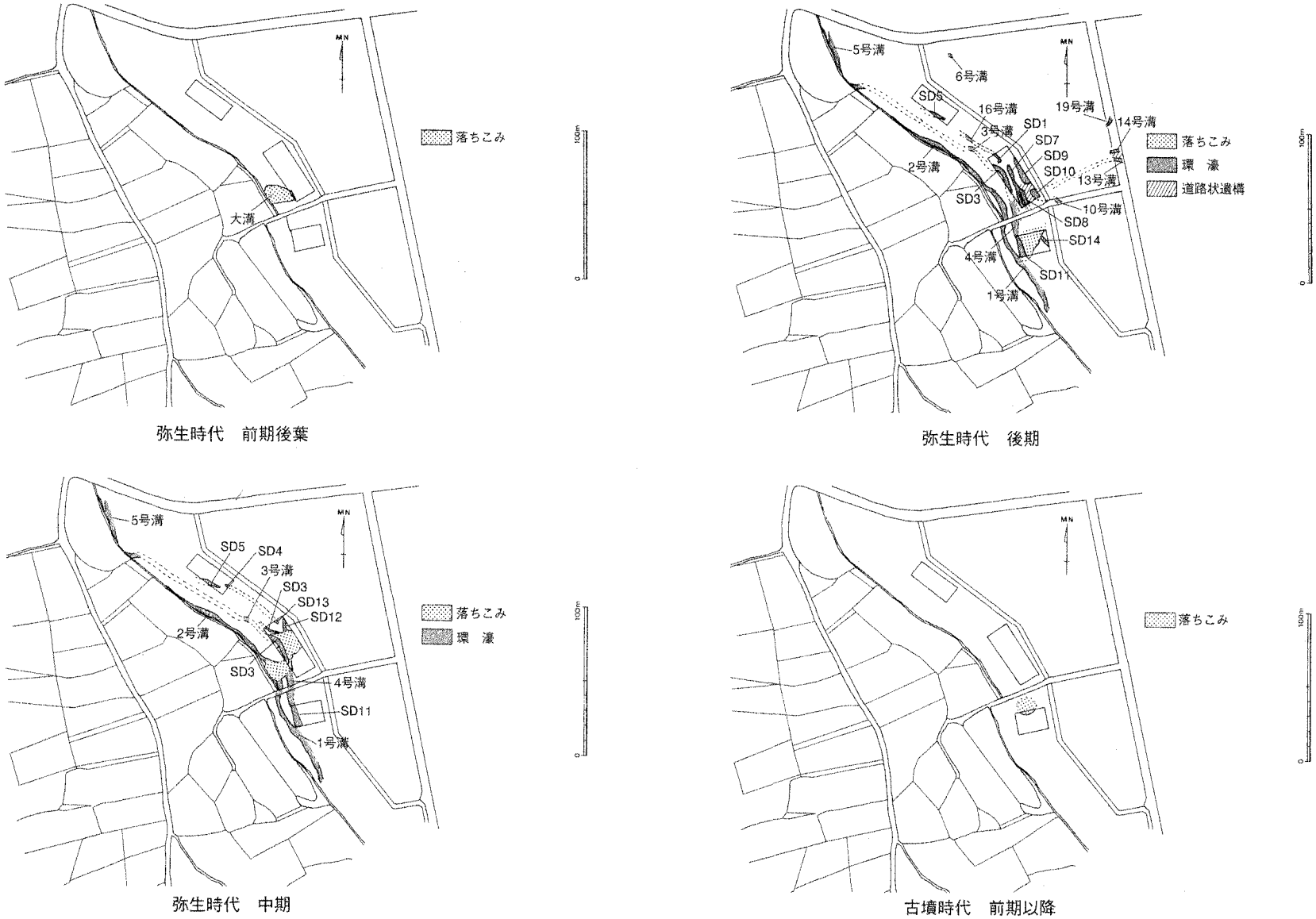
Ｂ．台地北東低地部における遺構群の変遷（第91図）

有機的なつながりが確認された遺構群を時系列に配置し，石田高原地区における遺構群の変遷を概観する。

本地域で最初に遺構が構築されるのは，弥生時代前期後葉である。南北約12m，東西約15mにわたって水溜場と考えられる大溝が掘削される。西側の堀方は未検出であるが，それほど西側にはのびず，最終的には東西20mほどになるものと推測される。この大溝の最下層には，弥生時代前期末に腐植土が堆積する。

弥生時代中期前葉には，大溝の北東部を中心に，ＳＤ５・ＳＤ４－ＳＤ13・ＳＤ２といった浅い溝が巡らされる。また，大溝を起点として北に２号溝と５号溝－３号溝－ＳＤ３，南に１号溝と４号溝－ＳＤ11という２本の環濠が丘陵を巡ることになる。ＳＤ４とＳＤ５は，Ⅷ区内の近接した地点でそれぞれ止まっており，この付近が弥生時代中期における集落への出入り口であった可能性が考えられる。大溝の北側から東側にかけては，この時期の包含層が形成されるが，この包含層の下層には薄い腐食土層が入ることから，この包含層が分布する範囲には，大溝が氾濫して沼状の湿地帯が形成されていたものと推測される。北側に展開する環濠もこの湿地帯につながる形で止まっている。

弥生時代後期中葉以降は，大溝を挟んで南北にのびる２本の環濠に加えて，ＳＤ７－ＳＤ８－ＳＤ14，ＳＤ９，13号溝－ＳＤ10－10号溝が新たに掘削され，丘陵を囲む環濠は最大で４条～５条となる。この段階では大溝は完全に埋没しているものと考えられ，丘陵寄りの２本の環濠は，この大溝を切るように再掘削される。また，東西に道路状遺構が整備され，ＳＤ９とＳＤ10の間の陸橋を挟んで南側に折れる。南進する道路の両側を併走するＳＤ８・ＳＤ10の肩には小ピットが列状に検出され，柵列が巡らされていたものと推測される。道路状遺構はⅣ区とⅤ区の間でさらに西に折れ，ＳＤ８・４号溝・１号溝をまたぐような橋を通って，丘陵上に達するものと考えられる。弥生時代中期の湿地帯は新たな環濠の掘削によって陸化したものと推測されるが，これに代わって大溝の南東側の落ち込みに腐食土が厚く堆積する。本年度調査区のⅤ～Ⅵ区一帯に周囲から水が流れ込むような湿地が形成されていたものと考えられ，４条～５条の環濠のうち，一番西側の環濠をのぞく３～４条は，この落ち込



弥生時代　前期後葉

弥生時代　後期

弥生時代　中期

古墳時代　前期以降

第91図　石田高原地区遺構変遷図（平成５年度調査分と合成）（Ｓ＝１/400）

みを起点に南北にのびていたものと推測する。

古墳時代前期には環濠がすべて埋没し，大溝の南側に大型の落ち込みが形成される。その全容は明らかでないが，東西約10m，南北約１m以上である。この落ち込みからは６世紀末の須恵器も出土しており，この時期まで周囲から水が流れ込む環境であったことがわかる。

このように，丘陵北東低地部では，時期によって地点を変えつつも湿地状の落ち込みが形成され，，それを起点として環濠や溝が掘削されている点に特徴がある。環濠の機能としては，外敵の進入を防ぐ防御的な意味も考えられるが，この地域のあり方からは，むしろ生活域や耕作面を確保するための低地部における排水機能がより重要視されていた可能性が指摘できよう。また，これらの落ち込みからは木製品が比較的多く出土しており，これらの落ち込みを貯木場として積極的に利用していた可能性も考えられる。

②出土遺物について

本年度の調査では重要遺物の出土が相次いだ。まず，ＳＤ７から出土した線刻絵画土器があげられる。原の辻遺跡では，これまで２例の線刻絵画土器が知られており，竜とみられる線刻絵画も弥生時代中期の器台に描かれた例がある（杉原2000）。今回出土した壺には，最低でも２匹の竜が描かれ，表面は部分的に剥落するものの，本来は全面に線刻画が描かれていたものと推測される。竜のモチーフの類例としては，大阪府池上遺跡例などがあげられる。竜は架空の動物であり，水を司る神獣として中国で誕生するが，日本では弥生時代後期以降，中国鏡のモチーフを真似て土器に描かれるようになる（佐原・春成1997）。原の辻遺跡例は環濠からの出土であり，竜に関する思想的背景をよく理解した上で，水にまつわる祭祀行為に供されたものと考えられる。

そのほか，原の辻遺跡で２例目となるココヤシ製笛は，原の辻遺跡以外の地域において出土例がなく，壱岐島内である程度根付いていた楽器であったことが伺える。現在でも，遺跡の北側にある芦辺町清石浜は，単位面積あたりの漂着物の量が東北アジアで最も多いとの統計結果もあり，弥生時代も海流の影響でココヤシなど南方系の木の実が漂着する機会が多かったのであろう。類似した楽器としては山陰地方を中心に弥生時代前期に分布する陶塤（とうけん）があるが，原の辻遺跡出土例は今のところこれに後出するようである。ココヤシ製笛の系譜については今後の課題である。そのほか，青銅製の指輪や鹿角製の刻骨の出土は，原の辻遺跡では初例である。

【参考文献】

副島和明1995『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集　長崎県教育委員会

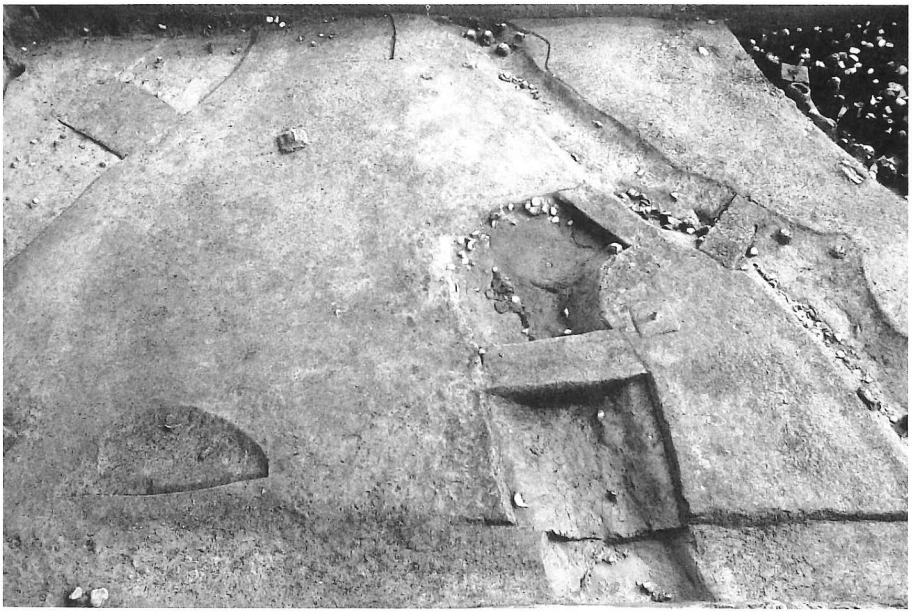
杉原敦史2000「線刻絵画土器発見！」『原の辻ニュースレター』７　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

佐原眞・春成秀爾1997『原始絵画』歴史発掘５　講談社

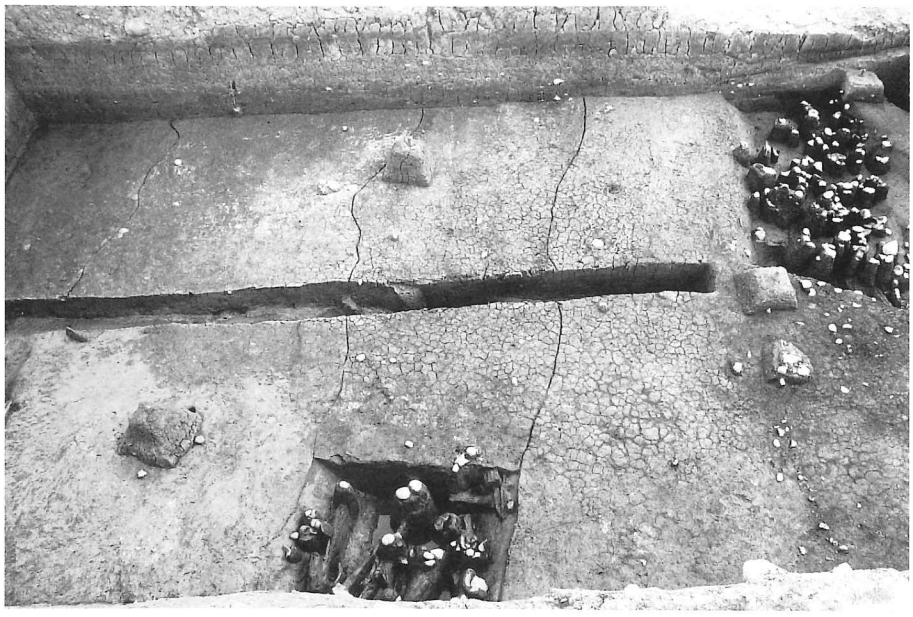
図　　版

図版14

Ⅰ区遺構検出状況
（西から）



Ⅰ区遺構検出状況
（北から）



Ⅱ区遺構検出状況
（北から）

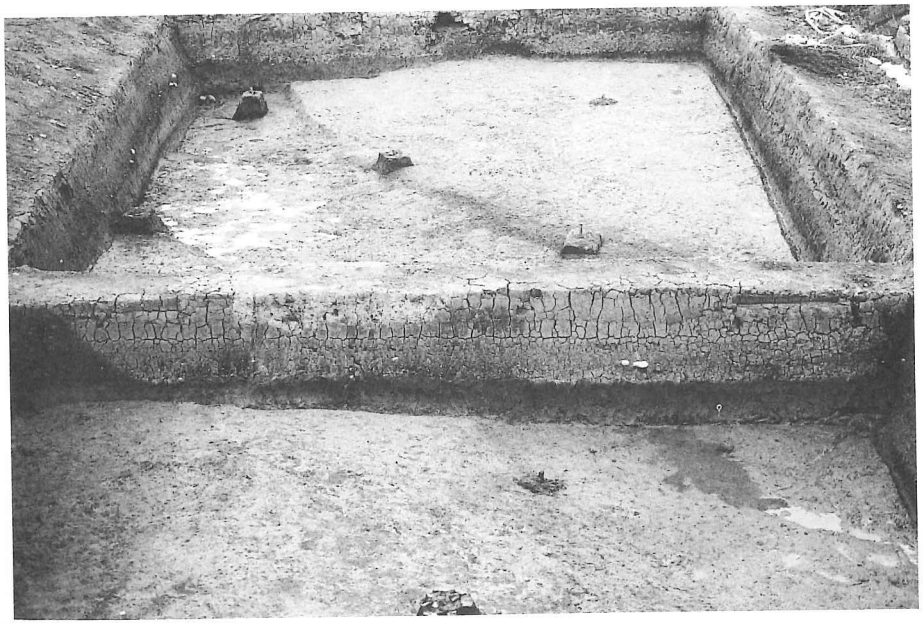
Ⅳ区遺構検出状況（西から）

Ⅳ区遺構検出状況（西から）

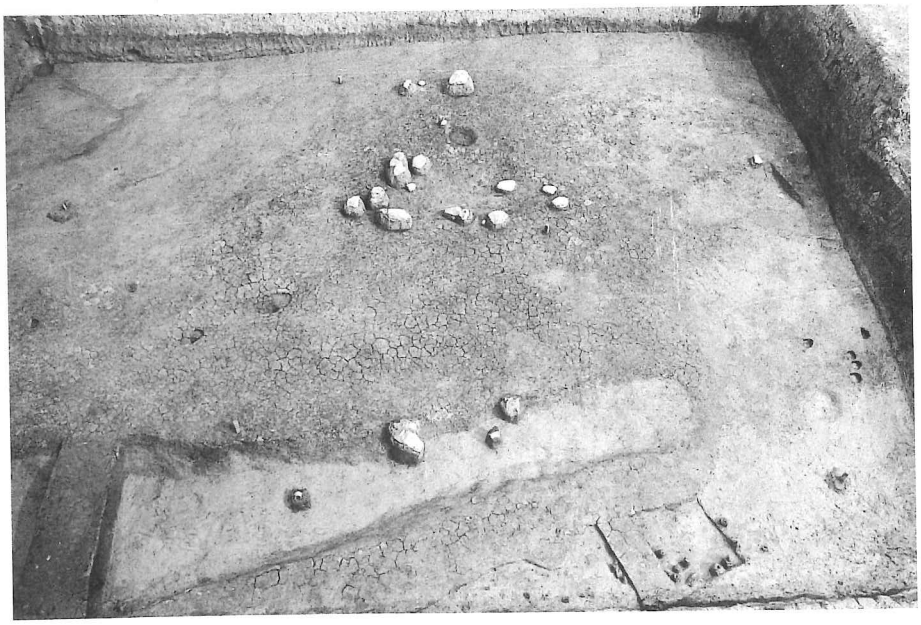
Ⅴ区遺構検出状況
（北から）

図版16

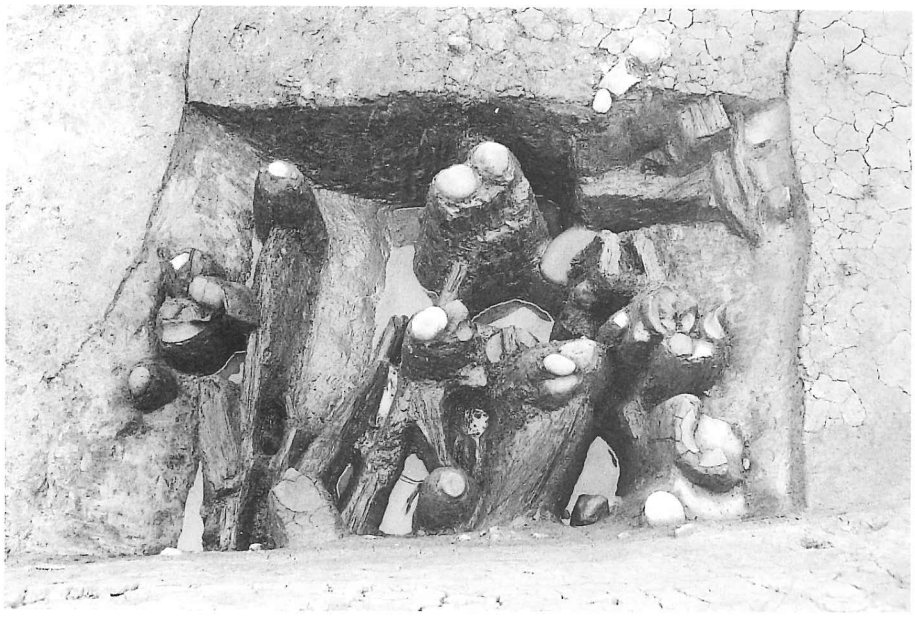
Ⅵ区全景（北から）



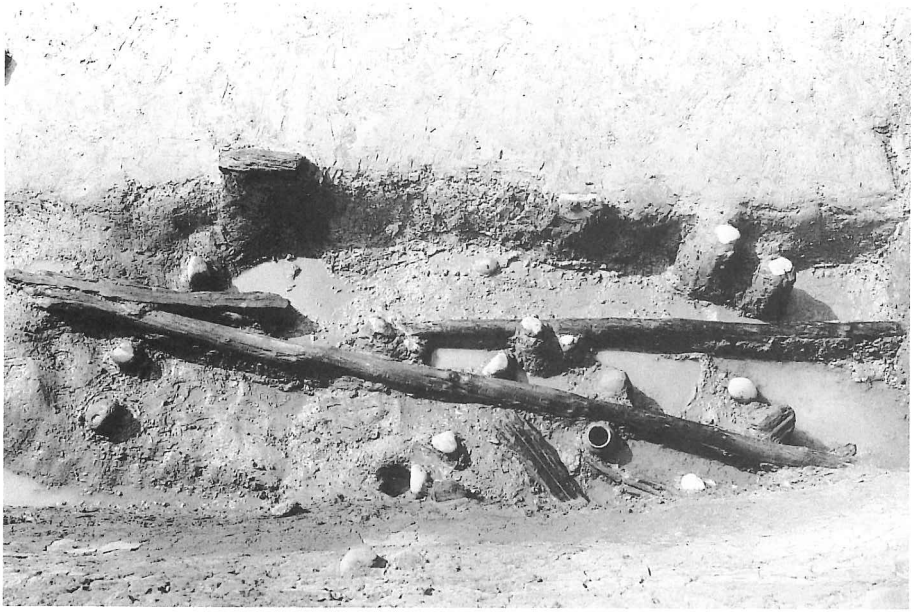
Ⅶ・Ⅷ区全景（南から）



Ⅷ区遺構検出状況
（西から）



Ⅱ区ＳＤ７遺物出土状況

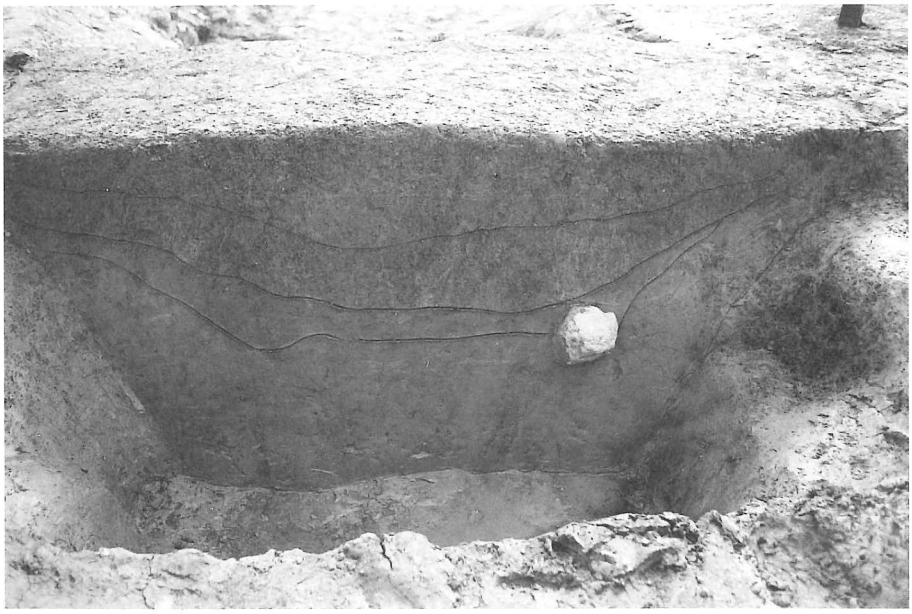


Ⅱ区ＳＤ９遺物出土状況

Ⅳ区ＳＤ10遺物出土状況

図版18

Ⅵ区石敷き遺構検出状況

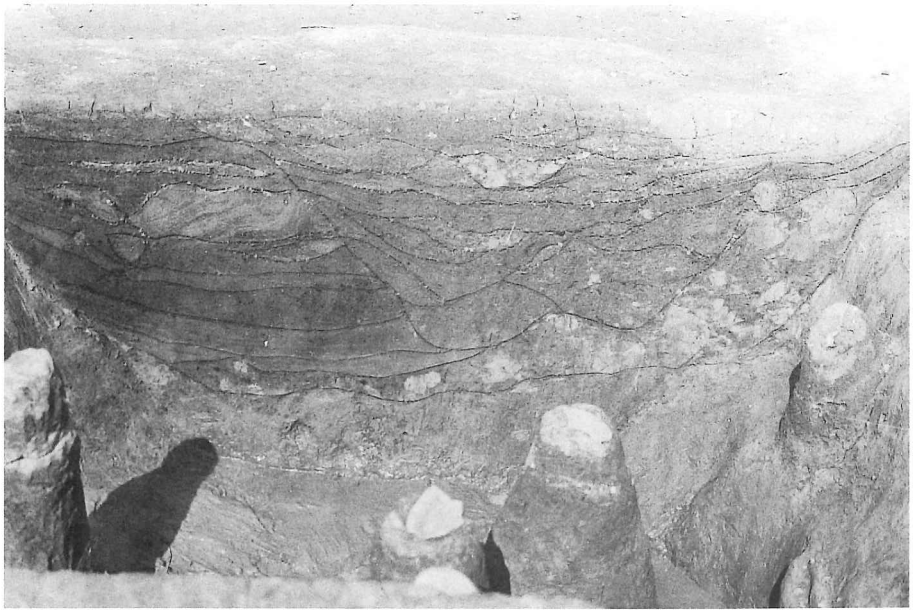


ＳＤ１断面土層

ＳＤ２断面土層

ＳＤ７断面土層

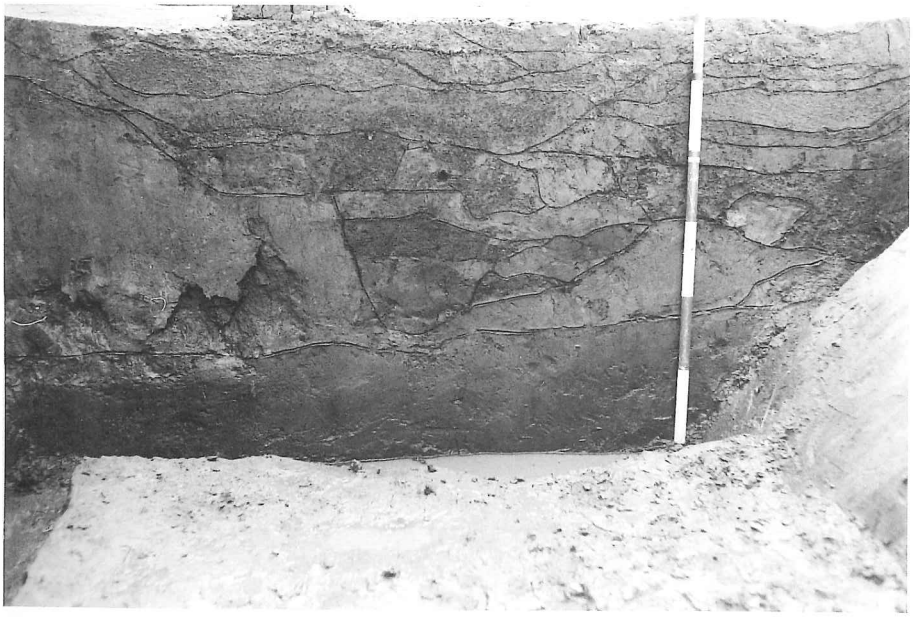
ＳＤ８断面土層



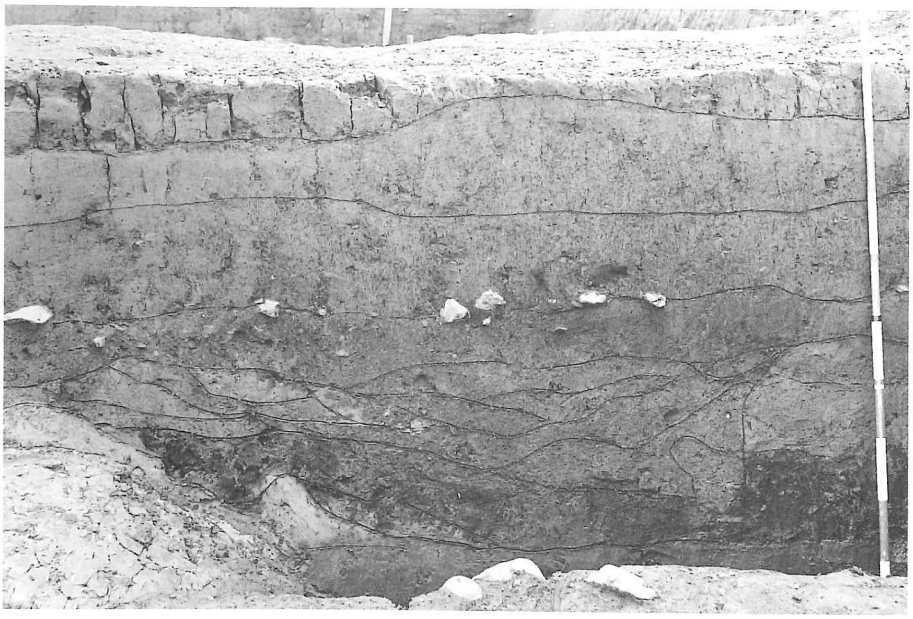
ＳＤ８断面土層

図版20

ＳＤ７・ＳＤ８断面土層



ＳＤ10断面土層



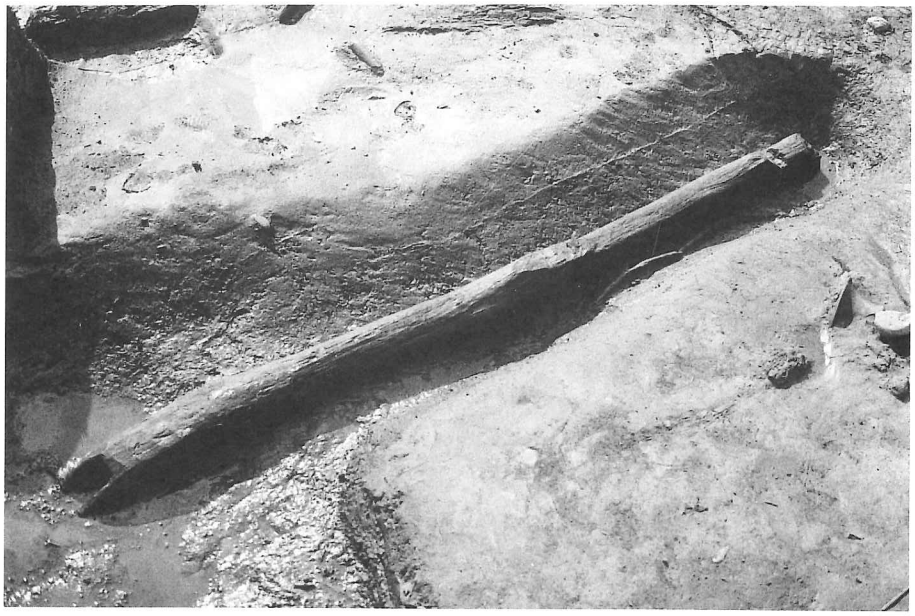
Ⅲ区南壁
サブトレンチ土層

ＳＤ９断面土層

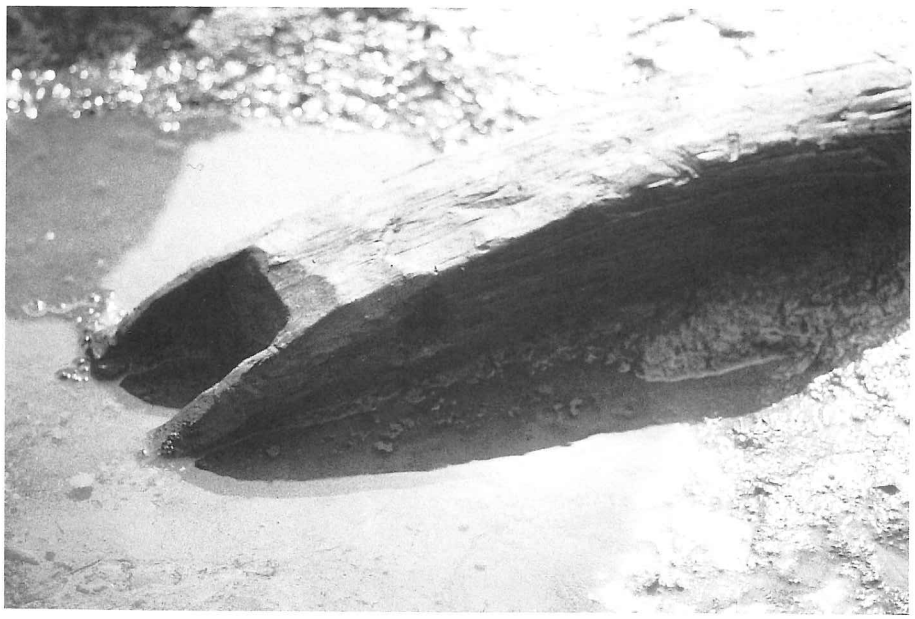
Ⅳ区南壁
サブトレンチ土層

ＳＤ５断面土層

図版22



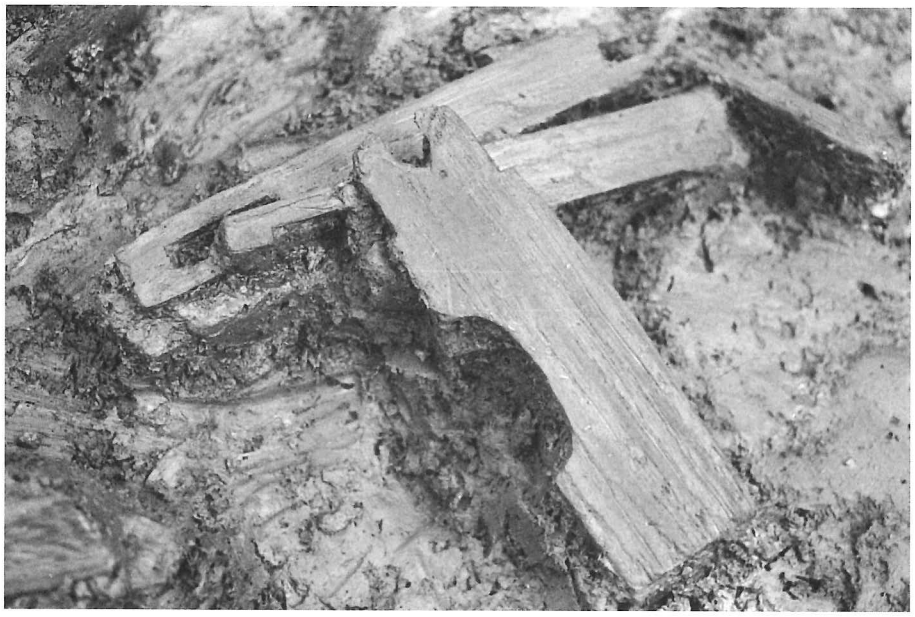
建築部材出土状況
（全景）



建築部材出土状況
（先端部）

建築部材出土状況
（末端部）

組み合せ式案
脚部出土状況（遠景）



組み合せ式案
脚部出土状況（近景）

木製品出土状況

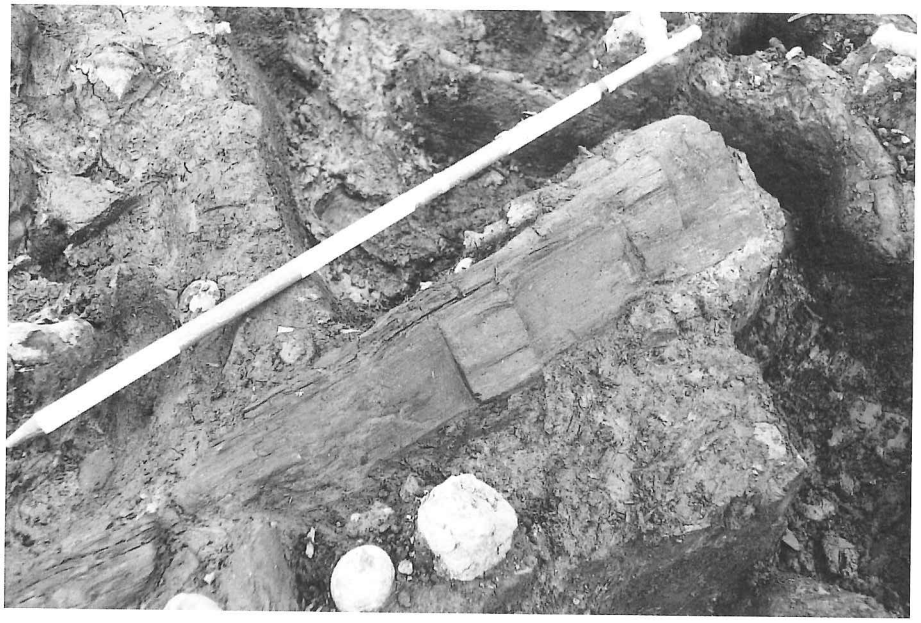
図版24

ＳＤ３獣骨出土状況

刻骨出土状況

ココヤシ製笛出土状況

木製品（槽）出土状況



木製品（梯子）出土状況

銅鏃出土状況

第72図ー12

第73図ー17

第73図ー22

第72図ー 7

第73図ー18

第74図ー31

第72図ー13

第73図ー14

第73図ー19

第74図ー34

第75図ー15

第73図ー21

第75図ー36

石田高原地区出土遺物

第15図ー39

第76図ー51

第77図ー65

第76図ー52

第76図ー48

第78図ー71

第76図ー53

第75図ー49

第78図ー72

第77図ー63

第76図ー50

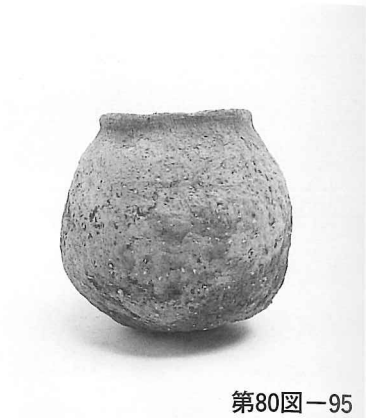
第78図ー74

石田高原地区出土遺物

図版28

第78図ー76

第79図ー89


第80図ー95

第78図ー80

第79図ー90

第89図ー 8

第79図ー86

第79図ー91

第79図ー87

第80図ー94

石田高原地区出土遺物

長崎県,原の辻遺跡(平成14年度調査研究事業)における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ⅰ．花粉分析

1．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試　　料

試料は，弥生時代後期～古墳時代初頭とされる石田高原地区Ⅷ区のＳＤ５およびⅡ区のＳＤ３から採取された２点である。試料の詳細を図１に示す。

3．方　　法

花粉粒の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

2）水洗処理の後,0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974，1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種があることからイネ属型とした。なお，検鏡の際に寄生虫卵が観察された場合は計数を行った。

4．結　　果

（1）分類群

出現した分類群は，樹木花粉27，樹木花粉と草本花粉を含むもの３，草本花粉23，およびシダ植物胞子２形態の計55である。分析結果を表１に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花

粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお，寄生虫卵も２分類群が検出された。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，クルミ属，ノグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，アカメガシワ，サンショウ属，ブドウ属，ツバキ属，グミ属，ハイノキ属，モクセイ科，イスノキ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，イボクサ，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，キンポウゲ属，アブラナ科，ワレモコウ属，アリノトウグサ属－フサモ属，チドメグサ亜科，セリ亜科，ゴマ，オオバコ属，ゴキヅル，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵，鞭虫卵

（２）花粉群集の特徴

１）石田高原Ⅷ区ＳＤ５

１層（試料14）では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し，アブラナ科，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科，カヤツリグサ科，キク亜科，セリ亜科の草本花粉が伴われる。他にオモダカ属，ミズアオイ属，ゴマが検出される。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属，シイ属－マテバシイ属，エノキ属－ムクノキが高率で出現し，スギ，クリ，モクセイ科，ツバキ属が伴われる。

２）石田高原Ⅱ区ＳＤ３

４層（試料15）では，樹木花粉よりも草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し，アブラナ科，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科，カヤツリグサ科，セリ亜科の草本花粉が伴われる。また，クワ科－イラクサ科がやや低率に出現する。樹木花粉ではシイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，エノキ属－ムクノキ，スギが高率で出現する。なお，回虫および鞭虫の寄生虫卵が低密度に検出された。

5．花粉分析から推定される植生と環境

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる石田高原地区Ⅷ区のＳＤ５（１層）およびⅡ区のＳＤ３（４層）の堆積当時は，イネ科をはじめアブラナ科，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科，キク亜科，クワ科－イラクサ科などの人里植物もしくは耕地雑草が分布していたと考えられ，周辺ではイネおよびゴマなどの栽培が行われていたと推定される。また，周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属，シイ属－マテバシイ属，ツバキ属などの照葉樹林をはじめ，エノキ属－ムクノキ，スギ，クリ，モクセイ科などの樹木も分布していたと推定される。

Ⅱ区のＳＤ３（４層）では，回虫および鞭虫の寄生虫卵が検出された。これらの寄生虫は，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染するが，低密度であることから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。

文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187－193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21－30.

表1　原の辻遺跡，石田高原地区における花粉分析結果

分類群		14	15
		Ⅷ区ＳＤ５	Ⅱ区ＳＤ３
学名	和名	１層	４層
Arboreal pollen	樹木花粉		
Abies	モミ属	1	1
Tsuga	ツガ属	1	2
Pinussubgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	3	1
Cryptomeria japonica	スギ	11	6
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2	1
Juglans	クルミ属	1	
Platycarya strobilacea	ノグルミ		1
Alnus	ハンノキ属		1
Betula	カバノキ属	2	
Corylus	ハシバミ属	1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ	2	2
Castanea crenata	クリ	6	3
Castanopsis	シイ属－マテバシイ属	25	19
Fagus	ブナ属		1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	2	3
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	35	11
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ	1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ	17	7
Mellotus japonicus	アカメガシワ	1	
Zanthoxylum	サンショウ属		1
Vitis	ブドウ属	1	1
Camelia	ツバキ属	4	
Elaeagnus	グミ属		1
Symplocos	ハイノキ属	1	1
Oleaceae	モクセイ科	8	1
Distylium	イスノキ属	1	
Lonicera	スイカズラ属	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	7	30
Leguminosae	マメ科	1	1
Araliaceae	ウコギ科		1
Nonarboreal pollen	草木花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属	2	
Sagittaria	オモダカ属	1	
Gramineae	イネ科	186	118
Oryza type	イネ属型	8	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	10
Aneilema keisak	イボクサ		1
Monochoria	ミズアオイ属	1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	1
Rumex	ギシギシ属	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	6	21
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2
Ranunculus	キンポウゲ属	3	
Cruciferae	アブラナ科	7	35
Sanguisorba★	ワレモコウ属		1
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属－フサモ属	1	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	
Apioideae	セリ亜科	9	6
Sesamum indicum	ゴマ	1	
Plantago	オオバコ属		1
Actinostemma lobatum	ゴキヅル	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	14
Asteroideae	キク亜科	4	1
Artemisia	ヨモギ属	34	41
Fem spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	5	7
Trilate type spore	三条溝胞子	1	8
Arboreal pollen	樹木花粉	127	64
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	32
Nonarboreal pollen	草本花粉	281	254
Total pollen	花粉総数	416	350
	試料１㎤中の花粉密度	5.4 $\times 10^4$	1.9 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	5	8
Fem spore	シダ植物胞子	6	15
Helminth eggs	寄生虫卵		
Ascaris	回虫卵		1
Trichuris	鞭中卵		8
Total	計	0	9
	試料１㎤中の寄生虫卵密度	(－) (－)	7.2 $\times 10$
	明らかな消化残渣	(－)	(－)

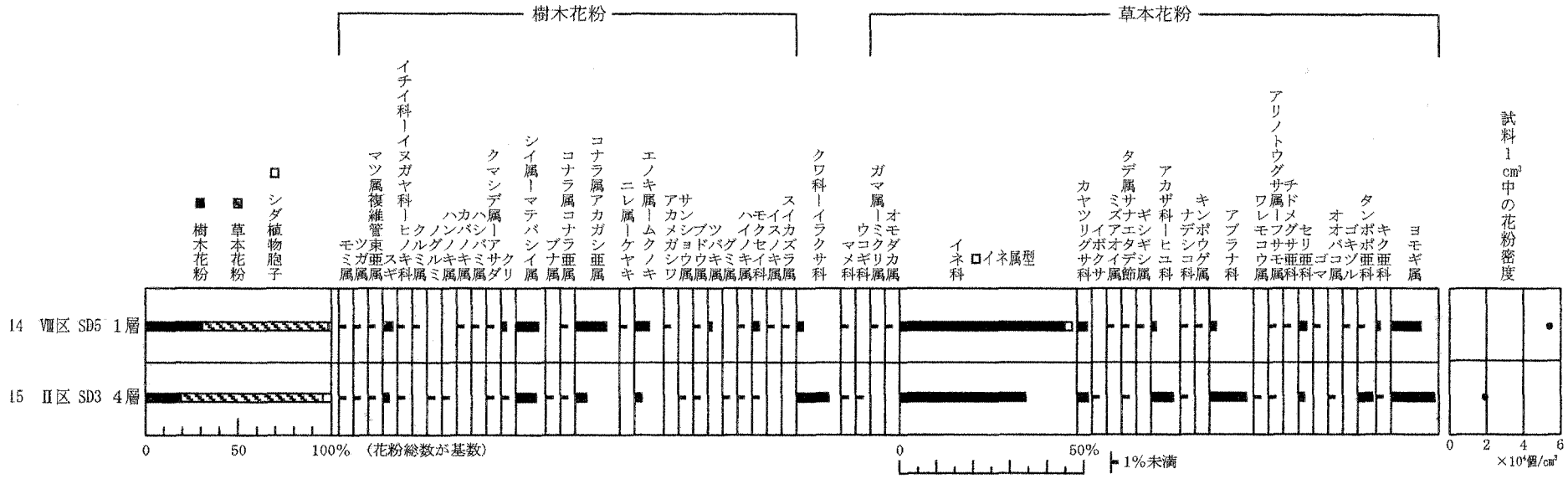
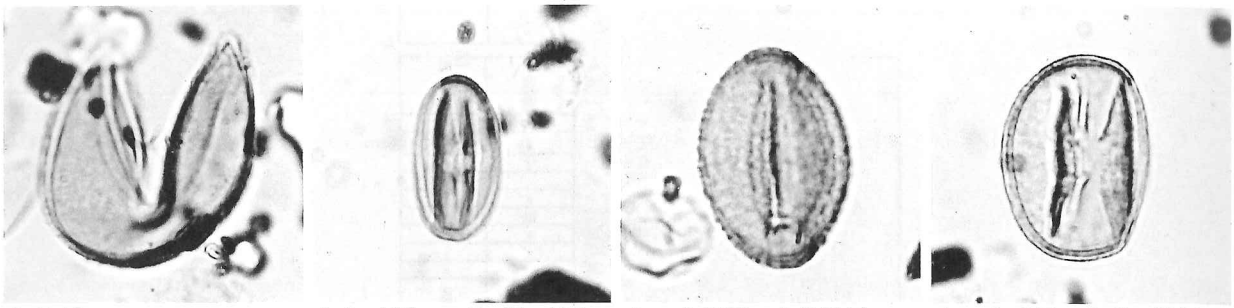
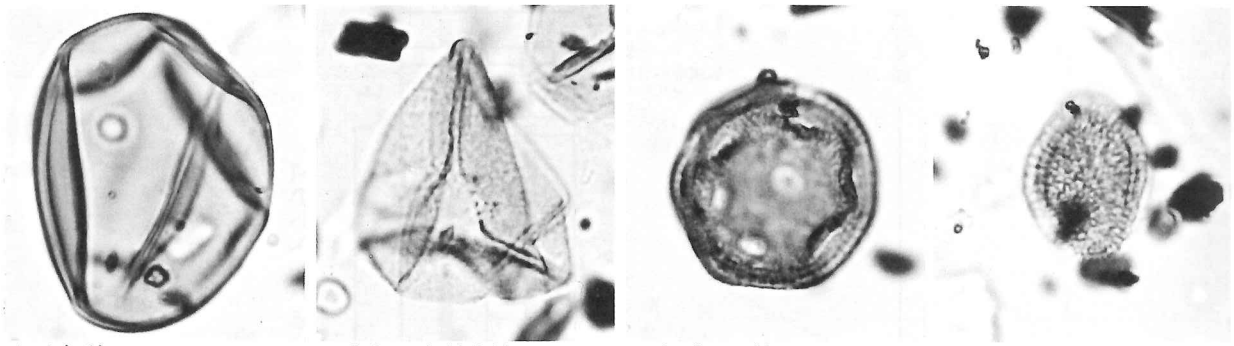


図1　原の辻遺跡，石田高原地区における花粉ダイアグラム

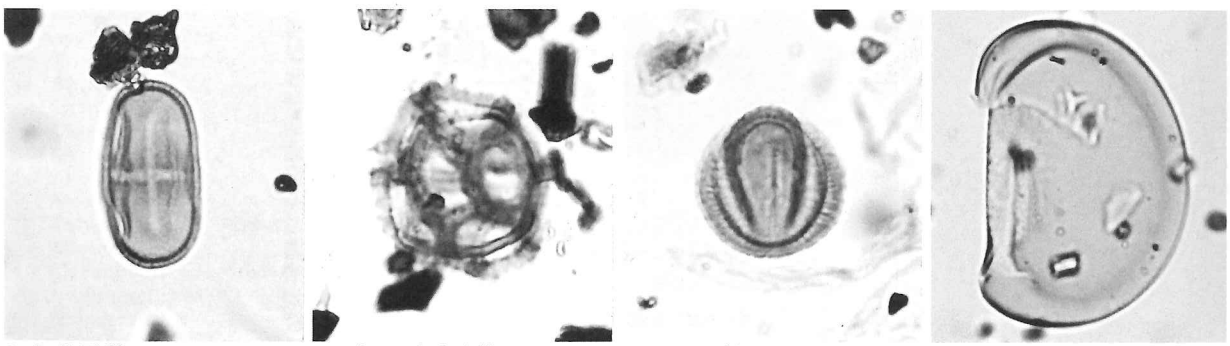
原の辻遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



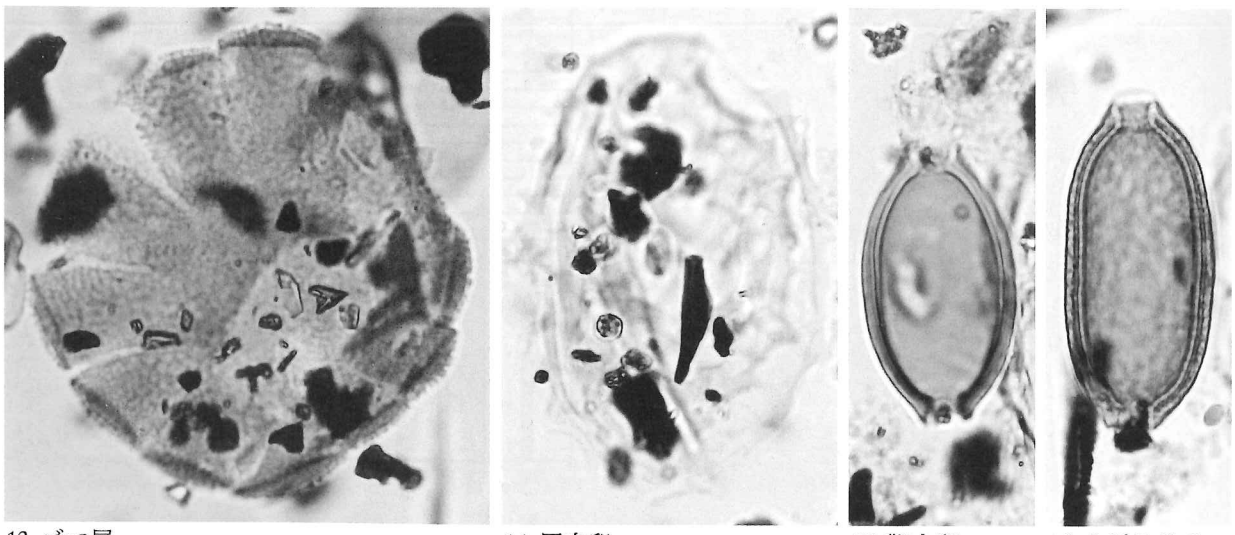
1 スギ　2 シイ属ーマテバシイ属　3 コナラ属コナラ亜属　4 コナラ属アカガシ亜属



5 イネ科　6 カヤツリグサ科　7 ナデシコ科　8 アブラナ科



9 セリ亜科　10 タンポポ亜科　11 ヨモギ属　12 シダ植物単条溝胞子



13 ゴマ属　14 回虫卵　15 鞭虫卵　16 カピラリア

10μm

Ⅱ．寄生虫卵分析

1．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は，花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており，人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり，寄生虫卵の種類から，摂取された食物の種類や，そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

2．試　　料

試料は，弥生時代後期～古墳時代初頭とされる石田高原地区Ⅱ区のＳＤ３，ＳＤ７，ＳＤ９から採取された計３点である。試料の詳細を表１に示す。

3．方　　法

微化石分析法を基本に，以下のように行った。

1）サンプルを採量

2）脱イオン水を加えて撹拌

3）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

4）25％フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）

5）遠心分離（1500rpm，２分間）による水洗の後にサンプルを２分割

6）片方にアセトリシス処理を施す

7）両方のサンプルを染色後，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8）検鏡・計数

4．結　　果

分析の結果，ＳＤ３の７層（試料13）では鞭虫卵，ＳＤ７の８層（試料３）では鞭虫卵，ＳＤ９の４層（試料４）では鞭虫卵卵とカピラリア卵が検出されたが，いずれも低密度である。

5．考　　察

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる石田高原地区Ⅱ区のＳＤ３，ＳＤ７，ＳＤ９からは，鞭虫卵が検出された。鞭虫は，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染するが，低密度であることから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。ＳＤ９からは鳥類に寄生するカピラリア卵が検出された。このことから，水鳥等の存在が示唆される。

文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231－245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14－15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.９－55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学,2,同成社，p.151－158.

表１　原の辻遺跡，石田高原Ⅱ区における寄生虫卵分析結果

		3	4	13
分類群		ＳＤ７	ＳＤ９	ＳＤ３
学名	和名	８層	４層	７層
Helminth eggs	寄生虫卵			
Trichuris	鞭虫卵	2	1	10
Capillaria	カピラリア		1	
Total	計	2	2	10
試料１㎤中の寄生虫卵密度		1.8 ×10	2.4 ×10	1.4 ×10^4
明らかな消化残渣		(－)	(－)	(－)
試料１㎤中の花粉密度		4.0 ×10^4	3.8 ×10^4	3.5 ×10^4

Ⅲ. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映していることから，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試　　料

試料は，弥生時代後期～古墳時代初頭とされる石田高原地区Ⅰ区のＳＤ１とＳＤ３，Ⅱ区のＳＤ７とＳＤ９，Ⅲ区のＳＤ３，Ⅳ区のＳＤ８とＳＤ10，Ⅴ区のＳＤ14，Ⅵ区のＳＤ11，Ⅷ区のＳＤ５，芦辺八反Ａ区のＳＤ２から採取された計12点である。試料の詳細を図１に示す。

3. 方　　法

以下の手順で珪藻を抽出し，プレパラートを作成した。

1）試料から乾燥重量１ｇを秤量

2）10％過酸化水素水を加え，加温しながら１晩放置

3）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成

6）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結　　果

試料から出現した珪藻は，真－中塩性種（海－汽水生種）９分類群，貧塩性種（淡水生種）82分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表１に示し，珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔中塩性（汽水生）種〕

Navicula menisculus v. upsalinesis,Navicula peregrina

〔貧塩性（淡水生）種〕

Achnanthes hungarica,Achnanthes lanceolata,Amphora copulata,Aulacoseira ambigua,Aulacoseira sp.,Cocconeis placentula,Fragilaria construens,Fragilaria construens v. binodis,Fragilaria construens v. subsalina,Fragilaria construens v. venter,Gomphonema augur,Gomphonema parvulum,Gomphonema truncatum,Hantzschia amphioxys,Navicula capitata,Navicula confervacea,Navicula elginensis,Navicula pupula

5．珪藻分析から推定される堆積環境

（1）石田高原Ⅰ区

ＳＤ１の４層（試料１）およびＳＤ３の８層（試料２）では，珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったことや，水流による淘汰を受けたことなどが考えられる。

（2）石田高原Ⅱ区

ＳＤ７の８層（試料３）では，流水性種の Achnanthes lanceolata, Gomphonema parvulum が高率で出現し，止水性種の Fragilaria construens, Fragilaria construens v.venter なども伴われる。このことから，８層の堆積当時は，おおむね滞水した流水の環境であったと考えられ，部分的に止水になる箇所や時期もあったと推定される。

ＳＤ９の４層（試料４）では，Achnanthes lanceolata などの流水性種，Fragilaria construens v.venter などの止水性種，および Hantzschia amphioxys などの陸生珪藻が出現する。このことから，４層の堆積当時は，滞水した流水域や止水域，および湿潤な陸域などが見られる多様な環境，もしくはこれらを繰り返す不安定な環境であったと推定される。

（3）石田高原Ⅲ区

ＳＤ３の14層（試料５）では，おもに止水性種の Fragilaria construens v.venter が優占して出現する。このことから，14層の堆積当時は，おおむね滞水した止水域の環境であったと推定される。

（4）石田高原Ⅳ区

ＳＤ８の７層（試料７）では，Fragilaria construens, Fragilaria construens v.venter などの止水性種が優占し，２層(試料６)では，Gomphonema parvulum, Navicula elginensis などの流水性種，および Navicula confervacea, Hantzschia amphioxys の陸生珪藻が出現する。これらのことから，７層の堆積当時はおおむね滞水した止水の環境であったと考えられ,2層では滞水した流水の環境および湿潤な陸域の環境であったと推定される。

ＳＤ10の22層（試料８）では，Fragilaria construens, Fragilaria construens v.venter などの止水性種が優占する。このことから，22層の堆積当時はおおむね滞水した止水の環境であったと推定される。

（5）石田高原Ⅵ区

ＳＤ11の５層（試料９）では，流水性種の Achnanthes hungarica が優占する。このことから，５層の堆積当時はおおむね滞水した流水の環境であったと推定される。

（6）石田高原Ⅴ区

ＳＤ14の３層（試料10）では，中塩性（汽水生）種で汽水泥質干潟指標種群の Navicula menisculus v. upsalinesis，および汽水泥質干潟指標種群の Navicula peregrina が優占する。このことから，３層の堆積当時は海水の影響がある泥質の干潟の環境であったと推定される。

（7）石田高原Ⅷ区

ＳＤ５の４層（試料11）では，珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

（8）芦辺八反Ａ区

ＳＤ２の９層（試料12）では，珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

文献

Hustedt,F.（1937－1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda－Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl. 15, p.131－506.

Patrick, R.eimer, C. W.（1966）The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.（1975）The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（２）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, p.35－47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29－44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1－20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73－88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，p.23－45.

表1　原の辻遺跡，石原高原地区および芦辺地区における珪藻分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	石田高原Ⅰ区		Ⅱ区		Ⅲ区		Ⅳ区		Ⅴ区	Ⅵ区	Ⅶ区	芦辺八反
分類群	SD1	SD3	SD7	SD9	SD3	SD8	SD8	SD10	SD11	SD14	SD5	A区SD2
貧塩性種（淡水生種）												
Achnanthes hungarica	16	4			1		331	4				
Achnanthes inflata			2									
Achnanthes lanceolata	52	12	2	3		1	60	6				
Amphora copulata	5	6	7	6	4	3	7	1				
Amphora montana	2	6		1		1	1	7				
Anomoeoneis sphaerophora		1		1								
Aulacaseria ambigua	6			1	11	4						
Aulacaseria sp.			6		14	3						
Caloneis bacillum				1				2				
Caloneis hyalina				1				1				
Caloneis silicula	1		1									
Cocconeis placentula	6	4		4		5	23	1				
Cymatopleura solea	1											
Cymbella lanceolata							4					
Cymbella naviculiformis				1	1							
Cymbella silesiaca	1		2	1	1	1	2					
Cymbella tumida					3							
Diploneis sp.			5									
Diploneis subovalis			1									
Epithemia adnata			1									
EunoFragilariatia diodon			1									
Eunotia minor			3	1	1	4	9	1				
Eunotia serra			1									
Eunotia soleirolii				1			12		1			
Fragilaria brevistriata		2										
Fragilaria capucina	1	4										
Fragilaria construens	16	3	12	1	74	57	1					
Fragilaria construens v.binodis	1		1		8	12						
Fragilaria construens v.subsalina			10		11	8						
Fragilaria construens v.venter	11	8	154	6	182	98	1					
Fragilaria vulgaris	2											
Gomphonema acuminatum	1		1	1		4						
Gomphonema angustumGomphonema augur	1	1		1			19	16				
Gomphonema clevei		1										
Gomphonema globiferum					1							
Gomphonema gracile	6	3		2	1	1	1	3				
Gomphonema minutum		1		3								
Gomphonema olivaceum	1											
Gomphonema parvulum	41	5	1	11		3	11	6				
Gomphonema sp.					1							
Gomphonema truncasum	8	3	2		3		19	1				
Gyrosigma sp.		3		3		1		1				
Hantzschia amphioxys	1	9		5	1	2	1	3				
Melosira lineata	2											
Navicula americana					1	1						
Navicula capitata	5	1				1	37	12	1			
Navicula confervacea	14	2		9	1		93	1				
Navicula consenta	1	1					3	1				
Navicula crypsocephala	6	3		1				4				
Navicula crypsotenella	1						3					
Navicula cuspidata	1	2			1	1		1				
Navicula decussis	2				1							
Navicula elginensis	1	1	4	12	1			2				
Navicula kotschyi	11	4	1			2						
Navicula laevissima				3	3	2						
Nitzschia brevissima	1											
Nitzschia frustulum	1						14	3				
Nitzschia linearis	5											
Pinnularia acrosphaeria		1	1	1								
Pinnularia interrupta	2			2								
Pinnularia major		1										
Pinnularia microstauron				2			1	2				
Pinnularia schroederii				2								
Pinnularia viridis	1			1				2				
Rhopalodia gibba	1			1	4	4						
Rhopalodia gibberula			1		1	1						
Stauroneis acuta		1					1					
Stauroneis anceps				2								
Stauroneis lauenburgiana	1		1	1		1	2	1				
Stauroneis phoenicenterom	1			6	1			1				
Stauroneis smithii			1									
Surirella angusta				1								
Synedra ulna	4	2					5		1			
Tabellaria fenestrata－flocculosa	1		2		4	5						
真－中塩性種（海－汽水生種）												
Actinocyclus sp.		1										
Bacillaria paradoxa	1	1										
Navicula menisculus		1			1							
Navicula menisculus v.upsalinesis	1						2	86				
Navicula peregrina		1			1			69				
Nitzschia hungarica	11	1										
Nitzschia levidensis v.victoriae	2							1				
Nitzschia plana			2									
Thalassionema nitzschioides								1				
合　計	0	0	261	108	230	114	351	233	668	233	3	1
未同定	0	0	16	13	6	10	10	11	21	11	3	0
破　片	2	2	98	58	39	62	57	58	56	23	26	2
試料1㎖中の殻数密度	0.0	0.0	3.5 ×106	3.8 ×105	1.5 ×106	1.4 ×105	9.2 ×106	3.1 ×106	2.6 ×107	6.2 ×106	2.4 ×103	2.0 ×102
完形殻保存率(%)	(－)	(－)	73.9	67.6	85.8	66.7	86.4	80.8	92.5	91.4	18.8	33.3

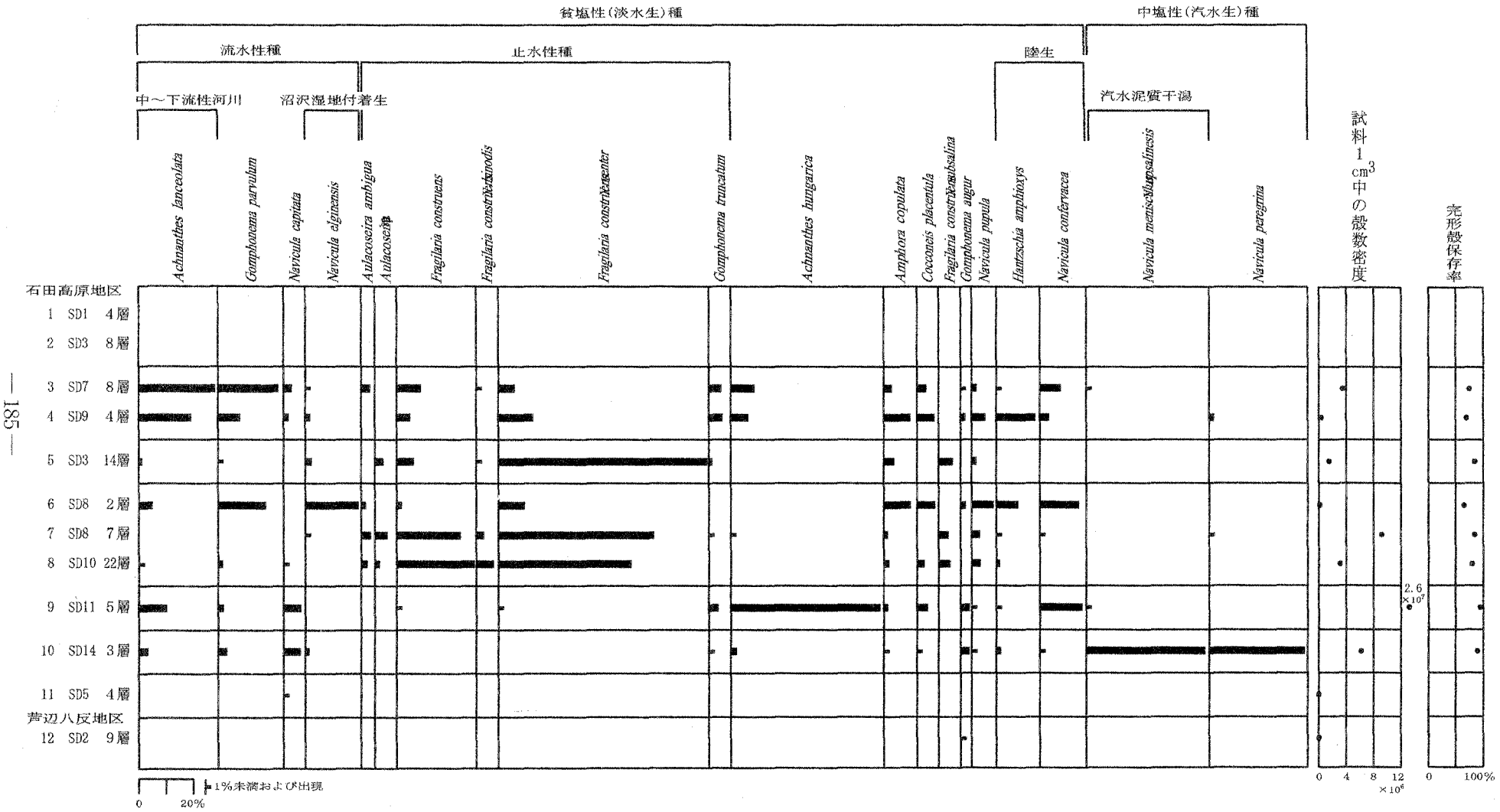
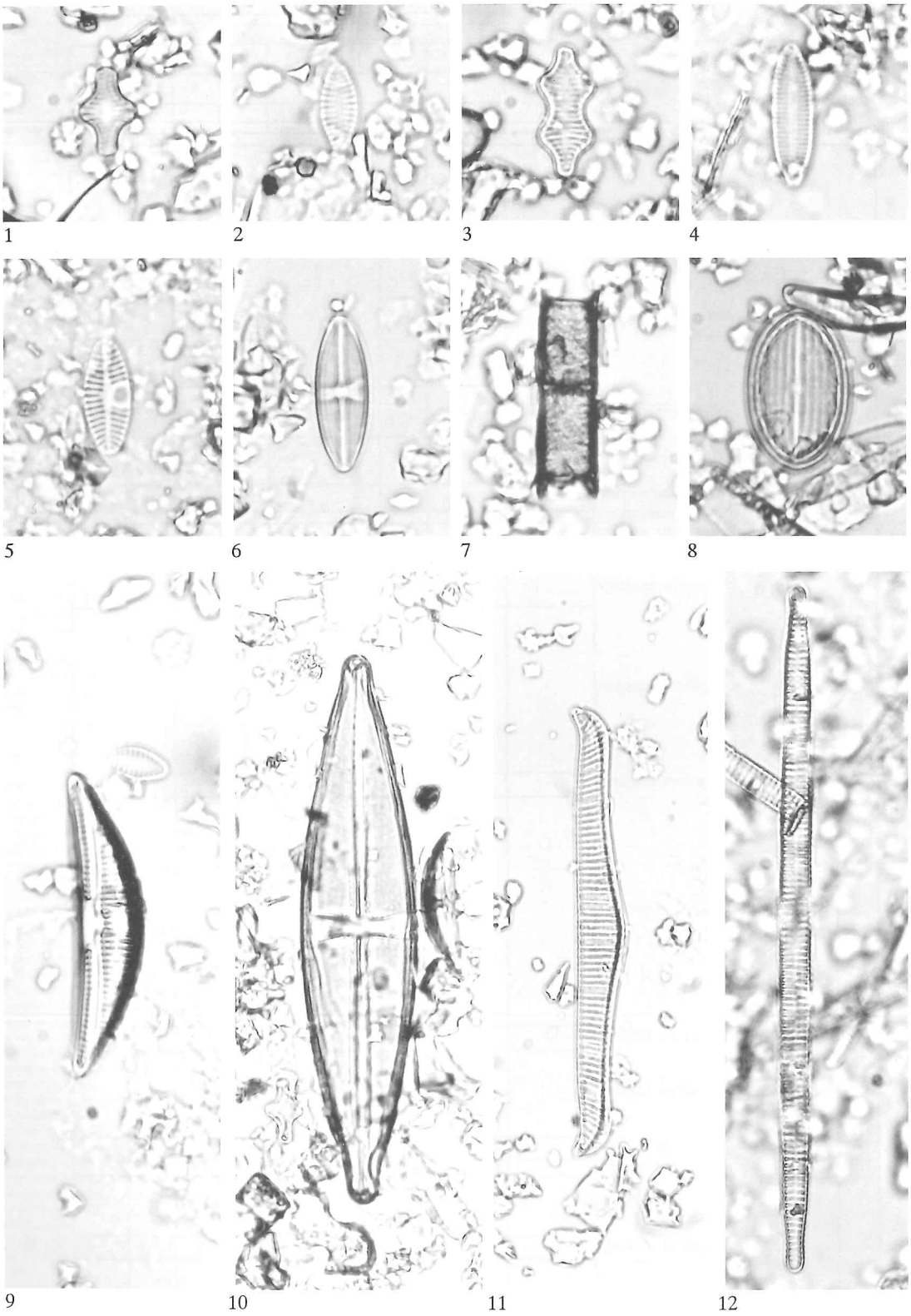


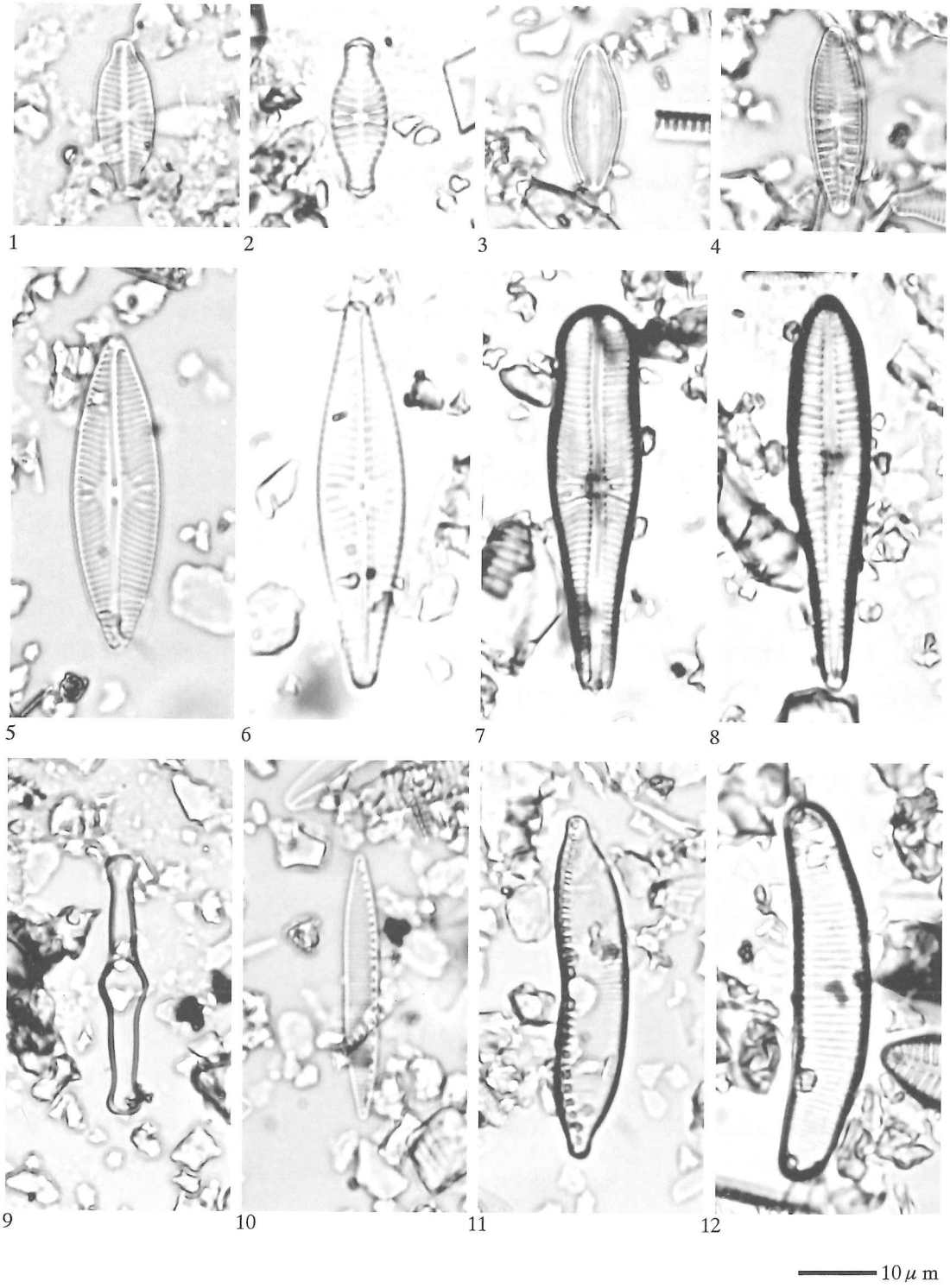
図1　原の辻遺跡，石田高原地区および芦辺八反地区における主要珪藻ダイアグラム



1 - 9 ―――― 10 μm

10 - 12 ―――― 10 μm

1. *Fragilaria construens* 2. *Fragilaria construens* v. *venter* 3. *Fragilaria construens* v. *binodis*
4. *Fragilaria construens* v. *subsalina* 5. *Achnanthes lanceolata* 6. *Achnanthes hungarica*
7. *Aulacoseira ambigua* 8. *Cocconeis placentula* 9. *Amphora copulata* 10. *Stauroneis phoenicenteron*
11. *Rhopalodia gibba* 12. *Synedra uluna*



1.*Navicula elginensis* 2.*Navicula capitata* 3.*Navicula confervacea* 4.*Gomphonema pervulum*
5.*Navicula menisculus* v. *upsalinesis* 6.*Navicula peregrina* 7.*Gomphonema truncatum* 8.*Gomphonema augur*
9.*Tabellaria fenestrata-flocculosa* 10.*Nitzschia frustulum* 11.*Hantzschia amphioxys* 12.*Eunotia soleirolii*

原の辻遺跡　高元，石田高原地区（2002年度）出土動物遺存体

丸山　真史[1]・松井　　章[2]

はじめに

今回報告するのは，高元Ⅰ，Ⅱ区，石田高原Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ区から出土した動物遺存体である。本遺跡では，平成５年度の石田高原地区の調査において，環濠の一部から小貝塚をともなうゴミ捨て場が確認されており，そこから多くの動物遺存体が出土した（茂原・松井1995）。また，高元地区でも，平成６年度の範囲確認調査において，竪穴住居址から卜骨などともに動物遺存体が出土している（松井　1995）。今回の試料は，弥生時代の試料が主体で，その他に古墳時代の試料も含まれる。

１．出土した動物遺存体の特徴

搬入された試料は，発掘中に肉眼で確認し採集したものと，水洗選別から得られたものである。後者は発掘担当者が，石田高原Ⅴ区後期落ちこみ内の貝層ブロックを１㎜メッシュのふるいにより水洗選別したもので，魚類をはじめとする多くの微細遺物を採集することができ，本報告に盛り込むことができた。

動物種名，部位まで同定できたものは，破片数93点である。魚類が23点，うち軟骨魚類（サメ類）８点，硬骨魚類16点である。硬骨魚類は，ベラ科の一種７点，フグ類３点，マダラ２点，オイカワ，フサカサゴ科の一種，マダイ，フエダイ科がそれぞれ１点ずつである。両生類（カエル類），鳥類が１点ずつ，哺乳類66点，うちヒト２点（おそらく同一個体），イノシシ30点，ニホンジカ３点，鰭脚類１点，イヌ４点，ウマ17点，ウシ２点，イルカ類７点である。発掘面積に対してこの出土量は多いとは言えず，以前の環濠部の調査に比べても少ない。

２．種類ごとの特徴

ａ．ウニ綱

棘皮動物門

ウニ類

ウニの棘が多数出土している。

脊椎動物門

ｂ．魚類

サメ類

石田高原地区の環濠部からサメ類の椎骨６点，遊離歯２点が出土している。そのうち１点は，ネザミザメ特有の蛇腹のような側面を持つ大型の椎骨である。以前の調査で出土したような加工品は見ら

1　京都大学大学院人間・環境学研究科　修士課程
2　奈良文化財研究所　主任研究者　京都大学大学院人間・環境学研究科　助教授（併任）
3　東京大学江田真毅氏のご教示を得た。

れない（茂原・松井　1995）。

オイカワ

貝層ブロックの水洗選別試料から，完形の咽頭骨１点が採集された。河川の中流から下流域，清澄な湖沼に生息する。遺跡からの出土は全国的に少なく，貴重な試料である。現在，出土が確認されているのは，愛知県一色青海遺跡（久保1998），滋賀県栗津湖底遺跡第３貝層（内山・伊庭1997），広島県帝釈弘法滝洞窟遺跡（松井ほか2000・藤田ほか2002）である。

フサカサゴ科の一種

貝層ブロックの水洗選別試料から主鰓蓋骨１点を採集した。フサカサゴ科は，それぞれの種が類似しているため区別が難しく，本例も種の同定には至らなかった。

マダラ

貝層ブロックの水洗選別試料から，前上顎骨を２点採集した。マダラは，日本列島近海では北太平洋北部，日本海，黄海，オホーツク海，ベーリング海に分布する。現在，日本海では島根県が南限とされている。北海道や東北地方以外の遺跡からの出土は少ない。全長1.2m程度まで成長するが，本例は２点とも小型の個体である。

マダイ

石田高原地区の環濠部から，主上顎骨１点が出土している。それほど大きくないが，体長30cmを越える個体である。

ベラ科

貝層ブロックの水洗選別試料から７点のベラ科の咽頭骨を採集した。手元の環生骨格比較標本のキュウセン，ヤシャベラ，オハグロベラ，ムスメベラなどと比較したが，いずれも形態的特徴を異とし，種を同定するには至らなかった。

フグ類

貝層ブロックの水洗選別試料から，前上顎骨３点と歯骨１点が採集された。歯骨はかなり小型の個体である。

フエダイ科の一種

小型のフエダイ科の前上顎骨が一点出土している。

c．両生類

貝層ブロックの水洗選別試料から，カエル類の上腕骨１点のみを採取した。大きさから，アマガエルのような小型の種と推測される。

d．鳥類

高元地区から尺骨が１点出土している。手許の標本では，ウミウ，カワウ，アオサギなどより大きく，ガン，ハクチョウより小さい。尺骨の特徴は，長さの割に細く華奢な印象を受ける。アホウドリ類に類似するが，手許に現生標本が無く，今後，現生標本をもとに種を確定したい[3]。

e．哺乳類

イノシシ

全部で29点出土している。最も多く出土したのは遊離歯で，犬歯１点，大臼歯９点である。犬歯は

大きく発達したオスのものである。また，臼歯の咬耗はいずれも進んでおらず幼獣または，若獣のものが多い。次いで脛骨４点，下顎骨，橈骨それぞれ３点ずつ，頭蓋骨，上腕骨それぞれ２点ずつ，環椎，寛骨，肩甲骨？それぞれ１点ずつである。骨端部の化骨化終了した成獣を含め小さな個体が多い。今回は，形態的にブタの可能性を見ることができる顎骨などの良好な試料に恵まれなかった。

ニホンジカ

石田高原地区から寛骨が１点と高元地区から枝角が２点出土している。枝角のうち１点には，加工痕が見られる。落角を使用したもので，数回切ろうとした痕跡があるが，風化しているため明瞭ではない。

イヌ

石田高原地区の環濠部から，下顎骨１点，脛骨１点，遊離歯１点が出土している。下顎骨から大きさを推定すると，縄文犬のやや大きい部類に属し，形態も縄文犬の範疇に含められる。

イヌ科

石田高原地区から，下顎犬歯が１点出土している。日本犬には見られない大型のイヌ，もしくは小型のオオカミと考えられるが，どちらの可能性もあるため，種の同定には至らなかった。

ウマ

石田高原地区の環濠内から遊離歯が17本出土しており，そのうち２点が切歯で，その他はすべて臼歯である。年齢査定できたものは13本で，５歳～10歳のものが５本，10歳～18歳のものが６本，18歳以上のものが２本である。出土状況は，環濠の３層から４層，トレンチ部からで，層序的には後世の混入をうかがわせる要素はない。他の廃棄された動物遺存体と同様に環濠からの歯のみの出土なので，それ自体，埋葬や祭祀に伴うものと考えることはできない。

ウシ

石田高原地区の環濠部から，遊離歯が２点出土している。いずれも同地点から出土の犬臼歯であるが，別個体のものである。ウシは，伊皿子貝塚の弥生時代後期に相当する位置から出土しているものが最も古いとされている。

鰭脚類

アシカ？

石田高原地区の環濠部から，大きさアシカに相当する大腿骨が１点出土している。骨端部が化骨化していない若い個体である。以前の調査でもアシカ類が報告されており（茂原・松井1995），原の辻遺跡を代表する種類である。ほかの鰭脚類，たとえばトド，オットセイなどのオスも大きいが，分布域から見て，現在では絶滅状態のニホンアシカの可能性が高いだろう。アシカは，韓国の釜山市東三洞貝塚（韓国新石器時代）や，鳥取県青谷上寺遺跡（弥生後期）を始め，対馬海峡を挟む日本海沿岸の遺跡からの出土が多く，近年では愛媛県宮前川遺跡群（弥生末～古墳初頭），同県阿方貝塚（弥生後期）などからも出土が知られており，分布が広かっただけでなく，薬用などの単なる食料以上の価値があったとも考えられる。

イルカ類

高元地区から３点と石田高原地区から４点，いずれも椎骨が出土している。小型のクジラ類である

ハナゴンドウの現生比較標本よりもさらに小さい個体である。

ヒト

石田高原地区から，前頭骨と頭頂骨が1点ずつ出土した。接合しないが，おそらく同一個体と思われる。

3．考　　察

原の辻遺跡の人々は，イヌを多く飼い，それらを食料にしていたことが，以前の環濠部の調査で明らかであった。また，その立地からして多様な水産資源を利用したことも原の辻遺跡の人々の生業の特徴である。クジラ，イルカ，アシカ？といった海棲哺乳類や，大型のサメ類のような大型魚類や，多くの中，小型の硬骨魚類を求めて，積極的に海に乗り出していったと考えられる。内陸ではオイカワのようなコイ科の魚類を捕らえ，さらに沖に出てさまざまな海水魚を漁獲していたことが明らかになった。

鳥類遺存体は少量ずつ出土しているが，細片が多く同定は困難で種類は限られている。しかし，尺骨の一点は，大型で，従来の原の辻遺跡の報告例，骨の形態学的特徴からするとアホウドリの可能性が高い。今後，現生アホウドリの標本と比較して種類を同定したい。

また，今回，特筆せねばならないのは，ウマ，ウシの出土である。魏志倭人伝には，「その他牛馬虎豹鵲なし」と記され，ウマやウシがいなかったとされている。実際には戦前から縄文貝塚や弥生時代の遺跡からウシやウマが出土することが珍しくなかった。直良信夫は，縄文時代後期から晩期にかけて，既に鹿児島県の南端の出水貝塚から北海道の東釧路貝塚まで日本全国にウマの飼養が広がっていたと考えている（直良1970)。林田重幸も，縄文時代にも弥生時代の人々も馬を貴重な家畜としており，原の辻遺跡においても以前の調査で出土した試料を弥生時代のウマと考えている（林田1977)。その後，松浦や松井らは，フッ素年代推定法やAMS放射性炭素年代推定法を用いて，従来，縄文，弥生時代のウマといわれていた資料を測定したところ，いずれも後世のもので，貝塚やその他の遺跡出土試料は後世の混入であったことを証明した（近藤ほか1992)。そして，松井は平成6年度の原の辻調査出土のウマを出土状況等から，弥生時代の可能性は低いと考えた（茂原・松井前掲書)。今回の出土例は，同一個体の臼歯が環濠の埋土，第3層から4層にかけてまとまって出土しており，これまでのように遊離した歯が単独で出土した状況とは異なっていることが特徴である。原の辻遺跡では，以前よりウシやウマの出土が報告されていたが，他の遺跡から出土した縄文ウマや弥生ウマの骨を，フッ素年代測定法や放射性炭素年代測定を行ったところ，いずれも構成の混入であることが判明した。しかし原の辻遺跡の立地する壱岐は，地理的にも大陸から日本列島に到達するまでの中継地点となり，さらに他の出土遺物からも大陸との交渉の窓口であったと考えることができ，例外的に移入されていた可能性も否定はできない。今後，ANS放射性炭素年代測定法により歯，そのものの年代を測定する予定である。

おわりに

発掘土壌の水洗選別により，多くの微細遺物が得られ，このなかにオイカワが含まれていたことは

大きな成果である。そして，マダラも北海道や東北地方以外の地域で出土することは珍しく貴重な試料となった。環濠からウマが出土したことは，弥生時代の家畜の移入に大きな問題を投げかけた。今後，放射性年代測定の結果を見て評価をせねばならない。

参考文献

内山純蔵・伊庭　功1997「第９章動物遺存体　第２節魚類」『粟津湖底遺跡第３貝塚』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会 pp. 328－333

久保禎子1998「一色青海遺跡の動物遺存体と生業形態」『一色青海遺跡（自然科学・考察編）』pp. 57－68

近藤　恵・松浦秀治・中井信之・中村俊夫・松井　章1992「出水貝塚縄文後期貝塚層出土ウマ遺存体の年代学的研究」『考古学と自然科学』第26号 pp. 61－71

茂原信生・松井　章1995「原の辻遺跡出土の動物遺存体」『長崎県文化財調査報告書　第124集原の辻遺跡幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書１』長崎県教育委員会 pp. 189－208

直良信夫1970『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』日本中央競馬会 pp. 17－18

林田重幸1974「日本在来馬の源流」『馬　日本古代文化の探求』社会思想社 pp. 215－262

松井　章1995「原の辻遺跡出土の動物遺存体」『芦辺町文化財調査報告書　第９集　原の辻遺跡―高元地区簡易確認発掘調査―』芦辺町教育委員会 pp. 85－92

松井　章・宮路淳子・中越利夫2000「帝釈弘法滝洞窟遺跡出土の動物遺存体（予報）」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報ＸⅣ』広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室 pp. 101－108

藤田正勝・宮路淳子・松井　章2002「帝釈弘法滝洞窟遺跡出土の動物遺存体（予報）―1997－1999年度調査（その２）」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報ＸⅥ』広島大学文学部帝釈峡遺跡発掘調査室 pp. 53－62。

原の辻遺跡（平成14年度発掘調査）出土動物遺存体の種名表

- 棘皮動物門　ECHINODERMATA
  - ウニ綱　Echinoidae
    - ウニ類　Echinoidae gen. et sp. indet
- 脊椎動物門　VERTEBRATA
  - 軟骨魚綱　Chondrichthyes
    - ネズミザメ目　Lamniformes
      - ネズミザメ　Lamna ditropis
        - サメ類　Lamniformes fam. gen. et sp. indet
    - エイ類　Rajiformes fam., gen. et sp. indet
  - 硬骨魚綱　Osteichtyes
    - コイ目　Cypriniformes
      - コイ科　Cyprinidae
        - オイカワ　Zacco Platypus
  - カサゴ目　Scorpaeniformes
    - フサカサゴ科　Scorpaenidae
      - フサカサゴ科の一種　Scorpaenidae gen. et sp. indet
  - タラ目　Gadiformes
    - タラ科　Gadidae
      - マダラ　Gadus macrocephalus
  - スズキ目　Pecifoemes
    - フエダイ科　Lutjanidae
      - フエダイ科の一種　Lutjanidae gen. et sp. indet
  - タイ科　Sparidae
    - マダイ　Pagrus major
  - ベラ科　Labroide
    - ベラ科の一種　Labroidei gen. et sp. indet
  - フグ目　Teraodontoidae
    - フグ科　Teraodonidae
      - フグ類　Teraodonidae gen. et sp. indet
- 哺乳綱　Mammalia
  - 霊長目　Primates
    - ヒト科　Homonidae
      - ヒト　Homo sapiens
  - 食肉目　Carnivora
    - イヌ科　Canidae
      - イヌ　canis familiaris
      - イヌ科の一種　Canidae gen. et sp. indet
  - 鰭脚亜目　Pinnipedia
    - 鰭脚類　Pinnipedia fam., gen. et sp. indet
  - 奇蹄目　Perissodactyla
    - ウマ科　Equidae
      - ウマ　Equus caballus
  - 偶蹄目　Artiodactyla
    - イノシシ科　Suidae
      - イノシシ　Sus scrofa
    - シカ科　Cervidae
      - ニホンジカ　Cervus Nippon
    - ウシ科　Bovidae
      - ウシ　Bos taurus
  - クジラ目　Cetacea
    - イルカ類　Delphinidae gen. et sp. indet

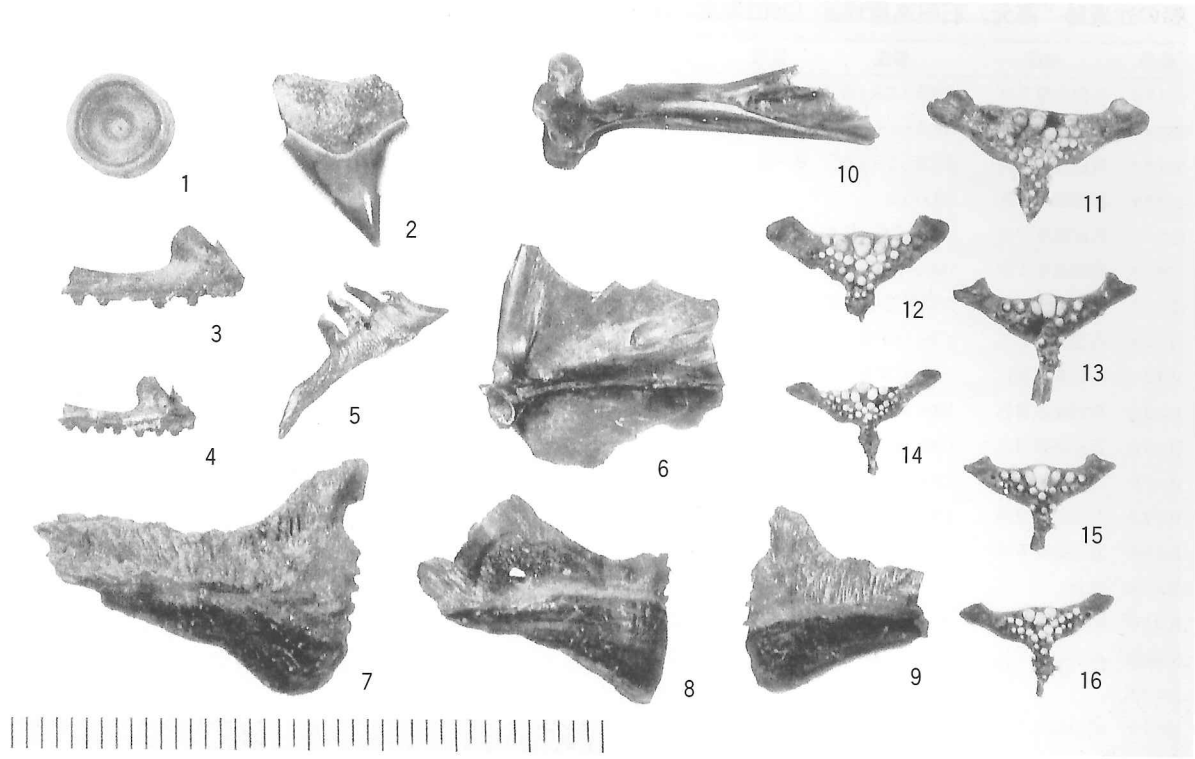


写真1　1 エイ類　2 サメ類　3・4 マダラ　5 オイカワ　6 フサカサゴ科　7～9 フグ類
10 フエダイ科　11～16 ベラ科

写真2　1 アホウドリ　2～12 ウマ

春の辻遺跡　高元，石田高原地区（2002年度）出土動物遺存体一覧表

番号	地区	層位	位置	日付	種	部位	左右	備考
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－15	20021011	イヌ	下顎骨	右	M1長18.45幅7.43㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－14	20021011	イヌ	脛骨	右	骨幹
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－16	20021011	イヌ	第3切歯（下顎）	右	
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Dのニ		20020903	イヌ	橈骨	右	近位端最大幅18
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層貝層		20021022	イヌ科	犬歯（下顎）	右	大型のイヌ？／小型のオオカミ？
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	下顎骨	左	関節突起
02コクホ	高元	中期包含層5層	B－3		イノシシ	下顎骨	右？	第2大臼歯萌出中
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	下顎骨		歯槽破片
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	寛骨	左	腸骨，破片
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Dnニ Ⅲ層下層		20020903	イノシシ	環椎		H51.35BFcr54.85㎜
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Dnイ 4層		20020909	イノシシ	脛骨	左	体部のみ
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Dnロ 4層		20020909	イノシシ	脛骨	左	体部のみ
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Doイ 4層		20020927	イノシシ	脛部	左	遠位部
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020909	イノシシ	脛骨	不明	骨幹，破片
02コクホ	高元	中期包含層5層下		20021018	イノシシ	肩甲骨？		破片
14コクホ	高元	ＳＢ5覆土5層		20021007	イノシシ	犬歯下	右	オス
02国保	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－10	20021011	イノシシ	後頭骨		unfused
14コクホ		溝状落ちこみ4層②		20020926	イノシシ	尺骨	左	近位部 unfused
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	尺骨	右	近位置端～体部 unfused 小形
02コクホ	石田高原Ⅳ区	15Hfイ 4層		20021007	イノシシ	上腕骨	右	遠位端破片 fused
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	上腕骨	右	遠位端～体部遠位端最大幅37.91㎜小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－8	20021002		側頭骨	右	頬骨突起
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－12	20021011	イノシシ	第2大臼歯(下顎)	左	長20.16㎜幅14.36㎜咬耗 b
02コクホ	石田高原Ⅴ	溝状落ちこみ4層②	B－17	20021011	イノシシ	第2大臼歯(下顎)	左	長21.96幅14.10㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	床面清掃		20021025	イノシシ	第2大臼歯(上顎)	右	長16.85幅13.46㎜
14コクホ	石田高原Ⅲ区	15Dnロ 5層		20020927	イノシシ	第3大臼歯	左	未萌出エナメル質長さ×幅34.19㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	15Hfロ Ⅳ層		20021017	イノシシ	第3大臼歯(上顎)	右	長29.87㎜幅18.07㎜
14コクホ	高元ⅡD18区4層			20020730	イノシシ	大臼歯		破片
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ5層		20021023	イノシシ	第三小臼歯(上顎)	右	長13.83幅11.96㎜
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	第3大臼歯(下顎)	左	長36.28幅16.95咬耗 c
14コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層		20020926	イノシシ	第三大臼歯(下顎)	左	未萌出長36.43幅16.62㎜
14コクホ	石田高原Ⅲ区	中期包含層		20020927	イノシシ	第三大臼歯(上顎)	右	未萌出長33.44幅19.01㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－9	20021011	イノシシ	橈骨	左	近位端～体部近位端最大幅28.43㎜
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15DsⅣ層		20020910	イノシシ	橈骨	右	近位端～体部近位端最大幅24.46㎜小形
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Dsロ Ⅳ層		20020910	イノシシ	橈骨	右	近位，近位端最大幅31.78㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	15Heニ南北トレンチ		20021017	イルカ類	椎骨		径36.81長22.07㎜unfused
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層		20020930	イルカ類	椎骨		unfused
02コクホ	高元	14Meロ 5層	B－2	20021007	イルカ類	椎骨		椎体，径45.06長27.15㎜fused
14コクホ	高元	ＳＢ5覆土5層	B－2	20021007	イルカ類	椎骨		
14コクホ	高元ⅡD18区	Ⅴ層		20020801	イルカ類	椎骨		
02コクホ	石田高原Ⅱ区	15Diイ SD7		20021209	イルカ類	尾椎？		
14コクホ	石田高原Ⅳ区	南壁トレンチ灰白色土		20020924	イルカ類	不明		
14コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層		20020926	ウシ	第1／第2大臼歯(上顎)		長29.29幅12.51
14コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層		20020926	ウシ	第2大臼歯(上顎)	左	
14コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	臼歯	左	長29.50幅23.00㎜
14コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	臼歯	左	長26.86幅23.24㎜
02コクホ	石田高原Ⅵ区	15HJニⅣ層礫群	B－2	20021003	ウマ	臼歯		破片
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－18	20021011	ウマ	臼歯		破片

番号	地区	層位	位置	日付	種	部位	左右	備考
02コクホ	医師抱く現Ⅳ区	15HJ イⅣ層		20021017	ウマ	臼歯（下顎）	右	
02コクホ	石田高原Ⅳ区	15HJ イⅢ層礫郡	B－1	20021003	ウマ	臼歯（下顎）		破片
14コクホ	石田高原Ⅳ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	小臼歯	右	
15コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	第1切歯	右	
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－3	20021001	ウマ	臼歯（上顎）	右	長27.29幅25.56
14コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	臼歯（上顎）	右	
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－4	20021001	ウマ	第1／第2大臼歯(上顎)	右	長25.40幅25.20㎜
14コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	第3切歯（上顎）	右	
14コクホ	石田高原Ⅵ区	北壁トレンチ		20020920	ウマ	第三大臼歯(上顎)	左	長27.41幅24.57㎜
14コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層		20020926	ウマ	第三大臼歯(上顎)	右	長30.20幅22.37
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－2	20021001	ウマ	第2小臼歯(上顎)	右	長33.58幅24.57㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－5	20021001	ウマ	臼歯（下顎）	左	
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－6	20021001	ウマ	臼歯（下顎）	右	
2コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	エイ類	椎骨		径6.80長
2コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	オイカワ	咽頭骨	右	
2コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	カエル類	上腕骨	右	小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－7	20021001	鹿類(アシカ?)	大腿骨	右	unfused 小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝ブロック	20021017	鹿類(アシカ?)	中足骨	左	unfused
02コクホ	石田高原Ⅵ区	古墳おちこみ4層		20021017	サメ類	椎骨		径28.67㎜長16.60㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	サメ類	椎骨		径6，長5㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅣ層	B－1	20021001	椎骨	径32.97長21.15㎜		
02コクホ	石田高原Ⅴ区	16Ea イ4層		20021008	サメ類	椎骨		残存径27.28㎜長15.23㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみ4層②	B－13	20021011	サメ類	椎骨		径28.32長16.28
14コクホ	高元 Ic11区	No12サブトレ		20020801	サメ類	歯		
2コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	サメ類	歯		
2コクホ	高元	ＳＢ5覆土5層		20021008	鳥類(アホウドリ?)	尺骨	左	近位端～体部
14コクホ	石田高原Ⅳ区	15Do ハⅢ下層		20020903	ニホンジカ	寛骨	右	寛骨白付近
02コクホ	高元	ＳＢ5覆土5層		20021007	ニホンジカ	角		落角，加工痕
02コクホ	高元	中期包含層5層	B－8		ニホンジカ	角		破片
02コクホ	石田高原Ⅵ区	15He ハ5層(砂)	(拡張トレンチ)	20021118	ネズミザメ類	椎骨		径38.18長14.93㎜
02コクホ	石田高原Ⅵ	古墳おちこみ①層		20021106	ヒト	前頭骨	左	
02コクホ	石田高原Ⅵ	古墳おちこみ①層		20021106	ヒト	頭頂骨		
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フエダイ科	主上顎骨	右	
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フグ	歯骨	左	歯骨高1.2㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フグ類	前上顎	左	エナメル長7，高5㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フグ類	前上顎	右	エナメル長17，高7㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フグ類	前上顎	右	エナメル長14，高5.5㎜
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	フサカサゴ科	主観蓋骨	左	小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ科	上咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ科	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ科	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ類	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ類	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ類	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	ベラ類	下咽頭歯		小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	マダイ	主上顎骨	右	中形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	マダラ	前上顎	右	小形
02コクホ	石田高原Ⅴ区	溝状落ちこみⅥ層	貝層ブロック	20021017	マダラ	前下顎	右	小形

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査研究事業報告書
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	藤村　誠・中尾篤志
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 (はるつじ)	長崎県壱岐郡 (ながさきけんいきぐん) 芦辺町 (あしべちょう) 石田町 (いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20000514 ～ 20030214	2,567m²	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	溝18条 住居址10棟以上 土坑6基 掘立柱建物跡2棟 道路状遺構	弥生土器 朝鮮半島系土器 打製・磨製石器 ガラス玉・銅鏃 鉄鏃・鉄鎌 ココヤシ製笛 絵画土器 大型建築部材 組合せ式案(机)	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集

原の辻遺跡

2003. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂